Infinite Seed

スピリタス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｅｅｄ

【Ｎコード】
Ｎ８９５３Ｓ

【作者名】
スピリタス

【あらすじ】
モテない男、その名も吉良大和。彼は人助けをした結果死んでしまいましたとさ。
ところが神に救われ転生する事になりました。その世界はインフィニット・ストラトスの世界でした。女尊男卑な世の中で彼は１人のＩＳ操縦者として、世界を動かす大事件に巻き込まれていきます。

第1話：そんな転生で大丈夫か？（前書き）

ガンダムとＩＳのクロスです。この手の物はもう何作もありますが書きたくなってしまったので書いてみます。どうぞ、よろしくお願いします

第1話：そんな転生で大丈夫か？

「ごめんさい！私、あなたとは友達としてやっていきたいの。だから付き合えません！」

・・・またふられた。これで１０連敗達成だな・・・そんな事を思いながら俺こと、吉良大和は俺をふった女の子を見送った。

初めまして、俺の名前は吉良大和。年齢＝彼女いない歴のチェリーボーイさ！今日も自分の２０歳の誕生日を目前にして好きな女の子に告白してみたが結果は先の通り。大学行ったらモテるようになるかな～♪なんて考えてた２年前の自分をぶっ飛ばしたいね♪
今日のデートの終わりに告白しても結果はハハっ♪て感じだものそもそも、俺の名前ってアレなんだよな・・・

吉良大和

つまりコレは数年前にテレビでやってたアニメ、機動戦士ガンダムＳＥＥＤ及びＤＥＳＴＩＮＹに出てきた主人公、キラ・ヤマトと同じなんだよなぁ・・・コレのせいで昔いじめられたっけ？アニメのキラはカッコいいけどお前は全然だめだな。と

そりゃさ、アニメのキラと比べられたら勝てる訳が無いでしょ？あんなかっこ良くないしむしろブサの方だし、ＭＳの操縦なんてできる訳が無い。ラクスみたいなかわいい子が知り合いにいる訳でもないし、ましてやコーディネーターなんかでない。

「このまま、賢者コースかなぁ」

そんな事を思いながら、俺は改札を通り駅で赤い電車を待っていた。
く○りの歌う赤い電車ってなんかいいよね。

そう、待っていたんだこの時までは。次の瞬間、目に飛び込んでくるのは線路に転落していく女の子。その後ろで太った男が鼻息荒く、僕の物にならないなら死んじゃえ～！とか叫んでる。おいおい、ふられた腹いせに女の子を突き飛ばしたのか！？

警笛ならしながら近づいてくる快速特急泉岳寺行き。ここは普通しか止まらない駅。よってあの快特は今の時速１２０ｋｍ、止まれる訳が無い。そこから先はスローだった。近くにいた俺はとっさに女の子に手を伸ばす。女の子も俺の意図に気づいてか必死に手を伸ばす

「やった！届いた！」

そう思ったのもつかの間、突き飛ばされて勢いのついていた女の子に引っ張られ俺も線路に落ちそうになる。このままでは２人とも落ちてしまう！頑張れ俺！グイッと力の限り引っ張る引っ張る。

「ふんが！」

最後の力を振り絞り、女の子を引っ張った。女の子、ホームへ宙を舞う。反動で俺は入れ替わるように線路へと落ちていく。引っ張った弾みで前に出てしまったのだ。

「あっ」

・・・・グシャ！

俺は電車にひかれて死んだ。最後に見たのは驚いて目を見開く女の

子だった。

次に目を開けたときに目に飛び込んできたのは何も無い白い空間だった。どこでしょうねここは

「ここは転生の間だ」

突然後ろから声がして心臓が止まりそうになる。

「安心しろ。貴様の心臓はすでに止まっている。つまり、お前はもう死んでいる」

人の心を読まないで下さい。あともうすでに死んでいるって、そうか電車にひかれて死んだのか

「さよう。貴様は電車にひかれて死んだ。だが、私は貴様にチャンスを与えようと思う。貴様のこれまでの行いは評価に値する。極めつけは最後の人命救助だな。もっとも貴様が死んでしまったがな・・・そこで私は貴様を好きな世界へ転生させてやろうと思ったのだ。なんならオプションもつけるぞ？」

なんて気前がいいんでしょ。ここまで言われたら転生するしか無いでしょ。そのまま神は続ける

「まず、世界だが生憎ＩＳにしか空きがない。よってここにする。容姿、能力はガンダムのキラ・ヤマトと同じにしてやる。つまり、

お前がキラだ。ちなみにこの世界はお前の世界にあるラノベと同じだ。細かい事は追々気づく事になるだろう」

「残念な事に俺はそのラノベとやらを呼んだ事が無い。よって世界がわからないのだが、そんな転生で大丈夫か？」

俺は不安げに尋ねるが、神は

「大丈夫だ、問題ない。出口はあっち」

ピッと扉のような物を指す神。転生できるだけありがたいか。

「そうだ、最後に頼まれてくれないか？」

「よかろう。申せ」

「俺の両親によろしく言っといてくれ」

「しかと承った。では新しい世界へ行ってこい」

「あぁ、行ってくる。ありがとうございました」

俺は神に一礼し、旅立っていった。

第1話：そんな転生で大丈夫か？（後書き）

感想等ありましたらお願いします。

第2話：ISの世界（前書き）

第2話です。

第2話：ＩＳの世界

「急げ急げ！試験が始まる！」

「わかってるって！だからこうして走ってるんじゃないか！」

「つーかどこを走っているんだこれ！？」

「一夏！？大丈夫だよね！？」

しゃべりながら僕は走っていた。僕ってのは誰あろう僕、吉良大和。
一緒に走っているのは小学校からの親友である織斑一夏。

ところでなんで僕らが走っているかっていうと・・・

「くっそ！藍越学園の試験会場ってここだよな！？」

一夏がイライラしながら言う。

「僕に聞かないでよ！ていうか迷ったのは一夏が勝手に進むからだし！」

僕も相当いらついているな

今日は藍越学園高校の試験なのだが、一夏が迷ってしまい一緒にいた僕まで迷ってしまったというのが事の真相である。

「お！多分ここだぜ！」

「一夏、それもう5回は聞いたよ！」

そう言いながら一夏は勢いよく扉を開けた。が、扉の先は暗くなっ

ていてとても試験を行うような場所ではない。

「一夏・・・・」

僕は非難を込めた目で一夏を見た。さすがの一夏もバツが悪そうだ。

「まぁまぁ、ってアレは！？」

一夏が部屋の一角をさして驚く。つられてみた僕も驚いた。

「これは、ＩＳだね・・・でも、なんでこんなところに？」

そこにあったのは2機のＩＳ：打鉄だった。

ＩＳ：正式名称インフィニット・ストラトスは女性だけが使える一種のパワードスーツ。それが一機あるだけで男なんて、あえて言おう！カスであると！・・・あえて言わなくてもカスみたいな扱いなんだけどね。女性だけしか使えないという事は、有事の際は女性に守ってもらうという事になる。ＩＳの前では戦闘機なんて赤子同然だ。よってどこの国も女性の機嫌を損ねないように、女性優遇政策を取っている。おかげで女性は増長し、女に逆らったら逮捕。なんて女尊男卑がまかり通ってしまうくらいである。

「（でも僕はこんなの絶対おかしいよって思うんだけどね）」

そんな事を言いながら僕と一夏は打鉄に近づいてしげしげと眺めた。こんな物のせいで世の中がおかしくなったんだ。まったく、束さんもなんて物を作ってくれたんだ。と、僕はＩＳの作成者である篠ノ之束さんに文句を言った。

「ＩＳか。俺たちにはまったく関係ないよな」

「そうだね、動かせないもんね」

一夏と僕はそう言いながらポンポンとＩＳに手を置いた。その瞬間・・・

「「え！」」

ＩＳの情報が頭に流れ込んできた。これをどうすれば動くのか、手に取るようにわかった。まるで最初から知っていたみたいに。

驚いて僕と一夏は顔を見合わせた。次の瞬間、ガチャガチャっと音を立ててＩＳが自分の体にフィットした。

「動いてる？」

僕はわけがわからなかった。自分は間違いなく男で、ＩＳは女性しか動かせないのに動いている。頭がこんがらがってきた。

一夏もＩＳに乗っていて訳が分からないと言いたそうにこちらを見ていた。２人して固まっている事数分。武装した女性部隊が入ってきた。

「貴様ら！何を・・やって・・・」

その女性は最後までしゃべれなかった。男がＩＳを動かせているという事実をみて唖然としている。そりゃそうだろう。

「ＩＳを動かしているだと！？男の分際で！？えぇい！いいから降りてこい！」

その女性は強い命令口調で僕たちに命令してきた。ここは従っておくべきだろう。

「一夏、ここは言う通りにしよう」

「吉良がそう言うなら・・・」

僕たちはＩＳから降りた。途端に身柄を拘束された。待っているのはおそらく取り調べだろうな・・・

こうして高校受験をしにきた僕らは、世界で唯一ＩＳを動かせる男子として一躍有名人となってしまったのだった。

第2話：ISの世界（後書き）

やっぱり小説って難しいですね・・・

第3話：幼なじみとの再会（前書き）

バイトのせいで更新が遅れました。第3話です。

第3話：幼なじみとの再会

「・・・・・・・・」

空気が、重い。入学式が終わって自分の教室に戻ってきたのだけど、周りから何か珍しい物でも見るかのような視線がすごくいたい。それは、一番前の席の一夏も感じているようで、さっきから所在無さげにしている。

「これは、想像以上にキツい・・・」

そう一夏がごちる。うん、僕もキツい。誰かこの空気をどうにかしてくれ。そう思ったとき、ガラッと教室のドアが開く。これ幸いと思いそちらを向く。そこにいたのは見事なまでの童顔の女性だった。

「はじめまして、今日からこのクラスの副担任の山田真耶です。皆さんは本日よりＩＳ学園の生徒として、ＩＳの事を学んでもらいます。それでは皆さん、頑張りましょう」

そう締めくくった。のはいいんだがみんなボケーっとしている。みんな山田先生の話を聞いていたのかどうか怪しいぐらいだ。

「・・・じゃあ、自己紹介をしてくれるかな？」

めげずに山田先生は自己紹介を促す。頑張っているなぁ・・・

そうして、自己紹介をしていき一夏の番になった。あれ？一夏もボーッとしているな。山田先生が泣きそうだよ。しかたないので一夏をつついて自己紹介をするように促す。

「初めまして、織斑一夏です。よろしくお願いします」

途端に空気が変わる。それも期待を込めた空気に。もっとしゃべれとかそう言う感じの・・

「以上です！」

一夏がそう締める。これにはクラスのみんながズデデっと滑った。なんせ僕も滑ったくらいだ。いくら何でもその締めは無いでしょ・・っと次は僕の番か。

「初めまして、吉良大和です。よろしくお願いします」

これまた空気が変わる。さっき一夏がとんでもない締め方をしてくれたせいで期待に満ちた空気がさらに増した。

「・・・・・」

山田先生！あなたもですか！

最後の砦だと思っていた山田先生の方を向いたら、期待に満ちた視線を返された。どうやらここに僕の味方はいないらしい。

「えーと、・・・以上です」

ズデデっ！これまた見事にずっこけた。仕方ないでしょ、僕だってこんな空気が初めてなんだから・・・一夏の気持ちがよくわかったよ。と僕の目の前にいる親友に目を向けた次の瞬間、ズパパン！！と重い音がした。僕と一夏はそろって後ろを向く。

「まったく。貴様らは挨拶もろくにできんのか！？」

「げぇ！関羽！？」

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者！」

一夏が言ったそばから叩かれた。・・・アレはただの出席簿・・・だよね？なんでこんなに痛いんだろう？

「お久しぶりです。千冬さん」

バン！・・・今度は僕が叩かれた。なんで？

「学校では織斑先生と呼べ！」

「りょ、了解です」

頭をさすりながら答えた。

「千冬姉が担任だったのか！ってアタ！！」

一夏がまた叩かれる。その先には出席簿をポンポンと叩きながらこちらをギロリと睨む織斑先生。

「織斑君って千冬様の弟だったの！？」

その一言をはじめとして俄にクラスがざわつく。

「そうだ。不本意だが確かにこいつは私の弟だ。だが、弟だろうが

なんだろうがここではビシバシ厳しくしていくから覚悟しておくように！」

織斑先生はこめかみを抑えながらそう言う。しかし織斑先生、そこまで言わなくても・・・・

その後も織斑先生に黄色い声が上がり続け、それを先生が一喝して静かにさせるというのが何度か続いたのだった。

「・・・であるからして、ＩＳというのは現在国家による全面的な管理が行われいるのです」

山田先生が教科書を読み上げていく。うん、ここら辺はあの説明書に書いてあった。あれ、１日で全部の内容覚えたから今のところは楽できるな。そう思って窓側の席にいる幼なじみに目をやる。

篠ノ之箒

僕と一夏の小学生からの幼なじみだ。実はちょっとした理由で、長い間あっていなかったので久しぶりにあった時には心底驚いた。しかも、かなりかわいくなっているんだからさらにびっくりした。ま、本人は一夏一筋だから僕は関係ないんだけどね。

ちょうどその時一夏が先生に当てられた。途端に戸惑う一夏。山田先生はおそるおそるどこがわからないのか聞く

「えと、全部です」

一夏・・・それは無いと思うよ。あの説明書読めばだいたいの事は書いてあるし。次の瞬間、再び響く出席簿のいい音。

「馬鹿者!織斑、ＩＳの説明書はどうした?」

織斑先生、憤慨す。

「電話帳と間違えて捨てました」

対する一夏は顔が真っ青だ。そしてもう一度響く出席簿で叩く音。

「織斑、あとで渡すから取りにこい。そして来週までに完璧にしておけ!」

そんなこんなで1限目は過ぎていった。

「大変だったね、一夏」

「あ、吉良。まったくだよ、助けてくれよ」

「それは無理。僕だって織斑先生に叩かれたくないもの」

「ていうか、あんな分厚いのを一週間でなんて無理だよな?」

「いや?いけるでしょ?僕は1日で読み切ったよ」

「・・・吉良に聞いた俺が馬鹿だった」

まぁ昔から物覚えはなぜか良かったからね。そんな中、1人の女子がこちらに近づいてきた。

「ちょっといいか？」

「「え？」」

振り返ってみれば、いままで一度も話しかけてこなかった幼なじみの箒が腕を組んで仁王立ちをしていた。そこで屋上へと移動する事にした。

「ひさしぶり、6年ぶりだけど箒ってすぐにわかったぞ」

一夏がそう切り出す。

「うん、僕も。本当に久しぶりだよね」

「そうだ。俺、新聞で見たぜ。剣道の大会で優勝したんだってな！おめでとう」

一夏がそう言うと、箒の顔が赤くなる。はぁ、相変わらずわかりやすいなぁ・・・でもそれに気づかない一夏もさすがというべきか。

「お前らも久しぶりだな。その・・・なんだ・・・本当に久しぶりだな」

箒さん、照れてて同じことを2回言ってますよ。大事だからですか？そんなこんなで再会を喜ぶ僕たち。しばらくして、そろそろ次の授業の準備をしようと思ったのか一夏が立つ。つられて僕たちも。

「さ、千冬姉に叩かれないうちに戻ろうぜ」

「う、うむ」

まだ顔を赤くしながら、頷く箒。そして一夏が先に歩いていき、箒が後を追おうとする。そこで僕は箒の腕をつかんで聞いてみる事にした。

「箒、まだ一夏の事、好き？」

途端に顔が真っ赤になる箒。わかりやすすぎるよ！

「な！？べ、別に・・・私はあいつの事なんか・・・なんとも思ってないぞ！」

これで騙される人がいたら見てみたいよ。て、1人いたよ。一夏が。

「そっか、なら一緒の学校に慣れてよかったね。頑張って！」

そう言って箒にエールを送る。

「おーい！早く来ないと千冬姉に叩かれるぞ！」

屋上の入り口で鈍感王の一夏がそう言う。いけない。叩かれるのは嫌だ。

「ほら、箒。行こう！」

そういって僕たちも一夏の後ろに続くのだった。

第４話：挑戦状（前書き）

ためていた物を連続投稿します。第４話です

第４話：挑戦状

屋上で箒と話をし、教室に戻って授業をこなして今は休み時間。いい加減この空気に辟易していた時、それは訪れた。

「ちょっとよろしくて？」

不意に後ろから話しかけられた。僕と一夏が声のした方に振り返ってみると、見事な金髪ロールの女の子が立っていた。

「何？なんか用？」

一夏が聞く。

「まぁ！なんですのそのお返事は！この私が話しかけてあげたのですからそれ相応の態度という物があるのではないですか！？」

「「・・・・・」」

正直、こういう手合いは苦手だ。これも女尊男卑の賜物なんだけど・・・

「ごめんね、僕たち君が誰なのか知らないんだ」

おそらく自己紹介の時に言っていたんだろうけど、僕たちは千冬さんに叩かれた事しか覚えていない。

「私を知らない！？このイギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットを！？」

僕と一夏はそろって頷く。知らない事は素直に知らないといわないとね。その時、一夏が質問した。

「なぁ吉良、代表候補生って何だ？」

これにはずっこけた。見ればオルコットさんも顔が真っ赤だ。

「一夏、そもそも代表候補生っていうのがわかってなかったんだね・・・代表候補生っていうのはね、国によって選ばれた国家代表ＩＳ操縦者候補。つまり、エリートっていえばいいかな？これは教科書読めば書いてあるはずなんだけどね・・・」

「なるほど。よくわかったよ。それで、その国家代表候補生が何の用で？」

そこでオルコットさんがようやく口を開こうとした時、チャイムが鳴った。また鬼の授業が始まるのか・・・

「誰が鬼か」

千冬さん登場。と同時に出席簿のいい音が。っていうか僕の心を読んだよこの人。なんとまぁ規格外。

「さて、今からクラス代表を決めたいと思う。クラス代表とは、そのままの意味で代表戦にも出てもらうし、学年の会議に出たりと、まぁ一言でいえば学級委員みたいな物だ。自薦、他薦は問わん。誰かいないか？」

千冬さんがそう言った。クラス代表ねぇ、めんどくさいな

「はい！織斑君を推薦します！」

どこからかそんな声が上がった。これにびっくりしたのは当の本人である一夏。次々とその声に賛同するように声が上がる。

「ちょ、ちょっと待った！それなら俺は吉良を推薦する！」

「一夏！？」

それはないでしょ！このまま行けば一夏で決まりだったのに！

「ふむ、織斑と吉良か。これ以外にいなければこいつらで決めるからな？」

織斑先生がみんなにそう言う。よし、こうなったら是が非でも一夏に押し付けよう。そんな事を考えていたら別の声が上がった。

「そのような選出、納得がいきませんわ！」

声の主はさっき突っかかってきたオルコットさんだ。彼女の後ろからはメラメラと炎が見えるようだ。

「だいだい、そこの２人が選出された理由は男で、珍しいからでしょう？実力から言ったらこの私セシリア・オルコットがクラス代表になるのは必然であり、そもそも男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！」

・・・酷い言われようだ。クラス代表になる気はないけど、ここまで言われるとムカってくるな。

「そもそも、文化としても低レベルなこの島国に私が来たのはＩＳの技術を学ぶ為であって、「イギリスだってそんなお国自慢無いだろ？」」

一夏が反論した。オルコットさんは突然の反論に面食らったようだ。

「イギリスだって日本と同じ島国だし、まずい料理で言ったらイギリスの右に出る物は無いだろ？」

「おいしい料理はたくさんありますわ！あなた！私の祖国を侮辱しますの！？」

「最初に侮辱してきたのはあなたの方だよね？侮辱を侮辱で返されたくなければ、言わなければいいだけの事じゃない。そもそもイギリスって美味しい料理あるの？僕、フィッシュ＆チップスくらいしか知らないんだけど」

・・・やってしまった。つい、僕も一夏に乗せられて言ってしまった。オルコットさんは僕の方を見てわなわなしている。

「決闘を申し込みますわ！」

・・・なんでこうなるかな？あ～もう！こうなったら行くところまで行ってやる！

「いいよ。ごちゃごちゃ言うより早くていいや」

「もしわざと負けたりしたら一生私の奴隷にして差し上げますわ！」

「真剣勝負で手を抜くほど僕は馬鹿じゃないよ」

僕とオルコットさんはにらみ合ったまま動かない。それを見ていた千冬さんがやれやれっといった感じでため息つきながら口を挟んだ。

「では、オルコットと吉良で戦え。勝った方が織斑と戦い、クラス代表を決める。勝負は一週間後。ほかに何かあるか？」

僕たちは同意し、決闘の話はまとまった。さて、これからどうしようか。

放課後。今この場にいるのは僕と一夏と山田先生。話しているのは部屋割りの事だ。なんでも、１人部屋が一つしか開いていなくて相部屋になるらしい。相部屋というと必ず女子。僕と一夏は人生の勝負を賭けたくじ引きをするところだった。

「もう一度聞くけど一夏、相部屋の方に行く気はないね？」

「馬鹿言うなよ吉良。俺だって１人部屋がいいに決まってるじゃないか」

「ならもう話す事は無いね。いざ尋常に」

「「勝負！！」」

僕と一夏は同時にくじを引いた。僕のくじの先端には１人と書いてある。やった！１人部屋だ！一夏、頑張ってね

「くそ！」

一夏はさっさと行ってしまう。さて、僕も部屋に行って荷物の整理でもしようか。

部屋の前につくと隣の扉の前に一夏がいた。どうやらお隣同士だったみたいだ。

「なぁ、今からでも遅くない。吉良、俺と部屋を交換しよう」

「くどいよ一夏」

そう言って僕たちは部屋に入っていく。数分後、隣の部屋から箒の声と思われる悲鳴と、一夏の断末魔の叫びは聞かなかった事にしたい。

さて、今日は色々あって疲れたな。寝よう。お隣さん、痴話げんかも程々にね

第４話：挑戦状（後書き）

次回、吉良のＩＳが来ます。それは私の好きなＭＳからです。

キングダムハーツの方はただいま執筆中ですのでもうしばらくお待ちください

第5話：クラス代表決定戦前編（前書き）

やっとＩＳが出ます！

第5話：クラス代表決定戦前編

僕と一夏が決闘を受けて立ってから（一夏は受けた覚えは無いって言ったけど）数日が過ぎた。一夏は箒にＩＳの事を教えてくれるように頼んでいたのに、なぜか箒は一夏と剣道の特訓をやってた。一度、一夏にその事で愚痴をこぼされた事があったが・・

「聞いてくれよ～吉良～。箒の奴、ＩＳの事を教えないで剣道ばっかりやってるんだぜ？こんなんで大丈夫かよ・・・」

うん。それについては大いに同感だ。といっても2人とも専用のＩＳを持っていないので仕方ないのだけれど・・・それに、何回か稽古を見に行ったけどアレはアレでなんかいい雰囲気だったから、それで相殺されるんじゃない？箒が顔を赤くするたびに一夏が首をひねっていたのはさすがだと思ったけど・・・

「でも、僕のＩＳもどうなるんだろうか」

そして今、僕は自室に一人こもって明日の決闘の事を考えていた。実は、僕も一夏もまだ専用ＩＳが来ていない。本番は明日なのに・・・

「考えても仕方ないか・・・寝よう」

そうして僕は眠りについた。

ｉｎ　ｔｈｅ　ｄｒｅａｍ

ふと気がつくと、僕は真っ白な世界にいた。ここは？

「久しぶりだな、吉良大和」

どちら様で？

「貴様をこの世界に転生させた神だ。無論、貴様の転生に関する記憶は消したから知るはずも無いがな」

転生？何の事ですか？

「まぁよい。しかし、なかなか面白い事になっているな決闘とは！血湧き肉踊るわ！・・・話がそれたな、貴様にはまだ専用のＩＳが無いのだろう？ならばワシが用意しよう。あの時の約束を今果たそう」

そう言って神の手に光が宿る。

「このＩＳの名は貴様が決めろ。それと同時に失っていた記憶も戻る。では、おそらくもう会う事は無いだろう。さらばだ」

言うだけ言って、神と名乗ったものは消えた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「・・・・・・夢？」

朝日が差し込み僕は目を開けた。未だにさっきの事が信じられなかった。だけど、腕にはめられたブレスレットに気づいた時、僕は夢ではなかった事を確信した。

「おはよう、一夏」

「おぉ吉良。おはよう」

朝、僕たちは教室で待っていた。千冬さんにそう指示されたからだ。
そして・・・

「ふ、２人とも!!専用機が来ました!早くアリーナに来て下さい!」

文字通り転がり込んできた山田先生に連れられ、僕たちはアリーナへと向かった。そこには、白とメタリックグレーがいた。

「白いのが織斑のＩＳ、白式だ。そしてこっちのグレーのが・・・」

千冬さんが説明していく。どうやら僕のＩＳはこの代表戦にむけて急場しのぎで作り上げたらしく名が無いみたいだった。

「つまり、中途半端に作って持ってきたんだ・・・」

僕が内心ため息をついていると、突然ブレスレットが光りだしなんと、そのグレーのＩＳと同化したのだ!唖然とする僕たちをよそにそのＩＳは光がさらに強くなる。僕は自然と手を伸ばしていた。

「これは!?」

光に触れた瞬間、僕は理解した。それと同時に頭に流れ込んでくる大量の情報。僕はこのＩＳの・・いや、このＭＳの名を知っている。
そして、自分が何者なのかも。全部思い出した。

僕は転生して吉良大和となり、これは生前に見ていたガンダムＳＥＥＤに出てくるＭＳだ。その名も・・・

「ストライク」

僕がそう言うと、ＩＳは僕の体に装着される。なんだか懐かしさすら思い出すようだ。

「なっ！？フルスキンだと！？」

箒がびっくりして声を上げた。みんなもびっくりしている。

「大丈夫なのか吉良？」

「大丈夫です織斑先生。僕はこれがなんなのかちゃんとわかっていますから」

僕は千冬さんにそう返し、ストライクのコンソールを呼び出す。そこには起動直後のＯＳが表示されていた。

Ｇｅｎｅｒａｌ　Ｕｎｉｌａｔｅｒａｌ　Ｎｅｕｒｏ－Ｌｉｎｋ
Ｄｉｓｐｅｒｓｉｖｅ　Ａｕｔｏｎｏｍｉｃ　Ｍａｎｕｖｅｒ　ＧＡＴ－Ｘ１０５　Ｓｔｒｉｋｅ

神様、ここまで原作に忠実なんですか。と僕は一人苦笑する。

「そうか、なら行ってこい」

「はい！」

そう言ってカタパルトへと向かう。さて、これが初出撃だ。

「カタパルト接続。進路クリア。発進どうぞ！」

「吉良大和、ストライク、行きます！」

バシュっ！とカタパルトから射出される。あとは目の前のお嬢様を倒すだけだ！

「あら？逃げずにちゃんと来ましたのね。あまりにも遅いものですから逃げたとばっかり思っていましたわ」

「ごめんね。でも、ちゃんと来たよ」

「えぇ。ですが、どうやらそのＩＳは未完のようですわね。そこで私はチャンスを与えようと思います。このまま戦っても私が勝つのは当然。ですので、もしあなたがこの場で泣いて謝れば許して差し上げますわ」

オルコットさんはそう言う。でもそれってチャンスって言わないよね。

「悪いけど、僕負ける気無いから。それにそれはチャンスって言わないよね？」

「っ！ならいいですわ。さぁ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

試合開始とともに放たれるブルー・ティアーズのスターライトＭＫ一？。威力だけならたいしたもんだ。僕はあわてて回避する。その瞬間、ＩＳの動きに違和感を感じた。動きがのろすぎるのだ。慌てて僕はストライクのコンソールを呼び出す。

「むちゃくちゃだ！これだけのＩＳをこんなＯＳで動かそうだなんて！」

僕は織斑先生の言葉を思い出す。確か、未完だったんだよね。だから最終調整も僕がやるのか・・・僕はキーボードを呼び出しタイピングを始める。

「キャリブレーションを取りつつゼロ・モーメント・ポイントおよびＣＰＧを再設定」

セシリアがミサイルで攻撃してくるのでイーゲルシュテルンで撃ち落とす。

「ちっ、なら疑似皮質の分子イオンポンプに制御モジュール直結、ニューラルリンゲージ・ネットワーク再構築。メタ運動野パラメータ更新、フィードフォワード制御再起動、伝達関数コリオリ偏差修正、運動ルーチン接続、システムオンライン、ブートストラップ起動！！」

ＯＳの再設定が終わると、ストライクがさらに自分になじみだすのがわかった。だけどまだ、ファーストシフトすら終わってないんだから時間を稼がないと、勝機は無い。

「防御重視のＩＳにしてはよく動きますわね！それとフルスキンな

ど見た事がありませんでしたがたいした事ありませんわね！」

セシリアはストライクを防御重視だと思っていた。だから動きが遅く、集中砲火していれば勝てると踏んでいた。しかし、吉良が高速でＯＳを書き換え、動きをよくしてからはかすりはするものの直撃は少しずつ減っていた。

「（とは言ってもこのままじゃジリ貧だ）」

勝負をかけてきたのか、セシリアはスターライトに加えて、後ろのビット兵器までパージして使ってきた。

「まずい！アレは避けきれない。なにか武器は！」

コンソール上に表示される武器は近接防御用のイーゲルシュテルンと近接ナイフ

「アーマーシュナイダー・・・これだけか！」

無いよりはマシと思い、サイドスカートからアーマーシュナイダーを取り出す。そして始まるビット兵器からの攻撃。当然避けきれないので直撃を受ける。ここまで２７分。

「この戦いもすでに終楽章に入っていますわ。ですがここまで持ったのには褒めておきましょうか」

「そりゃどうも（だけど次くらったら確実に落ちる。それにまだ、あの装甲が展開されていない。こうなったら一か八か）」

「フィナーレですわ！」

ビット兵器を発射する。とにかく避けた。そして眼前に広がるはスターライトＭＫ?を構えたセシリア

「落ちなさい！」

放たれるスターライト。

「うぉおおおおお！」

僕は無理矢理の加速でその砲身にぶつかって射線をずらした。だけど、無理矢理近づいたのがいけなかった。

「いただきましたわ！」

セシリアから放たれるブルー・ティアーズ。しかもミサイル型だ！

爆炎に包まれるストライク。誰もが落ちたと思った。しかし・・・

ーフィッティング＆フォーマットが終了しました。これよりファーストシフトを開始しますー

その声とともにストライクは真の姿を現した。

「（やっとＰＳ装甲が展開された）」

セシリアのミサイルが直撃する瞬間、ストライクはＰＳ装甲を展開し、吉良を守ったのだ。赤、白、青のトリコロールカラーに染まるストライク。ようやくストライクの完成だ。

「な!?ファーストシフト!?ではあなたまさか、今まで初期設定の機体で戦っていたんですの!?」

「ごめんね、待たせて。でもここからが本当の戦いだよ!」

ーストライカーパックを選択して下さいー

その声とともに浮かび上がるのはエール、ソード、ランチャーのストライカーパック。あちらの方が射撃が得意なんだからここはソードだな。そう思って僕はソードストライカーを選択する。ストライクにソードストライカーが装備される。それから吉良は気づいた事があった。

「(オルコットさんがビット兵器を使う時って、スターライトを放ってこない。逆にスターライトを使う時はビットをブルー・ティアーズに戻す。ということは、両方を同時に使えないってことか!)」

それなら戦い方はある。僕は対艦刀・シュベルトゲベールを持ち構えた。セシリアは一発スターライトMK?を放ってからビットを射出する。それなら今はそっちを見てればよい。

「うぉおおおおお!」

ビット兵器に接近し、切り落とす。運動パターンが一定なので次のビットの動きも予想しやすかった。

「3つめ!」

僕はビットを破壊したときオルコットさんがビットを戻すのを見た。ってことは次はスターライトによる砲撃だ。でも、いつまでもかけてられない。ここで勝負を決める!そう思って僕はビームブーメラ

ン：マイダスメッサーを振りかぶって投げた。

「どこに投げていますの？」

そう、僕はあさっての方向に投げたのだ。かまわず僕は対艦刀をかまえ、突撃する。

「自棄になって突っ込んできましたわね。いい的ですわ！」

発射されるスターライトＭＫ？。僕はギリギリまで引きつけてから避けた。

「避けた！？もう一度ですわ！」

構えるオルコットさん。だけど背後から戻ってくるものを彼女は忘れていた。さっき投げたブーメラン、僕は狙いを悟られないようにわざとあさっての方向に投げたのだ。ザシュっと切る音がした。

「くぅ！ですがこれくらい！」

セシリアが持ち直しスコープをのぞいた時、吉良は映っていなかった。

「どこに！？」

見失ったセシリア。ブルー・ティアーズがすぐさま上方向に注意のアラートをかける。だけど遅かった。

「これで！終わりだぁああ！」

吉良は渾身の力を込めてシュベルトゲベールを振った。

ブザーが鳴って試合終了を告げる。試合はセシリアのエネルギー切れという前評判を覆しての吉良の勝利に終わった。握手しようと思い吉良が近づくと、ブルー・ティアーズが地上めがけて落下しだした。

「マズイ！気絶したのか！？」

辺りを包む悲鳴。吉良は彼女を追って、キャッチした。

「大丈夫？オルコットさん」

吉良が声をかける。

「うぅん・・・・は！あ、あなたは！それよりもこの状況は！？」

セシリアが今の状況に気づいて暴れだした。吉良はセシリアをお姫様だっこの状況でキャッチしたのだから無理も無い。

「わわ！暴れないで、僕も落ちちゃうから！」

吉良があわてて状況を説明する。

「・・・そうでしたの。でも、なぜあなたは私を助けて下さったのですか？私はさっきまであなたの敵でしたのに・・・」

「あのねぇ、いくら敵だったとはいえ気絶して落ちていく人を放置

なんかできないよ」

「・・・ありがとうございます。私は熱くなってあなたにひどい事を言ったのに・・・」

「そんなの、子供の喧嘩と大差ないと思うよ。それに、僕も熱くなってイギリスの事を悪く言ってごめんね。だから、これで仲直り。これからよろしくね、オルコットさん」

吉良にそう言われ、セシリアは顔が熱くなるのを感じた。

「・・・セシリア」

「うん？」

「これからは、わたくしの事をセシリアと呼んで下さい」

「そう？じゃあセシリア、これからよろしくね。僕は今まで通り吉良でいいよ。こっちの方が呼ばれ慣れてるしね」

「いいえ！わたくしの事を名前で呼ぶんですから、大和さんと呼ぶ事にしますわ！」

「そ、そう？ならそれでもいいけど」

セシリアが身を乗り出してそう言ったので吉良は少しびっくりしてしまった。気づいたのかセシリアもコホンっと軽く咳払いしてごまかす。

「それじゃあ、僕は一夏と戦うからそろそろ降りないと。セシリア、

念のためドクターに診てもらって」

吉良はピッとゲートを指差す。そこには保健室の先生が立っていた。

「わかりましたわ。大和さんもお気をつけて」

セシリアを保険医に預けて一旦休憩に戻る。だから、吉良は気づいていなかった。セシリアが先ほどのお姫様だっこを思い出して顔を真っ赤に染めた事に。

余談だが、吉良とセシリアがお姫様だっこをしている間中、女子の悲鳴が鳴り止む事は無かったという・・・

第5話：クラス代表決定戦前編（後書き）

更新が遅くなってスミマセンでした。昨日パソコンを直し、執筆を再会しました。

結局ＡＣアダプタの破損だったという・・・アップルストアに持っていったらただでアダプタをくれたので持ってって良かったと思いました（笑）

私の好きなＭＳはフリーダムもそうなんですがストライクなんです。カッコいいですよね！

ご意見ご感想お待ちしております。

ではまた次回

第６話：クラス代表決定戦後編（前書き）

まだまだ一巻が終わらない。早くシャルロット出したいよｏｒｚ

第6話：クラス代表決定戦後編

ｓｉｄｅ　セシリア

戦いが終わって保険医に預けられたセシリア。軽い脳しんとうという結果で大事には至らなかった。彼女は今ベッドで横になり、一人の男について考えている。

「吉良、大和」

セシリアが名前を口にすると同時に、吉良の顔を思い出し赤くなる。整った顔立ちに、明るい茶色のショートシャギーの髪型、そして紫色の瞳には強い意志を込めた光が宿っていた。セシリアにボロボロにされてもそれは色あせる事無く、彼には何か得体の知れない強さがあった。

「彼こそが、わたくしの・・・」

セシリアは出会ってしまった。自分の理想とする、運命の相手に・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「おつかれ」

戦いを終えてピットに戻ると一夏がそう言って迎えてくれた。

「ありがとう。次は一夏とだね、負けないよ」

一夏はすでにＩＳを脱いでいた。おそらくファーストシフトまで完成したんだろう。ここから３０分の休憩に入る為、一旦白式を待機

状態に戻したのだ。僕はとりあえず休憩に入る。

「まったく、ひやひやさせおって馬鹿者。しかし、よくもまぁ戦闘中にＩＳのＯＳの書き換えなんかできたな」

千冬さんがあきれながらそう言ってきた。仕方ないでしょ、僕だって、できるってさっき気づいたんだから。

「まぁこちらとしても聞きたい事はあるが、そろそろ次の試合の準備をしろ。話はそれからだ」

千冬さんがそう言う。じゃあそろそろ行こうかな。

「ストライク、起動」

僕がそう言うと、ディアクティブモードのストライクが体に展開される。この状態はフェイズシフトがダウンした状態だから仕方ないか・・・。僕はストライクをカタパルトに乗せ、ストライカーパックを選択する。えーと、一夏のＩＳは近接主体だからオールマイティがいいかな。わざわざ接近戦をしかけて相手の土俵に立つ必要もないし。

「カタパルト接続確認、装備はエールを選択、エールストライカースタンバイ」

僕はエールを選択した。右手にビームライフル、左手にシールド、背中にはエールストライカーがついている。これで運動性能は上がったから、素早い攻撃にも対処できるかな。

「進路クリア、吉良君、発進どうぞ！」

「吉良大和、ストライク、行きます！」

カタパルトから青空へと飛び立つエールストライク。そのままＰＳ装甲を展開し、一夏を待つ。

「さて、俺も行くか！」

吉良が言ったのを確認してから一夏は白式を展開する。すでにファーストシフトまでは終わっているので一夏も万全の状態で戦える。

「一夏・・・！」

「箒」

発進直前に箒が一夏に駆け寄る。

「行ってこい！」

勝て！と言わないのは相手が吉良だからだろう。

「あぁ、行ってくる！」

短くそれだけ返し、一夏もカタパルトにＩＳを固定する。

「進路クリア、織斑君、発進どうぞ！」

「織斑一夏、白式、出るぜ！」

一夏もまた吉良の待つ戦いの場へと白式を発進させる。

「お待たせ、さぁやろうぜ！吉良」

「一夏、僕は最初から本気で行くからね？」

「上等！俺だって本気だからな！」

ブザーが鳴り、戦いの開始が告げられる。両雄激突す。

僕はとりあえず牽制の為にビールライフルを放つ。対する一夏は白式を動かして避ける。とりあえず白式の武装データを入手する事にしよう。えっと、白式：装備は・・・と。あれ？気のせいかな？近接用ブレード雪片弐型としか表示されないんだけど・・・

「おぉおおおお！」

一夏はその雪片弐型で突撃してくる。驚いた。接近戦主体のＩＳとは聞いていたけど、これじゃ主体じゃなくて接近戦しかできない機体じゃないか！だけど、雪片？どこかで聞いた名前のような気がする。

「当たらないよ！」

僕はエールのスラスターを使って攻撃を避ける。負けじと一夏も連撃してくる。僕もＩＳの操縦にはまだ慣れてないところがあるので、ここは無理をせずにシールドで防御する。このシールドはアンチビームコーティングされていて防御力もかなり高い。その気になればセシリアのスターライトＭＫ？だって簡単に防げるだろう。そして一夏の雪片にもビームで刃が形成されているので防げると思ってい

た。

「な！？」

僕は一夏の攻撃をシールドで確かに防いだ。事実、一夏の攻撃はシールドに当たっていて僕には届いていない。だけど・・・

「シールドエネルギーが削られている！？」

わけがわからないよ！そう言いたい気分だった。そういえば、雪片・・・雪片！？思い出した！あれは千冬さんが昔使っていた武器の名前だ！雪片弐型って名前から考えるに、アレはその後継武器なのだろう。確か雪片の武器特性は、自身のシールドエネルギーを消費して相手のシールドそのものを切り裂き、絶対防御を発動させてダメージを与えるというものだっけ。

「つまり、当たれば削られるという事か！」

僕は急いでバーニアを全開にする。もちろん牽制の射撃も忘れない。一夏相手にシールドは意味が無い。そう思った僕はシールドを投げ捨て、左にビームサーベルを構える。ちまちまやっていたらまたジリ貧だ。

「いくよ！」

バーニアを最大出力にして一夏に接近する。射撃はせいぜい牽制が関の山だ。本当は遠距離からランチャーのアグニで狙いたいけど、今の僕じゃ絶対当てられない。ならば接近して切るしか無い！

高速でぶつかり合う雪片弐型とビームサーベル。僕も一応箒と一夏

の誘いを受けて昔剣道をやっていたので、一応剣の心得はある。たぶんこれで勝負は五分だろう。すでに試合を始めて結構な時間が過ぎた。ここらで決めないと！

「ライフルを捨てた！？」

一夏が驚いて声を上げる。僕は接近して勝負を決めるつもりだった。だからライフルを捨てて両手にビームサーベルを構えた。

「クッ！二刀流か！」

一夏が徐々に押され始める。僕は片方で一夏の攻撃を受け流しつつ、もう片方で胴薙ぎをする。

「浅い！」

一夏はとっさの判断で回避し、僕の攻撃は腹部をかすっただけ。

「（マズイ！今度は攻撃の反動でこっちががら空きだ！）」

すでに一夏は雪片を振りかぶっている。

「いただき！」

ニッと笑って一夏が振り下ろす。その目はすでに勝利を確信した目だ。

「・・・・・・」

その時、僕の脳裏で何かが弾ける音がした。次の瞬間、僕は無意識

のうちにビームサーベルを投げ捨て、アーマーシュナイダーを取り出しある場所へ投げた。

「うわぁあああ！」

一夏が後退する。腹部の損傷によりシールドエネルギーが０になる。吉良はさっきかすめた腹部の損傷に向けてアーマーシュナイダーを投げたのだ。それは、見事にヒットし起死回生の一手となったのだった。

「織斑機、シールドエネルギーエンプティー！勝者、吉良大和！」

山田先生のアナウンスが響く。

「僕の勝ちだね！一夏！」

「くそ！絶対勝ったと思ったのによ」

「最後のは僕も危なかったよ。なんとか挽回できて良かった」

「とにかく疲れた。さっさと戻ろうぜ」

「うん、そうだね」

僕たちは歓声が鳴り止まないアリーナを後にして、ピットへと戻っていった。

僕と一夏がピットに戻ると千冬さんと山田先生、そして箒が迎えてくれた。

「なんとか試合は終わったか。だがまだまだ甘い。わかったら少しでもＩＳを動かす訓練をするように！以上。織斑と篠ノ之、お前らは下がれ」

「え？千冬姉、吉良はどうするん・・・・！！」

うわぁ、また一夏の頭に千冬さんの出席簿がめり込んだ。おかしいな、どんどん僕の中の常識が崩れていくよ。

「吉良には聞きたい事がある。最悪国家機密に関わる内容かもしれん。よってお前らに聞く権利は無い。わかったら下がれ」

まだ頭を抑えている一夏とそれに続いて退出する箒。今残っているのは僕たちだけだ。

「さて、人払いも済んだところで単刀直入に聞く。お前のＩＳはなんなんだ？」

「・・・それは、どういう意味ですか？」

「お前とオルコットの戦闘を見ていたが、正直アレはあり得ん。お前のＩＳは確かに未完成だった。それがどうしてここまでの物になるのかがわからないのだ」

・・・ガンダムのテクノロジーってオーバーテクっぽいよなぁ・・・それに僕の事とか話しても信じてくれないだろうし。といっても僕が知っているのはガンダムの事だけであって、前世の僕がどんな人間だったのかまったく解らないんだけどね。ガンダムの事だけを知識として知っているだけ。そんな感じだ。

「まず、僕のＩＳの名前はストライクといいます。未完のＩＳから急に発生した光については答えようがありませんが・・・」

「ふむ。ストライク、か。それで、そのＩＳはどんな能力を持っているんだ？」

「ストライクの最大の特徴は、戦闘の状況において最適な武装を選択する事ができるストライカーパックシステムを採用している事です。それぞれ、近接のソード、遠距離のランチャー、中距離のエールの３つです。この３つを使い分ける事により、最適な戦闘状況を作る事ができます」

「ストライカーパックシステムか・・・それだけでどこの国も欲しがりそうだな。ところで、お前のＩＳの色はグレーだったはずだ。なぜ色が変わった？」

「あれはフェイズシフト装甲といいます。フェイズシフト装甲は実体弾及び実体剣による攻撃を無効化する特殊な装甲です」

「なん・・だと？」

千冬さんも山田先生もあまり声が出ていない。そりゃそうか、だってこんなシステムにしろ、装甲にしろ、まだどこの国も開発にすら至っていないのだ。もしもこの技術がどっかの国にわたったら一気にパワーバランスが崩れてしまうような代物だ。

「ちなみに僕のＩＳの基本武装は一部を除いて全てビーム兵器です。これもまだどこの国もほとんど開発していませんよね？」

「「・・・・・・・・・」」

あまりの桁外れな技術力に2人とも絶句してしまう。僕だってここまでとは思わなかった。ビーム兵器と言うのはとても難しい。というのも兵器レベルでの大威力のビームを発生させる事は現代でもとても大きな、それこそセシリアのスターライトＭＫ？かもしくはそれ以上の内部装置が必要になるからだ。それをたかだかＩＳ専用の銃のサイズで実現させると言う事は、それだけで未知の技術の固まりなのだ。ビームサーベルに至っては説明は不要だろう。もちろん、どちらの武器も威力は折り紙付きだ。

「・・・笑えない。冗談抜きで国家機密に触れそうだ」

千冬さんがこめかみを抑えながらそう言う。

「いいか？吉良。お前のＩＳは未知のＩＳと言ってもいい。よって、くれぐれも軽率な行動はしないように。それと山田先生、今ここで聞いた事は他言無用だ」

僕と山田先生が頷く。事の重大性が嫌と言うほど解った。

「この件は私が預かる事にする。退出していいぞ」

僕は千冬さんにお礼を言って退出する。これから先、大変そうだ。

そんな一抹の不安を抱いて・・・・

第6話：クラス代表決定戦後編（後書き）

次、更新できるのは土日のどっちかになると思います。

ではまた次回！

ご意見ご感想ありましたらドシドシお願いします！

第7話：現れたセカンド幼なじみ（前書き）

今回は原作などで何かと不遇が続いたセシリア回です。

ぶっちゃけ私はセシリア大好きです。

第7話：現れたセカンド幼なじみ

一夏ｓｉｄｅ

吉良達とのクラス代表戦を終えた次の日のＳＨＲの事

「というわけで、クラス代表は織斑一夏君に決まりました！あ、１繋がりでいいですね！」

山田先生が高らかにそう宣言する。黒板にはでかでかと織斑一夏と書かれている。ふむ、これは俺の名前だ。あれ？俺、昨日負けたよな？どうして俺の名前が書いてあるんだろう？？

「先生、俺は昨日の試合で負けたんですがどうしてこうなったんでしょう？」

生じる当然の疑問。そしてそれに答えたのは山田先生ではなく、後ろに座っていたセシリアだった。

「それはわたくしと大和さんが辞退したからですわ！」

うわぁ～なんで辞退するのかなぁ・・・吉良に負けたセシリアはともかく吉良まで辞退なんて・・・あれ？よく千冬姉が許したな。そう思って吉良の方を見る。

「最後の攻めを見て、一夏はこれから強くなるって思ってね。だから僕と織斑先生で考えた結果だよ」

ふむふむ、なるほど。で、本音は？

「単に面倒だったから（ニコっ♪）」

うわぁ～満面の笑みで最悪な事を言ったよこの人。

実際はできるだけ吉良のＩＳを人目にさらしたくないという千冬の配慮なのだが、一夏相手に国家機密をバラすほど2人とも馬鹿ではない。

「なら俺も辞退する！！」

「できるか馬鹿。お前まで辞退したら誰が代表をやるんだ」

「一夏、僕が辞退したのは勝者の特権だよ」

「そう言う事だ。それに吉良はともかくとして、お前は知識も技術も圧倒的に足りてない。これを機に訓練に励めよ」

追い討ちをかけるように千冬姉が言ってくる。くそっ！ここに俺の味方は・・・

「く・・！こうなったら、吉良！放課後俺の訓練に付き合ってくれ！」

こうなったら吉良を巻き添えにしよう。何が何でも付き合ってもらうぜ！

「それくらいなら別にかまわないよ」

よっし、吉良が同意した！「それならわたくしもご一緒しますわ！！」おろ？セシリアも？

バンっ！！

それまで黙って事の成り行きを見ていた箒が荒々しく机を叩いてセシリアに食って掛かる。

「あいにくだが一夏の相手は私と吉良で足りている！」

箒が額に青筋を浮かべてそう言う。・・・・修羅がそこにいた。

「ご心配なく。私が狙っているのは一夏さんではありませので」

そう言ってセシリアは吉良を見る。ちなみにセシリアがそう言った途端に箒の殺気は風船が破裂するように消えたのだった。そういえばセシリア、さっき俺の事を名前で呼んでいたか？まぁ、いいか

「話はまとまったようだな。では朝のＳＨＲを終わる。今日はこれからＩＳの飛行操作実践がある。遅れるなよ？」

千冬姉のその言葉でもってＳＨＲは終了する。あれ？あっちで吉良とセシリアが話しているな。何話してるんだろ？不思議に思いながらも俺は出席簿で叩かれたくなかったので、急いで授業の準備をする事にした。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「それで、お話ってなんですか？」

ＳＨＲが終わってからすぐ、僕はセシリアを捕まえて話しかけた。

「さっき言ってた一夏との訓練にセシリアも参加するの？」

「え!えぇ、できれば参加したいのですが・・・ダメですか?」

「良かった!ならセシリアにお願いしたい事があったんだよ」

「お願い・・・ですか?」

「そう、僕と一緒に射撃の訓練をしてほしいんだ。セシリアの武器は射撃武器が主体だからね、僕に射撃の仕方を教えて欲しいんだ」

「それはもしかして・・・や、大和さんと2人っきりで、という事ですか?」

あれ?心無しかセシリアの声が震えている。顔も赤いし・・・

「うん?まぁ場合によってはそうなるかもね。あ、もしかして嫌だった?なら・・「そんなはずがある訳がありませんわ!このセシリア・オルコット。喜んでお受けいたしますわ!」そ、そう?ありがとう」

吉良がにっこり微笑んで言うとセシリアが赤くなる。良かった射撃は覚えておかないといけなかったからね。

「(うふふ・・・//大和さんと2人っきり、大和さんと・・・そしてゆくゆくはその先まで行っちゃったり・・・//)」

恋する乙女の妄想は止まらない。今のセシリアの頭の中は花畑だった。

「さて、ならそろそろ行かないと、授業に遅れちゃうよ」

そう言ってもなかなか動き出さないセシリア。どうにも心ここにあらずな感じだ。ぐずぐずしてたら遅れて出席簿アタックをくらってしまう。

「ほら行くよ！セシリア！」

仕方が無いので強引にセシリアの手を握って走り出す。

「そんな・・・／／大和さん、強引になんて、ダメですわ／／」

後ろでセシリアが何か言ってるけど聞こえない。聞こえないったら聞こえない。この後、結局授業に遅れて僕らは出席簿アタックをくらったのだった。・・・まぁその衝撃でセシリアはやっと我にかえったが・・・

「さて、そろったところで授業を始める。織斑、オルコット、吉良、ＩＳを展開して飛んでみろ」

千冬さんにそう言われ僕とセシリアはすぐさま展開する。遅れる事１秒、一夏も展開する。

「吉良君のＩＳってフルスキンなんだ。珍しいね～」

「あれはなんて書いてあるんだろう？Ｇ、Ｕ、Ｎ、Ｄ、Ａ、Ｍ？ガンダム？」

「こうして見ると鎧みたいだよね」

女子は口々にそう言う。僕はかまわずＰＳ装甲を展開する。

「あ！色が変わった！？」

「きれ～」

ストライクが赤、白、青のトリコロールカラーに染まる。装備は、エールにしよう。そう思いエールストライカーを準備する。

「よし、飛べ！」

千冬さんの合図とともに一斉に空へと上がる。僕、セシリア、一夏の順だ。

「何をしている！ストライクはともかくとして、白式の方がブルー・ティアーズよりも出力は上だぞ！」

千冬さんの怒号が響く。そしてそのまま僕たちは空へと上がり待機する。

「そもそも空を飛ぶっていう感覚がいまいちつかめないんだよな～」

一夏がそう文句を言う

「一夏さん、イメージは所詮イメージですわ。自分がやりやすい方法を探すのが建設的でしてよ」

セシリアがアドバイスする。

「ちなみに、なぜＩＳが飛べるのか説明してもいいけど、長いよ？反重力力翼と流動派干渉の話からだからざっと・・・５時間ほどか

な？」

吉良がそう付け加える。５時間だって？やめだやめだ！そうやってしゃべっていると千冬姉から通信が入る。

「では３人とも急下降と急停止をやってみろ。目標は地表１０ｃｍだ」

急降下と急停止。イメージとしては自分の前方に角錐を展開させるイメージらしいが、それがまったく解らない。というのが一夏の弁だった。

「ではお先に」

そう言ってセシリアはグングン降りていく。衝突音が聞こえないから成功したみたいだ。さすがだね

「次、どっちが行く？」

一夏に聞くと

「俺が行く」

一夏がそう答えたので僕は見送る。どんどん一夏が小さくなって停止・・・・しない？

ドゴォオオオン！！

・・・・・地面に衝突した。やっぱり一夏にはまだ難しかったか。地面にはマンガみたいに人型の穴があいている。うわ、一夏出席簿

アタックをくらってる。痛そうだ。・・・あれ？ＩＳの絶対防御を無視する出席簿っていったいなんなんだろう？？

少しした後、僕は考えるのをやめた。世の中には知らない方がいい事もいっぱいあるのだろうからね。そろそろ僕も行かないと。そう思った僕はストライクを動かして急降下＆急停止をする。幸い一夏みたいな事にはならなかった。

「次は３人とも武装を展開しろ・・・吉良はもうできているからいいか」

千冬さんがそう言う。ストライカーパックを選択する時に一緒に武装も展開してしまったからだ。それではアレなので、ソードストライカーを展開することにした。

「・・・さすがだな、次！オルコット！」

セシリアが武装を展開する。手にはスターライトＭＫ？が握られてる。射線の先には僕がいる。あれ？なんでこっちに向けてるの？

「さすがは代表候補生といったところか・・・だがそのポーズはやめろ。吉良を撃つ気か？」

セシリアが自分のポーズについて説明をする。まぁそれで千冬さんが納得するとは思えないんだけど・・・

「次は近接武器を展開しろ」

続けて千冬さんがそう言う。だけどセシリアは手こずっているみたいだった。

「あぁもう！インターセプター！」

ついに名前を呼んで展開した。これは初心者がやる方法らしく、セシリアは屈辱の顔をしていた。

「いつまでかかっているんだ。実戦だったらお前はもう堕ちているぞ」

「実戦では懐になど入られませんわ！」

「ほう、先の試合で懐に入られて切られたのは誰だったかな？」

そう言われてセシリアは赤くなる。そしてあなたのせいですわ！と言わんばかりに僕を睨んでくる。なんで？

「次、織斑」

一夏は雪片を展開する。

「遅い、０．５秒で出せるようになれ」

情け容赦ない千冬さんの言葉だった。

「今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドはなおしておけ」

一夏が自分があけた穴を思い出してがっくりとしている。しかたないな。

「一夏、僕も手伝うよ」

「ホントか！サンキュー吉良、助かったぜ！」

早速僕たちは穴を塞ぐ。２人でやれば早いもんね。

「織斑君と吉良君が・・・・ジュルリ」

「どっちが攻めかな？守りかな？」

「私はどっちでもいけるわ」

・・・僕たちの後ろでそんな声が聞こえるけど聞こえなかった事にしたい。

放課後、僕とセシリアはアリーナにいた。もちろん射撃の訓練をする為だ。ちなみに一夏達はというと・・・

「吉良達の訓練を邪魔するのは悪いな。一夏！私たちは剣の訓練をするぞ！」

「え？いやぁ・・・俺は吉良と剣の打ち合いをやりたいんだが」

「いいから行くぞ！」

そんな感じでズルズルと箒に引っ張られて剣道場の方へと向かった。最後に一夏と目が合って助けて、と視線を送られたけど無理だった。だってあそこに飛び込む勇気は僕にはない。まだ死にたくない。一夏、生きていたらまた明日会おう。そんな事を思ったのだった。

「もう、ちゃんと聞いていますの？」

「あぁ、ごめんごめん」

セシリアがプクッと頬を膨らませる。いけない、ちゃんと聞かないと。

「射撃において重要なのは・・・・」

セシリアがどんどん説明していく。僕は全て覚える為にメモを取る。

「ま、ざっとこんな物ですわね。武器の違いはあれど基本的なとこはあまり変わりませんわ」

なるほど、これはもう一回読んで頭に叩き込まないと

「習うより慣れろ、ですわ。じゃあやってみましょうか」

セシリアがそう言うので僕たちはＩＳを展開する。

「前から思っていたのですけど、なぜ大和さんのＩＳは色が変わるのですか？」

「あぁまあ理由はあるけど話せないんだ。国家機密だから・・・」

「そうでしたの」

セシリアが少し残念そうな顔をする。

「気を取り直して、始めましょう」

セシリアがそう言うと、ターゲットが現れる。その後は射撃の訓練が幕をあけた。

「今日はありがとう、セシリア」

訓練を終えて僕とセシリアは寮へと向かう道を歩く。

「お易い御用でしたわ。でも大和さん筋がいいですわね、今日始めたばかりなのにもうコツをつかんで」

「そうかな？ありがとう」

セシリアに笑いかけると赤くなる。夕日のせいかな？

「（あぁ、大和さんと2人っきりで帰れるなんて至福のときですわ。夕日に染まってとっても格好いいですわ）」

セシリアの頭の中でグルグル妄想が渦巻く。ちなみに吉良はそんなセシリアを見て頭に盛大に？マークを浮かべていた。

実は吉良も鈍感という意味では一夏といい勝負だった。前世の吉良があまり女に縁がなかったせいなのか、これまで吉良は自分に向けられる好意にまったく気づかなかった。ただし、他者に対して向けられる好意には敏感なのが一夏と違うところだった。

そんなこんなで吉良達は帰路につくのだった。

夜、食堂の中では織斑一夏クラス代表就任祝いパーティーが催されていた。

「それでは！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

パンパーン！と鳴らされるたくさんのクラッカー。軽快な音とは裏腹に、俺の心は深く沈んでいった。吉良達と別れて箒と地獄の打ち合いが終わって帰ってきてみればこれだ。忘れてた、いや忘れたかったこのクラス代表、俺に押し付けた張本人である吉良はセシリアと楽しそうに談笑していた。めでたくない、めでたくないぞこれ。

「いや～これでクラス代表戦は盛り上がるね！」

「ほんとほんと」

「他クラスには織斑君の情報を売れる！クラス代表は盛り上がる！言う事無しだよね！」

「ほんとほんと」

お前ら・・・クラスメイトを売るなよ。ってかここにいるの、確実に1組以外もいるだろ。

「人気者だな、一夏」

すみませ～ん、さっきから箒が不機嫌なんですが俺何かしましたか～？

「2年新聞部副部長の黛薫子で～す。クラス代表の織斑一夏くんと吉良大和君にインタビューしにきました～」

・・・さらになんだかめんどくさそうなのが来た。インタビューねぇ。

「それでは、クラス代表に就任した感想をどうぞ！」

マイクを向けられる。えぇどうせ俺は弱い日本人ですよ。

「精一杯頑張ります」

「ふむふむ、俺に触れるとやけどするぜ！ね」

盛大にねつ造された。

「それでは男でＩＳを使えるもう一人の男子、吉良大和くんどうぞ」

「精一杯頑張ります」

「ふむふむ、クールに決めるぜ！ね」

これまた盛大にねつ造された。吉良は途方に暮れている。こうして情報はねつ造されるんだな・・・

ちなみにセシリアは長過ぎるので却下された。その後、写真撮影でちょっとしたハプニングがあったが無事パーティは終了した。

「「（女子のパワーって恐ろしい！）」」

これがこのパーティを通じて俺と吉良が得た教訓だった。

次の日のＳＨＲ、何やらクラスが騒々しい。いったいなんだろう？

「おはよう、この騒ぎはいったいなんなの？」

「あ、吉良君、織斑君おはよう！なんかね、２組に転校生我来るんだって」

「この時期に転校生？変だよな吉良」

「まぁ一概にはそう言えないんじゃないかな？都合って物もあるし」

「どんな奴なんだろうな」

「うん、僕も興味あるかも」

そう言った途端に箒とセシリアの機嫌が目に見えて悪くなる。箒はわかるけどなんでセシリアまで？

「一夏！今のお前に女子を気にしている暇があるのか？」

「そうですわ！大和さん、今日もアリーナで射撃の訓練ですわ！」

ズズイっと迫られる。訓練をしてくれるのはいいんだけど、何だか今の２人には鬼気迫る物があるな。

「ま、とにかくクラス代表戦頑張ってね！」

「織斑君が勝つとみんな幸せだよ～」

女子達がそう言う。なんせこのクラス代表戦、生徒にやる気を出さ

せる為に色々と賞品がついているからだ。

「まぁ頑張るよ」

一夏がたじろぎながらそう言う。

「今のところ専用機を持っているのは1組と4組だけだから余裕だよ」

クラスの誰かがそう言った時

「その情報、古いよ。2組も専用機持ちが代表になったからそう簡単には優勝できないよ」

ドアの方から声がした。振り返ってみるとそこにいたのは・・・

「鈴・・・？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

そこに立っていたのはトレードマークのツインテールとつり上がった目をした僕たちのセカンド幼なじみ、鳳鈴音だった。

第7話：現れたセカンド幼なじみ（後書き）

ゆかなさんボイスでのセシリアは死ねます。かわいすぎです。

でもゆかなさんというとテッサのイメージが出てきてしまう自分がいるんですがね。

ではまた次回！

ご意見ご感想をお待ちしております。

第8話：嵐を呼ぶセカンド幼なじみ（前書き）

空いた時間を使ってちょいちょい書いてくと、なんだか良さげな感じがします。

第8話：嵐を呼ぶセカンド幼なじみ

僕たちのセカンド幼なじみである鳳鈴音（ファン・リンイン）が一夏に対して宣戦布告をした・・・のはいいんだけど鈴ってあんなしゃべり方だっけ？

「なにしてんだお前、すっげぇ似合わねぇぞ？」

僕の気持ちを代弁するかのように一夏が突っ込みを入れる。

「んな・・・！なんていうことを言うのよ！あんたは！」

おぉ、戻った。どうやら気取ったしゃべり方をしてただけのようだ。

「久しぶりだね、鈴」

「吉良も久しぶりじゃない。会えて嬉しいわ！」

「うん、僕もだよ」

と、そこへ

「おい」

後ろから大魔神（千冬さん）登場

「なによ！！」

それに気づかない鈴は後ろを向いて、途端に血の気がサーッと引いていた。

「ち、千冬さん」

バシン！

「学校では織斑先生だ。それにＳＨＲがもう始まっている。わかったらさっさと教室に戻れ」

「す、すみません・・・」

鈴がすごすごと戻る。確か昔から鈴は千冬さんの事が苦手だったっけ？

「また後で来るからね！逃げないでよ一夏！吉良は後で話そうね！」

僕らにそう言ってぴゅーっと走って戻る。

「一夏、相変わらず鈴は変わらないね」

「そうだな吉良。これから賑やかになりそうだ」

僕と一夏はニッと笑う。うん、絶対騒がしくなるね。あれ？そういえば何か忘れているような・・・あ！

「思い出に浸るのもいいが今はＳＨＲ中だ」

気づけば後ろに立っていた大魔神（千冬さん）に僕らは仲良く叩かれたのだった。

ｓｉｄｅ箒＆セシリア

鳳鈴音と名乗った少女が一夏と吉良と仲良くしているのを見て2人は気が気ではなかった。

「（なんだ一夏は！あんなに親しそうに。ま、まさか付き合っているとか・・・あり得ん。だがしかし・・・）」

「（なんなんですの！あの方は・・・わたくしの大和さんとあんなに仲良くして・・・は！もしかして付き合っているとか！？）」

「「これは昼休みの時間に聞く必要があるようだな（ですわね）」」

想う相手は違えど、恋する乙女たちの気が気で無い1日が始まった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

やっと昼休み。お昼の時間だ。僕は一夏達を誘って学食へ行く事にした。もちろん箒とセシリアも一緒だ。そういえば2人とも珍しく千冬さんから出席簿アタックをくらっていたけどどうしたんだろう？？不思議に思いながら食堂に着くと

「待ってたわよ！2人とも！」

そこには鈴がいた。この吊り上がった目もツインテールも昔から変わらないよね。一瞬で判別つくからいいけど。僕らはそれぞれ昼食を受け取って少し大きめの席に着く。そしてテーブルに着いてすぐに一夏が話しかけた。

「ホント久しぶりだよな鈴。元気してたか？」

「げ、元気だったわよ。アンタもたまには病気とかしなさいよ」

鈴・・・それどういう意味だよ。一夏も困っているな。それから僕と一夏と鈴は空白を埋めるように話していく。

「んんん！一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわね、大和さん説明をお願いしますわ。この方と付き合っているのですか？」

すっかり忘れていた箒とセシリアが話を遮るようにこう質問してきた。って！なんて事聞くのさ！

「べ！別に付き合っている訳じゃ！」

鈴がテンパっている。

「そうだよ、僕と鈴はそういうのじゃなくて」

「そうそう、俺たちは小五から中二まで一緒の学校だったんだ。いわば幼なじみってやつだな」

「・・・・・・」

一夏が幼なじみって言うと鈴の機嫌が目に見えて悪くなった。でも仕方ないよね、鈴も昔から一夏一筋だから。それを一夏本人に幼なじみって言われたら不機嫌にもなるか。ちなみに僕はよく鈴から一夏の事について質問されたり、恋愛相談（愚痴）に付き合わされたっけ。

「そうですの。大和さんと一夏さんの幼なじみだったんですの（あの方の本命はどうやら一夏さんみたいですわね）」

そしてなぜか途端ににこやかに笑顔になるセシリア。ずいぶんと機嫌が良くなったけど何かあったのかな??

「・・・・・・・・・・・・（ゴゴゴゴゴゴ！！）」

その反対にさらに機嫌が悪くなる箒。これは一波乱ありそうかな・・・

「ところで一夏さぁ、ＩＳの事わかる?もしわからないならあたしが教えてあげてもいいよ?あ、吉良もどう?」

「悪いが一夏の相手は私と吉良で足りている!!一夏がどうしてもと言うからな！」

あれ?このやり取り前もあったような気が・・・それに箒さん、一夏がどうしてもなんて言った事あったっけ??

「私は一夏に聞いているの。関係ない人は引っ込んでてよ。それにあたしの方がアンタ達より強いし」

これを聞いてセシリアと箒はピクッと顔が引きつった。特にセシリアなんて額に青筋が浮かんでる。ってなんで鈴も挑発するような事言うかな！

「ンンン！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ！中国代表候補生鳳鈴音さん?」

「・・・・・誰?」

「・・・な!?わたくしをご存じない!?わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ!」

「知らない。あたし他国に興味ないし」

鈴がピシャッと言うとセシリアは顔を真っ赤にして怒った。しょうがない・・・

「まぁまぁ落ち着いてセシリア、鈴も。とにかく僕も一夏と一緒に訓練する事になってるし、この2人も付き合ってくれているんだ。だから、鈴は僕たちができない時にお願いできないかな?」

ここら辺が妥協案ってところだろう。そうやって鈴に提示すると・・・

「わかったわよ!吉良までそんな風に言うなら私にも考えがあるからね」

妥協案、失敗。はぁ・・・本格的に嵐がありそうだな。そんな感じで昼休みは終わりを告げた。

昼休みが終わって午後の授業が始まった訳だけど、恐ろしいくらいに何も無かった。それがまるで嵐の前の静けさみたいで僕は逆に怖かった。そして今は放課後、一夏と特訓する為に僕たちはアリーナにいた。

「なにしてるの?箒」

僕たちがアリーナに移動するとそこには箒がいた。箒がいる事自体は別に珍しくない。問題は箒が今身につけているものだ。

「それってＩＳ：打鉄？」

箒が装備しているのはまぎれも無くＩＳだった。箒はなにかと一夏の特訓の相手である事を強調していたのだが、専用機を持ってなかったためにＩＳの指導はできなかった。それがこうも簡単に訓練機の使用許可が下りるなんて・・・やっぱり、鈴の事で焦っているのかなぁ？まぁなるようになれだよね・・

「なぁ吉良、今日はセシリアまで連れてどんな訓練をやるんだ？」

「あぁ今日セシリアに来てもらったのは、射撃と近接を使った２対１をやろうと思っていたんだよ。一夏の武器は雪片弐型しかないからね、まずはいろんな武器に対する反射性を上げようかなって思ったんだ」

そう、一夏の武器は近接用ブレードのみ。であるから僕はいろんな武器に対する反射性を上げようと思ってセシリアにも来てもらったのだ。でも箒もいるってことは・・

「一夏、急だけど箒もいる事だから箒も入れて３対１にしようか」

「っ！？聞いてないぞ吉良！それじゃまるで俺に死ねって言ってるみたいじゃないか！」

「いやそんな事は言わないけど、せっかく箒もいるんだから少しでも訓練密度を上げようと思って・・・別に一夏をいじめて楽しもうとか微塵も思ってないから安心して」（笑）

「笑ったろ！今絶対笑ったろ！絶対おもしろがってるだろ！？」

「さぁ！あまり時間もないからさっさと始めようか」

そう言って僕らはＩＳを展開する。

「ちょ・・・！ちょおっと待て！話せばわかる！頼むから待ってくれ！いや、待って下さい！」

「回避しないと死ぬかもね！」

「たすけてーーーーー！！」

そして始まる訓練という名の死合い。というか一方的すぎる。

訓練を始めて１時間後、一夏が目を回して気絶してしまったので訓練は一時中断となった。・・・一夏よく１時間も持ったね、それは褒めてあげるべきだと思うよ。訓練の内容はこうだ。とにかく回避する。僕と箒が接近戦を仕掛ける。そしてセシリアはそんな中、遠距離から常に一夏に狙いを定めている。つまり近づけば僕と箒の斬撃、離れればセシリアの砲撃と情け容赦の無い訓練内容だった。一夏、途中から泣きそうだったもんね・・・

「さて大和さん。一夏さんが気絶して休んでいる間にわたくしたちの訓練を始めましょうか」

「そうだね。今日もよろしく」

僕とセシリアは射撃の訓練を始めようとする。その時アリーナの扉

が開き、嵐が乱入してきた。

「一夏！宣言通り来たわよ！」

鈴、登場。

「・・・あれ？一夏は？」

「・・・あそこ」

そう言って僕はアリーナの角で目を回している一夏を指差す。

「・・・・・・（ピキっ！）」

あ、何かがキレる音が・・・

「な、なによ！せっかくこのあたしがわざわざ来てあげたってのに何休んでいるわけ！？も～怒った！今からとっちめてやる！」

そのまま鈴はツカツカと一夏に近づいてそのまま一撃入れた。・・・・痛そうだ。

「なんだなんだ！？って鈴！？どうしてここに？」

「昼に言ってたでしょ！あんたの訓練に付き合ってあげるんだから感謝しなさいよね！」

「・・・あの～鈴さん？俺はさっきまで訓練をしてて目を回していたんですが・・・」

「うっさい！四の五の言わずにやるわよ今すぐ！」

おぉ、鈴がどんどん準備していってる。

「待て、一夏は私が教えるのだ。私にどうしてもと一夏が頼んできたのでな」

そこへ箒が登場。箒の額には青い筋が何本も出ている。

「だから言ってんじゃん、それはあたしの役目だって」

鈴は言うが早いかＩＳを展開し一夏に切り掛かる。

「ちょっと待て！！」

一夏は急いでＩＳを展開し鈴の攻撃をかわそうとした。

ガキン！！

ところが、それよりも前に箒が間に割って入って刀で鈴の攻撃を受けた。

「ちょっと！邪魔しないでって言ってるでしょ！」

「それはこっちの台詞だ！」

・・・一夏を放っといて勝手に戦い始める２人

「一夏！」

「何黙って見てんのよ！」

「何黙って見てるって・・・お前らどっちかに味方したら怒るだろ」

「当たり前よ（だ）！」

もうめちゃくちゃだ・・・

「こうなったら実力行使よ！」

「させるか！」

そう言いながら2人は一夏へと向かっていく。これはもしかして・・・

「こっちくんなぁーーーー！！」

「・・・大和さん、止めた方がよろしいのでは？」

「僕にアレを止める勇気はありません」

何よりも今僕は自分の命が惜しい。

「・・・そうですわね」

先ほどと同じように一夏の絶叫を残して、本日2度目の殺戮ショーが始まった。

そしてようやく本日の訓練（殺戮？）が終わった。一夏なんてｏｒｚのポーズをしているよ。よっぽど疲れたのだろう・・・まぁ無理も無いけど。

「だぁー！やっと終わった・・・最後の方は死ぬかと思ったぜ。そしてさっさとシャワー浴びたい」

「一夏、今日はお前が先にシャワーを使っていいぞ。では「また後」でな」

「ホントか！？サンキュー箒。おう、また後でな」

そう言い残して箒はさっさと行ってしまう。はて、やたら「後で」を強調してた気がするけど？

「ちょ！ちょっと一夏、シャワーってどういう事！？」

これに食いついた鈴。マズイ！一夏と箒が同じ部屋だなんて鈴に知れたら爆発するんじゃないか？

「あ、俺と箒は同じ部屋なんだよ。いつもは箒が先にシャワー使うくせに、今日は俺が先でいいなんてラッキーだな」

・・・鈍感王の一夏はここでもそのスキルを遺憾なく発揮したようです。

「なによ・・・それ・・・」

あぁもう！すでに鈴の後ろに阿修羅がいるよ！ってか下手したら阿修羅も尻尾を巻いて逃げ出す勢いだよ！

「まぁ幼なじみだし、そんなに違和感は無いけどな」

そこは、男女が同じ部屋って時点で違和感持とうよ。

「・・・幼なじみならいいわけね」

「へ？」

「いいわよ！それならこっちにも考えがあるんだからね！」

そう言って肩を怒らせてアリーナを後にする鈴。対する一夏は何が何だかわかってないようだった。はぁ、これはもう一波乱ありそうだね・・・僕はそんな確信めいた予感がした。

訓練を終えて、僕は今自室でくつろいでいる。・・・くつろいでいるはずなんだが・・・

「・・・・・・・！！」

「・・・・・・・！！」

隣がやたらうるさい。声の主は箒と鈴だ。一応各部屋はかなり防音対策がしてあるのにこのうるささだ。よっぽど大きい声でしゃべっているんだろうね。一夏の声が聞こえないところを考えるとすでに置いてきぼりのようだ。

「・・・・・・！！」

「・・・・・・・・・!!」

「・・・・・」

「・・・・」

ようやく静かになった。そして、うるさかったので注意しにいこうかと思ってドアを開けたときだった。

「・・・ひっく・・・うぅ」

涙で目を真っ赤に腫らした鈴がそこに立っていた。

「（一夏、今度は何をやらかしたの？）」

泣きじゃくる鈴を見て、僕は先ほどの予感が的中した事を悟った。

第8話：嵐を呼ぶセカンド幼なじみ（後書き）

やっと鈴が登場です。話の関係上、吉良にフラグを立てる事ができませんでした。

しかしＩＳに出てくる女の子はみんなかわいくて「おもちかえりぃ～！」したいですね。

ではまた次回！

泣いている鈴をそのまま放っておけないのでとりあえず僕は部屋の中へと入れた。その鈴はまだ泣いている。何があったのか分からないけどあの鈴が泣くなんて、よっぽどの事があったに違いないと思った。

「はい、お茶」

僕は鈴にお茶を入れてあげる。鈴はありがとうと言って受け取りそれを飲む。さっきより落ち着いてきたみたいだ。そろそろかな？

「それで、さっきすごい言い争っていたけど何があったの？」

「実は・・・・」

鈴はポツポツと話し始める。

「要約すると、鈴が中国に帰る時に空港で一夏と結婚の約束をしたけど、一夏はそれを勘違いして覚えていた。っていうこと？」

僕の要約を聞いて鈴はコクッと頷く。鈴が一夏と交わした約束、それは「あたしの料理が上達したら毎日あたしの酢豚を食べてくれる？」というものだった。あの日空港で2人っきりで何か話していたのは知っていたけどそんな内容だったとは

「（一夏・・・そこまで言われたら気づこうよ）」

凛と一夏が交わしたこの約束、言い換えるならば「毎日あたしの作るみそ汁を飲んでくれる？」というものだ。つまり、結婚の約束に等しい。それを一夏はただ飯を食わしてくれると勘違いして覚えていたのだ。鈴が怒るのも無理は無いと僕は思う。

「それにしても、一夏もとんでもない勘違いしてたもんだね」

「まったくよ・・・」

「でも、それで一夏のことを本当に嫌いになった訳ではないでしょ？」

「それは・・・その・・・まぁ」

僕の言葉を聞いて鈴が真っ赤になりながら肯定する。鈴が一夏のことを一途に思う理由は一つ。昔、「外国人」ということでいじめられていた鈴を一夏が助けたからだ。鈴はその勝ち気な性格のせいで強そうだが本当はとっても弱い女の子である。箒の時もそうだが、一夏はそういう弱い人を集団でいじめる奴がこの上なく嫌いなのだ。

そんなこんなで今に至るという訳である。にしても一夏ってやっぱり鈍感なんだね。と自分のことを棚に上げる吉良だった。

「それで、これからどうするの？」

「それは・・・あいつのせいであたしは怒っているんだから当分このままでいいかと」

「それって本当に思ってるの？」

「・・・・」

鈴としても好きな人としゃべらないってのはつらいと思う。

「いいのよ。あいつが忘れているのがいけないんだから、思い出して謝るまで許さない」

鈴も頑固だよねぇ。ま、今回の事は一夏がいけない事だからどうしようもないか

「わかった。鈴がそこまで思ってるなら僕は何も言わないよ。だけど、クラス対抗戦が終わるまでには片をつけてね。でないと僕が辛いから」

僕が笑ってそう言うと鈴もやっと笑ってくれた。涙の筋と真っ赤な目がちょっと痛々しいけど・・・

「とにかく、今回のことは一夏が全面的に悪いんだから鈴は一夏が思い出して謝ってくるまでこっちから何かいう必要は無いと思うよ。一夏には少しお灸を据えないと」

「やっぱり吉良に話して正解だったわ。もし誰にも話せなかったらあたし辛かった・・」

「あまり思い詰めないでね。僕でよければいつでも相談に乗るからさ」

「ありがとう。遅くまでごめんね、おやすみ！」

鈴はそう言って部屋から出て行く。さて、僕も寝よう。

ｓｉｄｅ　一夏

鈴に頬をひっぱたかれた次の日、俺は鈴に昨日のことを問いただそうとしたがことごとく避けられた。会えば全速力で逃げていくので取りつく島が無かった。

「はぁ～」

自分の席に突っ伏してため息をつく。

「おはよう、一夏」

俺の親友である吉良が話しかけてくる。

「どうしたの一夏、ため息なんかついちゃって・・・鈴のこと？」

「おまっ！どうして知ってんだよ！？」

「あのねぇ、僕は一夏の部屋の隣なんだよ？そして、あれだけ大きい声で話せば・・・ねぇ？」

「つまり、全部聞こえてたと」

吉良が頷くと一夏の顔がサーッと青くなる。実際は鈴から直接聞いたのだが、それを一夏にいうほど吉良は馬鹿ではない。

「どうしたらいいのかな～？」

「もう一回鈴との約束ってやつを考え直してみれば、そうするれば正解が分かるかもよ？とにかくこのままだと悪いのは一夏なんだから」

「本当の約束ねぇ」

正直一夏はさっぱりだった。てっきりただ飯を食わせてくれるという約束だと昨日まで思っていたからだ。でも吉良の言葉から考えるにどうにも違うようだ。

「どういう意味なんだ？」

「それを僕が言ってしまうのは意味が無いよ。自分で考えて答えを出すのに意味があるんじゃないか」

むぅっと一夏は唸ってしまう。結局1日考えたが分からなかった。その日、一夏はいつも以上に千冬さんに頭を叩かれたのだった。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ようやく、クラス対抗戦前日。ここまでが本当に長かったのだが最後の最後まで油断ならなかった。さっき鈴が僕の部屋にやってきて一夏が鈴に言ったひどいことを僕に怒鳴り声とともに言ってきた。鈴にとってのブロックワードは「貧乳」である。

鈴は胸が小さいことを気にしていた。どっかの誰かが「小さいのはステータスだ！希少価値だ！」なんて言ってたけど、鈴に限っていえばそれは戯れ言にしかならない。それを一夏に指摘されては怒るのも無理は無い

「（一夏・・・）」

僕はもう何度目かも分からないため息を隠すこと無く盛大に吐いた。
これは約束云々ではなく単純に鈴に謝らないといけないことだ。
そして、ようやくクラス対抗戦が幕をあけた。

クラス対抗戦当日、一夏対鈴の試合は満員御礼だった。一年同士の専用機持ちの試合というのに加えて、世界で初めてＩＳを使える男子の試合ということで生徒たちでアリーナは埋め尽くされていた。上空では織斑一夏操る白式と鳳鈴音操る甲龍（シェンロン）が待機している。戦いの火ぶたは今まさに切って落とされようとされていた。

「一夏、今謝るのなら半殺しで許してあげるわ」

「へ、冗談だろ」

「そう、じゃあ仕方ないわね！」

そして鈴は互い違いになっている武器、青龍刀を手に持つ。対する一夏は雪片弐型を展開する。ブザーが鳴って試合が始まった。

「いくわよ！」

鈴は接近しつつ青龍刀を振り回し一夏に接近する。一夏はそれをいなそうとして真正面から受けた。

「くっ！」

しかし、刃が回転している分威力が上乗せされただ打ち合うより重い一撃となって一夏を襲った。状況不利と判断した一夏は一旦距離

を置こうと鈴から離れる。

「あまい！」

鈴がそう叫ぶと両肩のアーマーがスライドし見えない衝撃が一夏を襲った。あれは・・・

「あれはなんだ！？」

モニターの前で試合を見ていた箒が声を上げる。

「あれは、おそらく衝撃砲だね」

「衝撃砲？」

「空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾として打ち出す物ですわ」

僕の言葉を引き継ぐようにセシリアが言葉を続ける。モニターには衝撃波と青龍刀を用いて確実にダメージを与える鈴と、未だにダメージを与えられない一夏が映し出されていた。だが、状況は少しずつ動いていった。

「（見える！）」

吉良達との訓練の賜物か一夏は鈴の攻撃を少しずつだが見切っていた。セシリアとの回避訓練のおかげで射撃武器を使う人が持つ癖というのを一夏は理解していた。それは目線である。剣道でもそうだが相手の目を見るのは大切である。「目は口ほどに物をいう」とい

う諺があるが、なかなかどうして当たっていた。だから一夏は鈴の目線に常に注意していた。そして青龍刀で向かってくるならそれまで培った剣の心得で対抗していった。

「（一撃なんとか入れば！）」

一夏の頭には千冬から説明された白式の特性が浮かんでいた。

「（一か八かやってみるか！）」

一夏が覚えた数少ないＩＳの操縦技術である瞬時加速（イグニッションブースト）を使って奇襲をかけようとしたのだ

「うぉおお！」

鈴の衝撃砲の射程に入る前に懐に入り、シールド無効化攻撃でケリをつけようとしたときだった。

ズドォオオオオオオン！！

ものすごい衝撃と音、それは鈴の衝撃砲とは比較にならないまでの音と威力だった。

「なに！？どこから！」

千冬さんの怒声が響く。

そしてモニターに映ったのは禍々しいまでの黒に染まったフルスキンの見たこと無いＩＳだった。

第１０話：クラス対抗戦後編（前書き）

続きです。

第１０話：クラス対抗戦後編

正体不明のＩＳがアリーナに降り立った。その異常事態に学園側は対応に戸惑った。

「どこからだ！」

千冬さんの怒声が響く。それについて山田先生が素早くキーボードを叩いて情報を集める。

「アリーナの外側からビームを撃ってシールドを壊して侵入した模様です！」

「外からだと！？どれだけ高威力の武器なんだ」

アリーナのシールドは基本的にＩＳと同じ物が使われている。それは簡単に破壊できる物ではないのだ。それを破壊できる武器ということは、操縦者に直接的なダメージを与えることができる武器ということになる。

「織斑、鳳！試合は一時中断、すぐに帰投しろ！」

「帰投って、あいつはどうするんだよ！」

「アレは先生達で抑える。いいからお前らはさっさと戻ってこい！」

「なら、俺たちは先生達が来るまでこいつを足止めする！」

「えぇ、あたし達で足止めするわ！」

鈴と一夏がそんな事を言う。驚いたのは山田先生だ。すぐに一夏達に避難するように言うが2人とも頑として聞かない。

「怖かったら逃げてもいいんだぜ?鈴」

「冗談でしょ?あたしよりあんたの方が弱いんだからあんたこそ逃げてもいいのよ?」

「女を置いてそんなことできるか」

一夏と鈴は互いに言い合うと、目の前のＩＳを観察する。そのＩＳはとにかく不気味だった。手は異常に長く、つま先よりも下にダラッと伸びている。そしてまたもフルスキン、吉良のと同じだが禍々しさが段違いだった。

「あぶねぇ！」

突然黒いＩＳが手を伸ばしビームを撃ってきたのであわてて回避する。一夏は白式のハイパーセンサーによる簡易解析でセシリアのソレよりも熱量が高いことに恐怖した。

「「（当たれば無事じゃ済まない）」」

背中を伝う冷や汗。鈴も同じことを思っていたようだ。

「ちょっと！織斑君、鳳さん、聞いてますかー！？」

一方、管制室では山田先生がマイクを通してしゃべっている。プライベート・チャネルはしゃべる必要も無いのだが山田先生はそれを

忘れるくらい焦っていた。

「あいつらがやりたいと言ってるんだ。やらせてやれ」

反対に千冬はさほど焦っていないようにコーヒーを飲もうと塩を入れた・・・・塩？

「織斑先生それ、塩です」

ピタッと動きが止まる。確かに千冬さんは塩を入れていた。それも山盛りの。

「なんでここに塩なんかあるんだ！」

「やっぱり弟さんが心配なんですね～」

山田先生がそう言うとキッとこっちを睨む千冬さん。山田先生は地雷をふんだかな～っと後悔した。

「山田先生、飲むといい」

ズイっと差し出される塩コーヒー。山田先生は千冬さんの無言の圧力に耐えきれず一口、そしてしょっぱすぎて泣いた。

「先生！わたくしに出撃許可を！」

セシリアが言う。しかしセシリアの言葉を否定するように千冬さんは首を振った。

「援護に行きたいのはわかるがこれを見ろ」

セシリアはモニターを見ると目を見開いた。

「遮断シールドのレベルが４に設定されている。それに扉が全てロックされていて・・・これでは避難も救援にも行けませんわ！」

「そういう事だ。今も3年の精鋭がシステムクラックを行っているがまだかかるそうだ。それにどのみちお前は援護部隊にはいれない。お前のＩＳでは連携が取れないからな」

そう言われセシリアは千冬さんに食って掛かる。だがセシリアの反論はすべて千冬さんに論破され、セシリアはぐうの音も出なかった。

「それなら僕が行きます」

吉良がそう言った。

「僕なら遮断シールドをランチャーのアグニで破壊できると思います。それに連携も取れます」

「本当か？」

「はい、僕のストライクの特性を使えば可能です」

ストライクの特性であるストライカーパックシステム。それはいかなる状況でも最適な武装を選択できる能力だ。今の状況にこれほど必要な物は無いと思う。

「わかった。さっき連絡があったのだが、ハッチのクラックは後１分で完了するそうだ。お前は待機して、クラックが完了次第出撃し、

あいつらを援護しろ」

「了解」

そういうと吉良はストライクを展開しようとする。

「大和さん・・・」

セシリアが不安げな顔で近づいてくる。

「大丈夫だよセシリア、僕はちゃんと帰ってくるから。だから待っててね」

「絶対ですわよ！絶対・・・帰ってきて下さいね！」

「もちろん」

吉良が安心させようと思ってセシリアの頭をなでた。するとセシリアは顔をトマトのように赤くするがされるがままにしている。とても気持ち良さそうだ。

「（青春してますねぇ）」

山田先生が隣にいる千冬に話しかける。

「（あぁ、だが吉良のアレは素だからな。鈍感という意味ではアイツと変わらんさ）」

「（吉良君も罪作りな人ですね～）」

小声で話す2人をよそに、吉良はストライクを展開しカタパルトに接続した。

「カタパルト接続を確認、ランチャーストライカースタンバイ、火器パワーフロー正常」

今回吉良はランチャーを選択した。というのも一夏も鳳もどちらかと言えば接近戦仕様の機体で、遠距離からの牽制を含めた動きができないからだ。それに、とどめに移る時にはソードで挟みうちできる。ストライクならではの戦い方だ。

「よし、クラック完了！ハッチオープン！吉良！」

「了解、吉良大和、ストライク、行きます！」

カタパルトから勢いよく射出されるストライク。

「吉良君、大丈夫でしょうか？」

「あぁ、アイツならきっとなんとかしてくれるだろう」

そう言って千冬はまたコーヒーを飲もうとして、片栗粉を入れた。

「それ、片栗粉です」

「なぜここに片栗粉が！」

「織斑先生、吉良君の事も心配なんですね」

先ほどの塩コーヒーの件をまったく懲りていない山田先生。そして・

・・

「飲むといい」

ズイっと差し出される片栗粉コーヒー。事ここに至って山田先生は後悔したが断る事ができずにそれを飲む。

「うわ・・・」

無駄にとろみのついたコーヒーのような何かだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

僕は空へ上がるとすぐに一夏達と合流した。僕は手短に状況を説明し、援護に回る。鈴は僕のＩＳがフルスキンだから驚いてたな。

「しかし、こうして3人そろって何かやるのも久しぶりだな」

一夏がのんきにそんな事を言う。

「一夏！今は戦闘中よ！」

そんな一夏を鈴がたしなめる。

「まぁまぁ、2人とも落ち着いて」

そしてそんな2人を僕が落ち着かせる。懐かしいな、中学の時みたいだ。そういえば、さっきもそうだけど向こうは僕たちが会話してるときって攻撃してこないな・・なんでだ？

「もしかして無人機なのかな？」

「「え？」」

「いやだって、あっちは僕たちが会話してるときって攻撃してこないよね。絶好のチャンスなのに」

「でもそれってあり得ないわ、ＩＳは人が乗らないと動かないのよ？」

「うん、だから推測の域を出ないけど・・・」

「でもそれなら、思いっきりやれるってことだよな！」

「一夏？」

「正直俺は相手も人間だから、心のどっかで加減してたのかもしれない。だけど相手が無人だってんなら遠慮なくいけるぜ！」

「・・・そうね。どちらにせよここで叩かないと」

一夏も鈴もすでに相手が無人機であると思っている。ならここはそれに従うか。

「それなら、僕と鈴で援護するから一夏がとどめを刺して。鈴、後どれくらい残ってる？」

「１８０よ」

「なら、僕が牽制するから鈴は僕が合図したら挟み込んで！」

「「了解！」」

一夏と鈴は一旦下がり僕はランチャーのアグニを構える。セシリアとの特訓のおかげで射撃の能力は上がってる。スコープを覗き照準を合わせる。

「照準・・・入った！」

アグニを2、3発放つと敵は大きく回避行動をとる。アグニの威力は敵のビームと同等かそれ以上の威力である事を感じ取ったのだろう。

「まだまだ！」

さらにミサイルを放つ。僕はそれにアグニを当てて爆煙でもってかく乱する。

「鈴！」

僕が合図すると鈴は分かってたというようにすでに動き出していた。さすが、長い付き合いは伊達じゃないね。鈴は青龍刀を振り下ろす。だが相手もさすがで、すんでのところで避けた。

「吉良！もう一度！」

「ダメだ！相手に同じ手は通用しない！次で決めるから、一夏！」

アイコンタクトで鈴と一夏と呼吸を合わせる。僕と鈴で突っ込むから、一夏は相手が回避したらそこを斬れと。

「ソードストライカーを！」

僕は装備を換装し鈴と一夏とともに突っ込む。相手の砲撃に備え僕と鈴と一夏は一直線に並ぶ。即席ジェッ◯ストリームアタックもどきだ。

「うぉおおお！」

僕たちが突っ込むと予想通り敵はビームを撃ってきた。だけどソードストライカーのシールドで防げる威力なので僕は迷う事無く突っ込みそれを防ぐ。

「これなら！」

僕と鈴は2人で剣を振る。でもこれは囮で、相手は見事にかかり上に逃げる。

「かかった！一夏！」

「まかせろ！」

最後方に待機していた一夏が飛び上がった敵を上段から斬る。敵は白式の零落白夜で切られて直接ダメージを負い地表へと落ちていく。

「勝った！」と誰もが思った瞬間だった。

突然敵ＩＳが再起動し一夏に狙いを定めていた。

「一夏ー！」

一夏は白い光に飲み込まれ、地面に落ちていく。僕はシュベルトゲベールを振り下ろし本当のとどめを刺した。

幸い一夏はとっさに鈴がキャッチしたがすぐに医務室へ運ばないと！

「鈴！一夏を早く医務室へ！」

鈴はすでにピットを抜けていた。良かった、あれなら何とかなるだろう。アリーナのロックも全て解除されてみんなの避難も完了している。「万事解決」そう思って僕が警戒を解いたときだった。

「・・・・！！」

ストライクのハイパーセンサーが警告を告げる。

ー警告　多方向からロックされていますー

「どこから！？」

そう思った瞬間僕は多方向から撃たれた。『オールレンジ攻撃』なぜ今までセンサーに引っかからなかったのかは謎だが、薄れ行く意識の中で僕が最後に見たのは、モノアイに４枚の緑の羽根を持つフルスキンのＩＳだった。そこで僕は意識を失った。

ーー

ーーーーーーーーー

「ファンネル、全機を確認。これより帰投する」

緑のＩＳを操っていると思われる人物が報告すると、通信が入って

きた。

「ご苦労、だがしかし攻撃しろとは言わなかったはずだが？」

「興味があったからな、あんたがそこまで興味を持つ男がどれほどの物か」

「それで？」

「正直話にならないな。そこまでの男なのか？」

「ククッ今はそうさ。だがあいつは私たちと同類なのだよ。いずれまた会う事になるさ」

「そういうものか。まぁ、アイツのデータは入手した。任務は完了だ」

「ご苦労、では手始めにそれをフランスとドイツへ匿名で送っておけ」

「わかった」

そういって2人は通信を終える。彼らの目的がなんなのかはまだ分からない。

ところ変わってここは保健室。今寝ているのは一夏と吉良である。一夏は鈴が運んだのだが、吉良は突入した部隊によって回収され、ここまで運ばれたしだいである。といっても実は吉良は起きていた

のだが、さっきから千冬さんや箒がやってきて話していたので起きるタイミングを逃していたので寝たふりをするしかなかったのだ。

「（いつ起きよう）」

そして今度聞こえてくる声は鈴のものだった。どうやらこの間の事で一夏と話しているみたいだ。

「・・・てっきり俺は毎日みそ汁を～の話だと思っていたが」

一夏がそう言う。お！一夏にしてはよく気づいたね。さぁ、行け！鈴！

「ち、違うわよ！ほら、料理って誰かに食べてもらうと上達が早いじゃない？それよ！」

・・・あれ？なんでそこで引いちゃうの？絶好のチャンスじゃん。なんて僕が思っているうちに話はトントンとすんでいき有耶無耶になって終わってしまった。まぁ鈴も思うところがあったんだろうけど。でも、僕としてはなんだか無駄に疲れたよ。

結局、一夏と鈴は仲直りして一件落着。ここが起き所だろうと思って起き上がる。ふと右側に違和感があったので見てみると

「セシリア？」

ベッドに寄りかかるようにしてセシリアが寝ていた。心配かけちゃったみたいだ。僕はセシリアを揺すって起こす。

「・・・大和さん？」

「うん、ごめんね。心配かけちゃったみたいで」

「本当に・・・無事で・・良かったです」

セシリアが泣きながらそう言う。泣きはらした目がすごく痛々しかった。

「泣かないで、僕はもう大丈夫だから」

「わたくし・・大和さんが堕ちたって聞いて、怖かったんですわよ・・・」

「うん、ごめん」

「ゆるしませんわ、わたくしに心配かけさせたんですもの・・」

「えぇ！じゃあどうしたらいいの？」

僕がわからずにセシリアに聞くと、セシリアはクスリと笑って

「そうですわね・・・キス・・・してくれたら、許して差し上げますわ」

そんな爆弾発言をした。ってキス！？それはさすがに・・・どうする！僕！ラ◯フカード！？

「冗談ですわ。でも、デートくらいで許して差し上げますわ」

「それくらいならまぁ、なんとか」

デートっていうか2人で出かけるってことだろうな、っと吉良は結論付けた。

まぁ結局突入してきた1組の女子達のおかげでいろいろ有耶無耶になったんだけどね。ふぅ、びっくりした。

そんな感じでクラス対抗戦は終了した。

ガコン！

エレベーターが止まり、人が2人出てきた。もちろん織斑千冬と山田真耶である。ここは学園でもごく一部の関係者しか入れない禁止区域だ。2人の目の前には先ほどの黒いＩＳの残骸が置かれていた。

「それでどうだった？」

千冬がそう切り出す。

「やはりあの黒いＩＳは無人でした。遠隔操作と独立稼働の技術なんてまだどこにもありませんよ」

やはり、と千冬が一人ごちる。

「修復は？」

「それも無理ですね。最後の吉良君の攻撃で完全に機能中枢が破壊されましたから」

「・・・コアは」

「未登録でした。それから・・・」

山田先生はディスプレイを操作し、最後に吉良を撃ったＩＳを映す。

「これについてはまったく解りません。フルスキンである事以外、所属も何もかも・・・」

「・・・・」

ディスプレイにはモノアイに４枚の緑の羽と思われる物、そしてフルスキンのＩＳが映し出されていた。

「（吉良のＩＳといいこれらといい、何かが起こるな）」

千冬の目は戦士のように鋭く、ディスプレイを見つめていた。

僕と一夏は翌日退院し、通常の授業に戻っていった。そして放課後、部屋の前にいくと箒と一夏がなにやら話している。なんだろう？

「一夏！」

「お、おう？」

「ら、来月の学年別個人トーナメントだが・・・私が勝ったら・・・」

・・・これはもしや

「私と付き合ってもらう！！」

一夏に向けてそう宣言した箒。

「（またややこしいことになりそうだ・・・）」

一難さってまた一難の瞬間だった。

第１０話：クラス対抗戦後編（後書き）

ふぅ、やっと上げられた。小説って書くの時間かかりますね。

次回は来週になるかと思います。

ではまた次回！

第１１話：新たな出会い（前書き）

やっと出たよ！シャルル～！これが本当に出したかった！

感想で指摘があったので、色々考えた結果、主人公に対するみんなの呼び方を大和にする事にしました。考えた結果、この小説の中では吉良大和＝キラ・ヤマトなので

前に書いた物も順次直していきたいと思います。

最初は慣れないかもしれませんがよろしくお願いします

第11話：新たな出会い

「それで、女の園ってどんな感じなんだ？いい思いしてんじゃねぇか？」

唐突にそんな事を言いだすのは中学の時からの友達である五反田弾である。

「いや、なんだよいい思いって・・・んなもんしてねぇよ」

答えたのは一夏。2人とも対戦ゲームをやりながら話している。久しぶりの休みに僕たちは弾の家に遊びにきていたのだ。

「嘘吐くな嘘を！お前らのメール見たがヘヴンじゃねぇか！何だそりゃ！？」

「ヘヴンじゃねぇよ！むしろヘルだ！」

「そうだよ弾。僕たち始まってからずっと男2人だったから大変だったんだよ？」

「その点、鈴が来てくれて話し相手が増えたのは嬉しかったがな」

一夏がそう言うと弾が訳知り顔でニヤニヤする。弾も鈴の想いは知っている。弾と僕で何度相談（愚痴）にのった事か・・

「あぁ、鈴ねぇ・・・」

弾、あまりニヤニヤしてると犯罪者みたいに見えるよ。幸いここは

家だからいいけど、外なら間違いなくお巡りさんを呼ぶレベルだ。

「それで大和、鈴は来たが一夏は相変わらずなのか？」

「いつも通りの一夏ってことで・・・」

僕がそう言うと弾は手を額にやってヤレヤレと首を振る。わかる！すっごいよくわかるよ弾！

「俺がなんなんだよ？」

「・・・ほらね」

一夏はまったくわかってないみたいで、頭に？が浮かんでいる。弾は「不憫な・・・」と小さく呟いた。

バタン！

僕らが一夏の鈍感さを嘆いていた時、ドアがすごい音とともに開けられ弾の妹の五反田蘭が入ってきた。

「お兄！ご飯できてるって言ってるでしょ！さっさとーー！！」

「あ、蘭お邪魔してるよ」

「大和さん・・と一夏さん！？」

「おっす」

一夏が蘭にそう言うと蘭の顔が真っ赤に染まっていく。あぁ、そう

いえばこれも久しぶりだったな

「き、来てたんですか!?あの・・・全寮制の学校に通っているはずじゃ・・」

「あぁ、だけど今日は休みだからこうして大和と一緒に遊びにきたってわけ」

一夏が蘭にそう言う。蘭は「そうですか」と小さく呟く。

ゾクっ!

急に部屋の温度が下がった気がする。隣の弾なんかさっきからカタカタ震えている。

「お兄、あとで話があります」

抑揚の無い声で蘭がそう言った。あぁ、弾ご愁傷様。僕は隣でカタカタ震えている弾に心の中で手を合わせた。

「一夏さんたちもお昼まだですよね?良かったら食べてって下さい」

それだけ言って蘭は部屋を後にした。部屋には再び静寂が戻る。

「弾、なんと言うかご愁傷様?」

「俺、明日の朝日が拝めたら神を信じてもいいかもしれない」

「なぁ、なんで蘭は俺としゃべる時って妙にたどたどしいんだ?まだ心を開いてくれてないのかな?」

一夏は今日も今日とていつもの一夏だった。それを見た僕たちはお互いにため息を吐いたのだった。その後僕たちは弾の家でお昼をごちそうになり、学校へと帰っていった。家から出た後しばらくして、弾から「たすてけ」とメールが来たときは涙が出た。

翌日、僕たちが教室に入ると教室の隅っこで何やら盛り上がっている集団がいた。

「おはよう、何の話をしているの？」

僕と一夏がその集団に近づいて挨拶をすると「「「ぎゃあ！」」」と悲鳴を上げてすごい勢いでこっちを振り向いた。そしてちょっと傷ついてしまった僕。

「なんでもないよ！なんでも！」

「そうですわ！何でもありませんわ！」

セシリアまで何やってるの・・・ていうか絶対何か隠していそうだが、関わるとろくな事にならないのはこれまで人生経験から知っていたので深くは考えない事にした。そして始まるＳＨＲ。

「実は、今日はみんなにお知らせがあります！なんと、このクラスに転校生が２人も来ます！！」

開口一番山田先生がそう言った。途端にどよめくクラス。転校生ねぇ・・・また女の子か。っと僕が思ったところでガラッとドアが開いて２人が入ってきたところで、それまでのどよめきが嘘のように静かになった。だってそのうちの１人が

男だったのだから

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国ではまだ不慣れな事も多いと思いますがよろしくお願いします」

そう自己紹介した彼は綺麗な金髪に華奢とも思えるくらいすらりとした体。貴公子と言っても差し支えない立ち振る舞い。体の端々から高貴なオーラがにじみ出ていた。

「男・・・・？」

ふいにクラスの誰かがぽつりとそう言った。

「き・・・・！！」

あ、マズイ。嫌な予感がしたので僕と一夏は急いで耳に指で栓をした。その瞬間・・・

「「「「「きゃぁぁあああーーーーーーー！！」」」」」

比喩でもなんでもなく教室中が震えた。人間ってここまで大きな声出せるんだ。

「男！！このクラスに3人目の男！」

「ワイルド系の織斑君に、紳士系の吉良君、今度は守ってあげたくなる系！！」

「日本にうまれてよかったー！」

口々にそう言いだす女子達。ちなみに耳栓の意味が無かった事を記しておく。

「騒ぐな、まだ自己紹介は終わってない」

千冬さんがそう言うとピタッと止まる辺りさすがだと思う。

「ラウラ、挨拶をしろ」

「はい、教官」

「教官はやめろ。ここでは一教師なのだから織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ピッと敬礼をするラウラと呼ばれた女の子。銀色のストレートの髪はとても綺麗でなのだが手入れをしているというよりは伸ばしっぱなしにしているというだけで整えられている訳ではなかった。それよりも目立つのが眼帯。治療用のではなくて、本物である。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

途端にシーンとなる教室

「あの・・・以上ですか？」

「以上だ」

山田先生が続けようとするも、ピシャッと会話を終了してしまった。

クールな子だなと思っていたら急にその子は一夏に近づいて

バシン！

なんの前触れも無く、一夏の頬をひっぱたいた。あぜんとする僕たち。

「いきなり何しやがる！」

当然怒る一夏。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるものか」

対するラウラは冷静にそう吐き捨てた。そして彼女はくるっと踵を返し、戻っていく。

「あー、この後は2組と合同で模擬戦を行う。各自着替えてグラウンドに集合。以上」

空気が悪くなりきる前に強制的に千冬さんがＳＨＲを終わらせて僕たちは移動を開始する事にした。

「吉良、デュノアの面倒を見てやれ」

「分かりました」

「君が吉良君だね？僕の名前はシャルル・デュノア。シャルルでいいよ」

「よろしく、シャルル。僕は吉良大和。大和でいいよ」

「そう、じゃあ」

「話は後、とにかくここを出ないと」

そう言って僕と一夏は外へ出る。何が何だか分かってないシャルルは僕が手を引いて外に出す

「わぁ！」

途端に悲鳴を上げるシャルル。やっぱり急に引っ張ったのはまずかったかな？

「みてみて！彼らよ！」

「吉良君とデュノア君手をつないでる！」

「そこに織斑君を混ぜれば・・・はぁはぁ、鼻血が」

「はぁはぁ、３Ｐ、はぁはぁ」

外に出ると一斉に注目を浴びた。それと、最後の女子の発言はアウト以外のなにものでもないと思う。これ以上ここにいたくない僕らは逃げるように更衣室へとダッシュしたのだった。

「着いた！！」

到着してから一夏が大声を出した。

「大丈夫？シャルル」

僕がシャルルに話しかけると、シャルルは今まで僕と握っていた手を見てて顔が真っ赤になっていた。なんで？

「あの・・・シャルル？」

「あ！大丈夫大丈夫！」

何でも無いように笑ってごまかすシャルル。まぁ何でも無いならいいか。

「じゃ、さっさと着替えちまおうか。遅れたらシャレにならんし」

「そうだね」

千冬さんの出席簿アタックを思い出した僕たちは急いで全裸になる。

「わぁ！！」

今度は悲鳴を上げたシャルル。さっきからいったいどうしたんだろう？

「シャルル？」

「あ！なんでもないよ！でも、少し後ろ向いていてくれない？」

理由は分からないが後ろを向く僕ら。ほどなくしてＯＫが出たので振り返るとすでに着替え終わっていたシャルルがいた。なんて着替えるのが早いんだ。

「まぁいいや、僕たちも着替えようか」

そう言って僕たちも着替えていく。着替えている最中シャルルがジーッとこっちを見ていたのが謎だった。

グラウンドに着くとすでに整列している状態だった

「遅いぞ馬鹿者！」

千冬さんに怒られた。ちなみに少し理不尽だと思ったのは内緒だ。だって更衣室まで距離があるのに無茶を言う。

「遠くても時間通りに来い！」

バシン！といいのをくらいました。本当にどうして考えている事が分かるんだろう？

「さて、今日はＩＳの実戦訓練をやる。まずは鳳とオルコット！前に出ろ」

鈴とセシリアが文句をいいながら前に出る。

「それで、わたくしは鈴さんと戦えばいいのでしょうか？」

「いや、お前らが戦うのは・・・」

そこでいったん言葉を区切って空を見上げる千冬さん。なんだろう

「どいてくださーい！」

目に入ってくるのはこちらに高速で突っ込んでくる山田先生だった。

「大和！」

「うん！」

僕と一夏でＩＳを緊急展開して受け止めた。うぅ、危なかった。

むにゅ

ん？何だこの柔らかな物体は？マシュマロみたいで気持ちいい

むにゅむにゅむにゅ

分からずに触っていると山田先生が声を上げた。これってまさか・・・

キュピーンっと殺気を感じて避けると同時に通り過ぎるビーム。振り返れば顔は笑っているのに怒っているセシリア、鈴もセシリアと同じ事を一夏にやっていた。

「落ち着けお前ら、お前達が戦うのは山田先生だ」

見かねた千冬さんがそう言った。助かった。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな、お前らじゃ相手にならんぞ」

「「！？」」

びっくりしていて声のでない鈴とセシリア。なんせ僕も声が出なかったもの。山田先生が元代表候補生だったなんて・・・

そして始まるセシリア、鈴のペア対山田先生の試合。結果はまぁ見事なまでな山田先生の圧勝だった。

その後は各自別れてＩＳの訓練になったのだが、これがまた厄介だった。僕と一夏とシャルルに殺到し、他の人達には集まらなかったのだ。そこでもまた千冬さんが一喝し、出席番号順に別れた。なんだかんだと言いながら別れて準備していく面々だが

「・・・・・・」

ボーデヴィッヒさんのところだけは異様な空気に包まれていて、誰一人声を出そうとはしなかった。

「（あそこは大変そうだな・・・）」

そう思ったがそれ以外は滞り無く進んだ。いや、忘れていた。一夏がＩＳを立たせたままで次の人に案内したせいで一夏だけ一回一回お姫様だっこで運んでいたっけ。あの時の騒ぎようと言ったら・・・・それから、お姫様だっこされたときの箒の顔が面白かった。とだけ記しておく。

昼食時、僕たちは一夏に誘われて屋上にいた。どうやらさっきの実習の時に箒が一夏を誘ったらしいのだが、一夏は余計な（箒にとって）気を回したらしくいつものメンバー＋シャルルという大人数になってしまっていたのだった。

「（一夏に箒の気持ちを気づかせるのは至難の業、か）」

相変わらず鈍感な一夏を嘆きつつ、それぞれお弁当を開く。ちなみに僕は今日はお弁当を持ってきていたのでちょうど良かった。

「うわぁ、大和のお弁当美味しそうだね」

僕の弁当を見たシャルルがそう感想を述べた。

「そう？」

「うん、この卵焼きなんかすごく美味しそうだよ！」

お、フランス人なのに卵焼きの素晴らしさが分かるとはやるな！トロッとさせながらふわっとさせるのが難しいんだよ～

「なら、食べる？」

少し感動したのでお礼にと卵焼きを箸でつかみシャルルの口に持っていく。

「はい、あ～ん」

「・・・・・・／／／」

あれ？シャルル、顔を赤くしてどうしたんだろう？なんかもじもじしてるし・・・お、食べた

「どう？」

「お、美味しいよ／／／」

「よかった～」

「まぁ、大和の料理はおいしいからな」

箒が補足するようにそう言った。

「でもこれ、カップルがやる「はい、あ～ん」だよね？」

「「！？」」

「でも、男同士なんだから関係ないでしょ？」

そう、男同士だから関係ないんだ。そこ！悲しいとか言わないで！

「一夏！はい、あ～んだ！」

「一夏！あたしのを食べなさい！あ～ん！」

「ちょっと待てお前ら！もごぉう！」

ちなみに、シャルルのカップル発言を聞いて箒と鈴は競うようにおかずをつかんで同時に一夏の口の中に入れていた。・・・アレは放っておこう。

「あの、大和さん・・・」

おずおずといった感じでセシリアがしゃべる。

「わたくしも大和さんの、その卵焼きが欲しいですわ」

「セシリアも？いいよ。はい、あ～ん」

さっきと同じように箸で卵焼きをつかんでセシリアの口へ運ぶ。

「お、おいしいですわ／／／」

緊張と嬉しさでほとんど味など分かっていなかったが、セシリアはそう言った。

「こ、今度はわたくしのを食べて下さい」

そう言ってセシリアが差し出したのはＢＬＴサンドだった。野菜なんかがしゃきっとしてて美味しそうである。

「はい、あ～ん」

ぱくりと一口食べてみた

「（ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中身はネバネバ、トマトとレタスが辛すぎず、甘すぎる味わいがとっても・・・！！）」

僕の意識はそこで途絶えたのだった。

「はっ！」

僕が目覚めると知らない天井だった。ここは？

「良かった！起きたんだね、大和！」

「シャルル？」

僕がベッドから体を起こすと、ちょうどシャルルがカーテンを開けて入ってきた。

「大和がセシリアのサンドイッチを食べたら急に気絶するんだもん。びっくりしたよ」

・・・思い出した。アレのせいで僕は気絶したんだった。

「今は何時？」

「とっくに授業が終わって、今は6時半くらいだよ。だから5時間ほど寝ていた事になるね」

「シャルルがここまで運んでくれたのか？」

「僕たちで、かな？一夏達なんか大和が倒れたのとセシリアのサンドイッチを見てパニックになってたからちょっと大変だったけど・・・」

シャルルは笑いながらそう言った。でもアレは料理じゃない。サンドイッチみたいな何かだ！

「そっか、なんにしてもありがとう」

僕はシャルルに向かってぺこっと頭を下げた。シャルルは笑って「

いいよいいよ」と言ってくれた。なんだかシャルルと話していると落ち着くなぁ・・・と思ったときだった。

「大和さん！お目覚めになりまして！？」

入ってきたのは僕を気絶させた張本人であるセシリアだった。

「まったく、わたくしの料理が美味しすぎたからって気絶するとは・・・これはもっと作って差し上げる必要がありますわね／／／」

どこをどうしたらそんな結論になるのか分からないが、そんな身の毛もよだつような申し出をしてきた。これは絶対回避しないといけないフラグだ。

「いや、いいよ。セシリアも作るの大変でしょ！？」

「そんな、わたくしの料理は食べられないというのですか？」

涙目の上目遣いでこちらを見てきた。あぁ、ここで「そうだ！」と言えたらどんなに楽だっただろうか・・・残念ながら僕は目の前でセシリアみたいなかわいい子がそういう事をしている。というのに断れるほど鬼畜ではなかった。

「その、時々、セシリアの負担にならないぐらいでならお願いします」

・・・回避失敗。でもこれは仕方ないと思うしかない。さて、帰ったら胃袋の強化に取り組もうかな？と本気で思った僕が少し悲しかった。

「大和・・・」

それと同時にシャルルの視線が痛かった。

あの後、僕はシャルル達と保健室を出て、途中でセシリアと別れて部屋を目指した。

「ところで、シャルルの自室ってどうなってるの？」

「えっとね、実は織斑先生が教えてくれたんだけど、僕は大和と同じ部屋なんだよ」

「あぁ、なるほど！」

ようやく合点がいった。昨日の夜、突然千冬さん達がやってきて元々2人部屋を1人で使っていた僕の部屋にベッドやらなんやらを置いていったのだ。思い返せばすぐにでもわかりそうなものだったな。

「それじゃシャルル、これからもよろしくな」

「それはこちらこそだよ、大和」

お互いに今日を通してかなり親睦を深めたと思う。僕はそう思いながらシャルルとともに部屋へと入っていったのだった。

「吉良君とデュノア君が同じ部屋に入ったよ！」

「あの中ではどんな事が・・・はぁはぁ」

「もうだめ！鼻血が止まんない！」

「どっちが攻め！？守り！？」

「あたしはどっちでもいけるわ！」

・・・鍵とチェーンはしっかり締めておこうっと新たな誓いを立てたのだった。

第１１話：新たな出会い（後書き）

この回で出てきたセシリアの料理は、今連載中のなのはにおけるシャマルレベルだと私は思っております。もしくはバカテスの姫路さん？

さすがに化学薬品を混ぜるようなバイオ兵器をつくる事はないと信じておりますがはてさて。

ではまた次回！

キーブレードの方はただいま執筆中です。うまく話をまとめれればいいなと思っていて、ただいま脳みそフル回転で執筆しています。

第１２話：明かされる正体（前書き）

時間があったので連投

今回はシャルの生い立ちについてです。原作2巻の主な内容がシャル関係なのでここは致し方ないかと。

ちなみにシャルルートで確定したわけではありませんのでご注意を。

第12話：明かされる正体

「えっとね、一夏が鈴やセシリアに勝てないのは単純に射撃武器の特性を把握しきれていないからだよ」

「・・・やっぱりか」

次の日の放課後、僕たちはシャルルとともに一夏の訓練に付き合っていた。理由は、同じ男同士で訓練をしたいという一夏のたっての希望だった。（実際は箒達との特訓から逃げたいだけなのだが）

「その辺りは僕も教えているんだけど、やっぱり時間が足りなくてね」

僕らは射撃武器の特性を一夏に教えてはいたのだが、いかんせん時間が足りなくて一夏はまだ物にはできていなかった。

「なら、言葉でいうよりも実際使ってみて覚えた方が早くない？」

シャルルがそう言った。そっか、その手があったか！

「そっか、いくら言葉で言ってもわからない物があるし、なら実際に使って覚えた方がわかりやすいかもね！さすがシャルル！」

「あ、ありがと。じゃあやろうか。」

僕がシャルルにそういうとシャルルは赤くなりながらもアサルトライフル（ヴェント）を呼び出し、一夏に手渡す。

「いま使用許可（アンロック）したから自由に撃ってみて、あ、マガジンは一つ使い切っていいから』

言われた通りに一夏は射撃を開始する。薬莢の響く音がすごかった。

「なんつーか・・・早いって感じだな」

撃ち終えた一夏が感想を述べた。一夏は初めて銃を使い、刀とは違う反動に興奮していた

「そう、速いんだよ。一夏のイグニッションブーストも早いけど、弾丸は面積も小さいからより早いんだよ。それに当たらなくても牽制にはなる。それに一夏は攻撃する際に無意識のうちにブレーキをかけているんだ」

「だから、簡単に間合いも開くし、続けて攻撃されるって訳か」

一夏が納得したように頷いた。良かった、説明したい事がこの一回で済んでしまった。シャルルって頭いいんだな

「それじゃあ今度は僕の武器を使ってみる？」

そういって僕はストライクを展開する。手にはビームライフルが握られていた。

「前も思ったけど大和のＩＳってフルスキンなんて珍しいね。しかも色が変わるし、そんな小型のビームライフルまで持ってるし」

僕がストライクを展開すると、いきなりシャルルが質問攻めをしてきた。でも困ったな

「あぁうん。だけどそれは国家機密だからしゃべれないんだ」

「（やっぱりそう簡単に情報は手に入らないか）」

僕がそう言うとシャルルは何か呟いたが、小さすぎてよく聞こえなかった。まぁいいか

「はい、僕も使用許可（アンロック）を出したから使えるよ。ビームライフルはそのままエネルギーを消費して撃つから弾切れは基本無いんだよ」

僕の説明を聞いた一夏が射撃を開始する。

「なんつーか、さっきの銃と比べて反動が軽すぎるな。撃ってる感じがしないし・・・だけど速さはさっきより速いんだな」

「そう。ビームライフルはトリガーを引くだけで出るから反動がほとんどないので撃ってる感じってあまり無いんだよね。しかも実弾と比べて速さもある。だからセシリアのスターライトｍｋ?を避けるときはより集中しなきゃいけないんだよ」

「なるほど」

やっぱり実際にやると理解しやすいんだね。なんで忘れていたんだろう?

「ねぇ、ちょっとあれ！」

「ウソ！?ドイツの第3世代だ！」

「まだ本国でトライアル段階だって聞いていたけど・・・」

そう思ったところでアリーナの注目が入り口に集まった。何事かと思ってみてみるとそこには朝、一夏を殴ったラウラ・ボーデヴィッヒが立っていた。

「何の用だよ？」

そのままツカツカとこちらに来るラウラに一夏は敵意を隠さず質問する。このあいだいきなり殴られたのだから無理も無い。

「貴様も専用機持ちか、だったら私と戦え」

対するラウラは一夏の敵意などどこ吹く風で、そんな事を言った。

「嫌だね、理由がねぇ」

怒っている割には一夏は冷静なことに僕はホッとした。このままバトルになると思っていたからだ。

「貴様になくとも私にはある」

ラウラのその言葉を聞いて一夏は黙る。ドイツ、千冬さんときたらきっとあの事を言っているのだと僕も容易に察する事ができた。それは第二回のモンド・グロッソの決勝戦。２連覇確実と言われていた千冬さんが突然決勝戦を辞退したのだ。何が何だかわからずに騒然とする場内。実はこれには裏があって、千冬さんの弟、つまり一夏が何者かに誘拐されたため千冬さんは救出に向かった為だったのだ。その後の一夏の落ち込みようと言ったら・・ハッキリ言って見てられなかった。

「あの日、貴様がいなければ教官は容易に2連覇を成し遂げていただろう。だから私は・・・貴様の存在を認めない！」

「・・・・・・」

一夏もその事を考えているのか苦悶の表情をしている。

「それでも、俺にお前と戦う理由は無い」

「ふん、ならば戦わざるを得ないようにしよう」

そう言うとラウラはその漆黒のＩＳを戦闘状態にして、肩の大型の実弾砲が火を噴いた。危ない！！

「戦う意志のない相手にいきなり打ち込むのがドイツのやり方なの？」

僕はシールドを緊急展開し、２人の間に入って攻撃を防いだ。一方シャルルはアサルトライフルを彼女の顔に突きつけていた

僕は怒っていた。戦う意志のない一夏に対して下手をすれば怪我では済まない攻撃をしたボーデヴィッヒさんに対してキレる寸前までいった。なんとか理性で抑えたが危なかった。

「（こいつが報告にあった機体か・・・どうやらＩＳの性能はたいした物らしいな）」

「そこ！何をやっているんですか！！」

そこへスピーカーから響く担当教師のものと思われる声。

「邪魔が入ったようだ。今日は退いてやろう」

そう言い残して彼女はアリーナを去った。

「ありがとう大和、シャルル。助かった」

緊張状態が解けて一夏は僕たちにお礼を言った。

「気にしないでよ一夏」

「そうだよ、それにもうちょっとしてたら僕キレていたかもしれないし」

「えぇ！大和、それはマズイ！」

「（ねぇ一夏、大和がキレるとマズイってどういうこと？）」

「（キレたアイツは誰にも止められないってことだ。今まで何度かあったがひどかったぞ）」

「（そ、そうなんだ）」

一夏とシャルルがコソコソ話しているけど気にしない。そこまでひどくないと思うんだけどなぁ・・・

「とりあえず今日はここまでにしようよ」

これ以上この話題を続けたくなかった僕は早々に今日の訓練を終わ

らせた。2人もなんだかんだ言って終了していく。

「じゃあ大和と一夏は先に行ってて」

これも今ではお決まりのパターンだった。なぜかシャルルは僕たちと着替えたがらない。一度強引に着替えようとした一夏が鈴と箒にぼこぼこにされたのは最近の話である。それは蛇足か・・・

「行こうか、一夏」

僕たちはアリーナを後にして、更衣室に向かう。着替え終わって出たところで山田先生に呼び止められた。

「良かった～ちょうど呼びにいこうと思っていたところだったんですよ～」

間延びした声でそう言う山田先生

「なんですか？」

僕がそう言ったのを皮切りに、先生はもうすぐ風呂が使えるようになる事、それからＩＳの正規登録をするので書類を書く為についてきてほしいと言ってきた。

「そういうことですのでついてきて下さい」

「わかりました。大和、行こうぜ！」

一夏はお風呂がもうすぐ使える～の辺りから興奮していた。もちろん僕だって嬉しい。お風呂っていいよね

「うん、そういう訳だから先にシャルルがシャワー使っていいよ」

「うん、ありがとう」

僕は途中から入ってきたシャルルにそう言って一夏達の後を追った。
その時は、この後に大変な事になるなんて思いもしなかった訳で・・・

ｓｉｄｅ　シャルル

大和達と別れて僕は自室のベッドに腰掛けて考え事をしていた。

「やっぱりそう簡単に情報は引き出せないか・・・」

情報というのはもちろん大和と一夏、それに彼らのＩＳの事についてだった。特に大和のＩＳは衝撃的だった。話は少し前にさかのぼる。

シャルル・デュノアの家はフランスでＩＳの製造を行うデュノア社である。世界シェアは第三位の大手である。どこも第3世代の開発に躍起になっている。だが、デュノア社が開発したラファール・リヴァイブは最後発の第2世代型であった。ＩＳの開発には多額のお金がかかり、ほとんどは国からの支援によって成り立っている。そんな中、デュノア社は政府から次のトライアルに選ばれなかったら、予算を全部カットし、ＩＳの開発権も剥奪する通告をしてきたのだった。

それに驚いたデュノア社は急遽シャルルをＩＳ学園に編入させる事に決めた。一夏の白式のデータを取ってこいという命令付きで。
さらに数日前、匿名で送られてきたデータを見たデュノア社の社長

は驚いた。そこにはフルスキンのＩＳが正体不明のＩＳを相手に見た事も無い武器で戦っている映像が映し出されていた。ビームライフルにビームサーベル。高出力のスラスターにコロコロ変わる汎用性の高い武装どれもこれものどから手が出るほど欲しい技術だった

色々調べた結果、そのＩＳは吉良大和という少年の物でＩＳ学園に通っている。ならばと、社長は追加任務で吉良大和のデータをなんとしても取る事をシャルルに命じたのだった。

「考えていても仕方ないか・・・とりあえずシャワーでも浴びよう！」

そうして彼はシャワーを浴びる為に準備した

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「あぁ～終わった」

「書類っていってもたいした事無かったね。ほとんど名前書いただけだったし」

僕たちは山田先生にいわれた通りに書類を記入し、晴れてＩＳの正式所有者になった。

「一夏、もうちょっとシャルルと話していかない？」

「そうだな、今日の訓練の復習とかもしたいし・・・」

そうして僕たちは連れ立って僕の部屋に入っていく。シャルルはっと・・・お風呂場からシャワーの音がしている事を考えるにシャワー浴びているんだろう。ちょっと待つか。そういえばボディソープ

が切れていたっていってたっけ？

そう思った僕はクローゼットから詰め替えのパックを出して風呂場へと向かう。

ガチャ！

ガチャ？はて、今シャルルが入っている風呂場からドアが開く音がしたな。ちょうどいいや、渡しちゃおっと

「シャルル～詰め替えの持ってきた・・・よ・・・」

扉を開けた先にいた人物に僕は驚愕した。

「うぁあああああ！」

「どうした大和！？ってうわぁああ！」

僕の悲鳴を聞いて慌ててこっちに来た一夏も悲鳴を上げた。だって僕たちの目の前には、濡れたブロンドの髪は色っぽく、すらりと伸びた体、それがかえって普通サイズである胸を大きくそして美しく見せている。って！そうじゃなくて！

「きゃあ！」

シャルルの物と思われる悲鳴で我にかえる僕たち。急いでリビングへと戻る。さっき見た光景に僕たちは心臓がうるさいくらいになっていた。

「あ、上がったよ」

ビクッとして振り向く僕たち。その先には・・・女の子がいた。

「・・・・・・・」

「「・・・・・・・・」」

シャルルが風呂から上がってから僕たちはずっと無言だった。シャルルは何だか目線がうろうろしてるし、僕らは僕らでさっきの映像が・・・ってヤバいヤバい。雰囲気を変える為に僕はお茶を出してから話す事にした。

「それで、どうして男の格好なんかしてたの？」

「それは、僕の実家であるデュノア社からの命令で・・・」

そうしてシャルルは自分の身の上と、なぜ男装をしていたのかをポツポツと話していった。

話をまとめると、シャルルは愛人の子供で、実家から2人のデータを盗むようにいわれていたらしい

「・・・というわけ。今まで騙してごめんなさい」

シャルルはぺこりと頭を下げた。だけど、僕は顔も知らないデュノア社の社長に怒りを覚えていた。何だか今日は頭にくる事ばかりだと1人心の中で思う。いくら愛人の子だからって、シャルルにそこまでひどい仕打ちをしていい理由にはならない。

しかも、女である事がばれた以上は本国に強制送還されて牢屋暮らしが待っているって聞いて僕の怒りは爆発した。

「ふざけるな!!いくら親だからって子供の生き方を縛っていいなんて権利は無い!!」

「や、大和?」

僕の怒りが爆発して怒鳴った瞬間シャルルはビクッとした。でも、止まらない。僕の感情は止まらない!

「そうだ!そんなの馬鹿げている!」

一夏もこれには心底頭に来たらしく僕に同意した。

「ちょっと、どうしたの!?2人とも」

シャルルが戸惑っている。いけない、一回深呼吸しよう。す~は~、す~は~。

「ごめん、熱くなっちゃって・・・」

「いいけど・・・本当にどうしたの?」

「俺たちには・・・親はいないんだ」

一夏のその言葉を聞いてシャルルはハッとした。きっと事前にデータを見ていたんだろう。

「俺は昔、両親に千冬姉共々捨てられたんだ。実の親にだ。大和は・・・本当の両親を知らないんだ」

「どういう事？」

一夏の言葉を聞いてシャルルが眉をひそめる。

「僕の両親はね、本当の親じゃないんだよ。昔、親の血液型をひょんな事から知った僕は愕然としたよ。僕はＡＢ型で両親はＡとＯ。遺伝を考えるとＡＢ型ってのは生まれるはずが無いんだよ。そこから自然と導きだされる答えは・・・」

僕はそこでいったん言葉を区切る。

「でも後日、実の両親ではない事を暴露された日からも両親は今まで通りに接してくれた。血のつながりなんて関係ないって思わせてくれた両親に僕は感謝している。だから、血のつながった実の親がそんな事をするのは許せない！」

ダンッ！とテーブルを叩いて怒る。

「あ～、くそ！シャルルがバレたとしてもここにいられる手段は無いのか！？」

イライラしながら一夏がそういう。僕だってこれでさよならなんてまっぴらごめんだ！・・・まてよ？あれ、使えるかも！

「一夏！アレならいけるかも！特記事項第２１条！」

「それってどんなんだっけ？」

「簡単にいえば、ここにいる限りどこの国からも干渉を受けないってやつ。つまり、シャルルは今から3年間はどこからも干渉を受けないってわけ！」

「いいぞ！それだ！3年もあれば対抗手段も思いつくだろ！」

シャルルの目の前で繰り広げられるこの会話にシャルルは目をパチクリしながら聞いていた。

「す、すごいね2人とも・・・特記事項って55個もあるのに・・・」

「大和は勤勉なんだよ」

「一夏も少しは覚えようよ・・・」

まったく、これだから一夏は・・・

「とにかく、これでここにいられる口実ができた。居場所が無かったら僕がここに作ってやる！このままさよならなんて言わせない！」

「・・本当に？僕は・・・ここに、いていいの？」

「もちろんだ！」

一夏も同意してくれる。

「シャルルがここにいたいって思うなら、ここがシャルルの居場所なんだよ」

気づけばシャルルの目には涙が溢れてきていた。

「うぅ・・・ぐす・・・ありがとう、大和、一夏、ありがとう、ありがとう」

シャルルは泣きながら僕たちにお礼を言った。

数分泣いた後、シャルルは今までの心の疲労からか眠ってしまった。このままにするわけにもいかなかったので僕が抱きかかえてベッドに寝かせた。軽くて柔らかかった・・・じゃないじゃない。

「・・・さて、これからどうしようか？」

寝かしつけた僕は一夏に聞いた

「ここにいてもアレだから学食に飯を食いにいこう。それに、起こしたらかわいそうだし」

一夏にしては建設的なことを言う。内心僕は感心した。

コンコン

そんな事を思っていたらドアがノックされた。出てみると目の前には箒とセシリアがいた。

「あぁ、一夏やっぱりここにいたか」

「ごきげんよう、大和さん。お夕飯をご一緒しませんか？」

どうやら夕飯のお誘いだ。僕たちはこれ幸いと思い、誘いを受けた。

「あら？シャルルさんは？」

「しゃ！シャルルは疲れたから眠っているんだ！起こしちゃ悪いから早く行こう！」

「（大和！ナイス！）」

アイコンタクトで一夏が合図してくる。危なかった。そして僕たちは食堂へと向かったのだった・・・のだが・・・

「・・・・・なぁ、箒」

「どうした？一夏」

「・・・・・ねぇ、セシリア」

「どうされました？大和さん」

「「歩きにくい」」

見事にハモった。部屋を出てからずっと一夏の腕に箒、僕の腕にセシリアが抱きついていた。なんで抱きついてきたのかはわからないが、そこまで密着されると、セシリアの大きな２つのお山が腕に押し当てられて非常にまずい。主に僕の理性とか理性とか・・・一夏も同じ事を思っていたらしく、こちらを伺ってきた。

「まったく、こんな幸せを受けているのに感想はそれか」

「そうですわ、大和さんはもっと自分の幸福を自覚して下さい」

はい、十分自覚しております。僕だって健全な男ですから。そんな事されて枯れた老人のような反応なんかするわけありません。

「（うふふ、大和さん、恥ずかしがってますわ。つまり、わたくしを異性として意識していらっしゃるのですわ／／／恥ずかしいですが、やったかい有りですわ！）」

そう思ったセシリアはさらに強くその胸を押し当ててきた。

「（待って！セシリア！これ以上は！）」

そんなピンク色の空間がそこには広がっていた。それを見た他の生徒は箒とセシリアに嫉妬の視線を送っていたが、２人が気づく事は無かった。

「なぁ大和」

そんな事を思っていると一夏が声をかけてきた。

「なに？」

正直僕はそれだけ話すのが限界だった。

「俺たちも腕を組んで歩くか」

この一言で正気に戻った僕は一夏の頭をおもいっきり叩いたのだった。これまた余談だが、さっきの一夏の言葉を聞いていた他の女子

は一斉に鼻血を吹いていた。

やっとの思いで食堂についた。箒はサバの味噌煮定食、一夏はトンカツ定食、セシリアはキノコのリゾット、僕はカルボナーラをたのんだ。うん、おいしい。そう思いながら食べていくとセシリアがおずおずとリゾットを差し出してきていた。

「や、大和さん、リゾットとても美味しいですわよ。食べてみませんか？」

スプーンの上に乗るリゾット。実に美味しそうであるが・・・これってアレだよね？人前で恥ずかしいので言葉を濁していると、セシリアは涙目の上目遣いでこちらを見てきていた。

大和さんはそんな事言わないよね？光線（いま命名）が発動した瞬間だった。

その光線に耐えられなかった僕はパクッと食べた。周りの女子の視線と悲鳴が凄まじい！今日の学食の天気は晴れ時々悲鳴らしい。悲鳴って何だ？まぁいいか。

「それでは、わ、わたくしもにもカルボナーラを・・・」

こうなったらやるしか無いと腹をくくった僕はセシリアと同じ事を決行したのだった。それにしてもなんでセシリアって彼氏でもない僕にこんな事をしてくるんだろうね？といつも馬鹿にしている一夏と同レベルの疑問を持った大和だった。

そんな感じで夕食の時は過ぎていった。

第１２話：明かされる正体（後書き）

書き上がっているのはここまでです。さてここからまた書きためていこう。

早くデレデレになったセシリアが書きたいと思っているこのごろですが、それまでいったい後何話書かなきゃいけないんだろう・・・

それではまた次回！

ご意見ご感想をお待ちしております

第１３話：一騎打ち（前書き）

今回のラウラの台詞には某赤くてツノ付きで3倍のあの方の台詞を混ぜてみました。

何となく相性はいいのではないかと思ってしまいました。

それと模擬戦についてですが、原作を読み直してみて間違っていたので修正しました。

第１３話：一騎打ち

「ただいま、シャルル起きてる？」

あの恥ずかしい夕食を終えた僕たちはそれぞれ部屋へと戻っていった。

「あ、大和・・・」

シャルルがひょこっと顔だけ出して出迎えてくれた。けど、どうしたんだろう・・・？

「くぅうう」

・・・なんだかすごくかわいい鳴き声のようなものが。シャルルの方を見ると熟したトマトのように真っ赤っかだ。と、いうことは

「あの、シャルル？」

「あ！あのね、僕・・・いつの間にか寝てたみたいで、起きたらお腹空いちゃったんだけど、この格好じゃ行けない事に気づいてね！」

わぁわぁ言いながらシャルルが必死に弁解する。よほど恥ずかしかったのだろう。・・・面白そうだったので少し弄る事にした。

「何言ってるの？僕はまだ何も言ってないんだけど？」

僕の言葉にシャルルはハッとなって抗議の目でこっちを見てくる。

なんというか弄りがいがある。

「・・・大和のイジワル」

「冗談だよ。はい、これ」

そういって僕が差し出したのはリゾット。学食を出る時にこっそり買って持ってきたのだった。ではなぜリゾットか、答えは簡単で麺だと伸びるし、シャルルは箸を使えないので自然とこれに決まったのだ。

「あ、これリゾット？」

「そう、きっと戻ったらお腹空かせて起きてくるかな？って思ったから持ってきたんだよ」

「そうなんだ、ありがとう」

シャルルがお礼を言ってきた。僕はどういたしましてとだけ言い、シャルルが食べるかな～と思ったがなかなか食べ始めない。どうしたのだろう？

「えっとね、大和が食べさせてくれると嬉しいな」

「え！？なんで！？さっきもセシリアに「あ～ん」を要求されて、やってきたから勘弁してほしいのだけど・・・」

僕のこの言葉を聞いた瞬間シャルルの機嫌が悪くなったのがわかった。けど、なんでだ？？

「じゃあ僕にもやってよ。ていうかさっき大和は僕にイジワルした

んだから、その罰だよ！」

いつも控えめなシャルルにしては珍しく強引である。

「いいから！ほら、早く！」

顔を赤くしながら鬼気迫るシャルル。何だか良くわからないけど、ここは従っておいた方がいいと判断した僕はまた、あの恥ずかしいやり取りをやるはめになってしまったのだった。

「そういえば・・・シャルル？」

「ん？なに？」

シャルルが食事を終えて一息ついている時に僕はさっきのシャルルとの会話で気になったところをシャルルに聞いてみる事にした。

「デュノア社に送られてきた映像ってどんなのなの？」

僕が気になっていたのはこの点である。僕のストライクは千冬さんの配慮であまり部外者に見られる事がない。それなのにこうもあっさりと情報が漏れてしまうなんて・・・

「機密保持の為に僕もソレを見たのは一回だけなんだけど、奇妙なＩＳに大和たち３人が挑んでいくところがおさめられていたよ。見たときはビックリしたよ。こんなＩＳが世の中にあるんだってね」

奇妙なＩＳに僕たち３人で・・・間違いない、シャルルが言っている映像というのは先日のクラス対抗戦の時の物だ。だけどあの時には僕たち以外・・・いや！そういえば最後に僕に攻撃をしてきた緑

のＩＳいた！そいつが撮っていて送りつけたのなら納得できる。

「そうなんだ。話してくれてありがとうね（とりあえず明日千冬さんに話してみよう）」

僕はそう決めて、その日は終わりを告げた。

次の日の放課後、普段通りに授業を受け終えた僕は千冬さんを探していた。内容は昨日シャルルが話してくれた事だ。匿名とはいえ、フランスに僕のＩＳの情報が漏れたという事は、他の国にも流れ出たと考えるのが自然だと思ったからだ。案外、ドイツがこの時期に転校生としてラウラを入学させたのもこの辺りの事情があったのかもしれない。・・・いやでもこれは考え過ぎだろうか？

とにかく、千冬さんと話してこれからの対応を考えようとしてアリーナを通り過ぎるときだった。僕はちょうど訓練をしにきていた一夏とシャルルに出会った。

「あ、シャルルに一夏。これから訓練？」

「おう、大和こそ千冬姉との話し合いは終わったのか？」

「いや、まだだよ。おそらく職員室にいると思うから今からそこに行くんだけどね」

「・・・そういえば２人とも、さっきからここら辺なんだか騒がしくない？」

そうシャルルに言われて周りを確認すると、確かに騒がしい。しかもみんなアリーナの中を見て驚いているようだった。何かと思って

僕たちも中を見ると・・・

「なにやってんだ!?あいつら」

一夏が声を上げる。僕たちの目の前では、鈴とセシリアがタッグを組んで、なんとあのラウラと模擬戦をやっていたのだ。

しかも、驚いた事に鈴とセシリアの方が押されていた。2対1という数的不利をものともしないくらいラウラは強かったのだった。

鈴とセシリアのISはかなりのダメージを受けていた。機体は所々損傷し、ISアーマーの一部は完全に消滅している。対するラウラも無傷とは言わないけど、2人よりも全然ダメージが少なかった。

「くらえ!」

ジャカ!と鈴のIS『甲龍』の肩アーマーが動き空間圧搾用兵器:衝撃砲『龍咆』が最大出力で放たれる。並のISなら一撃でバラバラになるような威力だ。しかし、ラウラはソレを回避するそぶりを見せなかった。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

ラウラに当たると思われた不可視の弾丸は、ラウラに届く事は無かった。何かバリアの様な物でも展開しているのだろうか?

「く!まさかこうまでも相性が悪いなんて!」

攻撃を防がれた鈴が苦々しげにラウラを睨みつける。たしかにあの仕掛けがわからなければ全ての攻撃は無効化されてしまう。

攻撃を防いだ？ラウラは肩に搭載された刃を左右一対で射出した。それは本体とワイヤーで接続されているためか、複雑な軌道を描いてセシリアの援護射撃をくぐり抜け鈴の足を捕らえた。感じとしてはブレードとワイヤーの両方の特性を持つような武器だった。

「そうそう何度も！」

鈴の援護の為に射撃を続けるセシリア。さらにビット兵器による視界外攻撃まで始める。しかし、ラウラはソレをものともせずさっきと同様に腕を突き出す。今度は左右同時、交差された腕の先では見えない何かに阻まれるようにビットが停止していた。

「動きが止まりましたわね！」

動きが止まったところをセシリアが狙い澄ました狙撃を行う。しかしラウラは大型カノンによる砲撃でソレを相殺する。しかも、ラウラは先刻捕まえた鈴を振り子の原理のようにセシリアにぶつけてセシリアの狙撃を妨害した。

「きゃぁあああ！」

空中でぶつかってバランスを崩した2人にラウラが襲いかかる。あれは！

「イグニッション・ブースト！」

一夏が声を上げる。見間違えるはずもない、あれは一夏の十八番でもある格闘特化の技能だった。だけど接近戦なら鈴にも分がある。連結を解除した双天牙月を駆使し鈴はラウラの両手から伸びるプラ

ズマ刀を捌いていた。これならと思っていた僕は自分の考えが間違っていた事を知った。

「この！」

なんとかその二つを捌いていた鈴だが、ラウラはさらに先ほどのワイヤーブレードを展開してきたのだ。６つのワイヤーに２本のプラズマ刀。いくら鈴が接近戦が得意とは言っても、あれだけの数を捌くには難易度が高すぎる。鈴は接近戦は無理と思ったのか距離を取って衝撃砲を展開しようとした。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

言葉通りラウラは発射前に鈴の肩アーマーを破壊した。

「もらった」

「！？」

肩アーマーを破壊されてバランスを大きく崩した鈴にラウラの攻撃が迫るその時

「させませんわ！」

間一髪のところでセシリアが２人の間に入りスターライトｍｋ？を楯にし必殺の一撃を防ぐ。さらに、半ば自殺行為ではあるがミサイルビットを至近距離で爆発させた。２人とも爆風に巻き込まれ地面に叩き付けられたが、脱出する事はできた。２人とも無茶をする

「これだけやれば・・・！」

セシリアは落とすとは行かずとも相当なダメージを負わす事はできたと思っていた。しかし、爆煙が晴れた先にいたラウラは無傷だった。

「そんな!?無傷ですって!?」

「終わりか?ならば・・・私の番だ」

言うと同時にイグニッション・ブーストを展開し、鈴へ接近し、蹴り飛ばし、セシリアには近距離からの砲撃を浴びせた。さらにワイヤーブレードを展開し2人を捕縛し、そこから始まるただただ一方的な暴虐

「「あああああ!」」

その腕に、足に、体に、ラウラの拳が叩き込まれるシールドエネルギーはとっくにレッドゾーンからデッドゾーンへと到達していた。つまり、これ以上攻撃されISが強制解除されるような事があれば冗談ではなく生命に関わるのだ。

しかし、ラウラは攻撃の手をやめようとしない。ただ淡々と2人を殴り、蹴り、ISアーマーを破壊していく。

「やめろ!もう勝負はついた!」

気づけば僕は叫んでいた。このままでは2人とも死んでしまう。しかしラウラは普段の無表情からは想像もつかないほどの愉悦の表情をしていて、口元を歪めていた。

「おおおお！」

突然一夏が白式を展開し飛び上がった。隣にいた一夏もいい加減我慢の限界だったのだ。一夏は零落白夜を展開しアリーナのシールドを切り裂いて、その間を突破しラウラに迫る。

「その手を離せー！！」

シールドを突破した一夏はそのままイグニッション・ブーストを使う。本来ならこれはただでさえ燃費の悪い白式には自殺行為にも等しかったが、一夏にはそこまで考えている余裕は無かった。鈴とセシリアを掴んでいるラウラへと一夏は刀を振り下ろす。

「ふん・・・。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

「くそっ！」

一夏のエネルギー刃が届く寸前、ピタッと動きが止まった。まるで目に見えない何かに掴まれているかのようだった。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では貴様も有象無象の一つでしかない。・・・消えろ」

ガパっと肩の大型カノンが回転し、一夏を狙う。このままでは！

「一夏！離れて！」

一夏が間一髪離れたところに大型のビームが通り過ぎた。振り返ってみて見ると、ストライクを展開し、ランチャーストライカーを装備した吉良がアグニを構えて立っていた。

「ようやく報告にあった機体のお出ましか」

（報告？何の事だ？）一夏はそう思ったがそれどころではなかったのでとにかく鈴とセシリアを救出に行く。

「う・・・一夏・・・」

「無様なところを・・・お見せしましたわね」

「しゃべるな。大和、シャルル、大丈夫だ。２人とも意識はある」

一夏のその言葉にホッとする僕ら。だけど僕はラウラから目を離さない。

「なんで攻撃を続けたの？２人ともとっくに戦う力はなくて君の勝ちだったのに」

ひどく底冷えのする冷たい声で吉良は言った。吉良のその雰囲気にアリーナの温度が凍るように下がったかのようだった。

「なに、ソイツらは身の程を知らずに私に挑んできたのでな、この際だ、徹底的にわからせてやる事にしたのだ」

「それって、２人を殺す事も考えていたの？」

「必要とあらばな」

「ふ、ざけるな！」

僕の怒りが爆発した。2人を殺す場合もあっただって?人の命をなんだと思っているんだ!

「一夏、シャルル、悪いけど2人を医務室までお願い」

「いいけど大和はどうするんだ!?」

「僕は、戦う。もう頭に来ているんだ」

「それなら俺だって!」

よほど悔しかったのか一夏がそう言ってきた。でも・・・

「ダメだよ。一夏の白式はエネルギーがもう無いでしょ?だから2人をお願いって言ったの」

「行こう、一夏」

「シャルル!大和を放っておけって言うのか!?」

「そうじゃない!でも今は鈴とセシリアの方が先決だって事だよ!僕たちがやらなきゃいけない事を見誤らないようにしなきゃ!」

シャルルにそう言われハッとする一夏。彼らは黙って2人を担ぎ上げ、アリーナを後にする

「(大和・・・さん)」

セシリアが最後に見たのは、ストライクを展開し、ラウラと対峙する吉良の姿だった。

「さて、うるさい邪魔者は消えたな。では見せてもらおうか、貴様のその未知のＩＳの性能とやらを」

僕は無言で頷き、アグニを構えた。一瞬の静寂の後、戦いは始まった。

「照準・・・入った！」

僕はアグニを3発放った。ラウラはそれを容易く避ける。

「ほう、確かに威力は凄いようだな。だがいくら強力な武器でも当たらなければどうという事は無い」

「くっ！」

確かに素早い動きをするあのＩＳにアグニを当てる事は、決定的なチャンスでもない限りは無理だ。しかもさっきの戦いから見てわかる通り相手の操縦技術はかなり高い。だからそんなチャンスは滅多に無いだろう。

「エールストライカーを！」

装備を換装し、全ての距離に対応できるようにし、ラウラに接近する。

「少しはマシかと思ったが・・・貴様も感情的で直線的な愚図だったか・・・・」

「ぐっ！？」

瞬間、僕は見えない何かに体が縛られたかのように感じた。しまった！

「終わりだな」

両手から突き出したプラズマ刀が目の前に迫る。このままでは堕ちてしまう！

「こんなところで・・・・こんなところで僕は！！」

僕はストライクに残っていた頭部バルカン：イーゲルシュテルンを打ち、ラウラはそれを避ける。その瞬間、体の感覚が戻ってきていた。それにしてもこのシステム、どこかで読んだ覚えが・・・そうだ！

「・・・・ＡＩＣ！」

「ほう、この正体を見破るとは・・・どうやら愚図ではなかったようだ」

ＡＩＣ：アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。つまり慣性停止能力である。元々ＩＳはＰＩＣというシステムによって飛行と加減速をしているのだが、これをさらに発展させたのがＡＩＣである。効果は簡単に言って、対象を任意に停止させる事ができるという物である。原理はよくわかっていないのだが、ＡＩＣは１対１では反則的なまでの強さを持つ

反面、ＡＩＣを使う時は集中していなければならないので複数を相手にするには向かないのである。

１対１の場合は・・・ＡＩＣを使われる前に勝負を決めなければならない

「・・・・・・」

「どうした？わかったところで貴様は私からは逃げられない」

１対１で戦うなら、とにかく弾幕でかく乱し近づいてしとめるしかないが残念ながら僕のストライクにはその装備は無い。

「ランチャーストライカーを！」

僕はアグニを構え照準を合わせ、放つ。さらに同時にガトリングとミサイルを放つ

「無駄だ」

ラウラはそれら全てを避ける。だけどそれは計算のうちだ。僕は移動しながらさっきと同じように乱れ撃つ。

「クッ！」

さすがに弾幕が多く、ラウラも回避に手間取るようになった頃僕は装備をソードストライカーに変えて突撃する。

「しまった！」

ラウラは回避に専念していたせいで僕の攻撃に気づくのがワンテンポ遅れた。もらった！

「うぉおおお！」

ガキン！！

僕の斬撃は間に入ってきた何者かによって阻まれた。

「教官！」

ラウラが声を上げた。なんと、割って入ってきた人とは千冬さんだったのである。それもＩＳスーツではなく普段と同じスーツ姿で１７０ｃｍはあるＩＳ用近接ブレードをＩＳの補佐無しに軽々と扱っているのだからほんと常人離れしている。

「やれやれ、模擬戦をやるのはかまわないがアリーナのシールドを破壊されては教師として黙認しかねる」

破壊したのは一夏だけど・・・

「それでも足りないと言うなら学年別トーナメントで思う存分やるがいい。いいな？」

「教官がそう仰るなら」

ラウラは千冬さんのいうことなので素直に従い、ＩＳを解除した。

「吉良もそれでいいな？」

「わかりました」

千冬さんの言葉に僕も頷く。千冬さんは「うむ」と頷いて学年別トーナメントまで一切の私闘を禁止すると宣言した。

「あの、織斑先生」

アリーナにいる人達がゾロゾロと帰ったあと僕は千冬さんに話しかけた。

「なんだ？」

「僕のＩＳの存在が学園外に漏れました」

「なんだと！？」

「すでにフランスに漏れているのは確認済みです。シャルルが教えてくれました。そもそもデュノア社は僕と一夏のＩＳの調査をシャルルに命じていたんです」

「そうか。いつかは漏れると思っていたがここまで早いとは思わなかった」

「映像にはこの間のクラス対抗戦のときの戦いがおさめられていたみたいです」

「まいったな、まだこちらの準備は終わっていない。政府もお前と一夏という特例の出現に大騒ぎしているところだからな」

「僕はこれからどうしたらいいんでしょう？」

「今度の学年別トーナメントは各国要人が集まる。そこでお前が出ると今の日本政府ではおそらく各国からの反発に対処できないだろうな・・・よし、お前はトーナメントに出るな。漏れ出た件はこちらで調査をする。政府の準備が整うまでもう少し待て」

吉良の乗るストライクに積まれている装備は下手をすれば各国の軍事バランスがひっくり返ってしまう物である。日本政府としても吉良のＩＳは研究してもしたりないというのが現状であるし、まだ見ぬビーム兵器の仕組みを独占したいという思惑もある。もしもストライクを量産する事ができれば日本は最強になると言っても過言ではないだろう。

「わかりました」

僕はそれだけ言い、アリーナをあとにし鈴とセシリアの様子を見に行った。

僕が保健室についた時にはすでに2人とも治療は終わっていて、ベッドに横になっていた。

「お、大和！」

保健室に入ると一夏に向かえられ、今しがた起こった事を話した。千冬さんが規格外だったのにはみんな驚いていたがすぐに納得した。理由は「だって千冬さんだもの」というものであったが。

「でも2人ともどうして決闘なんかしたの？」

僕がそう聞くと2人とも珍しくモゴモゴ言うばかりで何だか歯切れが悪い。

「あ、もしかして一夏と大和の事を・・・」

「うるさ～い！！」

「もうシャルルさんは一言多いですわね！！」

「「？？？」」

わかったとばかりに頷くシャルルに、必死で隠そうとする鈴とセシリアに、何だか良くわかっていない僕ら。ん？外が騒がしくなってきたな？

ドドドドドドドドドドドド！！！

地鳴りのように聞こえるそれはだんだん近づいてきて、バァン！！と保健室のドアを吹き飛ばし、大量の女子がなだれ込んできた。彼女らは一斉に手をのばし僕らを引っ張ってくる。どうでもいいけど軽いホラーだよね、コレ・・・・

「吉良君！」

「織斑君！」

「デュノア君！」「私と組んで！！」

いきなりやってきて訳の分からない事を言い出す彼女たち。理由を

聞いてみると今度行われるトーナメントはタッグマッチであるらしい。だから彼女たちは僕たちと組もうと思ってここまでやってきたとのことだった。でも困ったな。僕は出れないし、シャルルは実は女の子だし、さて・・・

「悪いな！俺はもうシャルルと組む事に決めているんだ」

考えていたら一夏が突然そう言った。そうか、そこの2人で組めば良かったんだ。簡単じゃないか。女子たちは不満たらたらだったが納得して僕の方を向いた。あ、矛先が・・・

「ごめんね、僕はトーナメントには出れないんだよ」

残る僕に殺到する前に釘を刺しておく。ここでも不満を言ってきていたが、「千冬さん命令です」というとみんなすごすごと帰っていった。千冬さん恐るべし！

「一夏！なんであたしと組まないのよ！」

女子達が帰ったあと、鈴が抗議の声を上げた。一夏は同じ男同士だからという理由で納得させようとしたが鈴は納得できないようだ。

「だめですよ鳳さん。2人ともダメージレベルがCを超えています。よってトーナメント参加は許可できません」

うわ！僕の背後からいきなり山田先生が現れたのにはビックリした。ちなみに一夏は山田先生の説明を理解できていなかったみたいでシャルルが補足をしていた。

「う、ぐ！・・・わかりました」

「まぁわたくしは大和さんが出ない時点で出る気は無くなりましたから」

2人とも、特に鈴は非常に苦々しそうに納得した。

「まぁまぁ鈴、冷静になれって、さっきから病人のくせして動き過ぎだぞ？」

一夏は落ち着けとばかりに鈴の肩をちょん、と叩いた。

「ぴぐっ！」

途端、鈴は変な悲鳴を上げてベッドに横たわった。一夏の方を見ればやっちまったという顔をしていた。あ～あ、ご愁傷様

「い、ち、か。あ、あとで覚えてなさいよ！」

鈴の特大の恨みが詰まった声が保健室に響き渡ったのだった。

第１３話：一騎打ち（後書き）

勉強に集中する為申し訳ありませんが、更新を１週間に一回、土曜か日曜のどちらかにします。

次回は学年別トーナメントをお送りする予定です。

ではまた次回！

第１４話：学年別クラストーナメント（前書き）

水曜日が暇になったので仕上げました。

第１４話：学年別クラストーナメント

次の日、僕とシャルルと一夏はＩＳのトーナメント観戦にやってきていた。僕は出ないけどぜひ見てほしいという2人の願いだった。

「うわぁ、凄い人の数だね」

サスリサスリ

「いろんな国からＩＳ関係の要人が来ているからね、凄くもなるよ」

サスリサスリ

「・・・・・・大和、まだ痛むの？」

シャルルがそう聞いてくるが、さっきからサスリサスリいっているコレ。実は僕があごをさする音である。というのも昨日の夜ちょっとしたハプニングがあって、シャルルのかかとが僕のあごにクリーンヒットし気絶してしまったのである。

「なぁ大和、少しあごが青くなっているけど一体どうしたんだ？」

一夏がそう聞いてくるが僕とシャルルは笑ってごまかす。言えない、言えるわけがないよ！昨日のアレの事は！

～昨日の夜～

シャルルが女の子とわかってからも僕たちは同じ部屋で着替えていた。というのもシャルルが「男同士なのに別れて着替えるなんて怪しまれる！」と言って聞かなかったからだ。しかしそこは僕も健全

な男子。女の子と一緒に着替えるとなると今まで意識してなかったモノを色々と意識してしまうわけで、毎日がある意味で戦いだった。そんな時に起こった事件。

ジー・・・

その日も、もう何回目かもわからない僕が着替える時に感じるシャルルの視線

「シャルル、覗きは良くないよ」

「ふぁ!?僕は、別に・・・その」

シャルルはごまかしているつもりなんだろうが、これでごまかせると思っているのだろうか？

ジー・・・

「シャルル！」

「ふぇ!?・・・僕はなにも!・・・きゃん!」

「シャルル？」

「いたた、足が引っかかっちゃ・・・え？」

振り返った僕とシャルルの目が合う。それはまだいいが問題はシャルルの履いている物とその体勢である。今のシャルルは上はちゃんとコルセットだが下はピンク色のヒラヒラした物・・・つまり女性用下着である。さらにこけたせいでシャルルは今は四つん這い。ハ

ッキリ言って非常にまずい。特に僕の下半身が・・・

「き・・・・!!」

叫ばれるとさらにまずい事になると思った僕はあわててシャルルに飛びかかる。ビックリしたシャルルは悲鳴を飲み込んだ。が、僕は空中にいるので止まれない。さらに運の悪い事に伸ばしていた腕がシャルルの下着とお尻を掴んだ。おぉ柔らかい。じゃなくて!

さらに運の悪い事に重力に逆らえず僕の腕は自然、下へ向かう。とくればシャルルの下着も下へ・・・て!?

「わぁあああああ!?!?」

全部が脱げる前に察したシャルルがかかとを上げる。それがカウンターとなって見事僕のあごにヒットし、そこで僕は気を失ったのであった。・・・その後も実はシャルルは吉良のおでこにキスをしていたというラッキーがあったのだが吉良は気絶してて知らないのでアンラッキーである。

戻ってきて現在、そんな事があったので2人はもう笑ってごまかすしかなかったのである。一夏は盛大に?を浮かべていたが・・・

「さて一回戦は、箒とラウラか。最初で良かった」

「そうだね、凄い一夏らしい考えだよね」

「???」

一夏のこの言葉をシャルルはわかっていないようだった。

「最初の勢い、出たとこ勝負。実に単純でわかりやすい」

その言葉を聞いて「凄く一夏らしいな」とシャルルが笑って言った。

さすが一夏、単純である。

「（そういえば箒が、『優勝したら付き合ってもらう！』なんて言ってたけどきっと、買い物かなんかだろ。箒も馬鹿だな、買い物くらいいつでも付き合ってやるのに・・・）」

・・・さらに超鈍感でもあった。抽選とはいえラウラと組むはめになった上にこの鈍感、箒が不憫で仕方がない。おっと、そろそろか。

「「じゃ、行ってくる（ね）」」

僕にそう言って2人はアリーナへと飛び立つ。さぁ、始まりだ。

「一戦目で当たるとはな、待つ手間が省けたというものだ」

「へ、お互い考えている事は同じみたいだな」

アリーナ上空ではすでに戦闘態勢万全の四人が待機していた。そして始まりのブザーが鳴る

「「叩きのめす！！」」

ラウラと一夏のプライドをかけた戦いが始まった。

ーーーーーー

「あ、始まりましたわね」

一夏たちの試合が始まって少ししたあとシュンっとドアが開いて、セシリアと鈴が入ってきた。ちなみにセシリアはさりげな～く吉良の隣に寄り添った。

「どっちが勝ってるの？」

「鈴、今始まったばっかりだよ」

モニターにはチームプレーを生かす一夏たちと、箒を邪魔者としか見ていないラウラのスタンドプレーという真逆の戦いを見せていた。

「（がんばってね、一夏、シャルル）」

吉良の祈りは果たして届くのだろうか？

ーーーーー

場面は変わり、シャルルが箒を攻めるところに変わる。ハッキリ言って箒とシャルルでは実力が違う上に、箒はシャルルの戦い方が苦手である。さらに量産機か専用機かという違いも大きなディスアドバンテージになっていたのだがそこは箒の今までの剣の腕でカバーしていた。

「さて、箒はシャルルに任せて俺はお前を抑える！」

「ふん、あんなもの最初から物の数に入れてない。私だけで十分だ」

「いくぞ！」

一夏の言葉を皮切りに一夏の雪片とプラズマ刀がぶつかり合う。正直言って一夏が2本のプラズマ刀とワイヤーブレードを捌くのは難しく、距離をとって戦いたかったが、離れればあの大型カノンの砲撃が待っているだけだし、それになにより、白式のは近接用の武器しかないのだから仕方ない。

「やはりこんなものか・・・もう終わらせる」

何度か切り結んでいた一夏だが、その言葉とともに体が見えない何かに縛られたようになった。

「くそっＡＩＣ！！」

気をつけていたはずなのに一夏はＡＩＣに捕まった。

「さよならだ」

迫るプラズマ刀。あと少しで一夏に当たるその時、ラウラは急に方向を転換した。その瞬間に通り抜ける弾丸。

「シャルル！」

「一夏、お待たせ！」

放ったのは箒と戦っていたはずのシャルルだ。そして箒はといえば、大破した打鉄とともに悔しそうに膝をついてこちらを見ていた。

「さぁ、これで2対1だな」

「さっきも言ったが、あんなもの最初から数のうちに入れてない。

何ら変わった事はないな」

あくまでも冷静なラウラに一夏たちは向かう。一夏たちは攻撃を再開するがやはりラウラの実力は高かった。数的優位にあるはずなのに一瞬でも気を抜いたら負けてしまいそうなほどであった。

「やはりお前らは有象無象の愚図だな」

一夏の攻撃を捌きつつ、ワイヤーブレードを飛ばしシャルルを牽制する。

「このままじゃ！」

一夏はこれで決めると言わんばかりに零落白夜を展開した。必殺の武器で勝負を決めようとする一夏だが、攻撃が読まれていて当たらない。これでもダメかと吉良が思った時・・・

「あぁ、忘れていたのか？それとも知らないのか？俺たちは2人組なんだぜ！」

「！？」

「これなら外さない！」

一夏の言葉にラウラがハッとする。一夏の攻撃を避けていたせいでシャルルの接近に気づくのがワンテンポ遅れたのだった。シャルルが構えるのは６９口径パイルバンカー（灰色の鱗殻＜グレー・スケール＞）通称ＩＩＩＩ

「楯殺し（シールド・ピアース）・・・！」

ラウラがこの瞬間初めて焦りの表情をした。シャルルが出したこの武器：シールド・ピアースは単純な威力ならば第2世代最強と言われる物だったのだ。打ち出されるその威力はモニター越しでもわかるほど強烈で、ラウラはその衝撃に苦悶の表情をしていた。さらに、シールド・ピアースはリボルバー機構によって連射が可能だった。

勝った！

誰もがそう思ったときだった。

ｓｉｄｅ　ラウラ

シュバルツェア・レーゲン損傷甚大、これ以上の戦闘続行困難、ＩＳ強制解除まであとーー

シールド・ピアースを続けざまにくらったせいで私のシュバルツェア・レーゲンが持たない・・・その事実は私に敗北の２文字を連想させた。それでも私は・・・

「（負けられない）」

私は戦いの為に生み出された。それはＩＳが主流になってからも変わらず、私のような者がたくさん生み出された。格闘を覚え、銃を習い、とにかく相手戦力に甚大なる損害を与える事が私たちの存在理由だった。

すでに私はＩＳの適合性向上の為に施されたヴォーダン・オージェという処置に失敗し、失敗作という汚名まで着せられた。そんな中現れたあの人、織斑千冬は私を救い上げてくれた。彼女に師事するうちにいつの間にか私はトップに返り咲いていた。

そして私はあの人に憧れた。その強さに、その凛々しさに、そして全てに・・・そしてその彼女が言った言葉

「私には弟がいる。そいつと会うときは注意しておけ。でないと・・・」

そう言ったときの彼女の表情は忘れられなかった。同時に、彼女にそんな表情をさせるその弟を許せなかった。だから

「私は、あの人の前で叩きのめすと誓ったのだ！」

そんな時、頭に声が響いた。

ｌ汝、自らの変革を望むか？・・・より強い力を欲するか・・・？ｌ

そんなもの決まっている。

「私は力が欲しい・・・だから比類なき最強を！唯一無二の絶対を・・・私によこせ！」

ｌＶａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍｌ・・・Ｂｏｏｔ.

その瞬間、ラウラの世界は闇に染まった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「あああああああ！」

ラウラのＩＳが突如漆黒に包まれ、ラウラの悲鳴が上がった。

「なんだ、どうしたんだ！？」

一夏たちは突然のこの状況について来れなかった。目の前でシュヴァルツェア・レーゲンだった物はラウラの全身を包むとまるで粘土をこね直すかのようにその形を変えた。これは通常ではあり得ない事である。さらにそれは形を変え体を覆い、フルスキンのＩＳのような物となり、さらに右手に一つの形を成した。

「雪片！？」

一夏が声を上げる。それはかつて織斑千冬が振るったそれであった。ところ変わって織斑千冬たちがいる管制室は対応に追われていた。生徒と要人の避難誘導にかなりの人員を割いていたがさらに、あの未知の物を止めなければならなかったのだが人が足りない。

「あの馬鹿者が！」

織斑千冬は憤慨していた。すでに白式はエネルギーを使い果たし解除されている。という事は今の一夏は丸腰である。それなのに彼は素手で立ち向かおうとしたのだ。

あの正体不明物が現れてからの一夏は明らかにおかしい。一夏は馬鹿であるが命を投げ出すような事しない。が、今回はそれに当てはまらなかった。アレを見るやすぐ向かっていった一夏のその行為は自殺行為に等しい。

「それもアレが原因か・・・」

そう言って千冬は黒い雪片らしき物を見つめた。

「先生！」

バァン！と扉を開けて吉良が入ってきた。千冬は関係者以外立ち入り禁止だと言ったが吉良は聞かない。

「アレはおそらく雪片です！アレを見た一夏がまともに考えるとは思えません！僕が一夏を止めます！ＩＳの使用許可を！」

「では、お前ならあの馬鹿を止められるのか？」

「やります！」

千冬はしばし考えた後、決断した。

「ならばお前はあの馬鹿を止めてこい。いいか？絶対に死ぬなよ？」

「先生！吉良君のＩＳは国家機密なのでは！？」

「なに、山田先生。今は非常事態だ。それに・・・」

そう言って千冬はモニターのスイッチを切ってしまった。

「おっと、事故で外部モニターを消してしまった。困ったな、これで知っているのはここにいる私と山田先生だけだ」

真顔で「困った」と言う千冬さんに、唖然とする山田先生。外部に通じるモニターは消え、要人たちの避難は完了しているので今アリーナにいるのは戦っていたシャルル、一夏、箒のみである。という事は、ここで吉良がＩＳを起動させたところでバレないという事に

なる。

「じゃあ、いってきます」

そう言うと吉良はストライクを展開する。

「雪片があるってことは、ここはソードで行こう。カタパルト接続、ソードストライカースタンバイ！」

「ハッチオープン、射出タイミングをストライクに譲渡します。吉良君、気をつけて下さいね」

「了解！吉良大和、ストライク、行きます！」

吉良のストライクが飛び立った。

「はぁ、はぁ・・・」

一夏は怒っていた。それは強さは、攻撃力であると思っているあのＩＳとラウラに対して・・・

「そんなものは力とは言わねぇ！ただの暴力だ！」

一夏は一発、それぞれを殴ってやらなきゃ気が済まなかった。それになにより・・・

「あれは・・・千冬姉のデータだ！千冬姉だけの物なんだ！それをアイツは！」

誰よりも尊敬して止まない自分の姉の力があんな風に利用されているのが許せなかった。

「お前はいつも千冬さん千冬さんだな」

箒が少しあきれた目で見てくる。でもそんなの関係ねぇ！

「とにかく俺はアイツをぶん殴る。その為にもまずは正気に戻さないと！」

「だが、今のお前に何ができる？すでに白式のエネルギーは０だ。これではぶっ飛ばすどころか返り討ちだ」

箒の言葉に一夏は詰まる。確かになにもできないのが現状だ。

「それなら僕がなんとかできるかも」

「シャルル？」

「僕のリヴァイブならコア・バイパスでエネルギーを白式に移せると思う」

「本当か！？すぐやってくれ！」

ただし！とシャルルが人差し指を立てる。それはいつもと違って有無を言わせない表情とともに・・・

「絶対勝つ事！負けたら、そうだねぇ・・・女装して登校してきてもらおうかな？」

「うっ、・・・いいぜ。絶対負けないからな」

そしてシャルルのコアから白式へのエネルギー移動が始まる。

「やっぱり腕と武器だけだね」

「充分さ」

そう言って一夏が零落白夜を展開しようとした時、吉良がやってきた。

「一夏!」

「大和!?どうしてここに!?」

「千冬さんに言われてやってきたんだ!とにかくすぐにここを離れよう!」

「何言ってんだ!?今から俺はアイツをぶっ飛ばすんだぜ?」

「そんなの一夏がやる事じゃないでしょ!?それに一夏がやらなくたって・・・もうすぐ特殊部隊が事態の収拾に当たってくれるよ!」

「だからやらなくていい、か?違うぜ大和。俺が『やらなきゃ』じゃない。俺が『やりたいから』やるんだ。他の誰がどうとかなんて知るか。だいたい、ここで退いたら俺は俺じゃなくなっちまう!俺は・・・織斑一夏だ!」

「・・・・・・」

僕は一夏の目を見た。一夏の目はすでに決意に染まっている。これは・・・こうなった一夏は誰にも止められない、か。あんな調子いい事言っといて、千冬さんにどうやって謝罪しよう・・・でもこうなったら一蓮托生、かな？

「わかったよ。そこまで言うなら僕も手伝う。僕が隙を作るから一夏はそこを切って！」

「わかった。まかせろ！」

僕はシュベルトゲベールを構える。相手も僕の気配を察知したのか雪片と思われる剣を構える。

「死ぬなよ！一夏！」

「箒・・・死なねぇよ。信じろ、俺を。必ず勝って帰ってくる。心配も祈りも不要だ」

「い、一夏・・・／／」

後ろで一夏と箒の声が聞こえた。あれ？なんだろう・・・急にやる気が・・・こんな時まで2人ともごちそうさま（怒）

気を取り直して再度構える。威圧感が半端ないがこっちも負けられない！

「いくぞ！」

僕が突撃すると黒いＩＳが剣を振り下ろして来た。僕はそれを真正面から受け止める。重い・・・なんて重いんだ！気を抜いたらこっ

ちがやられる！でも、それでも僕は！

「守りたい人達がいるんだぁ！！」

渾身の力をこめて剣を押し返す。後少しだ！

「あぁあああああ！！」

ガァン！

ついにはじき返した。黒いＩＳは思い切りのけぞり、胴ががら空きになった。

「一夏！」

「おぉおおおおお！！」

ザァン！

雪片が黒いＩＳを切り裂く音が聞こえた。この瞬間、僕たちは勝った。

こうして学年別トーナメントは幕を下ろした。

「で？お前はあれだけ大口を叩いておきながら、一夏を止めるどころか逆に加勢した。というわけか？」

場所は変わって職員室。僕は千冬さんから呼び出し、もといお叱りを受けていた。

「すみませんでした」

僕はうなだれた。この後のお仕置きが恐くてしょうがない。

「この大馬鹿者が！」

ゴツン！！と出席簿アタック以上に痛い千冬さんの拳骨が落とされた。・・・僕の頭、二つに割れてないよね？

「ふん、弁解しないだけ潔いか・・・生きていたから良かったものの、下手をすれば死んでいたんだぞ？」

「・・・・・・・」

「まぁ、今回は生きていた事に免じて！３日間の特別講習と反省文１００枚で済ませてやろう」

その瞬間僕はその場に崩れ落ちた。その後、違う意味で千冬さんにしごかれたのはまた別の話である。

その日から３日間僕は地獄を見たとだけ言っておこう。

第１４話：学年別クラストーナメント（後書き）

少しでも執筆をしようと思い２本上げていますので、よろしければそちらもどうぞ！

第１５話：かくて幕は下ろされて

「お、大和！」

職員室（鬼の巣窟）から出て食堂へ向かうと一夏とシャルルがちょうど夕飯を食べているところだった。２人とも僕と同じようにさっきまで事情聴取を受けていたはずなのに元気だな～。いや、僕が瀕死なのか？

「お疲れさま。お茶、いる？」

「ありがとう」

傷心気味の今の僕の心にシャルルの気遣いは本当にありがたい。今はとてもじゃないけど何か食べたい気分じゃない。

ー学年別トーナメントは事故により中止となりましたー

さっきからテレビではずっとこのテロップが流されていた。まぁあんな事があったんじゃ無理もないよね。

「試合・・・無効・・・」

「交際・・・チャンス・・消え・・・」

それとともになぜか女子がみんなｏｒｚのポーズをしていた。そんなにトーナメントをやりたかったんだろうか？いや、もっと別の何かが？

「「「うわぁあああん！！」」」

ついにみんな逃げ出してしまった。ほんと、なんなんだろうね？？
あ、1人だけ残っていた。あれは箒だ。

「・・・・・・・」

箒は大丈夫だろうか？なんだかこの世の終わりみたいな顔してこちらを見ているけど・・・

「お！箒か。そういえば優勝したら～とか言っていたが」

ピクッと箒が反応した。え？え？一夏、ついに答えを出すの？

「付き合ってやってもいいぞ」

ついに来た！？箒なんかこの答えを聞いて顔が大変な事になっている。しいていうなら「見せられないよ！」ってやつだろう・・・
しかしよかったね、箒。ついに長年の想いが・・・

「買い物くらい」

・・・よし、一発殴ろう。せーの！・・・バキ！！僕は一夏の顔を、箒は腹を蹴り飛ばしたのだった。一夏は呻いて何が何だかわかっていなかったけど、僕たちの行動は間違っていないと思う。シャルルは苦笑していたけど。

「そういえばさ・・・」

あの後きっかり15分後に復活した一夏が僕たちに質問してきた。

「ISで会話ってできるのか？もちろんプライベート・チャネルとは別にって話だけど・・・」

話をまとめると、一夏がラウラを倒した際に、無意識と言うか、どこかプライベート・チャネルとは違う感じでラウラと会話したらしい。一夏は強さとはどういう事かって諭したらしいけど・・・

「聞いた事あるかも。操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉ができるって言うアレかな？」

シャルルが説明してくれるがこれってまるっきりニュータ◯プ能力じゃないの？・・・あれ？なんで僕ニュータ◯プなんて言葉知っているんだろう？？

「つまり、一夏はボーデヴィッヒさんと無意識のうちに波長があって、会話をしていたって事になるんだね？」

「そうだぜ大和。アイツ、本当の強さってのをわかってなかったから教えてやったんだ。そして後で千冬姉がフォローをしてくれたんだ。ラウラの人生はこれから始まるんだとよ」

よかった、これで全部一件落着だ。

「あぁ、ここにいましたか」

なんて僕らが話していると山田先生が息を切らせて走ってきた。同時に揺れる二つのお山が眼福である。

「大和のスケベ・・・・（ボソ）」

シャルルが何か言ってた気がするがよく聞こえなかった。山田先生は、今日は特別に男子がお風呂を使えるようにと学園が粋な計らいをしてくれたので走って伝えにきてくれたのだった。おぉ！ついにお風呂に入れる！

「・・・というわけで3人ごゆっくり～」

山田先生がそう言って出て行く。・・・3人？はて、それは僕と一夏とシャルルのことだろう・・・マズイ！シャルルはまだ男子で通しているんだった！だけどここまま行くと男子2、女子1になってしまう！それはマズイ、非常にマズイ・・・

「ま、まぁとりあえず支度だけしようぜ」

一夏がここにいても仕方がないと言わんばかりに僕らを促す。頼むから入るまでにはいいアイディアが出てますように・・・

「「「・・・・・・・」」」

出るわけがなかった。あの後僕たちは部屋へ戻り、支度をし風呂場へとやってきたがいい案が出るわけがなかった。結局シャルルが脱衣所で待っているという何ともいえない妥協案でこの場は収まった。シャルルには悪いが、さぁ！いざゆかん！O☆HU☆RO！

お風呂、それは日本人が生んだ娯楽の一つである。湯船につかるっていいよね！一夏なんてさっきからはしゃぎまくって「わはははははは！！」・・・ご覧の通り。それにしてもここのお風呂って設備がすごい。大浴場に、ジェットバス、檜風呂と種類豊富な上にサ

ウナや打たせ滝なんて物まである。これは僕ワクワクしてきたぞ！

「あ～生き返る～～～」

「一夏、ちょっと親父臭いよそれ」

「なにおぅ！！」

そんな事を言いながら僕らは久しぶりのお風呂を満喫した。そして入ってから結構時間が経った時

「俺はそろそろ上がるわ、大和ものぼせないうちに上がれよ？」

そう言って一夏は上がっていった。

「さて・・・」

僕は再度汗を流しじっくりとお風呂に入っていた。そうして少しした後扉がカラカラと開けられた。

「どうしたの一夏、忘れ物？」

当然一夏が入ってくるもんだと思っていた僕は振り返って・・・唖然とした。だってそこには体にタオルを巻き付けたシャルルがいたのだから・・・タオルをまいているって言っても薄くて体のラインがはっきりとわかるそれは・・・頑張れ！僕の下半身！

「シャルル！？どうしてここに！？」

「いやぁ・・僕もお風呂って言うのを体験してみようと思って・・・

いいねぇ、これ」

「そうじゃなくて！僕、男なんだけど・・・」

えぇい！昔、弾が大浴場はキンクリが発生しやすい場所で、『大浴場＝大欲情』なんて言葉や孔明の罠だ！なんて言ってた気がするがアレはゲームの話だっけ？確かお嬢様の学校に転入した一般人の誰かさんが水泳に奮闘するような内容だって言ってたけど・・・って僕も相当混乱している！

「あんまり見ないでよ・・・大和のエッチ／／／」

シャルルがそういいながら涙目でこちらを見上げてくる。これは反則だよ！『我、危険！戦略的撤退を求む！』そんな会議が頭で繰り広げられていたので僕は即戦略的撤退を採用した。

「あ！待って！その・・・大事な話があるの。大和に聞いてもらいたいんだ」

必死な顔で僕を呼び止めるシャルル。僕は黙ってお湯につかり直す。なんだか、聞かなきゃいけないような気がしたから・・・

「僕は、ここに残ろうと思う」

シャルルは一言ずつ、確かめるように話していく。

「それって、前に僕たちが言った？」

「そう、あの日の夜、大和たちは僕はここにいてもいいって言ってくれた。どうありたいのかは自分が決める事だって言ってくれた。

だから、僕は決めたんだ」

黙って僕はシャルルの話を聞いていく。

「僕は、大和たちがいるからここにいたいって思ったんだ。だから、ここにいる。そしてゆくゆくは大和と・・・（恋人に）」

小さく呟くように言ったそれは残念ながら吉良の耳に届かなかったが、シャルルがここにいたいという事ははっきりと伝わった。

「それにね、もう一つ、決めた事があるんだ」

「もう一つ？僕に関係ある事？」

「そう、大和って変なところで鋭いのに鈍感なんだね」

そうかな？さっぱりわからないのは確かだけど・・・

「僕の名前、シャルロット・デュノア。これが僕の母さんからもらった、本当の名前だよ。だからこれからは、シャルロットって呼んで」

シャルルの本当の名前か。シャルル、いや、シャルロット・デュノア

「それがシャルロットの意思なら・・・これからもよろしく、シャルロット」

「ん」

満足そうにそう返事し、僕らは上がる。もちろん先にシャルロット

を上がらせて、着替え終わったタイミングで僕。男の着替えなんてあっという間だからね。お風呂から出ても顔が赤かった僕らだけど、幸い誰にも会わないで済んだ。

翌朝のＳＨＲ。山田先生がやたらどんよりした雰囲気でクラスに入ってきた。どうしたんだろう？？そういえばシャルルも今朝「先に行ってて」とか言ってどっか行っちゃうし・・・ほんとどうしたんだろう？？

「え～・・・今日は皆さんに転校生を紹介します。といってももう・・みんな知っている人ですが・・・」

入ってきて下さいと言ってガラッと扉が開く。すでに知っている転校生って・・・・

「みなさん、はじめまして。シャルロット・デュノアです」

「というわけでデュノア君はデュノアさんでした。はぁ・・・・また部屋割りを考えないと」

ひらっとスカートを翻して入ってきたのは女子の制服を着たシャルロットだった。周りのみんなも唖然としていたが徐々に騒ぎだし・・・

「美少年じゃなくて美少女だったのね！！」

「ちょっと待って！確か昨日織斑君たち男子が浴場を使っていたって事は・・・」

ざわざわざわと騒がしくなる。さらにバァン！！と扉を破壊して鈴が入ってきた。

「一夏ぁあああ！！」

「わぁあああ！待て、俺はシャルルと一緒に風呂なんか入ってねぇ！」

「そうなんだ（ホッ）」

とそこへいきなりラウラが入ってきた。そしてそのまま彼女はツカツカとこちらに来て・・・

「ムグっ！？」

一夏とキスをした。うわぁ凄い大胆だ。

「お、お前は私の嫁にする！異論は認めん！」

「嫁！？婿じゃなくて！？」

・・・一夏、また新しいフラグを立てたんだね。それに嫁って、だめだ突っ込みどころが多すぎる！

「あ、あ、あんたねぇ！！」

収まったと思ったのもつかの間、再度鈴の怒りが溜まり、突き抜けた。今の彼女のツインテールは重力に逆らい、ツノのようになっている気がする・・・

「待て！俺はどっちかと言うと被害者サイドだ！！」

「あんたが悪い！悪いに決まってる！！」

危機を感じた一夏は鈴の横を抜け後ろから教室を出ようとした。その先には・・・

「箒！？」

一夏の目の前に突きつけられる日本刀。やばい、超怖い！

「貴様、どういうつもりだ？」

ゆらりと刀を抜いて一夏に迫る。後ろからは鈴も。これは・・・死んだか

「ところで、大和さん？」

「なに？セシリ・・・・」

僕はその時に死を悟った。だってその時のセシリアの顔は、恐怖という物を押し固めて作ったみたいだったから・・・

「一夏さんは一緒にお風呂に入っていないと言いましたわね？という事は大和さんは一緒に入ったんですわね？」

ガタガタガタ。否定も肯定もできない。ただ僕は震えるのみ・・・

「沈黙は肯定と受け取りました。では・・・」

キィンとブルーティアーズが展開され、目の前でスターライトｍｋ?がチャージされていく。こうなったら一夏を!

「ぎゃあああああ!!」

だめだ!あっちではもう刑が執行されている!

「では、ごきげんよう」

セシリアのその言葉とともに僕は光に包まれる。その後僕と一夏は互いに保健室で目覚めたのだった。

もちろん、なぜそこにいるのかは覚えていなかった・・・

その後僕たちは新しく決まった部屋割りのもと自室に戻ってきていた。ようやく部屋割りにめどがついたとかで、男子は個室が与えられたのだった。やったね!

「久しぶりにストライクの調整でもやろうかな?」

そう思った僕はストライクのコンソールを呼び出し各部をチェックしていくがふと、一つのディスプレイの前で手が止まった。

「あれ?こんな武装前までなかったはずだけど・・・」

僕の目の前にはどこから出たのかはわからないが、見た事もない武装が表示されていた。

「これは、今より強そうだけどこんなに火力が高いとエネルギーがすぐ無くなっちゃいそうだな」

果たしてその武装が使われる日は来るのだろうか？

舞台はみんなが待ち望んでいる夏へと移る。

第１５話：かくて幕は下ろされて（後書き）

今回の大欲情うんぬんの話は昔私がやったエロゲの話ですが通じたでしょうか？

あれはエロイけどストーリーがしっかりしていたので、か○や作品としては神だと思いました。

さて、頑張れば水曜日に一回と土日どっちかで一回という更新ができるかもしれません！

では、また次回！

ご意見ご感想をお待ちしております！

第１６話：臨海学校（準備編）（前書き）

今回は臨海学校の準備編と、物語での重要な人物が登場します。

８万ＰＶ、ユニーク１万突破！ありがとうございます！

これからも頑張って書いていくのでよろしくお願いします！！

第１６話：臨海学校（準備編）

「暑い・・・」

学校が休みの土曜日、僕は一人横浜のショッピングモールに立っていた。ジリジリと太陽が容赦なく照りつけてきて思わず溶けてしまいそうだ・・・ところでなんで僕がこんなところで一人立っているかというと、話は昨日にさかのぼる。

～昨日～

シャルルが女の子である事をばらしシャルロット・デュノアとなり、ラウラ・ボーデヴィッヒが一夏の事を嫁認定した次の日の朝の時の話だ。

「あ、一夏おはよう。どうしたの？何だか疲れているみたいだけど？」

「あ、大和か・・・なんでもない。少し早起きしすぎただけだ・・・」

「そう・・・」

一夏は何でもないというが端から見れば今の一夏の表情は間違いなく死人のそれである。魂どっかから出てるんじゃないの？と思わず聞いてしまうところだった。・・・実際今日の朝、ラウラが全裸でベッドに突撃して、運悪くそれに箒が出くわしてしまい、一夏は箒と命をかけた鬼ごっこをする事になった。というのが事の真相であるが、まぁ吉良には知る由もない。

「来週からは校外特別実習があるのでくれぐれも準備を怠らないように。ではＳＨＲを終わる」

ＳＨＲは千冬さんが来週にある校外特別実習、つまり臨海学校の説明をして終わった。いつもならここから山田先生の授業が始まるのだが、なぜか今日は千冬さんだけだ。どうしたんだろう？？

「先生、山田先生がいません。どうしたんですか？」

クラスのしっかり者の高月さんが尋ねる。よかった！ちょうど僕も気になっていたところだ。

「山田先生は来週の校外特別実習の現地視察に行っている。よって、今日の授業は全て私が持つ」

「・・・・・！！」

クラスから「えぇ～！」とか「ずる～い！」とか声が上がる。なるほど、山田先生がいないのはその為か。しかし、今や大事なのはそこじゃなくなった。全授業を千冬さんが受け持つという事は、朝から放課後まで鬼と一緒にいる事に・・・・！

「誰が鬼か！」

スパーン！！といい音がして僕は出席簿で叩かれたのだった。

・・・話がだいぶ逸れた気がするけど、事の発端は僕と一夏の会話だった。

「そういえば一夏、臨海学校って確か１日目は自由なんだよね？」

「そうだったな、あ！俺水着もってねぇ！」

「僕もだよ。それでさ、今週末買いにいきたいから一緒に・・「大和さん！！」・・セシリア？」

声をかけて来たのは今の僕たちの会話を横で聞いていたセシリアだった。

「今！この間の約束を果たしてもらいますわ！！」

約束？僕セシリアと何か約束したっけ？？わからなかったので首をひねっているとセシリアがさらに続けてきた。

「先日、大和さんはクラス対抗戦の時にボロボロになって帰ってきましたわね？」

・・・そうだった。僕は正体不明ＩＳに撃たれてセシリアに心配かけちゃったんだっけ・・・

「その時に私はベッドの上でデートしてくれたら許して差し上げると言いました。そして大和さんはそれを了承しましたわ！」

まったく記憶にございません。あれ？最近大物政治家といわれる人が似たような発言をしてた気が・・・まぁいいや。・・・ところでセシリアのベッドの上で発言はアウトじゃないんだろうか？

「ですから！今週末、わたくしと一緒に水着を買いにいきましょう！」

ズイ！と迫ってくるセシリア。どうしたものかと一夏の方を向くと・・・・

「一夏！買い物くらいならいつでも付き合うと言ったな！ならば私と今週末付き合え！」

箒に捕まっていた。しかも一夏は「おぅ、いいぞ」なんてあっさり了承してるし・・・

とにかく一夏は箒と行く事になった。ここで断って後でシャルルを誘ったらセシリアに悪かったので僕も了承した。まぁいいか、いつもお世話になっているからそのお返しにとことん付き合ってあげよう。

～回想終了～

もどって現在、僕は約束の１５分前にここにいた。遅れるのは悪いかなと思って早めに出たがこの炎天下の中はキツい・・・遅れる事数分、セシリアがやってきた。

「お待たせしました！」

息を少しだけ切らせてこちらにやってきた彼女はいつもの学園で来ている服ではなく私服だった（当たり前だが・・・）派手ではないが上品さのある服装がとても良く似合っていて、普段の制服を見慣れている僕は少しドキッとしてしまった。

「ううん、僕も今来たところだからそんなに待ってないよ」

「そうですか、良かったですわ」

「じゃあ、行こうか」

そう言って僕とセシリアは歩き出す。端から見ればカップルのデートの光景だが、吉良は別段そんな事を意識してなかったのを付け加えておく。そんな2人の後ろでは、彼らを尾行する一つの影がゆらっと動いたのだった。

「・・・っ！大和がセシリアと！ずるいよセシリア！僕も行きたかったのに・・・」

尾行しているのはシャルロットだった。昨日からセシリアの様子がおかしかったのでビビっ！ときたシャルロットはいつの間にか2人の尾行をしていたのだった。そしてさっきから恨めしげにセシリアを電柱の影から見ている。ちなみにその電柱には『シャルロット専用』と書いてあったとかないとか。

「あぁ！セシリア、大和の手を握ってる！！」

端から見れば完全に危ない人であるが今のシャルロットにはそれを気にしている余裕はない。そうこうしているうちに2人は水着売り場へと入っていく。

「マズイ！見失わないようにしなきゃ！」

そう言ってシャルロットも水着売り場へと入っていった。

「じゃあ、男の水着売り場はこっちだからまた後でね」

水着売り場についたので僕とセシリアは別れた。つないでいた手を

離した時にセシリアは名残惜しそうな顔をしていたけど僕も恥ずかしかったからタイミング的にはバッチリだ。さて、男物の水着を探そう。女尊男卑となった世の中でも種類は少ないが男物の水着はちゃんと売られている。僕は簡単に青地に白のストライプが入ったトランクスタイプにした。

「セシリアは・・・まだだよね」

僕は思ったより早く買い物が済んでしまったので入り口でセシリアを待っていた。そんな時どこからか声がした。

「ちょっと!そこのあなた」

誰だろうと周りを見渡してみる。が、誰もいない。

「男のあなたに言っているのよ。そこの水着、全部片付けておいて」

・・・どうやら彼女は僕に自分が試着した水着の片付けをさせたいらしい。これは女尊男卑になった今では何も珍しい事ではない。男は街を歩いているだけで命令されるのである。だけど、冗談じゃない!

「自分で片付けたらどうですか?めんどくさがってばかりいるとろくな事になりませんよ?」

僕だって人間だ!誰かの奴隷じゃない!

「ふぅん・・・そう言う事言うんだ」

彼女の顔は醜悪な笑みになり、警備員を呼ぼうとした。今の世の中

女性の証言は１００％採用され、それがウソでも虚偽告訴にならない。つまり、ウソでも「暴行されました」と言えばその瞬間男は有罪が確定してしまうという恐ろしい世の中なのだ。

「それくらいにしてくれませんか？彼はわたくしのツレですの」

困っていたところにセシリア登場。

「あら？あなたのツレなの？まったく、ちゃんと躾けくらいしておきなさいよ」

うわぁ僕は犬扱いですか・・・ちなみに、ここまで横柄な女は少数で大多数の女性は男の社会的地位をある程度認めてくれている。

「まったく！これだから男は！」

そんな捨て台詞とともに僕に命令してきた女性は去った。

「ありがとう、セシリア。助かった。それで、買い物は終わったの？」

「・・・いいえ、お気遣いなく。買い物はまだ終わっていませんわ。それで大和さんに選んでほしくて、入り口に戻ってきたら揉めていましたので・・・」

「そっか、じゃあ・・・」

行こうかと言おうとしたところで吉良は自分の靴ひもがほどけているのに気づいた。すぐに行くからとセシリアに言って先に行ってもらう。

「さて！」

結び終えたのでセシリアのところに行こうとした時、見慣れない人が立ちはだかった。

「さっきは災難だったな」

その男の声は低く、芯があり、聞く者を引き付けるような声だった。

「いえ、友人に助けてもらいましたから。それであの、あなたは？」

「なに、見ての通りただの通りすがりの男さ。それよりも君は今のこの女尊男卑の世の中をどう思う？」

「どう思うも何も、このままじゃダメだと思います。ですが何年もかけてそれが浸透した今、簡単にはひっくり返らないと思います」

「そうだな、ＩＳなどという物ができてからの女どもの増長は目に余る。過ぎた力は身を滅ぼすというのに・・・そしてそれが簡単に覆らないのもまた真だ」

「・・・あなたは、何が言いたいんですか？」

「私は、今の世の中を元に戻すべきであると思う。両性が平等に近かった時代にな」

彼の言っている事ができるのならぜひともやってほしい。というのが世の男たちの意見だろう。誰だって、自分が奴隷のように扱われるのは望んでいない。だけどＩＳという物がある限りそれは不可能

だ。

「そんな事をしようと思ったらこれ以上ない物を叩き付けないと無理でしょうね」

僕は肩をすくめてそう言った。

「そうだ、だから私は探しているのだよ。遠い昔になくしてしまった箱と、その鍵をな。そして君にも期待しているんだ。世界で唯一ＩＳを使える男子の２人のうちの１人、吉良大和君。・・・どうやら少し話しすぎたようだな。引き止めてすまなかった。話を聞いてくれてありがとう」

そう言ってその男は歩いていった。何だか良くわからなかったけど、セシリアを待たせているんだから急ごう。

「織斑一夏と吉良大和。果たして鍵になるのは２人のうちのどちらなのだろうか・・・」

見知らぬ男はそう呟いてどこかへと消えていった。

「遅かったですわね」

「ごめんごめん、なんか変な人に捕まっちゃって・・・」

セシリアがプク～っと頬を膨らまして抗議してくる。小動物みたいでかわいいけど、怒っているから茶化せない。

「まぁいいですわ。それでは早速選んでもらいましょう！」

セシリアがパン！と手を叩いて2つの水着を出す。一つは白のシンプルなビキニタイプ、もう一つは腰にパレオを巻いた少しゴージャスなタイプのブルーのビキニだ。

「う～ん・・・青い方がセシリアの雰囲気と合っているから、似合うと思うよ」

「じゃあこれにしますわ！」

はや！そんな簡単でいいの！？

「では早速試着を・・・ハッ！」

「え！？っちょ！」

突然セシリアにぐいっと腕を引っ張られ一緒に試着室へと押し込まれた。ちょっと！まずいんじゃないのコレ！

「・・・・！」

見ればセシリアも真っ赤だ。

「あの、僕は出てるから、終わったら見せてね」

「いえ！ここまで来たんですもの！ここで着替えますわ！」

なにがここまで何だかわからないがセシリアが服のボタンを外していく。とっさに僕は顔を背けて別の事を考える。えーと、煩悩退散煩悩退散！とは言っても洋服と肌が擦れる音というのもなかなか危

なかった。

「（っ～～！勢いですが、ここまで来たら最後までいきますわ！」

勢いとはいえ吉良を試着室へ引っ張り込んだセシリアは心臓が破裂しそうなほど緊張していた。本国であるイギリスではモデルの仕事もし、何度も水着に着替えて撮影もした。しかし好きな男子と同じ部屋で着替える事をするなんて事は当然あるわけが無く、セシリアの緊張は凄まじいものだった。

「（これくらいすれば鈍感な大和さんでも気づいて下さるかも！）」

そう考えると勇気が出るセシリアだった。

「ど、どうでしょうか・・・」

着替え終わったセシリアがこちらを向く。顔は真っ赤だ。

「似合ってる。凄いよく似合っているよ」

吉良は心からの感想を述べた。実際セシリアのお嬢様然とした雰囲気と青いビキニはよく似合っていた。でもそれ以上に生着替え＋水着のコンボにさすがの吉良も参っていた。とにかくこのピンク色の空間から早く出たかったのだ。

「似合っているからそれでいい思う。じゃ、じゃあ僕は外に出るね！」

シャ！と試着室のカーテンを開けると・・・

「何をやっているんだお前らまで・・・」

手を額に当ててあきれかえっている千冬さんがいた。

「織斑君に続いて吉良君まで・・・先生、もうついて行けません！」

ワァ！と山田先生が泣きそうになる。あの後、千冬さんに見られた僕らは2人からこってりとしぼられた。そして・・・

「よぉ大和・・・偶然だな、こんなところで」

一夏と箒もしぼられていた。つまり箒もセシリアと同じ事をやったのだ。それを千冬さんに見つかってしまい今に至るというわけである。

「さて、そろそろお前たちも出てきたらどうだ？」

千冬さんがある一角に向けてそう言うが、誰かいるのだろうか？

「そ、そろそろ出ようと思っていたところだったのよ！」

「タイミングを計っていただけです」

果たしてそこから現れたのは、鈴とシャルロットだった。2人とも何やってんの！？

「一夏が悪いのよ（あたしに黙って箒と行くなんて・・・）」

「大和が悪いんだよ（僕に内緒でセシリアと行くなんて・・・）」

わぁー、なんでか知らないけど避難囂々だ。

「（やはりシャルロットさんがつけてきたのですわね・・・）」

セシリアもセシリアでなんか考え事をしているし・・・

「やれやれ、さっさと買い物をすませて帰るとしよう」

ふぅ、とため息まじりにそう言った千冬さん。手には水着が握られていた。どうやら千冬さんも土壇場準備だったようだ。なら

「あぁ！いけない。僕買い忘れた物があったんだ！いこう、セシリア。じゃあみんな、またね！」

そう言って僕はセシリアの手を握って走り出す。同時に山田先生にアイコンタクトで僕の考えを伝える。

「あぁ！いけない！私も買い忘れた物があったんでした！鳳さん、デュノアさん！行きましょう！」

僕の後ろでは僕の意図を呼んでくれた山田先生が合わせてくれた。せっかくの姉弟、水入らずといきたいもんね。

「あぁ・・・また大和さんと手をつないでますわ／／／」

そして僕の後ろではなぜかセシリアがこれ以上ないほど幸せそうな表情をしていた。

その後僕たちはその他のいる物を買ったり、いろんなところを見て

回ったりして楽しく過ごした。で、今僕らは学園の前にいる。

「今日はありがとうね。凄く楽しかったよ！」

「いえ！こちらこそ、わたくしも凄く楽しかったですわ！」

今僕らは寮へと向かう道を歩いていた。ところが不意にセシリアの表情が暗くなった気がした。

「どうしたの？」

「・・・大和さんは昼間の事をどう思っているのですか？」

昼間の事、それは僕があの女の人のパシリにされかけた事だろう。

「正直言って、冗談じゃないって思ったよ。僕だって人間だから、誰かの奴隷じゃないからね」

「・・・すみません。今までのわたくしたちの考えは、身勝手そのものだったのですわね」

セシリアがうなだれた。実際、会った当初は見下すような態度を取っていたからね。でも・・・

「セシリアが謝る事じゃないよ。確かに間違ったかもしれないけど、こうして僕たちはわかり合えた。それでいいと思うんだ」

「・・・ありがとうございます」

セシリアが頭を下げる。でも僕はコレは望んでいない。

「セシリア、ちょっといい？」

だから僕はそんな事をもう気にするなと言いたかった。わかり合えたのだから、これからも仲良くしていきたかったから。

「はい、これ」

「これは・・・？」

僕が差し出したのは、鳥をモチーフとしたシルバーのネックレスだった。セシリアとの買い物の時にトイレと理由をつけて離れてこっそり買っておいたのだ。

「ん、今日のお礼と日頃の感謝のしるし、かな？セシリアに似合うと思ったからネックレスにしたんだけど・・・」

あれ？セシリアを見ればぷるぷる震えている。ミスったかな？

「あ、ありがとうございます！一生大事にしますわ！」

お礼を言いながら震える手でネックレスを受け取る彼女。良かった、ミスったわけじゃないんだ。

「（もう・・・死んでもいいですわ。いえ、まだ死にたくなんてありませんけども！）／／／」

セシリアはいろいろと大変だった。そしてセシリアはある考えを思いついた。

「あの、大和さんにコレを付けていただきたいのですが／／／」

「うん。いいよ」

あっさりと吉良は了承。そのままセシリアの首に手を伸ばす。

「（うわ、簡単にＯＫしたけど、よく考えるとこれって結構恥ずかしいな・・しかもセシリア、髪の毛さらさらしてて良い匂いだし、凄い気持ちいいし・・・だめだ、余計な事は考えるな・・・）」

「（大和さん・・・くすぐったいですわ・・・あぁでも！大和さんが私に・・・／／／）」

そこにはほわほわとしたピンク色の空間が広がっていた。

「これでよし。じゃあねセシリア、今日は本当にありがとう！」

「はい！大和さんもまた！」

恥ずかしかったのでそう言って僕らは逃げるように別れて部屋へと向かう。が、ある人物を見て僕の足がピタッと止まった。

「こんばんは、大和、何やってんの？」

そこに立っていたのは、シャルロットさんだった。

ゴゴゴゴゴゴ！！と擬音が聞こえるくらい何故か怒ってらっしゃる。

「あの・・・シャルロットさん？」

「なにかな?大和」

あぁ、何故かはわからないが僕はここで終わる事を知った。だってシャルロットさんが僕の目の前で展開している物は・・・

「シールド・ピアース」

その威力は前の戦いですでに知っている。

ドゴォオオン!!

・・・僕は、目の前が真っ暗になった。

みんなが待ちに待った臨海学校まであと少しである。

第１６話：臨海学校（準備編）（後書き）

さぁ、女尊男卑が浸透した世の中で、それをひっくり返す事べきであるという男の言葉は何を意味するのか？そして鍵とは、箱とはなんなのか？という重要な回にしてみました。

ではまた次回！

第17話：海とワッフルと旅行の定番（前書き）

前回の時点で8万ＰＶだったのにいきなり１０万ＰＶいってビックリしました。しかもお気に入りが１００件を突破するなんて作者として、こんな嬉しい事はありません！

本当にありがとうございます！

さて今回は（も？）ギャグパートです。それでは、どうぞ！

第17話：海とワッフルと旅行の定番

「海！見えたぁ！」

トンネルを抜けたら目の前に広がる青い海！それを見て女子達のテンションが上がるのは仕方ない事だ。僕も窓から見えるこの光景にわくわくしている。

「～♪」

そして隣に座っているセシリアも上機嫌だった。さっきから満足そうにネックレスをいじっている。

「ジーっ」

反対に不機嫌なのは前に座っていたシャルロットだった。彼女はさっきからジト目でこちらを見てきている。

「ずるいよセシリア。僕だって何か大和からプレゼントしてほしいのに・・・不公平だよ」

どうやら僕がセシリアにネックレスをあげたのがお気に召さなかったらしい。う～ん、確かにシャルロットにもお世話になったのにあげないのは不公平かな？

「シャルロットにも今度何かプレゼントしてあげるよ」

「ホント！？絶対だよ！後で無しにしてなんて聞かないからね！？」

「う、うん。わかったよ」

必死の形相で詰め寄ってきたシャルロットに若干たじろぎながら僕は約束した。そうこうしているうちにバスは宿に着いた。

僕たちが泊まる旅館は花月荘というところで、結構歴史があるらしくかなり大きかった。しかし、設備などは新しくとても綺麗な宿だった。どうやらここに毎年お世話になっているらしく、女将さんたちの対応も慣れたものがあった。

「ねぇねぇ、おりむーにやまぴー。2人の部屋ってどこなの～？遊びにいくから教えて～」

クラスメイトののほほんさんが聞いてきた。ちなみにのほほんさんというのはあだ名で、本名は布仏本音（のほとけほんね）という名前である。まぁ、本人はいつものほほんとした感じだし、縮めればのほほんになるからあながち間違っていないと思う。

「う～ん、僕たちもまだ知らないんだ」

ちなみにのほほんさんが僕たちの部屋の所在を聞いてきた時、クラスの大半が聞き耳を立てていたのは気のせいだと思いたい。一夏は「床じゃないか？」なんて冗談を言っていたけどそんな訳無いよね？

「お前たち2人の部屋はこっちだ。ついてこい」

おっと千冬さんが呼んでいる。そして千冬さんに従い長い廊下を渡りついた先は・・・

『教員室』と書かれていた。・・・あれ？

「最初は2人部屋にしようと思ったのだがな、それだと絶対に就寝時間を無視した輩が出るだろうから私との相部屋にした。これなら誰も来ないだろうからな」

あぁ、と僕は納得した。いくらなんでもここに来る事はないだろう。『来る＝死』を意味するのだからね。

「さて、1日目は自由だ。好きなところに遊びにいけ。私は用事があるからな・・・だがまぁ少しは泳ぐかな。どっかの馬鹿が選んでくれた水着もあるからな」

どうやら僕の計画は成功したみたいだ、と心の中で笑いながら僕と一夏は水着を持って外に出た。

「「「・・・・・・・・」」」

一転して僕と一夏、それに途中で会った箒は目の前の光景に絶句していた。だって地面からひょこっと顔を出していたもの、それが、ウサミミだったのだから。しかもご丁寧に「引っ張って下さい」と看板が立てられている。

「これってアレだよな?」

と一夏が箒に聞けば

「知らん!私は先に行く!」

と怒ってスタスタと先に行ってしまった。いやまぁ、これが僕らの

考えている通りなら、この下にいるのはＩＳを発明した希代の天才科学者の篠ノ之束（しののたばね）さんなんだよね。そして箒は束さんと仲が悪い。だから我関せずでさっさと行ったのだろう。

「はぁ一夏、僕が引っ張るよ」

ため息一つついて、僕はソレを掴んで思いっきり引っ張った・・・のだが

「は？」

一夏が目を丸くしている。そりゃそうだ。だってホントにウサミミだけだったのだから。とそこへ一本の巨大なニンジンがドン！と降ってきた。そしてニンジンの真ん中が縦にストンと割れ、中から現れたのは・・・

「あっはっはっは！引っかかったね！！いっくんにやまぴー！」

件の天才科学者、篠ノ之束さんでした。聞けば昔ミサイルで飛んでたら撃墜されそうになったからこの格好をしているとか。相変わらずなんてむちゃくちゃな人だ・・・

「「お、おひさしぶりです。束さん・・」」

「うんうん、ひさしぶりだね～2人とも。ところで箒ちゃんはどこかな？トイレ？」

あなたを避けていきました、とは言えない。

「まぁいいや、このウサミミダウジングマシーンですぐに見つける

から、じゃあねいっくん、やまぴー、また後で！」

言うだけ言ってすったったーと行ってしまった。めちゃくちゃ速いなぁ・・・と僕たちが呆然としてると

「あら？大和さんに一夏さん、こんなところで何をやっているのです？」

セシリアが登場。

「いや、嵐が通り過ぎた・・・」

一夏がそう言うが僕も間違ってないと思う・・・セシリアは「？？」だったけど。セシリアも海に向かう途中だというので僕らは連れ立って歩き出す。とそこへセシリアがある提案をしてきた。

「ところで大和さん、その、海に着いたらサンオイルを塗ってくれませんか？・・・／／／」

サンオイル？ってどこかで聞いたけど・・・なんだったかな？まぁオイルくらいなら大丈夫でしょ

「それくらいならお安い御用だよ」

「絶対ですからね！？後でなしは聞きませんよ！」

・・・安請け合いは後で後悔する事になる。そうして僕らはセシリアと別れて男子更衣室へと向かった。

ざぁ～ん、ざぁ～んと寄せては帰す波。青い海に白い砂浜！いいね

ぇ。着替え終わった僕らは砂浜に立っている。途中何人かクラスメイトに会ったがみなさん大胆な水着を着てらっしゃいました。反対に僕らは大変だったけど・・・主にガールズトークとか。

隣では一夏がかなり入念に準備体操をしていた。泳ぐ気満々だねと思っていたら一夏の背中に何かが飛び乗ってきた。ソレはそのままスルスルと肩までのぼり、一夏が肩車しているようになった。

「あんたもまじめねぇ・・・ほらほら終わったなら行くわよ」

「鈴！お前また人の背中に乗って・・・」

昔から鈴は一夏の肩に飛び乗っていたのだ。そして猫のように鈴は一夏の肩までのぼり、監視塔ごっこ？なる遊びを始めた。うん、一夏ならきっといい監視塔になれると思うよ！

「お前まで！ってか止めろよ！」

一夏渾身の突っ込みだった。だが今の大声が引き金となったのか、周りの女子が一斉にこっちを向いた。・・・ヤバ。

「あぁ！織斑君が肩車してる！」「きっと交代制よ！」

「「「そして、早い者勝ちよ！！」」」

最後の言葉を皮切りにいっせいに女子がこっちにかけてくる。冗談じゃなく足音が凄い。ここ、砂浜だよね？

「鈴！降りろ、誤解される！」

一夏が必死に鈴を説得する。鈴は「仕方ないなぁ」とか言いながら渋々降りた。と同時に目の前に女子の大群が・・・必死に僕らはそんなサービスはやってませんと言う。

「あぁ！何をしていますの！？」

女子に埋もれている僕らを見てセシリアが悲鳴を上げた。助かった、セシリア、早くこの人達をどけてくれ～！

「さぁ大和さん！そんな事してないで、早くわたくしにサンオイルを塗って下さいまし！」

「「「「なにぃ！？！？！？」」」」

ちょ！セシリア！止めるどころかさらに悪化してるんですけど！？

「じゃあ私はサンオイルをとってくる！」

「じゃあ私は場所の確保を！」

「私はオイルを落としてくる！」

塗ってあるならわざわざ落としにいかないでよ！余計な手間を増やさないでくれ！おぉ～い・・・僕の叫びもむなしく女子たちはざぶざぶと海の中に入っていってしまった。そして、何となく横を向いたら一夏と目が合った。途端に笑い出す僕たち。

「はは、ははははは！」

「ふふ、ふふふふふ！」

「じゃ、後は任せた！」

「あぁ！一夏の裏切り者！」

言い切る前に一夏はものすごいスピードで海に入っていた。・・・

一夏ってあんなに足速かったっけ？いつもの3倍くらい速い気が

「さぁ・・・お願いしますわ」

後ろを振り返れば新たな試練。すでにセシリアはパレオを脱いで水着のブラも脱いでいた。うわ、これは凄い。特にセシリアの胸が

「（こうなったらもう勢いで！）背中だけでいいよね！？」

「大和さんが前もと仰るなら、わたくしはかまいませんが・・・／／」

「背中だけでお願いしますｏｒｚ」

もう半ば自棄になりながらセシリアの背中にオイルをたらした。

「ひゃ！大和さん！オイルは手で暖めてから塗って下さい！」

「ご、ごめん。初めてだからわからなくて」

手で暖めるなんて知らなかった。セシリアはなぜか僕が初めてというのを聞いて嬉しそうだったけど。そして、手でオイルを適温まで暖めてから再び塗り直す。うわ、セシリアの体って凄いすべすべだ。しかも白くてシミ一つない肌は凄く綺麗で、それに凄く柔らかい・・

・／／／

「ん・・・はぁ・・・き、気持ちいいですわ・・・／／／」

「セシリア！頼むから変な声出さないで！？」

僕は理性と戦いながらもなんとか、なんとか！耐え抜いてオイル塗りを終わらせた。

「（もう二度とオイルなんか塗らない！）」

これがこの夏、僕が得た教訓だった。やつれている僕とは反対に、セシリアは凄く顔がツヤツヤしていた。

「よぉ、お疲れさん」

「裏切り者・・・」

セシリアとの違う意味での戦いを終えた僕はビーチチェアに腰掛けて休んでいた。そこへ現れた先ほどの裏切り者。聞けば鈴と一緒に競争をやっていたらしいのだが鈴が溺れかけたため、あわてて浜辺へと引き返してきたらしい。

「それにしても競争したら腹減ったな」

「そうだね、僕も変に緊張したからお腹空いたかも」

「あ、それなら」

後ろで話を聞いていたセシリアが何かを思い出したようで何かを言

おうとしているけど、なんだろう、嫌な予感しかしない。

「わたくし、昨日の夜に今日のティータイム用のワッフルを焼いてきたんですけど・・・」

原因判明。

「行こう！一夏！あのブイまで競争だ！」

「よく言ったぁ！大和！久しぶりの本気の勝負だ！負けねぇぞ！」

そう言って僕らは走り出す。後ろでセシリアが何か言っていたけど気にしない。

「「死んで・・・たまるかぁ！！」」

この夏、僕らの負けられない戦いが始まった。

「せっかく焼いてきたのにそれを冷蔵庫に忘れてきて・・・て、２人ともどこへ行ったのでしょう？」

後に残ったのは現状を把握できずに頭に？マークを浮かべたセシリアだった。

「はぁ、はぁ、さすがに二本連続はキツいか・・・」

「はぁ、はぁ、そう言う割には一夏って速いよね・・・」

あの生死を賭けた勝負から戻ってきた僕らはひとまず息を整える。

と、一夏がある一点を見ていた。アレは・・・ビーチバレーだ。

僕らは近づいていき混ぜてもらった。何度かチーム替えをしながら遊んでいたらシャルロットと何かが近づいてきた。

「あ、シャルロット」

僕は手を挙げてシャルロットを手招きした。シャルロットの水着は鮮やかな黄色の、セパレートとワンピースの間のような形で、胸元が強調されていた。

「シャルロットの水着、凄いよく似合っているよ。」

僕が心からの感想を言うとシャルロットは顔を赤くして「ありがとう」とだけ言った。顔が赤いけど熱射病かな?それなら大変だ。

「・・・今、大和に対してすっごい殺意がわいた気がするよ」

どうやら熱射病じゃないらしい。そしてそんなシャルロットの隣にいるのが・・・

「シャルロット、なにそれ?バスタオルお化け??」

僕が指摘すると、シャルロットはそれに何か耳打ちしてバスタオルを脱がせた。中身は・・・・

「お、ラウラじゃん。その黒い水着可愛いな、すごい似合っているぞ」

「か、かわい!?」

一夏がそう言った途端に真っ赤になるラウラ。これを見て一夏も（

熱射病か?）と思ったのは言うまでもない。

その後はまた僕らはビーチバレーを再開した。途中で、一夏と目が合ったラウラが顔を真っ赤にして逃げ出す、というハプニングがあったり、織斑先生が水着で登場した時にはほとんどの人が見惚れていたりと色々あったが1日目の自由行動は終了した。

ところ変わってここは宿の大広間。全クラスがここに来て夕飯を食べていた。なぜかここの旅館は夕飯時は浴衣の着用が義務らしく、みんな浴衣を着ている。

「うわぁ大和、日本人だからかな?浴衣がすっごいよく似合っているよ!」

僕の隣のシャルロットがそう言う。ちなみに席順は左から箒、一夏、ラウラ、セシリア、僕、シャルロットの順である。鈴は・・・2組なのでいない。

「そうかな?そう言うシャルロットも似合うよ」

「そう?・・・／／」

「セシリアも似合っているし、浴衣って誰が来ても似合うんだね」

「「・・・・・・」」

あれ?何か僕まずい事言ったかな?2人の目つきがどんどん冷たいものになってってるんだけど!?とまぁそんな事がありながらも夕飯がスタートした。

「おいしいねぇ！僕、フランスでお刺身なんか食べた事なかったけどハマりそうだよ！」

「そう言ってくれると嬉しいな。魚は新鮮だし、わさびは本わさだし、言うことないね！」

「本わさ？」

シャルロットが首を傾げて聞いてくる。そこで僕はわさびのちょっとしたトリビアを披露する事にした。説明を聞き終えたシャルロットは何を思ったのか、パクッとわさびの山を口にいれ・・・て？ちょ！ちょっと何やってるの！？

「～～～～～！！」

シャルロットが涙目になった。水を飲むのは辛さが増すだけなので、僕はご飯を食べるように言った。

「ふ、風味があって、お、美味しいよ」

シャルロット、頑張るなぁ。と僕らがほんわかと夕飯を食べている中、隣の人はというと・・・

「・・・つぅ！」

隣のセシリアは正座になれていないのか、足がしびれていた。

「・・・あの、セシリア。無理しないであっちのテーブル席にい

った方が」

「大丈夫ですわ！わたくしがこの席を取るのにどれだけ苦労したか・・・つぅ！」

セシリアは大丈夫というが、箸をもつ手も震えている。このままじゃいつまでたっても食べれないな。・・・よし。

「仕方ないなぁ。僕が食べさせてあげるよ」

そう言って僕は自分の箸でお刺身を一切れはさみ、醤油をつけ、わさびを少々、そしてセシリアの口元へと運ぶ。

「！？！？」

突如降ってわいた幸運にびっくりしたセシリア。しかし反射的に口を開いてお刺身を食べた。

「（大和さん、なんて大胆な！・・あら？大和さんが使った箸でわたくしが食べたという事は、これはか、間接キスになるんじゃないでしょうか！？）」

セシリアの頭の中はすでに花畑が広がっていて、もう足のしびれの事なんか忘れ去っていた。しかし幸運も長続きしないものだ。

「あぁ！セッシーが吉良君に食べさせてもらっている！」

「「「なんですと！？」」」

・・・時々、この学校はそういう反応の仕込みをしているんじゃな

いかと疑いたくなる。

クラスメイトのその言葉が引き金となり、俄に騒がしくなる大広間。

だが彼女たちは忘れていた。この大広間には鬼がいるという事を・・・

スパァン！とその鬼の手刀が僕に振り下ろされた。

「騒がしくなるのだからあまりそういった事はするな。あと、何度も言うが私は鬼ではない」

「すいません」

畳にめり込みながらそう言った。もう、心を読むスキルには突っ込まない事にする。

「さて、お前らもこれ以上騒がしくするなら私の特別メニューをやるか？なに、５０ｋｍ走るだけの簡単なメニューだ」

・・・果たしてそれは本当に簡単なメニューと言えるのだろうか？

「「「いえいえ！おとなしく食べます！」」」

そして再び静かになる食堂。

「そうだ、篠ノ之、ボーデヴィッヒ、オルコット、デュノア、後で私の部屋に来い。凰のやつも誰か呼びにいって連れてきてくれ」

千冬さんが思い出したようにそう言った。女性陣は千冬さんに呼ばれる理由がわからずみんな疑問の表情をしていた。そんな感じで夕

飯は終わった。しかしなんで千冬さんはみんなを呼んだんだろう？

夕飯が終わり僕らは自室（実際は教員室）でのんびりしていた。今は女子の入浴時間なのでテレビを見るなどしてまったりしていた。

コンコン

とそこへドアがノックされた。千冬さんは「来たか」なんて言っている。とりあえず近くにいた僕がドアを開けた。

「「大和さん！？」」

先頭にいたセシリアとシャルロットは僕を見て驚いていた。

「いらっしゃい」

「「「一夏！？」」」

その後ろの3人は一夏がひょこっと顔を出したのをみてびっくりしていた。そういえばまだ誰にも僕たちが泊まっている部屋を教えていなかったっけ。

「来たか、まぁ立っていないで入ってこい」

千冬さんがそう言ったのでぞろぞろと中へ入っていく。

「そう固くなるな。別に取って食おうって訳ではないんだからな」

「「「「「・・・・・」」」」」

千冬さんはそう言うが実際難しいだろう。いきなり理由もわからず呼び出された上に、呼び出した相手があの千冬さんなのだから。固くなるなと言う方が無理だ。

「そうだ、そろそろ大浴場の交代時間だったな。お前らは邪魔だからさっさと入ってこい」

千冬さんがそう言うので僕らはさっさと準備して部屋を出て行く。なぜかそうしないと、命に関わるような気がしたからだ。

「行ったか」

バタンっとドアが閉まったのを確認して千冬は話し始める。

「おっと、話し始める前に何か飲むか？」

そう言って適当にジュースを並べていきめいめい好きなものを手に取っていく。そして千冬が選んだものは

「ビール？」

ラウラが目を丸くした。ドイツにいた頃もビールを飲んでいたところなんて見た事がなかったからだ。というか「織斑先生もお酒飲むんだ」というのがこの場にいる全員が思った事だった。

「何を驚いている？私だって人間だ。たまには酒を飲むさ。それとも私はオイルを飲むような物体に見えるか？」

はい、見えます。というのがきっと5人の本心だろう。

「まぁ本当は一夏か大和のツマミも欲しかったがな。どうした？お前らも飲め」

そう言って5人はプシュッと缶を開けて中身を飲む。

「さて、前置きが長くなったが、単刀直入に聞く。お前らはあいつらのどこがいいんだ？」

「あいつら」というのは聞かなくてもわかる。一夏と大和の事だ。

「わ、私は別に・・・剣の腕が鈍っているのが腹立たしいだけですので」

とラムネを傾けながら箒。

「あたしは、腐れ縁なだけだし・・・」

スポーツドリンクを飲みながらの鈴。

「わたくしは、お互いを高め合える感じで・・・」

紅茶を飲みながらのセシリア

「ふむ、そうか。ではあいつらにはそう言っておこう」

しれっとそう言った千冬に対して3人はぎょっとして詰め寄った。

「「「言わなくていいです！！」」」

「僕・・・私は優しいところかな」

小さい、けれど真摯な響きの声でシャルロットはそう言う。

「そうか、だがしかしなぁ・・・大和は誰にだって優しいぞ」

「そうですね、それがちょっと、悔しいです」

顔を真っ赤にしながら、シャルロットはそう答えた。よほど緊張したのか、暑くなったシャルロットは手で顔をぱたぱたと扇いでいた。

「で?さっきから一言も発していないお前は?」

千冬がそう言うと今まで何もしゃべっていなかったラウラがびくっとした。

「つ、強いところが、でしょうか・・」

「いや、アイツは弱いだろう」

にべもなくばっさりと切る千冬に対して、めずらしくラウラは食って掛かった。

「強いです!少なくとも、私よりは・・・」

最後の方は尻すぼみになってよく聞こえなかったが。

「まぁ、強いか弱いかは別として、2人とも家事と料理はうまいし気が利くしで付き合える女はラッキーだな」

それから千冬はニヤリとしてとんでもない事を言い出した。

「欲しいか？欲しいならくれてやろうか？」

「「「「「く、くれるんですか！？」」」」」

「やるか、馬鹿」

千冬の言葉に「えぇ～」となる５人。

「私は一夏はもちろんの事、大和の事も弟だと思っている。そう簡単にはくれてやらんさ。女ならな、奪い取る気合いで来ないでどうする？自分を磨けよ、ガキども」

そう言って千冬は実に愉快そうにビールを胃に流し込むのだった。

第17話：海とワッフルと旅行の定番（後書き）

旅行の定番である恋愛談義、筆者も中学高校とやりましたが、その度にリア充死ねと何度思った事か・・・ま、それは大学でも同じ事ですがね。てか大学の方がダメージがでかいという罠。どうせ持てない男の僻ですよっと。

そろそろ紅椿が登場しますね。そしてうさみみのあの人も本格的に動き出します。さて、あの人はどんな立ち位置にしていこうかなぁ・・・

ご意見ご感想をお待ちしております。

ではまた次回！

第１８話：その境界線に断ち（前書き）

すいません！土日どちらかで更新とか行っておきながら日曜日、二日酔いでずっとベッドの上で死んでました。

月曜日が運良く暇になったので今日更新します。

第１８話：その境界線に断ち

合宿２日目。今日は丸１日かけてＩＳの各種運用の実験とそれのデータ取りに費やされる。特に「今年は専用機持ちが多いから大変だわ」なんて山田先生がさっきぼやいていた。

「さて、ようやく集まったか・・・おい、遅刻者」

「は、はい！」

遅刻者と呼ばれたのは普段なら絶対に遅刻しないであろう人物、ラウラだった。周りを見渡してみれば、ラウラ以外のいわゆる専用機持ち組もなんだか眠そうだった。

「（旅行だからってはしゃぎすぎたのかな？）」

吉良はこう思ったのだが実際はみんな、昨日の千冬との話し合いが頭にこびり付いてはなれず、よく眠れなかったのだった。

「さて、今日からは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

千冬さんの言葉を聞いてみんなは返事をし、それぞれ別れていく。僕はストライクを持っているので専用機持ちの方へ行く。実は今日僕は、この間見つけた新装備をテストするつもりだった。

「あぁ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

千冬さんが箒に声をかけた。箒は「はい」とだけ返事をし、こちら

にやってきた。

「実は、お前には今日から・・・」

「ちーーちゃーーーん!!」

千冬さんが言葉を続けようとした時、ずどどど!ともものすごい爆音と声が聞こえてきた。びっくりしてそちらを見れば、砂煙を上げながら人影が走ってきていた。しかもめちゃくちゃ速い!たぶんＩＳっぽい何かを付けているんだろうけど、問題なのはそれが・・・

「・・・束」

件の天才科学者である篠ノ之束さんだという事。確かこの辺り一帯は、立ち入り禁止区域に指定されているはずなんだけど、束さんにかかれば禁止もなんのそのってことなんだろう・・・そしてそのＩＳっぽい何かは僕たちの目の前に着陸した。

「やぁやぁ!ちーちゃん、会いたかったよ!さぁ、ハグハグしよう!」

そう言って束さんは飛んできた勢いそのままに千冬さんに飛びかかって・・・千冬さんに片手でキャッチされていた。いや、違うな。アレはキャッチじゃない。だって千冬さんの指が束さんの顔にめり込んでいるんだから・・・なんかミシミシとか嫌な音が聞こえるし

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬ、相変わらず容赦ないアイアンクローだね」

そう言いながらも束さんは千冬さんのアイアンクローから抜け出せている辺り、凄いと思う。そして束さんは今度は反対側にいた箒の方を向いた。

「えへへ、久しぶりだね！箒ちゃん、大きくなったねぇ・・・特におっぱいが」

ガン！！

「殴りますよ」

「殴ってから言ったぁ！ただおっぱいが大きくなったって言っただけなのに」

ガン！！2発目！？

「2度もぶったぁ！やまぴーにもぶたれたことないのにぃ！」

・・・メタ発言はやめて下さい。それと、僕を引き合いに出さないで下さい。

「え、えぇっと・・・この合宿は関係者以外は立ち入り禁止では？」

あまりにも、いきなりな展開についていけなかった山田先生がおろおろしながら言った。

「んん？珍妙奇天烈な事を言うね。ＩＳの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にいないでしょ？」

「そ、そうですね・・・」

山田先生、あっさりと轟沈。

「はぁ・・・束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒が困惑している」

「えーめんどくさいなぁ。私が天才科学者の束さんだよ。終わり」

束さんの自己紹介があってやっと周りの生徒たちも、この場にいるこの人がＩＳの生みの親である篠ノ之束さんである事が理解できた。そして俄に騒がしくなる僕たちの周り。千冬さんは束さんの自己紹介にあきれていた。

「えぇっと・・・この場合、どうしたら？」

もう何が何だかわからない、といった表情で山田先生が千冬さんに聞く。千冬さんは「無視する方向で」とだけ言い、何を勘違いしたのか、束さんは山田先生に嫉妬し、今度は山田先生に飛びかかった。ちなみに、束さんは性格こそアレだが、出るところはきちんと出ているので、そういう絡みは男の僕にはなかなかくるものがあった。

「それで、頼んでいた物は・・・？」

ややためらいがちに箒がそう尋ねた。それを聞いた瞬間、束さんの目が『キラーン』と光った・・・ような気がした。

「うっふっふ。それはすでに準備済みだよ。さぁ、大空をご覧あれ！」

びしっと真上をさす束さん。見上げれば・・・何かが降ってくる！？

ズズーン!!

突如銀色の殻のようなもので覆われたものが降ってきた。そしてそれは縦に真ん中から割れ、中に入っていた物を僕たちに見せた。

「じゃじゃーん!これぞ箒ちゃんの専用機『紅椿(あかつばき)』だよ!なんと、全スペックが現行のＩＳを上回っているんだよ!」

なんか今、さらっと凄い事を言ったような気が・・・

「じゃあフィッティングとパーソナライズをしちゃおうか」

「お、お願いします」

そう言って束さんは時折ふざけながらも高速で何やらキーボードをタイピングしていく。こういうのを見ると、改めて天才だなぁっと思ってしまう。と、そこへ・・・

「あの専用機・・・束博士の身内ってだけでもらえるの?」

「それってちょっとずるくない?」

どこからかそんな声がした。そしてその言葉を聞いて束さんは

「おやおや、歴史の勉強をした事がないのかな?有史以来、世界が平等だった事なんか一度もないんだよ?」

と言った。そうなのだ、今まで世界が平等だった事なんか一度もないのだ。今だって、女尊男卑が広がる前は男尊女卑の世界だ。なんて言われていた時代だったのだから・・・そして、束さんの言葉を

聞いた女子生徒は気まずそうに下を向いた。

「はい、これで全部の作業が終了。後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。さすが私、超早いね。あ、いっくんにやまぴー、白式とストライクを見せて。束さんは興味津々なのだよ～」

言われた僕たちはＩＳを起動する為の姿勢をとった。一夏は右腕のガンドレッドに集中し、僕は右腕のブレスレットに集中した。

「（来い、白式）」

「（行くよ、ストライク）」

僕たちの周りに光が集まりＩＳが展開され、さらにストライクはＰＳ装甲を展開した。

「データ見せてね～。うりゃ」

そう言うなり白式とストライクにブスッとコードを刺す束さん。するとディスプレイが２つ浮かび上がり、それが僕らのデータを映している事がわかった。しかし２人のＩＳのデータを同時に処理できるなんてやっぱりすごいな。

「白式はいいとして、やまぴーのストライクっておもしろいね～。ふんふん、ＰＳ装甲にビーム兵器！すごいね！あとはあとは」

束さんが目をキラキラさせながらディスプレイを見ている。あれ？よく考えたら国家機密がダダ漏れ中じゃない？

「束さんはＩＳの生みの親だからいいんだよ～」

なんだろう・・・みんなある程度心を読む訓練でもしてるのだろうか？でも、千冬さんも黙って見ているだけだし、きっといいんだろう。

「ん～・・・２人とも見た事もないフラグメントマップを構築してるね。見た事ないパターンだけど、２人が男の子だからかな？」

「そのことなんだけど、どうして男の俺らがＩＳを使えるんですか？」

一夏がもっともな疑問を束さんにした。それに対する束ねさんの答えは「わからない」だった。これにはびっくりした。あのＩＳの生みの親である束さんでもわからないなんて・・・

「そもそも、ＩＳは自己進化するように作ったから全部は把握できないんだよねぇ」

とのことらしい。「分解すれば何かわかるかも？」なんて言われたけど速攻でお断りした。もしも許可した日には何されるかわかったものではない。そんな時、いきなりセシリアが束さんの前に躍り出た。

「あの！篠ノ之博士のご高名はかねがね承っております。よろしければ私のＩＳも見ていただけないでしょうか！？」

セシリアは束さんを前にして興奮してるのかこう言ったが、ダメだセシリア！束さんは・・・

「はぁ？誰だよ君は。金髪は私の知り合いにはいないんだよ。そも

そも私はこの４人との久しぶりの再開なんだよ？一体どういう了見でしゃしゃり出てくるのかな？ていうか君だれ？」

「え？あの・・・」

「うるさいなぁ、あっち行きなよ」

今までの雰囲気がウソと思えるくらいにはっきりと示される拒絶の反応。そう、昔からこの人はこうなのだ。曰く「人間の区別がつかない」らしい。はっきりと身内だと思えるのは僕らと、かろうじて束さんの両親だけだ。しかしこれでもマシになった方で、昔は本気で他人を無視していた。セシリアは目に見えてしょげている。・・・後でセシリアのフォローをしてあげないと。

「ふぅ～変な金髪だった。これだから外国人は嫌いだよ。まぁ日本人でも何でもいいんだけどね。箒ちゃんとちーちゃんといっくんとやまぴー以外は」

実を言えば僕は束さんが苦手である。いや、苦手というのはちょっと違うかな・・・そう、どう接したらいいかわからない未知の生物みたいな人だと思っている。今は束さんが僕に興味を持っているおかげでちゃんと『僕』を認識しているが、無くなったら簡単に認識されなくなるだろう。

「はい、パーソナライズも終了。んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

プシュ、プシュと今まで繋がれていたケーブルが外れていく。箒はいったん目を閉じた後、カッと見開き凄い勢いで上昇した。ものすごい勢いで上昇した為、砂埃がすごい。

「どうどう?箒ちゃんが思った以上に動くでしょ?」

「えぇ、まぁ・・・」

日光を反射して赤く光っている紅椿とても綺麗だった。ある程度飛ぶと、今度は武装のテストになった。最初見たときから接近戦用の武装が多いので接近戦を主体とした機体だと思った。これは一夏の白式と似ている。だが実際は、打突にあわせて刃からエネルギー刃を飛ばせたりと中距離の装備でもあったのだった。箒は初めてとは思えない軌道をし、どんどんクリアしていく。

「すげぇ・・・」

隣にいた一夏は箒の動きに目を奪われていた。しかしその先にいた千冬さんの目つきは違った。

「(なんで千冬さんはあんな顔を?アレじゃまるで敵でも見ているみたいじゃないか)」

わからなかったので考えていた時、山田先生が大慌てでこちらにやってきた。手には小型端末が握られている。

「どうした?」

千冬さんが聞くと、山田先生は手に持っていた小型端末を千冬さんに見せた。どんどん千冬さんの表情が険しくなっていく。ある程度やり取りをした後、山田先生はまた大慌てで走り去っていった。

「全員注目!現時点を持ってIS学園教員は特殊任務行動へと移る

！テストは中止、各班ＩＳを片付けて旅館に戻れ！連絡あるまで各自待機していろ！」

突然のこの命令に騒がしくなる女子たち。しかしそれを、千冬さんの声が一喝した。

「とっとと戻れ！以後、許可なく室外へ出た物は我々が身柄を拘束する！」

「「は、はい！！」」

全員があわてて動き出す。

「専用機持ちは全員集合しろ。篠ノ之、お前もだ！」

「はい！」

気合いの入った返事をした箒。ようやく専用機が手に入っていい嬉しいのはわかるが、僕はなぜか言いようのない不安にかられたのだった。

「では、現状を説明する」

あの後旅館に戻った僕らは、千冬さんのミーティングルームにいた。どうやら、アメリカとイスラエルで共同開発していたＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が突然暴走しだしたとの事だった。この事態に訳が分からず呆然とする僕と一夏、反対に代表候補生といわれる彼女たちの顔つきは厳しい物だった。きっとこういう事態に対しての訓練を受けてき

たのだろう。

「その後の衛生による追跡の結果、福音はここから2キロ先の空域を通過する事がわかった。そして学園上層部の命令により、我々がこの事態に対処する事になった。教員は訓練機を使って空域と海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

はい？それって暴走ＩＳを生徒である僕らで止めろってこと！？

「先生！軍からは何もないんですか！？」

たまらず僕はそう言った。いくら専用機持ちとはいえ、こんな事態は僕らの手に余ると考えたからだ。

「残念だが、ない」

千冬さんは苦々しげにそう言った。おかしい、いくらなんでもこんな滅茶苦茶な事態に軍が知らん顔するはずがないのに・・・

「考えていてもすでに命令されている以上覆らん。それでは作戦会議を始める」

そう言って会議始まった。暴走したＩＳの武装は広域殲滅を目的とした特殊射撃型というもので、セシリアと同じくオールレンジ攻撃を行えるらしい。しかも移動速度がかなり速い。下手したら白式と同じくらいだ。

「この機体は現在も超音速で飛行を続けている。よってアプローチは一回きりだろう」

「一回きりのチャンス。という事はやはり一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかないという事ですね」

山田先生の言葉に全員が僕と一夏を見た。

「「え・・・？」」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「大和さん、あなたのビーム兵器で落として下さい」

そう言う鈴とセシリア

「ただ問題は、どうやってそこまで運ぶかって事だよね。大和のストライクはいいとして、一夏の白式もエネルギーは全部攻撃に回さなきゃいけないけどストライクほどの余裕もない・・・」

「しかも目標に追いつける速度が出せるＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちょ、ちょっとまて！俺たちがいくのか！？」

「「「「当然！」」」」

４人の声が見事に重なった。

「織斑と吉良。これは訓練ではない、実戦だ。もしも覚悟がないなら無理強いはしない」

「「・・・・・・」」

僕と一夏は互いに向き合う。でも、ここまで言われたら答えは一つだよね。

「やります。俺がやってみせます」

「僕も、やります」

「よし、それでは作戦の具体的な内容に入る。現在専用機持ちの中で最高速が出せる機体はどれだ？」

そう言ってセシリアが手を挙げる。ちょうど本国であるイギリスから追加装備が送られてきたところだったのだ。

「よし、それではオルコット、お前が・・・」

適任だな。そう言おうとした千冬だが、それは突如現れた人物によって遮られた。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭になナウ・プリンティング！」

「・・・出て行け」

現れたのは束さんだった。それを見た千冬さんは頭を押さえる。山田先生は言われた通り束さんを室外へ出そうとするが、ひょいひょいっとかわされていた。

「紅椿のスペックデータを見て！パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！」

そう言った束さんはいくつかディスプレイをだして説明しだす。

「紅椿の展開装甲を調節すれば・・・ほいほいっと。ほら！これでスピードはバッチリ！」

展開装甲？聞き慣れない言葉に一同首をひねっているとさらに束さんが説明してくれた。

「展開装甲というのはね～この天才の束さんが開発した第４世代型ＩＳの装備なんだよー」

なん・・だと・・？第４世代？確か今は各国の第３世代の１号試験機ができた段階なんだよね？

「ちっちっち、束さんはそんじょそこらの天才じゃないんだよ、ちなみに白式の雪片弐型もこの展開装甲が使われてま～す」

つまり、白式も第４世代型ってことになる。なんだかもうビックリを通り越してなんて言っていいのかわからなくなってきた。

「そして紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に合わせて切り替え可能。これぞ第４世代の目標である即時万能対応機（リアルタイム・マルチロール・アクトレス）ってやつだね。私が早くも作っちゃいました～」

しーんと静まり返る場内。束さんはこれを見て「変なの」とか言っていたが、変なのどころではない。だって、今各国が、様々な努力をして作り上げている第３世代型が無意味だという事になるのだから、こんな馬鹿な話はない。

「それにしてもアレだね～海の上で暴走なんて『白騎士事件』を思い出すね～」

束さんが言った白騎士事件。昔、束さんが作ったＩＳというのは、当初その成果を認められていなかった。「現行の兵器全てを凌駕する」という彼女の言葉は信じられなかったし、信じる訳にもいかなかったのだ。そしてその１ヶ月後、事件は起きた。何者かによりミサイルシステムがハックされ、２３４１発のミサイルが日本に向けて発射された。

誰もが混乱と絶望に陥る中、１人の騎士がそれを救ったのだ。それは白銀のＩＳを纏った女性で、飛んでくるミサイル全てを落としたのだった。彼女の姿からいつしか白騎士と呼ばれ、この事件は白騎士事件として語られる事となったのだった。

それからだ。ＩＳが主流となり、女尊男卑が一気に広まったのは・・・そういえば束さんなら白騎士の正体を知ってるんじゃ・・・？

「あの時はすごい活躍だったねちーちゃん」

「そうだな、白騎士が活躍したな」

・・・まぁ普通に考えたら千冬さんだよね。そういえば束さんは今こうしてここにいるけど、３年前から行方不明だったんだよね。たしか、全世界同時中継生放送インタビューの時に、最後のＩＳのコアを残して失踪なんてテレビでやってたっけ

「話を戻すぞ。束、紅椿の調整にはどのくらいかかるか？」

「７分あれば余裕だね」

そして千冬さんは頷いてこういった。

「では、作戦は織斑、吉良、篠ノ之の3名による目標の追跡、及び撃墜を目的とする。作戦開始は30分後。以上！準備しろ！」

バン！と千冬さんが手を叩いた。そして僕らもISの準備をしていく。そうだ、セシリアのフォローをしてあげないと。今日はセシリアにとっては散々だったろうし・・・

「はぁ・・・作戦からは外されるし、篠ノ之博士には嫌われるし、今日は散々ですわ」

やはり相当落ち込んでいるようだ。

「セシリア」

「大和さん！？どうしてここに？」

「いや、高速戦闘のレクチャーをセシリアにしてもらおうと思ってさ」

向こうから一夏もやってきた。どうやら千冬さんに言われたみたいだ。僕の言葉を聞いたセシリアは顔が明るくなった。良かった、やっぱりセシリアは笑っていた方がいい。

「それに、束さんの事なら気にしないで、ああいう人だから」

「・・・ありがとうございます」

そう言って、明るくなったセシリアは僕たちに高速戦闘のレクチャーをしていく。気づけば僕らの周りにはみんなが集まっていた。みんな、なんだかんだでセシリアの事を心配していたみたいだった。

「（この作戦、なんとしても成功させないとね）」

僕は心の中で固く決意した。

時刻は１１時半。空はこれでもかとばかりに晴れ渡り、陽光が容赦なく降り注いでくる。そんな中僕らは砂浜に立っていた。

「来い、白式」

「行くよ、ストライク」

「行くぞ、紅椿」

全身がぱぁっと光に包まれてＩＳが展開された。さて、ここからは新装備の出番だ。

「装備はＩ．Ｗ．Ｓ．Ｐ．ストライカーをスタンバイ」

これがこの間、僕が発見した新装備である。これはエール、ソード、ランチャーを一つにしたような装備で、エネルギーをかなり要する装備だ。しかし今回の作戦は一撃必殺（ワンアプローチ・ワンダウン）なので問題ないだろうと判断したのだ。

「ほう、それが新しい装備か」

「はい、これはＩ．Ｗ．Ｓ．Ｐ．ストライカーといって、大火力を持った武装です」

肩のレールガンに単装砲、腰部の二本の対艦刀、ビームライフルに、機関銃が乗ったビームシールド。その姿はまさしく火薬庫のようだった。だが、大量のエネルギーを使う為に稼働時間が短いという欠点もあった。

隣では、一夏と箒が話している。だが、箒は興奮しているらしく一夏がどうにかしてそれを落ち着かせようとしているのだが、一向に落ち着く気配を見せない。そうこうしている間に作戦の開始時刻が来た。とそこへ、千冬さんからプライベート・チャネルで通信が入ってきた。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かをし損じるやもしれん。いざという時はお前らでサポートしてやれ』

「「わかりました。ちゃんと意識しておきます」」

『頼むぞ』

それだけ言って千冬さんは通信を切った。それから再びオーブンに切り替わり、号令をかけた。

「では、始め！」

「織斑一夏、白式、出るぜ！」

「篠ノ之箒、紅椿、出る！」

「吉良大和、ストライク、行きます！」

僕らは空へと上がった。驚いたのは紅椿のスピードだ。一夏という荷物を乗せた状態にも関わらず、そのスピードは僕のストライクにまったく引けを取らない。そして僕らはそのまま目標高度である５００メートルまで上昇した。

「暫時衛生リンク確立、情報照合完了・・・目標の現在地を確認。一夏、吉良、一気に行くぞ！」

箒はそう言うなり紅椿をさらに加速させる。紅椿は展開装甲の名前にふさわしく、脚部及び背部の装甲がばかりと開いてそこから強力なエネルギーを放出した。

「見えたぞ！一夏、大和！」

「「！！」」

ハイパーセンサーの視覚情報が自分の感覚のように目標を映し出す。銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）はその名にふさわしく全身が銀色をしている。そして何より異質なのが、頭部から生えた一対の巨大な翼だ。それは資料によると、大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システムだそうだ。

相手が見えた事によって、一夏は雪片弐型を。僕は腰部にあった対艦刀を一本左手に構えた。

「加速するぞ！目標に接触するのは１０秒後だ！」

スラスターと展開装甲の出力をさらにあげる箒。僕もスラスターの出力を最大まであげて２人の横を飛ぶ

8・9・・・10!!

「うおおおお!」

ヴンっと一夏の雪片弐型が零落白夜を発動。それと同時に瞬時加速（イグニッション・ブースト）を行って間合いを一気に詰める。

「（行ける!）」

一夏の剣が福音に触れる、その瞬間

「なっ!?」

銀の福音は最高速を維持したまま反転し、一夏から距離をとった。

「一夏!!」

一夏の攻撃が避けられたのと同時に僕はビームライフルを撃った。しかし福音は少し体を動かしただけで簡単に避けられてしまった。ならばと続けて今度はレールガンと単装砲を乱れ撃つ。

「くっ・・・・・・!あの翼が急加速をしているのか!?」

高出力のマルチスラスターというのは他にも多く存在する。けれどここまで精密な急加速は見た事がない。僕の砲撃はすべて避けられてしまっていた。

「箒!援護を頼む!」

「任せろ一夏!」

吉良の砲撃が止んだところで再び一夏の零落白夜による攻撃。さらにライフルを腰にマウントした吉良も対艦刀を両手に持ち2対1の構図になるが、ひらりひらりと紙一重の回避をされてしまう。見事なまでに翻弄された僕らは、一夏は零落白夜の残り時間が。僕は残存エネルギーがイエローになっていた。

焦った僕らはつい大振りの攻撃をしてしまった。しまった!今度はこっちに隙が!そして、その隙を見逃す福音ではなかった。

銀色の翼、スラスターでもあるそれの装甲の一部がまるで翼を広げるかのように開く

「(しまった!これは・・・砲口だ!)」

一斉に開いた砲口は僕たちの方を向いた。次の瞬間、幾重もの光の弾丸が打ち出された。

「くそっ!!」

あわてて僕はコンバインシールドを構える。だが、シールドを持っていない一夏たちは避けるのに必死だった。

「ぐぅ!」

ついに一夏に砲弾が当たった。それは羽のような形をした高密度に圧縮されたエネルギーで、それがＩＳのアーマーに突き刺さったかと思うと、次の瞬間には一斉に爆ぜた。爆発するエネルギー弾。それが福音の主装備らしい。一つ一つの威力はそんなに高くないが問題は・・・

「なんて連射速度だ！」

いくら威力は高くはないとはいえ、爆発によるダメージを連続でくらっていたらこのシールドでも限界がある。

「２人とも！私が動きを止める！」

「「わかった！」」

言うなり、箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り返す。しかも腕部の展開装甲が開き、そこから発生したエネルギー刃が攻撃に合わせて自動で射出、福音を狙う。

紅椿の機動力と、展開装甲による自在の方向転換、急加速を使って間合いを詰めていく。さすがの福音もこの攻撃はキツかったのかだんだんと防御を使い始めた。

『Ｌａ・・・・・・♪」

そう思ったのもつかの間、甲高いマシンボイスが響き、その刹那、ウイングスラスターは全砲門を開いた。その数、３６。しかも全方位に向けての一斉射撃。

「マズイ！」

箒に浴びせられる弾丸。僕は牽制の為に持てる全ての武装を撃つ。レールガンに単装砲、マウントしていたビームライフル、そしてシールドにマウントされていたガトリングガン。

「押し切る！」

箒が光弾を紙一重で避けながら迫撃する。そしてついに隙が生まれた。残念ながら僕はもうエネルギーがほとんどない。だから一夏の零落白夜に賭けていた・・・が

「「一夏！？」

「うおおおお！」

突如一夏は福音とは反対側の直下海面へと全力で向かった。イグニッション・ブーストと零落白夜。その両方を使って一発の光弾をかき消す。

「なにをしている！？せっかくのチャンスに！」

「船がいるんだ！海上は先生が封鎖したのに・・・密漁船か！」

最悪だ。なんてタイミングで現れるんだ！

「馬鹿者！犯罪者などかばって・・・そんな奴らは！」

「箒！」

一夏が怒鳴った。

「箒、そんな、寂しい事言うなよ・・・力を手にしたら、弱いやつの事が見えなくなるなんて・・・どうしたんだ。らしくない、らしくないぜ、箒」

「わ、私、は・・・」

一夏の言葉に明らかに動揺して、それを隠すように顔を覆う。その時に落とした刀が粒子となって消えたのを見て僕はぎくりとした

「今のはリミットダウンだ！・・・まずい！！」

具現化維持限界、つまりエネルギー切れ。エネルギー切れのＩＳアーマーは恐ろしくもろい。それは第４世代とはいえ変わらないはず。しかも、箒は一夏の言葉に動揺し、これが『実戦』である事を忘れている。実戦で動きを止めるという事は的になるってことだ。そしてそれを福音が見逃すはずがない！

「箒ぃぃぃぃ！！」

僕は全ての武装を捨てて両手にシールドを呼び出す。一夏も箒のもとへ行っているが、箒に近い僕の方が早い。

「大和！？」

間一髪、僕は間には入って福音の弾丸の雨をシールドで受け止める。しかしＩ．Ｗ．Ｓ．Ｐ．を選択したツケがここで来た。

ピー！！

エネルギーアラートがなっていた。見ればフェイズシフトダウンの限界領域までエネルギーが減っていた。ま、まずい！

ヴゥゥゥン！フェイズシフトがダウンした事により、Ｉ．Ｗ．Ｓ．Ｐ．は外れ、ディアクティブモードのストライクだけになった。さ

らに悪い事に、シールドも限界に達しようとしていた。

「楯が！持たない！？」

ミシミシと嫌な音を立てているシールド。そして・・・バリン！！
ついにシールドがくだけ散ってしまった。後は僕のこのＩＳだけだ。

「ぐぁぁあ！！」

直後に僕に降りしきる弾丸。気が狂いそうなほどの激痛が僕を襲う。
そして僕はたまらず海へと落ちていく。

「大和！くそ！」

落ちていく吉良をみて一夏は歯ぎしりした。どうしてもっと早くケリをつけていなかったんだと自分を責める。しかし今はそうも言ってられない。箒の楯になった吉良が落ちた事により、再び箒は無防備状態になった。そして再び降り注ぐ弾丸。

「頼む！頼む、白式！間に合ってくれ！」

スローモーションのように弾丸が降りしきる中、一夏は箒を抱きしめた。その瞬間、あの数えきれないほどの爆発光弾が今度は一夏に降り注いだ。

「ぐぅぁあああああ！」

気が狂いそうなほどの激痛の中で、一夏は箒の顔を一度だけ見た。

「（無事・・・か。よかった・・・はは、何を泣きそうな顔をして

るんだか。そういえばリボン・・・焼き切れちまっているな・・・
ふーん、髪下ろしたのも悪くねぇじゃん）」

「一夏！大和！」

「う・・・ぁ・・・」

ぐらりと世界が傾く。いや、傾いているのは俺たちか・・・

海へと真っ逆さまに落ちる2人。そんな中、一夏は最後の力で箒の頭を守るように抱きしめる。３つの大きな水音と全身を伝搬する衝撃。吉良と一夏はそのまま気を失った。

第１８話：その境界線に断ち（後書き）

え～１日遅れたお詫びに２話更新にしました。この後で第１９話：舞い降りる剣です。よろしければそちらも読んで下さい。

第１９話：舞い降りる剣（前書き）

話の後半は、ミーティアを再生しながらお楽しみください。

第１９話：舞い降りる剣

「・・・・・・」

旅館の一室。壁の時計は１６時前をさしていた。ベッドで横たわる一夏と吉良はもう3時間以上も目覚めないままだった。その傍らに控えている箒はもうずっとこうしてうなだれている。リボンを失って垂れた髪が、まるで今の気持ちを表しているかのようだった。

「（私のせいだ・・・私のせいで、２人は・・・）」

箒は、先ほどまで幼き日の一夏との思いでを思い出していた。あの時の一夏は笑っていた。しかし、今目の前に横たわる彼は力なくベッドに寝ているだけだった。２人とも、ＩＳの防御機能を貫通して届いた熱波に焼かれ、至る所に包帯が巻かれていた。

その痛々しい様子を見て箒はぎゅうっとスカートを握りしめる。

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば再度招集する。それまで各自は現状待機だ』

これは海から引き上げられた箒に千冬からかけられた言葉だ。責められる訳でもなく無反応。むしろ思いっきり怒ってくれた方がマシだ、と箒は思った。

私は力を手にするとそれに流されてしまう。それを使いたくてしょうがなく、わき起こる暴力への衝動を抑えられない。だから自分を律する『枷』として剣術を習ってきた。

「それなのにこのざま・・・か」

箒は自嘲気味に呟いた。自分の抑止力としての精神はまるで薄い氷の上に立っているかのごとく薄い物だと知った。

「（私は、もうＩＳには・・・）」

箒が一つの決心をつけようとした時に突然扉が開いた。

「あーあー、わかりやすいわねぇ」

バン！と勢い良く開けられた扉の先に立っていたのは鈴だった。

「あんたのせいで２人が怪我をした。だから落ち込んでますってポーズ？・・・ふっざけんじゃないわよ！！」

鈴の怒りが爆発した。

「やるべき事が他にもあるでしょうが！今！戦わなくてどうするのよ！」

「私は・・・もうＩＳには・・・乗らない」

その言葉を聞いて怒りが頂点に達した鈴は、箒の胸ぐらをつかんで頬を平手打ちした。

「甘ったれてんじゃないわよ！！専用機持ちはね、そんな軽い覚悟でなるものでも、やめるものでもないの！それともなに？あんたは戦える時に戦わない臆病者なのね？」

「だがどうしろと!?もう敵の居場所もわからない!戦えるなら私だって戦う!」

やっと自分の意志で立ち上がった箒を見て鈴はふぅっとため息をついた。

「やっとやる気になったわね。あー、めんどくさかった。ラウラ、場所の特定は?」

「できたぞ、ここから３０キロ離れた沖合上空だ」

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「わたくしの準備もオーケーでしてよ」

「僕もリヴァイブの追加パッケージのインストールは完了してるからいつでも行けるよ」

「さて、あたしの甲龍もオーケーだし、あとは・・・」

そう言ってみんなが箒の方を向いた。

「私も戦う。戦って・・・勝つ!今度こそ負けはしない!」

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に落とすわ!」

「ああ!」

箒のその表情にもはや後悔はなく、硬い決意の表情をしていた。

ｓｉｄｅ一夏
ざぁ・・・ざぁん・・・。

（ここは・・・？）」

遠くから聞こえる波の音。俺はその音を目指してフラフラと砂浜の上を歩いていた。ふと、俺を見てみるとなぜか学園の制服を着ていて、素足のまま歩いている事に気づいた。手にはいつ脱いだのかわからないが、靴があった。

「ー♪ー♪」

どこからか歌声がする。それはとても綺麗で、澄んだ声だった。何だか無性に気になって俺は歩く。歩いた先にいたのは・・・

そこには1人の少女がいた。波打ち際、少女は踊るように歌い、謡うように躍る。俺は近づこうとは思わず、近く似合った流木に腰を下ろした。時折吹く風が心地よく、その少女の歌はどこまでも風に乗って、遠くまで響いていった。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「・・・・・・」

海上２００メートル。そこで静止していた銀の福音はまるで胎児のように膝を抱えてうずくまっていた

「・・・・・？」

ふいに福音が顔を上げる。次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃し、大爆発を起こした。

「初弾命中！続いて時弾装填！」

５キロ離れた場所に浮かんでいるＩＳ、８０口径レールカノン＜ブリッツ＞を装備した『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは福音が迫るよりも早く時弾を発射した。これが砲戦パッケージ『パンツァー・カノニーア』を装備したラウラのＩＳだった。

「ちぃ！予想よりも早い！」

初弾こそ命中させたラウラだったが、３発目からは福音も高機動を駆使して避けていった。対するラウラは砲戦仕様という重装備のため機動力はかなり落ちていた。ラウラに福音の手が迫る。しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた。

「セシリア！」

伸ばした腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる。青一色の機体、ブルー・ティアーズによるステルスモードからの強襲だった。彼女の機体はいつものビットはスカート状に腰部に接続され、スラスターとして機能していた。そして手にしている大型ＢＴレーザーライフル＜スターダスト・シューター＞により機動力に回している分の火力を補っていた。

さらに福音の背後からも別の機体が襲ってきた。

「遅いよ！」

それは先刻、セシリアの突撃と一緒に降りてきたシャルロットだった。シャルロットは２丁のショットガンを使って福音にダメージを

与えていく。福音も反撃開始と言わんばかりに銀の鐘（シルバー・ベル）をシャルロットに放った。

「おっと、悪いけどこのガーデン・カーテンはそう簡単にやられないよ！」

リヴァイブ専用防御パッケージであるそれは、実体シールドとエネルギーシールド両方によって福音の攻撃を防いだ。さらに、シャルロットは防御の合間にも、得意の高速切替（ラピッド・スイッチ）によって確実にダメージを与えていく。

『優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

状況不利と判断した福音は逃走へと切り替えようとした。

「させるかぁ！」

次の瞬間海面がふくれあがり、爆ぜた。海面から上がってきたのは、真紅の機体紅椿と、その背中に乗った甲龍だった。

「離脱される前にたたき落とす！」

福音へと突撃する紅椿。さらに鈴が機能増幅パッケージ（崩山）を起動する。そして計４門の砲門が火を噴いた。

「くらえ！」

肉薄していた紅椿が緊急離脱し、その後ろから炎を纏った衝撃砲による弾丸が降り注ぐ。

「やりましたの！？」

「まだよ！」

鈴の攻撃を受けてなお、福音の機能は停止してなかった。

『銀の鐘最大稼働（シルバー・ベル）・・・開始』

両腕を左右いっぱいに広げ、さらに翼自身も外へ広げられ、まばゆい無数の光が発射された。エネルギー弾の一斉射撃が始まったのだ。

まずい！そう思ったシャルロットはとっさに箒の前にガーデン・カーテンを展開して守った。今の箒は前回の失敗を踏まえ、防御の時に展開装甲を発動しないようにしているためにシャルロットが防御にまわったのだった。しかし、攻撃している間は福音の動きが止まる。そしてそれを見逃す鈴と箒ではない。

「もらったぁあああ！！」

鈴が双天牙月を振り下ろし、福音の片翼を切り落とした。さらに衝撃砲でもってダメージを与えていく。

「どうよ！！・・・・・ぐぅ！」

片翼を切り落とす事には成功したものの、おかまい無しに突っ込んできた福音の蹴りが鈴に命中した。その蹴りで鈴の腕部アーマーはくだけ散って海中に落ちていった。

「鈴！おのれ！」

箒は刀を両手にもって福音へと切り掛かる。箒に向けても片翼からの銀の鐘が降り注ぐ。箒はそれを反転して避けながら

「たぁあああああ！」

かかと落しのような格好で残りの翼を切り落としたのだった。

「はぁ、は、はぁ・・・」

「無事か！？」

珍しく慌てたラウラの声を聞きながら、箒は乱れた呼吸を整えていく。

「大丈夫だ、問題ない。それよりも・・・福音は？」

誰かが私たちの勝ちだ！と言おうとした瞬間、海中からまばゆい光が発生した。

「なんだ！？何が起きている！」

箒が怒鳴る。

「これは・・・第2形態移行！（セカンドシフト）だ」

「そんな・・・」

そんな箒に答えるラウラと、呆然として声が出ないセシリア。ここでセカンドシフトするとは誰も予想できなかった。

ｓｉｄｅ大和

今、僕は草原の上にいる。どうしてここにいるのかはわからないけど、吹いている風が心地いい。季節は・・・春なのだろうか？

「静かな～♪この夜に～♪あなたを～♪まあってるの～♪」

ふと歌が聞こえた。それは、とても優しい歌だった。僕はその声がする方へと近づいていった。そこにいたのは僕と年は変わらないくらいの女の子だった。僕はもっと彼女の歌が聞きたかったので、近くにあった石へと腰を下ろした。

「（なんだろう・・・どこかで聞いた事があるような、懐かしい歌だ）」

僕は懐かしさを抱きながらその歌に聞き入っていた。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

セカンドシフトした福音は圧倒的だった。強化された羽から出される光弾は簡単にラウラをボロボロにし、海に落ちた。

「よくもラウラを！」

シャルロットは怒りに任せてショットガンのトリガーを引いた。それは福音には当たらず、逆にシャルロットは福音によって吹き飛ばされた。見てみると、胸部から、腹部から、背部から、装甲が卵の殻のひびが割れるように割れ、小型のエネルギー翼が生えてきていた。それによってシャルロットは吹き飛ばされたのだった。

「なんなんですの！？この性能・・・軍用とはいえあまりにも以上な・・・！」

「私の仲間をよくも！」

急加速により箒は福音に接近した。そして、福音に向かって斬撃を浴びせ続ける。展開装甲によるアクロバットで敵機の攻撃を回避し、その動きのまま攻撃に転ずる。そして、徐々に出力をあげていく紅椿に福音が押され始める。

「いける！これなら！」

必殺の確信を持って雨突の打突をはなつ。しかし

キュゥゥゥン・・・

「な！またエネルギー切れだと！？」

その隙を見逃さず福音は箒の首を捕まえた。そして、ゆっくりと福音の翼が箒を包み込んでいった。

「箒さん！」

セシリアが砲撃しようとするが、残りの翼からの攻撃によって阻まれる。もう、手はなかった。

「（すまない、一夏・・・）」

箒はやられる事を覚悟をした。

ｓｉｄｅ　一夏

俺は波の音を聞きながら、飽きもせずその女の子を見ていた。とこ

ろが、ふと気がつくと歌は終わっていた。不思議に思った俺は彼女の隣へといく。

「どうかしたのか？」

そう問いかけても少女はじぃっと空を見上げたまま動かない。俺も少女に習って上を見上げる。

「呼んでる・・・いかなきゃ」

呼んでる？誰を？不思議に思った俺が少女に視線を戻すと、もうそこに彼女の姿はなかった。俺は仕方なく戻ろうとした。その時、背後から声をかけられた。

「力を欲しますか？」

振り返ってみると、騎士甲冑を身にまとった女性が、馬に乗ってこちらを見ていた。

「力を欲しますか？・・・欲するなら、なんのために？」

力を欲する理由？難しくて良くわかんないけど、とにかくあれだな。

「友達を・・・いや、仲間を守る為、かな？」

「仲間を・・・」

「そう、俺は世界を救う為に力を欲するとかそんな大層な事は言わない。ただ、自分の手の届く範囲にいる俺の大切な仲間くらいは守りたいんだ」

俺は今の自分の気持ちをストレートに表した。自分でも「こう思っていたのか」と思えるくらいストンと何かが落ちてくるようだった。

「なら、行かないとね」

振り向くとさっきの少女が立っていた。彼女は俺の手を取ってこう言った。

「あなたの仲間が待っているから・・・いってらっしゃい」

「ああ」

俺は一言返事をした。とたんに空が、世界がまばゆい光に包まれる。俺はなぜか『夢の終わり』なんて言葉が頭に浮かんだ。そういえば、あの騎士の女性は誰かに似ていたな・・・それに、彼女が乗っていた馬。馬にあんな物ついてたっけ?そう思いながら俺は意識が覚醒していくのを感じた。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「ぐ・・・う・・・」

ギリギリと締め上げられ、苦しそうな声が箒の口から漏れる。さらに、紅椿を包む翼の光が徐々に強くなってきていた。箒は自分に砲弾が降り注ぐカウントダウンが始まったのだと思った。

「一夏・・・」

箒の頭は一夏の事でいっぱいだった。会いたい、会いたい、会いたい。今死んでしまったら、あの優しい微笑みに二度と会えない、そ

んな気がした。それは死よりも恐ろしい事のように今の箒には思えた。さらに輝きを増す翼を見て、箒は目をつむり、覚悟した。

キィィィィン！

突如福音が手を離した。驚いた箒だがすぐさま距離をとる。

「何が！」

箒は音のする方を見た。そして、気づけば涙が溢れ出ていた。今もっとも会いたい人物、織斑一夏がそこにいた。

「俺の仲間は・・・誰1人としてやらせはしねぇ！」

第2形態移行をした白式＜雪羅＞が舞い降りた。

ｓｉｄｅ　大和

あれから僕は彼女の歌を聴いていた。そして彼女の歌は終わり、僕は彼女に近づいた。

「あら?あらあら?まぁ、こんなところまでようこそ」

僕の姿を見た彼女はこっちが恐縮してしまうくらい丁寧な挨拶をした。そして、僕らは少しの間話し合った。

「さて、僕は・・・行かないと」

「どちらへ行かれれるのですか?」

「一夏たちのところへ」

「あなた1人が行っても勝てるとは限りませんわ」

「・・・かもしれない。でも、何もできないからって何もしなかったら、きっと僕は後悔する」

「では、あなたに問います。あなたが信じて戦うものなんですか？織斑先生の命令ですか？それとも名誉の為ですか？」

僕が信じて戦うもの・・・それは

「僕は、大切な、信じる仲間を守る為に、戦う。僕はちっぽけな1人の人間だ。やれる事も限られている。だけど、僕の手の届く範囲の人くらいは、守りたい。それに、理不尽な暴力が多いこの女尊男卑の中で、何とどう戦わなくちゃいけないのか、少しわかった気がするから」

「・・・わかりました。でしたら、これをあなたに」

そう言って彼女は手にしていたペンダントの青い翼を具現化し、突如ＩＳが出現した。これは!?

「これは、ＺＧＭＦ　Ｘ－１０Ａフリーダムです。今のあなたには必要な力と思いましたので、この力を授けます。想いだけでも、力だけでもダメなのです。あなたの行きたいと望む場所へ、守りたいと思うものへ、この力は不要ですか？」

彼女の言葉が僕に響く。

「想いだけでも、力だけでも・・・ありがとう。君は・・・だれ？」

僕は彼女の顔を見つめた。

「わたくしは、ラクス・クラインですわ。吉良大和」

「ありがとう。僕は行くよ。」

「はい、わたくしも歌いますから・・・平和の歌を。そして、わたくしの想いと力は、あなたとともに・・・では、いってらっしゃいませ」

そうして世界が白くなっていく。僕は意識が覚醒していくのを感じた。

「ここは?」

目が覚めると旅館のベッドの上だった。隣を見てみると誰かが寝ていた形跡がある。きっと一夏が寝ていたのだろう。そして今はいない事を考えると、すでに一夏は戦いの場へと行ったと推測できた。

「僕も、行かないと」

ブレスレットからペンダントに変わった僕の新しいＩＳを手に握りしめながら僕は外へと出た。

ざぁ・・・ざぁぁん・・・波の音を聞きながら僕は砂浜に立っていた。

「やはり、行くのか?」

ふいに後ろから声をかけられた。振り返ってみるとそこにいたのは千冬さんだった。

「はい、僕は約束しましたから。僕の信じるものの為に、守りたいと望むものに。想いだけでも、力だけでも。だから僕は行きます」

僕は千冬さんを真正面から見つめた。すると千冬さんは大きくため息をはいた。

「やれやれ、そんな目をされるとどうにも弱いな私は。・・・行ってこい。大和、あいつらを頼んだぞ」

千冬さんのその言葉を聞き、僕はホッとした。

「あぁそれと、私は大和には許可を出したが、あいつらは命令違反だ。その事をあいつらに言っておけよ」

「わ、わかりました」

思わず僕は吹き出しそうになるのをこらえて返事をした。一夏たちは帰ってきてからも地獄が決定した。

「では、行ってきます。・・・フリーダム」

僕がそう言うと、ぱぁっと光に包まれて青い翼を持った天使が現れる。

「こ、これは!?」

千冬さんがビックリしている。とりあえず設定をしよう。ディスプ

レイにはＯＳが表示される

Ｇｅｎｅｒａｔｉｏｎ Ｕｎｓｕｂｄｕｅｄ Ｎｕｃｌｅａｒ Ｄｒｉｖｅ／Ａｓｓａｕｌｔ Ｍｏｄｕｌｅ Ｃｏｍｐｌｅｘ

「ＣＰＧ設定完了。ニューラルリンケージ、イオン濃度正常、メタ運動野パラメータ更新、原子炉臨界、パワーフロー正常。全システム オールグリーン、フリーダム、システム起動。すごい、ストライクの４倍以上のパワーがある」

設定は完了した。この機体に託された想い、決して無駄にはしない。

「吉良大和、フリーダム、行きます！」

青い翼を持った天使は、大空へと舞い上がった。

ｓｉｄｅ ｅｎｄ

戻ってきて現在。箒は一夏が駆けつけてくれた事に驚いていた。

「一夏！一夏なのだな！怪我は、大丈夫なのか！？」

そんな箒の心配を一夏は満面の笑みでもって返す。

「おう、もう大丈夫だ。待たせて悪かった・・・て、なんだよ泣いてるのか？」

「な、泣いてなどいない！」

ぐしっと目を拭う箒。そんな箒を、一夏は微笑みながら頭をなでた。

「ん、まぁちょうど良かったかな。ほら、これ」

そう言って一夏が差し出したのは

「リボン？」

「そう、誕生日おめでとうな」

一夏に言われ、ようやく今日が自分の誕生日であった事に気づいた箒。

「それ、せっかくだし使えよ。じゃ、行ってくる」

そう言って一夏は福音と対峙する

「さぁて、再戦といきますか！」

新たに手にした新兵器＜雪羅＞を構えながら一夏は雪片弐型も構えた。福音は一夏が現れた事によりターゲットを一夏に変更した。そして、福音によるエネルギー翼と腹部から生えた翼からの一斉掃射が始まった。だが・・・

「そう何度もくらうかよ！」

『雪羅、シールドモードへ切り替え。相殺防御開始』

キンッと音を立てて雪羅が変形し光の膜が広がり、弾雨を消した。これが、雪羅の零落白夜によるシールドだった。エネルギー消費は激しいが、完全に無効化できるのでこちらがかなり有利になる。

「うおおおっ！」

強化され、４機の大型ウイングスラスターが備わった白式・雪羅は２段階瞬時加速（ダブル・イグニッション）を可能にしている。そしてそれによって複雑な機動をする福音を捉える事ができた。

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

福音の機会音声がそう告げると、それまでしならせていた福音の翼が自身へと巻き付き、球場になりエネルギーの繭に包まれたかのようになった。まずい！そう思った時にはすでに遅くて、翼が回転しながら一斉に開いて全方位に嵐のようなエネルギー弾を降らせた。

「セシリアー！！」

それまで攻撃の対象になっていなかったセシリアにもその弾雨は降り注ごうとしていた。

「・・・・！！」

完全にふいをつかれたセシリアは自分に弾雨が降り注ぐ事を覚悟し、目を閉じた。が、いくら待っても弾が当たった衝撃が来ない。おそるおそる目を開けてみるとそこには

「こちら吉良大和！僕も援護するよ！」

白と紺と青のトリコロールカラーにビームライフルと楯。背中に１０枚の翼を持った天使が舞い降りたった。

「や、大和さん?」

「大和だよ!」

一夏に続いて現れた吉良にみんなは驚いた。それと同時に嬉しかった。また、みんながそろった。

「一夏!僕が弾雨を抑えるから福音を頼む!」

そう言った吉良の頭の中で何かが弾けた感じがした。目からはハイライトが消え、頭の中がクリアになり、思考が冴え渡っていくような感じがした。この感覚、どこかで・・・と思ったが今はそれどころではなかったので考えるのをやめた。

「わかった!」

そう言って一夏は福音へと突っ込んだ。

「(私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい)」

一夏が戦っている様子を見て箒は強く願った。そして、その願いに応えるかのように、紅椿の展開装甲から黄金の粒子が溢れ出す。

「こ、これは!?」

ハイパーセンサーからの情報で機体のエネルギーが急激に回復していくのがわかった。そしてディスプレイには『絢爛舞踏』発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築・・・完了。と表示されていた。これが紅椿のワンオフ・アビリティーだった。

「まだ、戦えるのだな・・・ならば、行くぞ！紅椿！」

一夏から渡されたリボンで髪を縛り、赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は夕暮れの空を裂くように駆けた。

「ぜらぁああ！」

零落白夜の光刃がエネルギー翼を断つ。しかし、一度に両方を切る事はできず回避され、そうしている間に翼が再構築されてこちらへと強力無比な連続射撃をされてしまう。

「大和！！」

「ターゲット確認、マルチロック・・・いっけぇ！」

フリーダムの５個の砲門からビームと収束ビーム、レールガンが飛び出し次々と弾雨を撃ち落としていく。しかもかなり速いスピードで連射が可能なのでそのほとんどを撃ち落とす事ができた。

しかし一夏の白式のエネルギーも残量が２０％と危険域に入っていた。

「このままじゃ！」

じわじわと稼働限界時間が近づき一夏を焦らせた。

「一夏！」

そんなときに箒が駆けつけた。驚いた事に紅椿のダメージが回復している！

「箒！？お前、ダメージは・・・」

「私は大丈夫だ！それよりもこれを受け取れ！」

そう言って白式に手を触れた紅椿。その瞬間、全身に電撃のような衝撃が走り、視界が大きく揺れた。

「な、何だ？・・・て、エネルギーが回復！？これは！？」

「今は考えるな！行くぞ！」

「お、おう！」

箒の後に一夏も続いていく。一夏は雪片弐型のエネルギー刃を最大出力へと高める。巨大なエネルギー刃を一夏は両手で支え、振り下ろした。

「おぉおお！！」

福音は一夏の縦切りを回避しそのままこちらへ砲門を向けた。かかった！

「箒！」

「任せろ！」

一夏に向けられた翼を背後から一刀のもとに切り捨てる。

「逃がすかぁ！」

さらに脚部の展開装甲を開放し、急加速の勢いを乗せた回し蹴りが福音の本体に入った。予想外の攻撃に大きく姿勢を崩した福音を一夏は下から上への返す刃で切り落とす。

そして最後の一撃を放とうとした時、福音は体から生えた翼全てで一斉射撃をしてきた。だが、ここまで来たら引くわけにはいかない！一夏は全身にエネルギー弾を浴びながら福音へと突っ込む

「切り捨て・・・ごめぇぇぇぇん！！」

そのまま一夏は福音の胴体へと零落白夜の刃を突き立てた。

「おぉおおおお！！」

福音は最後の抵抗に一夏の首へと手を伸ばす。その指先が喉笛に食い込んだところで、銀色のＩＳはやっと動きが停止した。

「はぁ、はぁ、はぁ」

アーマーを失い、スーツだけの状態になった操縦者が落ちていく。危ない！

「・・・ったく、ツメが甘いのよ。ツメが」

ようやくダメージから回復した鈴が海面スレスレでキャッチした。同じくシャルロットとラウラも、無傷とは言えないが無事なようだった。

「終わったな」

「あぁ、やっと、な」

上空では白式と紅椿、それにフリーダムが夕闇の朱色に優しく包まれていた。

「一夏！箒！」

「大和！」

一夏たちのもとに大和をはじめとしたみんなが集まってくる。

「お疲れさま、とにかくその人を一度旅館まで運ぼうか」

「大和もいいタイミングで登場してくれるじゃないの！まるで降り立つ天使の様だったわ！」

鈴がそんな事を言う。しかし鈴が天使なんて言葉、似合わないなぁ。そんな事を思っていたら鈴に睨まれた。恐るべし・・・

「あ、そうだみんな。戻ったら千冬さんがお説教と懲罰用のメニューを用意して待ってるよ。命令違反の罰だって」

「げぇ！そんな・・・大和は？」

「残念、僕はちゃんと千冬さんから許可をもらったから」

一夏たちはそんなぁとか言いながら僕を恨みがましい目で見てくる。

でも、命令違反は命令違反だから仕方ないよね。

「それにしても、大和のストライクも第2形態移行したんだね。なんて名前？」

シャルロットが聞いてくる。

「あぁ、これはフリーダムって名前だよ」

「フリーダム・・・日本語で自由か。なんか意味深だね」

シャルロットのつぶやきは聞こえなかった。

そんなこんなであと少しで旅館である。もうすでに視界には建物が見えてきていた。とその時ロックオンアラートがなった。

ー警告、ロックされていますー

「どこから！？」

あわてて僕が振り向いたとき、一筋の光が直進してきた。慌てて僕はシールドを構えた。光はシールドに当たって消えた。けど、この粒子は・・・ビーム兵器！？

「大和さん！」

セシリアがこちらへ来ようとする。しかし、さっきの戦いで消耗している彼女たちに戦いはできない！

「来るな！今は早くその人を連れて旅館へ行け！」

そうこうしているうちに敵が見えてきた。敵は・・・3体!?まずい、数の上で圧倒的不利だ!

「いいから行け!すぐに千冬さんに知らせるんだ!」

「セシリア、行こう!」

「シャルロットさん!?大和さんを見捨てるんですの!?」

「そうじゃない!ボロボロの僕らがここにいても足手まといにしかならないんだ!なら、今できる事をやらなきゃ!」

シャルロットにそう言われハッとしたセシリアは悔しそうに鈴やラウラと一緒に戻っていく。

「一夏たちも戻って!」

「な!?俺はまだ戦えるぞ!」

「私もだ!」

僕の言葉に抗議する一夏と箒。でも、ダメだ!僕の考えている通りならこいつらと戦ってはダメだ!

「おそらく一夏たちの装備じゃ相手にならない!今は先生たちの応援を頼む!」

尋常じゃない吉良の様子を見てついに箒は決断する。

「行くぞ一夏！そして1秒でも早く応援を呼ぶんだ！」

箒の言葉になんとか頷いて戻っていく一夏たち。実際、先ほどの戦闘で2人のエネルギーもヤバかったのだが。

「行ったみたいだ。良かった」

そうして僕は目の前の3体のＩＳを睨みつけた。

「まさか、この世界にもこれが出てくるなんて・・・いや、きっとフリーダムが出てきた時点で考えておくべきだったんだ」

緑の装甲に、大量のビーム兵器を持つ機体
同じく緑の装甲に、死神のような鎌を持った機体
黒の装甲に、左手の鉄球が目を引く機体

「カラミティ、フォビドゥン、レイダーか・・・厄介な相手だ」

それぞれ、災厄、禁断、襲撃者の名を冠するガンダムが目の前にいた。

第１９話：舞い降りる剣（後書き）

だっはぁ！１日２話更新は疲れます。

やっと原作三巻の内容までほぼ終わりました。構想上、ある程度話が進みフリーダムが出てこないとオリジナルに入れないので、特に前話は原作とほとんど変わらずになんじゃこりゃ！？と思った方もいるかもしれませんが、これからはオリジナルの展開になると思います（それでも原作準拠ですが・・・）

それではまた次回、第２０話：悪の３兵器でお会いしましょう！

ではまた！

第２０話：悪の３兵器（前書き）

小説ってただ自分の書きたい事だけ書けばいいわけじゃないから難しい・・・

どうやったら皆さんに楽しく読んでもらえるか、本当に難しいですね

第２０話：悪の３兵器

～ハワイ沖～

時間は一夏たちが福音の暴走を止める任務を受けた時に戻る。ここはハワイ沖で稼働実験をしていた銀の福音、その監視をしていたアメリカ・イスラエル合同基地から数十キロ離れた海の上である。そこには１隻の空母があった。

「銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）が暴走した、ですって？」

その空母の中にいた１人の男が向かいに座っていた男に問うた。

「はい、今から２時間ほど前に銀の福音がアメリカ・イスラエルの監視下から離れて暴走した、との情報が入りました。さらに、ＩＳ学園に救援要請を打診したようです」

その男の返事を聞いて、男は笑い出した。

「ハーッハッハッハ！これは傑作です！あれだけの巨額を投じたＩＳが暴走！？ククッ、やはり女どもでは中途半端なものしか作れないのですよ。だが、これはチャンスです。ＩＳは言うなれば技術の固まり、私の知らない技術を持っている可能性が高い。・・・欲しいですねぇ」

そう言って男は立ち上がった。

「ま！まさか、アレを出すおつもりで！？」

「そうさ、今日は元々実験する予定だったんだ。それに、今出さな

くていつ出すと言うんだ?目の前にＩＳが転がっているんだ。これからの私たちの戦力にするとしましょう」

そう言って男はマイクを握った

「あ～君たち」

「あぁ?」

「え?」

「はい?」

男の言葉に3人の男が返事をする。

「今からアメリカ・イスラエルの最新鋭のＩＳ、銀の福音を鹵獲してもらいます。いいですね?」

「いいも悪いもないんだろ?」

3人のうちの1人の言葉に男は満足そうに頷く。

「どうやらＩＳ学園が動くようですが、銀の福音は絶対に殺してはいけません。わかってますね?」

「他はいくら殺ってもいいんだろ?」

「ですね?」

「うっせぇよ、お前ら」

どうやら話はまとまったようだ。3人の男は立ち上がり、それぞれ

ＩＳを起動したのだった。

「オルガ・サブナック、カラミティ、出るぜ」

「クロト・ブエル、レイダー、行くよ」

「シャニ・アンドラス、フォビドゥン、・・・行く」

それぞれ、『災厄』『襲撃者』『禁断』の名を冠するガンダムが空へと飛び立つ。レイダーは上空で変形し、その上にカラミティを乗せ、フォビドゥンと隊列を組んだ。それを見て男はニヤリと顔を歪めた。

「さて、戦果を期待してますよ。そして、我らの『青き清浄なる世界の為に』」

戻ってきて現在、オルガたち3人のＩＳのハイパーセンサーは吉良たちを捕捉していた。

「あの女に抱えられているやつがそうだな」

カラミティのハイパーセンサーが、鈴に抱えられたターゲットの情報を表示する。

「落ちろぉおお！！」

カラミティの超射程ビーム砲：シュラークが鈴を襲う。が、見慣れぬフルスキンのＩＳのシールドに阻まれる。

「外れ！へたくそ！」

1撃で決められなかったオルガにクロトが罵声を浴びせる。

「へぇ、他にもいたんだ。俺らみたいなＩＳを使う奴が」

シャニがそんな感想を言う。そうこうしている間に鈴たちは戦闘区域を抜けていく。

「オルガ！てめぇが一撃でしとめなかったからだぞ！」

「うっせぇよ！クロト！よくも邪魔してくれやがって、あの白い奴！」

「あいつ、ウザイ」

「命令は生け捕りだからな、あの白い奴を落としてからＩＳ学園を破壊するとするか」

そう言って3機は戦闘態勢へと入っていく

「せいぜい楽しませてくれよ」

カラミティが超射程ビーム砲：シュラークを放つ。

「そりゃぁあああ！抹殺！！」

レイダーが破砕球：ミョルニルを放つ

「はぁぁぁぁぁぁウザイ！」

フォビドゥンが誘導プラズマ砲：フレスベルグを放つ。3機から放たれた攻撃は一直線に吉良に迫っていた。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「ビームに鉄球か！くそっ！」

あの3機から一点に集中された攻撃は横ロールをして回避し、お返しとばかりにバラエーナをフォビドゥンに放つ。

「ビームが・・・！曲がる！？」

しかし、フリーダムの放ったバラエーナはフォビドゥンに当たった瞬間弾かれるように外へと逸れた。しまった！フォビドゥンにはビームが効かなかったんだ！

「ふん、無駄なんだよ」

フォビドゥンが鎌を持って突進してくる。

「うらぁああ！」

ブンっ！と大振りに振られた鎌を後退して回避する。危ない、後少し遅かったら首に直撃だった。

「おらおらおら！」

「撃滅！！」

避けたのもつかの間、カラミティとレイダーの砲撃が吉良を襲う。

「くそっ！このままじゃ！」

吉良はフリーダムをハイマットモードにし機動力を上げ、全ての攻撃をどうにか回避していく。戦闘開始からすでに３０分は経過していた。

「いい加減！」

「ウザイ」

フォビドゥンの鎌をシールドで防ぐ。薙ぎ払うように振るわれたそれによって吉良は吹き飛ばされた。そして目の前には・・・

「終わり？」

「っ！？」

目前に迫るレイダー。すでにその体勢はエネルギー砲：ツォーンの発射体勢に入っている。そして・・・

「これで！抹・・・！！」

ドカァァァン！！

「ぐぅうううう！」

発射しようとしていたレイダーの背部がいきなり爆発した。な、なんだ！？

「吉良君！」

「や、山田先生！？」

フリーダムのハイパーセンサーがラファール・リヴァイブを駆る山田先生を表示した。まさか、応援に来たのか！？

「な、なんでここに来たんですか！？戻って下さい！先生の武器では、ミサイルではダメージを与えられません！」

「そんな！私は織斑先生に言われてここに来たんです！それに、先生が生徒を見捨てるなんて絶対にできません！」

「でも！」

「実際私が来なかったら、やられていたかもしれなかったじゃないですか！」

「・・・っ！！」

「もっと、先生を頼って下さい。あなたは私の、大事な生徒なんですよ？」

山田先生は泣きそうになりながらもそう言った。そして、その言葉に僕はハッとした。僕は、なんて事を・・・あの3機を見て僕はいつの間にか、僕にしか相手をできない、僕がやらなきゃいけないって思っていたのかもしれない。でも、それは違うんだよね。

「・・・ごめんなさい。僕が間違ってました。先生、援護をお願いできますか？」

「任せて下さい！」

さっきまでの泣き顔がウソのように消え、先生は笑った。そしてＩＳを見るとすぐに顔が変わった。アレがきっと、戦士の眼なのだろうと思うくらいにその視線は鋭かった。

「先生、おそらくアレらには僕のＩＳと同じ装甲が装備されていると思います。だから実体兵器は通用しません。先生は相手に弾幕を張って下さい」

「はい！」

そう言って僕はフリーダムを再びハイマットモードにし、ビームサーベルを抜いた。

「へぇ～救援か、どちらにせよ俺らが殺してやるけどね」

「うっせぇよシャニ」

「なんだか知らないけどてめぇも瞬殺！」

来るか！僕と山田先生は互いに頷いて構える。が、次の瞬間３機の動きが鈍り、挙動が怪しくなった。

ドクン！

「ぐっ・・・！くそ！時間切れかよ！・・・クロト！」

「みたいだね！くぅ！」

「は、ぁあああああ！」

3機は今までの動きが嘘に思えるくらい動かなくなり、撤退していった。

～ハワイ沖～

「いやいや、驚きましたよ。まさかカラミティ、フォビドゥン、レイダーの3機でかかっても落とせないＩＳをＩＳ学園が所持しているなんてね」

空母から戦闘の様子を見ていた男はそう言った。

「ＩＳ学園の底力を見せつけられましたな」

「しかもあのＩＳは見たところ、僕のものとよく似ている。僕以外の人間が作れるわけないんですけどね」

「あちらには篠ノ之束の妹がいるとか。もしかしたらあのＩＳは博士によって作られたのかもしれませんな」

「篠ノ之束か。この世の中を女尊男卑などというふざけた物にした希代の犯罪者だな」

篠ノ之束という言葉を聞いた瞬間、男は顔をしかめた。

「私もそのせいでデュノア社の社長を首になりましたからな。まったく、今はあの女が社長だなんて悪い冗談にしか聞こえませんよ」

「だからこそ、我々ブルーコスモスが撃たねばならないのですよ。感謝してますよ、ジョルジュ・デュノア。あなたの提供してくれたコアのおかげで私はあの3機を作れましたから」

「リヴァイブ3機の強奪など容易い話ですよ。しかしよくあんなISを作る事ができましたな」

ジョルジュの言葉を聞いて男はニヤリと笑った。

「いや、これに関しては僕も何とも言えないんですよ。ただ作れた、それだけです」

実際にはそうではないのだが・・・男は心の中でそう呟いた。そして、男はある事実に気づいた。それは、フリーダムがエネルギー切れを起こしていないと言う事だ。銀の福音の相手をしただけでなく、あの3機の相手もしたのだ。並のISならばとっくにエネルギー切れを起こしているはずである。

「しかしあの青い翼を持ったIS、あれだけの火力を持ちながらもまったくエネルギー切れを起こすそぶりを見せなかった。という事は・・・」

「なんですか?」

「もしかしたらあのIS、なにか別のエネルギーを使って動いているのかもね。例えば・・・『核』とか」

「まさか!?」

「だって、そうでもしないとアレだけの火力を用いてパワーダウン

を起こさない事の説明ができないじゃないか」

「だからといって『核』とは・・・」

男の言葉にジョルジュは衝撃を受けた。基本、ＩＳはシールドエネルギーで動いているのだ。もしも別のエネルギーを用いているならば、しかもそれが核エネルギーということならば大変な事になる。

「おいおい、元ＥＵ防衛産業連合理事のこの僕の眼を疑うのかい？」

「いえ、そのようなわけでは・・・しかしそれならば由々しき事態ですな」

「ともかく、あの３機は無事に動いたし実験は成功だ。薬はまだ改良の余地がありそうだがね」

「回復次第、再び銀の福音の鹵獲ですか？」

「福音？そんなものはもうどうでもいいよ。それよりも今はあのＩＳだ。次はアレをターゲットにしよう」

次の狙いは吉良の乗るフリーダムになった。そして男は席を立った。

男の名は、ムルタ・アズラエルという。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

あの３機が撤退して僕はホッと胸を撫で下ろした。正直限界だったのだ。

「山田先生、あの・・・ありがとうございました」

僕は山田先生に対してお礼を述べた。

「いえいえ、これも教師のつとめですから。でも、役に立つ前に撤退しちゃいましたけどね」

あはは、と笑いながら山田先生も返してくれた。

「いえ、実際山田先生が来てくれなかったら僕は今頃落ちていましたよ。だから、ありがとうございます」

「だからもういいですって、さ！もう帰りましょう！織斑先生が待ってますよ」

「はい」

こうして僕らも旅館へと戻っていく。でももし、またあの3機が来たらどうしよう。

「（今回はなんとか守れた。でももっと、強くならなきゃ。あのときラクスとした約束を、これからも守るために）」

僕は1人そう決心した。

「正体不明ＩＳからの襲撃は予想外だったが、無事で良かった」

旅館について部屋に通された僕は千冬さんと今回の事件の経緯を説明した。

「ビーム兵器にお前のと同じ装甲を持った3機のフルスキンのＩＳか・・・厄介な事になったな」

「はい。しかも何を目的にし、どこの組織のＩＳなのかはまったく見当がつきません」

「お前はあのＩＳの危険性を知っていたらしいな。なぜだ？」

千冬さんの射抜くような視線が僕を捕らえる。

「それは僕もわかりません。ただ、あれがなんなのかは知っている。としかいいようがないんです」

「ふむ・・・」

僕の返答を聞いて千冬さんが少し考え込む仕草を見せる。そして・・・

「さて、お前のＩＳもセカンド・シフトをした。それについてのデータを取らせてもらう」

来た。フリーダムのスペックを見た時からこうなる事は予想できていた。だけど・・・それはできない。あれには、核が搭載されているのだから・・・

「実は、フリーダムには核エンジンが搭載されています。よって、データを取りたいの仰るのであればお断りします。もしも、奪おうとするならば僕は敵対してでも守ります」

たとえあなたであっても。そう言外に含ませながら僕は千冬さんを

見つめた。

「核だと!?では、あれは核で動いているのか!?」

「はい。フリーダムは核と、シールドエネルギーのハイブリッドエンジンなんです。この場合のシールドエネルギーは文字通りシールドだけ。火力については全て核からのエネルギーです」

「そんな馬鹿な・・・それではエネルギー切れはない、という事か」

「はい。そしてその技術がもし世界に伝わったら、きっとその技術を悪用する人が出てくると思います。それだけは絶対に阻止しないと・・・それが、この機体を託された僕の責任です」

「・・・わかった。国際ＩＳ委員会に提出する報告書は私の方でどうにかしておく。それと・・・」

そう言って千冬さんはくるっと山田先生の方を向き

「ここで聞いた事は他言無用だ。いいな?」

そう言った。山田先生も真剣な顔をし、頷き返す。さて、これで話は終わったかな?

「ありがとうございます。ところで織斑先生、一夏たちは?」

この話は終わり、と僕は話題を変える為に気になっていた一夏たちのその後を聞いてみた。そうしたら、ニヤッっと千冬さんは笑って「ついてこい」と言い、隣の部屋のふすまをあけた。そこには・・・

「あ、足が・・・！」とか
「つぅ！・・・や、大和さん！」とか
「大和！助けなさいよ！」とか

つまり何が言いたいかというと、そこは地獄絵図だった。聞けば、一夏たちは急いで旅館に戻り、千冬さんに僕がヤバいって事を伝えた。事態を重く見た千冬さんは山田先生を応援に行かせた。ホッとした一夏たちだが、話はそこで終わっておらず、命令違反した事はバッチリと叱られ&正座されられたのだった。・・・ご愁傷様。

「ね、ね、結局なんだったの？教えてよ～」

「駄目だよ。機密だから」

「むぅ、シャルロットも駄目で、吉良君でも駄目だなんて・・・」

今僕らは夕飯を食べているため大広間にいる。そして、ぱくぱくと夕飯を食べる僕にみんなが群がってきていた。どうやら事の詳細を一番取っつきやすそうなシャルロットに真っ先に聞きにいったのだが、うまい具合にあしらわれてしまったので僕にお鉢が回ってきたみたいだった。

「ちぇ～、吉良君もシャルロットもお固いなぁ」

「えっと、聞いたら制約がつくんだよ？」

「あー・・・それは困るかな」

「それに僕がもししゃべったのが千冬さんに知られたら、僕は殺さ

れるかも・・・」

その光景を想像して、背筋に薄ら寒いものを感じながら僕は答える。

「あー・・・それはもっと困るよ」

「というわけで、この話はおしまい」

そうして僕も夕飯を再び食べ始める。のだが・・・

ひょい、ぱく、ぱく

「「・・・・・・」」

僕と、隣にいた一夏は目の前の箒に困惑していた。なんというか、箒がすごくおとなしい。いや、悪い意味ではなくて

「（どうしたの一夏、またなんかやったの？）」

「（またって何だ!?俺は何もしてねぇ）」

「（だってなんだか妙にぎこちないし、ねぇ）」

「（お前の中での俺の評価はどんなんなんだ）」

え？朴念仁のハーレムキングじゃないの？と吉良はまたもや自分の事を棚に上げた。

「なぁ、箒」

ついに我慢できなくなり、一夏が声をかける。その言葉に箒はびくっと反応した。

「な、な、なにか？」

「いや、どうも様子がおかしいからどうしたのかなぁって・・・」

「お、おかしい・・・ですか？」

ズデデ！箒のこの言葉に僕と一夏は素でずっこけてしまった。なんなの？その敬語は・・・一夏も一夏であっけにとられているらしく眼を白黒させていた。

「えーと、やっぱりなんでもない」

一夏はそれだけ言うのが精一杯だった。しかし、その言葉に箒は目に見えてしょげてしまった。

「（一夏！）」

「（俺にどうしろと！？）」

それからは僕らと箒は特に会話はなく、黙々と夕飯を終えた。居心地の悪さに味なんかまったくわからなかった。

ざぁ・・・ざぁん・・・僕は夕食後、気分転換に夜の浜辺へと散歩に出かけた。辺りは静寂に包まれ、繰り返し聞こえる波の音が心地よかった。

「大和さん？」

少し歩いてたら後ろから声をかけられたので僕を振り向く。そこにいたのは、浴衣に上着を羽織ったセシリアだった。セシリアも気分転換に外に出たのだが、まさか吉良に会うとは思ってもいなかった。

「セシリア？どうしたの？」

「いえ、私も夜の散歩をと思いまして。せ、せっかくですからご一緒してもよろしいですか？／／／」

吉良と一緒にいる為にセシリアが出した精一杯の勇気

「うん、いいよ」

そう言って僕とセシリアは並んで歩く。特に話題があるわけでもないけど、会話をしなくてもこの空間は心地よかった。そうしてまた歩いていくと、月明かりに照らされた２つの人影が見えた。

「セシリア、あそこにいるのって」

「一夏さんと箒さんですわね」

旅館から少し離れた岩場に一夏と箒がいた。２人とも水着だった。初日に箒を見かけなかったけど、しっかり水着は買っていたんだ。セシリアが「やっぱり水着を着てくれれば良かったでしょうか」とか言ってたけど気のせいだろう。

「セシリア、２人の間を邪魔しちゃ悪いから行こうか」

2人の話を聞くような無粋なまねはしたくなかった。なによりも箒が勇気を出して一夏にアタックしているのだからね。頑張れ、箒
セシリアもこくっと頷いて僕の手を握った。ほら、岩場は危ないし・・・決して別の意味がある訳じゃないと思う・・・多分。
そして僕とセシリアが歩き出した直後だった。

「セシリアに大和！こんなところで何してんの？」

やばい！鈴に見つかった。しかもこの後ろには一夏と箒が！

「え？大和？」

シャルロットまで！？な、なんでさ！？しかもシャルロットは僕とセシリアが手を握っているのを見て、すごく怖い気を発し始めた。

「大和？なんでセシリアと手を繋いでいるのかな？？」

怖いですシャルロットさん。顔は笑っているのに目がマジです。

「私の嫁はっと」

ラウラまで！？ということは全員集合じゃないか！駄目だ。僕だけじゃ抑えきれない！

「いや、たまたまだよ。たまたま散歩中にセシリアに会って一緒に散歩をね。手を繋いでいるのは、岩場で危ないからだよ」

「ふ～ん」

シャルロットはどこか納得してなさそうな目を僕に向ける。

「大和、あんたなんか隠してない？」

ぎく！どうしてこんなところで鋭さを発揮するんだ！

「何の事かな？ナニモカクシテイナイヨ？」

自分の演技力の無さに絶望した。

「やっぱり！あんたなんか隠している！そこどきなさいよ！」

ズンズンと迫ってくる鈴とラウラ。あぁ、もう駄目だ。そして・・・

「一夏？あんた何をし・て・い・る・の・か・な？」

「ふむ。嫁には再教育が必要だな」

見つかってしまった。一夏と箒は僕らの声が聞こえた直後、すぐに場所を移動して隠れていたのだが、どうしてか見つかってしまった。鈴の瞳からはハイライトが消え、ラウラはサバイバルナイフを構えていた。あぁ、これは死んだかな？

「ほ、箒！逃げるぞ！」

「えっ、あっ。きゃあ！」

身の危険を感じた一夏は箒を抱きかかえ、脱兎のごとく駆け出す。そして後ろからはまるでどこぞのゾンビゲームの追跡者のように一夏を追う鈴とラウラ。一夏、生きていたらまた会おう。そう思って僕は旅館へと歩きだそうとする。

「ところで大和。いつまでセシリアと手をつないでいるのかな？かな？」

ゾク！背中に氷を入れられたかのように背筋が凍った。見れば僕の手は、まだセシリアの手と繋がれたままだった。

「（幸せ・・・／／／）」

当のセシリアはこれ以上ないほど幸せそうな顔をしていた。そして、シャルロットの瞳もハイライトが消えていた。これで鉈でも持っていたら完璧だ。

「セシリア、逃げるよ！」

手をつないだままだと走れないので、僕も一夏に倣ってセシリアを抱きかかえ、一夏の後を追う。

「一夏！」

「大和！」

僕と一夏は並んで走る。後ろでは3人の修羅が銃をぶっ放して追いかけてきた。やめて死ぬ。死んじゃう。

「「（これはこれで幸せかもしれない／／／）」」

吉良たちの事などどこ吹く風で、2人に抱きかかえられている箒とセシリアはこんな事を思っていた。

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても４２％かぁ。まあ、こんなところかな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながら、その女性は無邪気に微笑む。

「それにしても＜ブルー・コスモス＞がこんなに早く動きだすとは思わなかったなぁ。まだちーちゃんのＩＳも出来ていないのに・・・でもまあ、やまぴーのおかげでなんとかなりそうかな？」

月明かりに照らされながらその女性、篠ノ之束は無邪気に微笑んだ。そして、鼻歌を歌いながら別のディスプレイを呼び出す。そこでは、白式第２形態とフリーダムの戦闘映像が映し出されていた。

「それにしてもあの２機には驚いたなぁ・・・まさか操縦者の生体再生も可能なんてまるで・・」

「まるで『白騎士』のようだな。コアナンバー００１にして初の実戦投入機。お前が心血を注いだあの１番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す。漆黒のスーツに身を包んだその姿は、夜の闇全てを引き連れているかのようだった。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

２人は互いの方を向かない。背中を向けたまま、束と千冬は会話を

続けた。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこへいったんでしょうか？」

「・・・白式を『しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう？」

かつて『白騎士』と呼ばれたＩＳはいつのまにかコアを残して解体され、いつしか白式へと組み込まれていた。

「じゃあ、ストライクはどうなんだろうね～」

「・・・・・・」

「あれは私が開発した物ではないし、フリーダムに至ってはお手上げって感じ？ま、束さんは天才だから、解明するのは時間の問題だね」

うんうんと頷く束。そんな束に千冬は話しかける。

「・・・私も１つ、たとえ話をしてやろう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいね」

「例えば、とある天才が２人の男子の高校の受験会場を意図的に間違わせる事が出来たとする。そして、そこで使われるＩＳに手を加え、男は使えないというＩＳをその時だけ動かせるようにする。そうすれば、男のＩＳ操縦者の出来上がりだ」

「ん～？でも、それだと長く続かないよねぇ」

「そうだな。お前はそこまで長い間同じ物に手を加える事はしないからな。で、どうなんだ？とある天才」

「どうなんだろうね～。実のところ、私もわからないんだよねぇ。２人ともＩＳ開発には関わっていないはずなのに」

「・・・・」

その言葉を最後にどちらも言葉を発しない。

「ねぇ、ちーちゃん。今のこの世は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ。こんなに、歪んだ世界でも？」

「・・・・・・」

岬に吹き上げる風が、一度強くうなりをあげた。

「ーーーーーー」

その風の中、何かを呟いて束は消えた。後に残ったのは、気に寄りかかるようにして息を吐き出す千冬だけだった。

ｓｉｄｅ　一夏

翌朝、朝食を終えてすぐにＩＳ及び専用装備の撤収作業に当たる。そうこうして１０時を過ぎたところで作業は終了。全員がクラス別

のバスに乗り込む。

「あ～・・・」
「・・・・・・」

座席にかけた今の俺らは一言で言えばボロボロだった。昨日は1時間近く追い回されたあげく、旅館を抜けたのがバレて千冬姉に大目玉。実睡眠時間は3時間ほど。それでいて、重労働をさせられたのだから、もう死にそうだ。吉良なんか座席で寝ているぞ。

「う～・・・しんど」
「・・・・・・・」

隣で死んだように眠る大和。そのときバスの入り口に金髪の女性が入ってきた。

「ねぇ、吉良大和君っているかしら？」

「あ、はい。ここに」

1番前の席にいたのが幸いした。俺はとなりの大和を揺すって起こす。その女性は20歳くらいだろうか？少なくとも俺たちよりは確実に年上で、鮮やかな金髪をしている。その女性は大和をマジマジと見つめた。

「う～ん、一夏。なに？」

「大和にお客さんだって」

「お客さん？」

そこで大和は目の前にいた女性に目を向けた。

「あの、あなたは？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』の操縦者よ」

「「え！？」」

予想外の言葉に困惑していると、大和の頬にその女性の唇が・・・て！？

「ちゅ・・・これはお礼よ。青き翼の天使さん」

「え、あの、はい」

大和はぼーっとしたままだ。そして・・・

「ちゅ・・・あなたもよ？白いナイトさん」

俺の頬にも唇が触れた。

俺たちはひらひらと手を振ってバスを降りるナターシャさんにぼーっとしながら振り返す。そのままぼーっとしていた俺らだが・・・

ぞくり！

俺と大和は互いに嫌な予感に顔を見合わせ、後ろを振り向いた。そこにいたのは・・・

「浮気者め」
「大和ってモテるねぇ」
「本当に、行く先々で幸せいっぱいのようですわね」
「はっはっは」

スタスタと歩いてくる４人。ちなみに鈴は２組なので（ｒｙ。ああ・・・軍歌が聞こえるようだ。その後、俺らは違う意味で気を失った。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「・・・・・・」

バスから降りたナターシャは目的の人物を見つけてそちらへと向かう。

「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ。ガキの相手は大変なんだ」

そう言ってきたのは千冬だった。

「思っていたよりもすてきな男性だったからつい」

千冬の言葉にはにかみながらナターシャは答えた。

「やれやれ・・・それよりももう動いて平気なのか？」

「ええ、それは問題なく。私はあの子に守られましたから」

ここで言うあの子とは、今回の事件を起こした福音の事である。

「やはり、そうなのか？」

「ええ、あの子は私を守る為に望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断。あの子は私の為に自分の世界を捨てた」

「・・・・・・」

「幸い、今回の事件に関して罰は無く、あの子も修理して再び空には上がれるわ」

暴走を起こした福音はコアが無事で、再び組み直す事が出来る。しかも、今回の事件は原因不明でナターシャ自身に責任がない事、福音がセカンド・シフトをした事等の利害関係を精査した結果、超法規的措置が取られた。

アメリカ、イスラエルともに、最先鋭であり、セカンド・シフトした機体をみすみす凍結処理になど出来るはずもなかった。

「だからといって、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのＩＳを敵に見せかけた元凶を・・・報いは必ず受けてもらう」

言葉を続けるナターシャはさっきまでの陽気な雰囲気を微塵も見せず、その体に鋭い気配を纏っていく。

「まぁ、あまり無茶をするなよ？超法規的措置が取られたとはいえ、監視がつくんだろう？」

超法規的措置が取られたとはいえ、福音をそのままに出来るはずも

なく、再暴走した時の事を考え一定期間の監視が付けられる事となったのだった。

「それは忠告ですか？ブリュンヒュルデ」

ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』その総合優勝者に送られる称号だ。千冬はその第１回大会の優勝者なのだが、その名で呼ばれるのは好きではなかった。

「いや、アドバイスさ。ただのな」

「そうですか。それでは、おとなしくしていましょう。・・・しばらくはね」

一度だけ視線を交わしあった２人は、それ以上の言葉なく帰路につく。

・・・またいずれ

そんな言葉が２人の背中にはあった。

第２０話：悪の3兵器（後書き）

さて、今回はＩＳの世界を構成する1つの組織を出しました。以下それの詳細です。

組織名：ブルー・コスモス

盟主：ムルタ・アズラエル

反女尊男卑を掲げる男の組織。全ての女性は男の下にあるべきとの考えをもち、旧き男尊女卑を世界の真理と主張する。

行き過ぎた女尊男卑によって生まれた組織である。盟主は元ＥＵ国防産業連合理事のムルタ・アズラエル

ジョルジュ・デュノア

シャルロットの実父にしてデュノア社の元社長。最近社長の任を解かれ、権力復帰に執念を燃やし、ブルー・コスモスに協力する。（シャルロット転入までは社長だった）

オルガ・サブナック：カラミティの操縦者。詳細不明

クロト・ブエル：レイダーの操縦者。詳細不明

シャニ・アンドラス：フォビドゥンの操縦者。詳細不明

こんな感じです。ＳＥＥＤでのナチュラル対コーディネイターを男対女の図式にしてみました。ちなみに、吉良に話してきた謎の男はアズラエルではありません。また別の組織の男です。以上！

次回は日常編に戻って、夏休みのワンシーンを書こうと思ってます。

ではまた次回！

第２１話：僕とセシリアとわくわくさぶーん（前書き）

遅くなってすみません！

今回はゲストとしてあの方たちに特別出演してもらっています。

では、どうぞ！

第２１話：僕とセシリアとわくわくさぶーん

「はぁ～～～～」

夏、気温がグングン上がり、ここＩＳ学園の中の廊下も尋常じゃないほどの温度になる中、１人の女子生徒がまるで日本海溝のように深いため息をついてトボトボと歩いていた。彼女の名前は凰鈴音という。

「一夏のバカ・・・せっかくあたしが誘ってあげたってのに断るなんて！」

手に持った何かのチケットをヒラヒラさせながら鈴は歩いていた。チケットにはわくわくざぶーんと書いてある。鈴は友人から、明日オープンするこの全天候型屋内ウォーターレジャーランド：わくわくざぶーんの前売りチケットを買った。前売り券はすでにプレミアム価格になっており一般人には入手不可。当日券でも２時間以上待つだろうというそのプールへの入場券を手に入れた鈴は、喜び勇んで鈴の想い人を誘ったのだった。だが、返ってきた返事が

「わりぃ、俺の白式セカンド・シフトしたろ？だからその日、倉持技研の人がデータを取らせてくれって言ってきて行けないんだよ」

という鈴にとってはあまりにもな返答だった。チケットの有効期限はオープン当日のみ。鈴が手に入れた夢のチケットが紙くずに変わった瞬間だった。破ってしまおうかとも思ったがなんだかもったいなかったのでこうして持っているという訳である。

「あれ？鈴？」

誰かに呼び止められて鈴は顔を上げた。そこにいたのは吉良だった。

「やっぱり鈴だ。どうしたの？まるでこの世の終わりのような顔をしているけど・・・」

この世の終わり、まさしくその通りだわと1人自嘲しながら鈴はさっきの出来事を話した。鈴の話を聞き終えた吉良は顔が引きつっていた。あまりにも鈴が不憫で仕方なかった。

「と言う訳で吉良！このチケット買って！」

「う～ん、協力したいけどこまったな。僕も一緒に行ける人なんていないし、鈴と一緒に行ったら本末転倒だし・・・」

自分への好意には疎い一夏だが、他人がそういう行動をした時には勘違いしてしまうというスキルも持っていた。もしも鈴が僕と2人でプールに行ったなんて一夏に知れたら、鈴は大和が好きなんだ。なんて1人勘違いして、納得してしまうだろう。そうなったら目も当てられない。

「だからって、捨てるのももったいないのよ！お願い大和！ここはあたしを助けると思って！」

鈴がペコッと頭を下げた。

「やめてよ鈴！わかった、買うよ、買いますよ。それで、いくらなの？」

こうして吉良は1枚2500円のチケットを2枚買うことになり、

鈴に５０００円を払ったのだった。痛い出費だった。

「さて・・・」

鈴からチケットを買った吉良は自室へと向かっていた。この暑い中、一刻も早く自室のクーラーを使ってくつろぎたかった。そんな中、校門の手前に１台の車が止まったのが見えた。

「あれは・・・」

降りてきた人物を見た吉良は、出迎える為に校門へと向かった。

「さて、やっと戻って来れましたわ」

ＩＳ学園の正面ゲートの前で白のロールスロイスから降りたセシリアはさっそくの熱気にうんざりしながらも、気分は高揚していた。

「（やはり想い人とは同じ空の下にいたいものですし・・・）」

セシリアは本国であるイギリスでの仕事を終えて今日、やっと日本へと帰ってきていた。

「（さっそく大和さんに会いに行こうかしら・・・）」

「お嬢様」

「！？」

呼ばれて振り向くと、彼女の幼なじみであり、専属メイドであるチ

ェルシーがいつもと同じ微笑みをたたえながら控えていた。

「な、なんですか？」

内心を悟られまいと、セシリアは努めて優雅に返そうとする。が、チェルシーはそんなセシリアの内心を知ってか知らずか

「さっそく吉良様に会いに行かれますか？」

と言ったのだった。これにはセシリアもビックリした。

「それからお嬢様。１つ確認したい事がございまして・・・」

「なにか・・・？」

嫌な予感がする。確証は持てないが、これからチェルシーが言う事は、自分にとってすごく都合の悪いものになる予感がした。

「あの白いレースの下着は吉良様用ですか？」

「（・・・・・・え？）」

「お嬢様、派手すぎる下着は却って逆効果だと思われます」

「（・・・・・・え、え？）」

「では、これで」

言い訳をする暇も与えず、チェルシーは丁寧におじぎをして去って行った。後にはポカンとしたセシリアが残った。

いや、あの、ええと?セシリアはグルグルと頭の中を回転させ、チエルシーが言った事の意味を考えた。そして・・・1つの事実に思い当たる。彼女は母国に帰った際にこっそりとネット通販でそういう下着を買い、バレないよう2重底のスーツケースに隠して持ってきていたのだった。それがバレた。そう思った瞬間セシリアの顔は、夏の暑さにも負けないくらいに赤く染まった。

「(あ、穴があったら隠れたいとはこの事ですわ!)」

悲鳴こそあげなかったが、セシリアは今、大変な状態だった。そして、それに追い打ちをかける人物が現れたのだった。

「おかえり、セシリア」

どきぃ!突然の想い人の出現に、セシリアの胸は高鳴った。

「(や、大和さん!?ど、どうしてここに!?・・・は!もしかして、わたくしの出迎えに!?」

間違ってはいない。ただ、吉良はなぜセシリアがそんなにテンパっているのかの理由についてまでは知る由もないが。

「大和さん、1週間ぶりですわね。ごきげんよう」

内心ではいろんな妄想が渦巻く中、セシリアはスカートをつまんで優雅に挨拶した。正直、ギリギリだった。

「(ああっ!やっぱり大和さんでしたわ!やはりわたくしを思ってわざわざ出迎えに?きゃあ、そんな、大和さんったら・・・!)」

ーしばらくお待ちください。ただいま、セシリアの頭の中はピンク色ですー

「お嬢様」

「！？」

白昼夢、もとい妄想が弾けた瞬間だった。

「えーと、失礼ですがどちら様ですか？」

突然の見知らぬ人物の登場に吉良が尋ねる。

「お初にお目にかかります。セシリアお嬢様にお仕えするメイドで、チェルシー・ブランケットと申します。以後、お見知りおきを」

いつの間にか、セシリアの隣にチェルシーが立っていた。

「あぁ！前に一度セシリアからお話を伺ってますけどあなたがそうだったんですか。初めまして、吉良大和です」

「はい、吉良様。ときに、ご無礼を承知の上でお尋ねしますが、わたくしの事をお嬢様はなんと？」

「ええ。とても気が利く方で、優秀で、優しくて、あと・・・美人だって言ってました」

「まあ」

美人。吉良にそう言われたチェルシーはにっこりと柔らかく微笑んだ。それはお世辞のしようがない暗い綺麗で、けれど嫌みではなく人を包み込むような優しさに満ちていた。それは、幼少期から一緒だったセシリアが一番わかっているはずなのだが・・・

「（大和さん、わたくしには一度も美人だなんて言ってくれませんのに・・・）」

そんなちょっとしたやきもちを見透かしたのか、チェルシーがまた微笑んで

「私も吉良様のお話はよくお嬢様から耳にしております」

なんて事を言った。ビックリしたのはセシリアだ。セシリアはとにかく自分のしゃべった内容をチェルシーがしゃべりませんように！と祈るしかなかった。

「へぇ、そうなんですか。それで、なんて言ってました？」

「（やめて！チェルシー！）」

焦るセシリア。

「それは・・・・・女同士の秘密です」

そんなセシリアの動揺を感じ取ったのか、ものすごく魅力的な笑みでチェルシーはそう言ったのだった。

「はぁ・・・・・」

チェルシーと別れた吉良たちは、暑かったので食堂に隣接したカフェへとやってきた。さっきからセシリアはアイス・カフェラテを詰まらなさそうにかき回している。それというのも・・・

「いやあ、チェルシーさんてすごいですね。同じ１０代とは思えないですよ！」

「吉良様、どうか私の事はチェルシーとお呼びください。使用人ですので、敬語も必要ありませんよ」

「いえいえ、年上にはさん付けが基本ですから。それに敬語無しでは話せませんよ」

「まあ、吉良様はお上手ですね。女の喜ばせ方をよくご存知のようです」

「ええ！？そんな事言われた事ありませんよ！」

「まあ、うふふ」

とまぁ、こんなように２人とも初対面とは思えないくらいに自然に会話をしていた。それはもう、こっちが嫉妬してしまうほどに。自分の想いを知っているのに仲良くするチェルシーにも心がざわざわした。

「セシリア、どうしたの？」

あまりにもセシリアがむくれていたので吉良が尋ねた。

「えっと、僕のせい？」

確証はないのだが吉良はこれまでの経験から、こういうときは自分が関係しているのではないかと思った。

「そうですわ」

即答。そして吉良の推量が当たった瞬間だった。そして、その後も２人のぎくしゃくした感じが続いた。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

どれほど続いただろうか。吉良にとってこれほど居心地の悪いものはなかった。そして、ポケットをふとまさぐるとあるものが入っている事に気づいたのだった。えぇい！ままよ！と思った吉良は、現状の打開へと乗り出したのだった。

「セシリア、明日ここに行かない？」

「（これは・・・！？）」

セシリアは、吉良が出してきたある物を見て、目を丸くした。それはもう見事なまんまるだった。

翌日、天気は雲１つない快晴。気温はすでに２５度を超えている。絶好のプール日和だ。昨日吉良は、鈴から買ったプールの前売り券をセシリアに渡したのだった。時刻は８時４５分、開園１５分前だ。

右を見れば、当日券を求めてきたのであろう客が長蛇の列を作っていた。

吉良は暑い中ご苦労様、と思いながらセシリアがくるのを待った。

「大和さ～ん！」

向こうからセシリアが走ってきていた。服装は白のワンピースである。いかにもお嬢様といった感じだ。

「やぁ、セシリア。おはよう」

「おはようございます！大和さん」

セシリアの言葉が若干うわずっている。それもそのはずである。セシリアは昨日、吉良にこのプールに誘われた瞬間天にも上る勢いだった。

「（あぁ！夢ではないんですわよね！大和さんプール！それは至福のとき！そしてプールが終われば夏ですし、さらにその先まで行っちゃったりして！あぁ！・・・もう・・・！」

ーしばらくお待ちくださいー

いろんな意味でセシリアの頭はヒートアップしていた。暑かったので、とりあえず2人は中に入る事にした。ゲートでチケットを切ってもらい入場であるのだが・・・

「お！初々しいねぇ坊主。彼女とデートか？」

「「デート!?」」

ニヤニヤ笑いながらその男は聞いてきた。長身痩躯に青い髪。どうやら日本人ではないようだ。その男はハーフパンツにアロハシャツといかにもプールの従業員らしい格好をしていた。

「なんだ?違うのか。それにしてもそっちの子、いい感じじゃねぇか。はぁ・・・アイツと同じくらいの年だろうにどうしてここまで違うのか。あんたはあと3年ぐらいしたら俺好みのいい女になるぜ。俺が保証する」

「はぁ・・・」

あっけにとられるセシリア。

「たくっ。一緒に来ていたアイツもいけすかねぇしなぁ・・・ライダーあたりが来てくれると目の保養にいいんだがなぁ・・・」

「あの、僕たちもう行っても?」

なおもぶつぶつ言う青い髪の男に対していよいよ我慢できなくなった吉良は言った。

「おぉ!悪かったな!じゃあな坊主、頑張れよ!」

何に対してなのだろうか。手を振ってくる彼に僕はとりあえず会釈をしてその場を離れた。ちなみに離れる際にちらっと彼のネームバッジが見えた。

「ランサーさんか」

とりあえず日本人じゃない事は確定したが、なんか槍兵みたいな名前だった。

「じゃあセシリア、またあとでね」

「はい！」

あの変な人を通り過ぎた僕たちは更衣室の前で別れた。当たり前だけど男女別だった。それにしてもここも女尊男卑の影響か部屋の比率が7：3くらいになっている。その証拠に男子の更衣室は狭かった。僕は手早く着替えて更衣室をあとにし、セシリアを待った。

「それにしてもすごいなぁ」

更衣室から出て改めてプールの中を見る。もらったパンフレットにも書いてあったが実際に見るとそのすごさがよりよくわかる。全面に広がるは波のプール。頭上には長ーいウォータスライダー。そして多種多様なプール。とてもじゃないが今日1日だけでは泳ぎ尽くせないだろう。とそんな時更衣室から2組の男女のペアが出てきた。

「うわぁ。これはすごいわね」

「シロウ！あれはなんですか！？」

「アレはウォータースライダーだ」

「フム、確かにすごいが・・・別にあれら全てを泳いでしまっても構わないのだろう？」

僕が声がした方を振り返ってみるとそこには、黒いロングの髪に赤いビキニの少女、金髪に白いビキニの少女、赤い髪の男と、褐色の肌に白い髪の長身の男がいた。そのグループはいろんな意味で人目を引いていた。そして・・・

「（あかい・・・あくま?）」

黒髪の子を見てたらなぜか自然とこの言葉が出てきた。理由はない。が、あの赤いビキニといいなぜか悪魔を連想させた。そのグループは人目を気にせず、いや赤い髪の男だけ周りを気にしながら行ってしまった。僕はなぜか同情してしまった。きっと苦労しているのだろう、いろんな意味で・・・

「大和さ～ん!」

あの一団から遅れる事少し。セシリアが来た。

「あぁ、セシリ・・・!!」

振り向いた瞬間即座に１８０度反転。なぜかって?それはセシリアの水着のせいだ。

「どうですか?似合ってますか?」

こちらに回りながら聞いてくる。似合ってない訳がなかった。だが、セシリアの水着は臨海学校のときの物とは明らかに違っていた。特に布の量が。セシリアの水着は青く布地が多くないビキニだった。僕はセシリアをあまり直視しないように「似合っている」と

言うのが精一杯だった。

「じゃあ行こうか」

そういって僕とセシリアはプールへと繰り出して行くのだった。

「ム！なんだその準備体操は！貴様など妄想を抱いて溺死しろ！」

「いちいちうるさいんだよ！アーチャー！」

・・・なんだか異様な盛り上がりを見せているところもあった。

その後、僕らはまず波のプールで泳いだあと、ウォータースライダーへと移動した。これがまたすごくて、ドームのてっぺんからくねくね曲がり、ハイスピードで落ちてくるというものだった。その後も僕らはいろんなプールを試した。

「だいたい泳ぎ尽くしたかな？」

「そうですわね。ところで大和さん、そろそろお昼にしませんか？」

時刻は１２時３０頃、ちょうどお昼時だ。

「うん、いいかもね」

そういって僕らはプール内に併設されたフードコートへと向かった。

「ふぅ・・・」

昼ご飯を食べ終えた僕らは少し休憩という事で休んでいた。まぁ、ずっと泳ぎっぱなしはキツいからね。セシリアも隣でチェアに横になっているのだが・・・

「（やっぱりセシリアってすごいスタイルだよね）」

こうして横になっているとセシリアのスタイルはすごいと思う。着ているビキニの布地が少ないからさらにすごい

「大和さん、なにか？」

「・・・いや」

いけないいけない、視線がそっちに向いていたか。無意識とはいえ恐ろしい・・・

「「・・・・・・」」

気まずい沈黙が流れる。なにか、何か話題を・・・

『では！本日のメインイベント！男女水上ペアタッグ障害物レースは午後2時より開始いたします！参加希望者の方はフロントまで～』

話題を探していた時に場内アナウンスが流れた。

「これだぁ！！」

気づけば僕らはエントリーしていた。

舞台はこれから水上ペアタッグ障害物競走が行われる特設会場。無事エントリーを済ませた僕らはそのスタート地点に並んでいた。あの時は僕らは場の気まずさから何も考えないでエントリーしたのだが、今僕は自分の浅はかさに激しく後悔していた。

「僕たちは・・・どうしてこんなところに、出てしまったのだろう・・・」

なんだか勝てる気がしない。特にあの集団・・・いや、もしかしたらなんて

「シロウ！何が何でも勝ちますよ！」

「おう、セイバー！」

「行くわよ！アーチャー！」

「了解した。凛」

訂正、僕らでは勝てそうにありません。彼らから上る気迫は凄まじい・・・僕らは聞いてなかったけど、そんなに商品が欲しいのかな？

「が、頑張りましょうね。大和さん・・・」

引きつった笑いを浮かべながらそういうセシリア。エントリーした以上は仕方ないか。と僕も腹を決めた。

『では、スタート前にルールの説明です！』

開始前に実況のお姉さんがルールの説明をしてくれる。

『ルールは至ってシンプル！一番先についたペアが勝利です！ただし、途中でペアと協力しなければ抜けられない障害がありますので頑張って下さい！そして、中央の島にあるフラッグをとったら優勝です！ただし、プールに落ちたら最初からやり直しです！』

ふむふむ、つまり1人が強くても力を合わせないと勝てないってことか。なんとかなる、かな？

『位置に着いて、よ～い・・・ドン！！』

パン！とピストルが鳴らされてスタートする・・・が

ズバババババ！！

「「「はい？」」」

僕は今、あり得ないものを見た。スタートと同時に金髪の人が走り出しのたのだが、その人はなんとプールの水の上を走っていたのだ。しかも、超高速で・・・ホントに人間か？

「シロウ！早くこっちまで来て下さい！」

当の本人はすでに第一の関門まで行っててペアらしき人の名前を呼んでいる。

『え～と・・・プールに落ちたと判定。衛宮・セイバーペア。スタート地点に戻って下さい』

「そんな！！」

向こうで女の人が絶句していた。なにはともあれ、僕らもスタートする事にした。

レース自体はなんだかんだで僕らでもどうにかなった。僕らは今３番手、前を行くは衛宮・セイバーペアと遠坂・アーチャーペアだ。どちらも信じられないくらい息がぴったりで、障害がまったく機能していなかった。とはいえ僕らもＩＳ学園で鍛えているせいか他のペアよりはなんとかできていた。

「あと少し！でもこのままじゃ！」

すでに前の２組は最後の関門に到達している。だが何だか様子がおかしい。キン！キン！と鉄と鉄が打ち合う音が聞こえるのだ。

「アーチャー！あなたとは一度しっかりとお話をしなければならないと思っていました！」

「クク、私は事実を言ったまでだが？」

何の事実かはわからないが、僕たちが近づいていくと先行していた２組のチームのうちのセイバーさんとアーチャーさんがなぜか戦っていた。その隣では２人をなだめようとしているもうペアの片割れの人たちがいた。

「これは・・・」

「ですわね」

戦いに夢中になっていて僕らにまったく気づいていない彼ら。その横を僕らは巻き添えを食らわないように通り過ぎる。そして、最後の島にたどり着きフラッグを握った。

『ゴール！！優勝は、吉良・オルコットチーム！！』

実況のお姉さんがそうアナウンスした。

「「なにぃ！？」」

僕らが勝った事で後ろで争っていた人達の動きがぴたりと止まる。

「アーチャー！あなたのせいで優勝できなかったではありませんか！」

「何を言う？先に仕掛けてきたのは君だったはずだが？」

「っ・・・！！もう許しません！こうなったら・・・」

そう彼女が言った瞬間、手からは黄金に光る洋剣が現れる。アレハナニ？

「それを出されては私とて黙ってはいられんな」

そう彼が言うと、どこからか取り出した弓に先がねじれた剣のような物を構える。ちょっと待って。

「約束された（エクス）・・・！！」

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ（我が骨

子は捩れ狂う）」

「勝利の剣（カリバー）！！」

「偽・螺旋剣（カラド・ボルグ？）！！」

ドカァアアン！！

剣から放たれる黄金の光と、弓から放たれた凄まじいまでの矢がぶつかった瞬間、比喩でもなんでもなくプール全体が揺れた。

ー本日の営業は終了しました。またのお越しをお待ちしておりますー

今僕らはプールをあとにし、学園へと帰ろうとしていた。あの凄まじい衝撃あとのプールの様子だが、幸いにしてけが人はでなかったが、レース会場のプールは全壊、天窓もそのほとんどが割れるという物損被害が発生した。

プールは修理を余儀なくされ、一週間の営業停止になってしまった。開店早々ついてない・・・あのレースの優勝商品はいわゆる金一封だったのだが、少しでも経費削減のためにと変更になった。それが『如月ハイランド』のペアチケットだった。なんでも、このわくわくざぶーんと如月ハイランドは同じ系列らしく、これなら費用もかからない為これに変更となったのだ。ちなみにこれらテーマパークの経営者が金ぴかの人であるというのはわりと有名な話らしい。

「でも、今日は楽しかったね」

夕日が照らす道を僕とセシリアは並んで歩く。

「そうですわね。途中ですごいハプニングがありましたけど」

そういってセシリアは笑った。そして僕らは学園へと向かう。

「（大和さんとすこしは距離が縮まったのでしょうか・・・／／／）」

セシリアがぼそっと何か言ったがよく聞こえなかった。

「ん？何か言った？」

「いいえ、何でも」

セシリアは笑って答える。その顔は夕日に照らされてとても綺麗だった。

余談だが、その頃プールを壊した張本人たちは、事務室で正座してうなだれ、こってりとしぼられていたという。

「あ、鈴！」

学園に戻ってきた僕は鈴にあった。

「大和じゃない。プール楽しかった？」

「うん、とっても楽しかったよ。それで鈴にお土産があるんだ」

そういって僕はポケットをまさぐる。鈴はわからずにキョトンとしていた。

「はい、これ」

「これって・・・」

僕が差し出したのはさっきもらった如月ハイランドのペアチケットだ。

「鈴のおかげで楽しかったからね、鈴に恩返し。これで一夏を誘って行って来なよ」

「大和・・・ありがとう!!」

そう言って鈴は一夏を探しに走り出す。その後ろ姿を見送った僕は楽しかった今日を振り返りながら自室へと入って行った。

第２１話：僕とセシリアとわくわくさぶーん（後書き）

Ｆａｔｅ／ｈｏｌｌｏｗ　ａｔａｒａｘｉａから登場してもらいました。

ちなみになぜセイバーとアーチャーが戦ったかというと、セイバーが泳げなかった事をアーチャーがからかった（事実を言った？）からです。まぁ、アーチャーのあの口調で言われたらそりゃ怒るかなぁ・・・でも水の上を走れるんだから別にいいよね？

それとＦａｔｅのキャラは伏線でもなんでもなく、ただ出しただけです（笑）

次回もまた夏休みの出来事です。そろそろシャルロットとラウラにスポットを当てようかと。

ではまた！

第２２話：僕とシャルと@クルーズ（前書き）

遅くなってすみませんでした。ようやくテストが終わって夏休みに入りましたので、これからは頑張って更新していきたいと思います。

第２２話：僕とシャルと@クルーズ

寮の食堂で僕とシャルロットとラウラは遅めの朝食をとりながら話していた。

「今から僕とラウラで行く予定なんだけど、大和もどうかなぁって思って」

「うーん、僕なんかといっしょに行ってもいいの？女の子２人でなんでしょう？」

正直、女の子２人の買い物について行くのは気が引けた。しかしシャルロットはどこ吹く風でにっこりと笑って言った。

「その事は心配いらないよ。それに大和のアドバイスも欲しいし」

「アドバイス？」

「実は、ラウラと服を買いに行こうと思ってるんだ。ラウラはほら、こんな感じだから軍服以外持ってないみたいで・・・」

ラウラを見れば、当然のように学校の制服を着ていた。ちなみに今日は学校がないので僕たちは私服だ。

ふむ、買い物に行く理由はわかったけど、それと僕のアドバイスが

「買い物？」

「うん、そう。買い物」

どう関係あるのかわからない。

「だから、一夏の好みそうな洋服を大和と僕で選ぼうってわけ」

なるほど、そういう事か。

「でもそれなら一夏を誘った方が早いんじゃない？」

僕なんかが行くよりもそっちの方がいいじゃないか。僕がそういうとラウラが口を開いた。

「嫁の奴、部屋には不在で電話も通じない。よって、ちょうどいた貴様に選んでもらおうというわけだ」

ずっと一緒にいた僕なら一夏の好みそうな女子の洋服がわかるかもしれないって考えたのか。

「大変だったんだよ？ラウラってば禁止されているＩＳの一部機能を使おうとしてさぁ」

はぁ、と１つため息をついてシャルロットが言う。

「し、仕方なかろう。いない一夏が悪いのだからな」

・・・なんだかこのままだと収まりがつかなくなりそうだ。仕方ないか。

「はぁ、わかったよ。今すぐ支度するから待ってて」

とりあえず僕は食べ終わった食器を下げて、準備する為に自室へと

戻った。

「（やった！ラウラの服選びを口実に大和とデートだ！）」

後に残ったシャルロットは内心で大和とのデートに歓喜していた。・・・もしかしたらシャルロットは意外と腹黒いのかもしれない。

部屋に戻って準備をして僕らはバスに乗って一路街へと向かった。どこかって？それはラ◯ドマークがあるあそこです。ま、それは置いといて

「「着いた！」」

バスから降りた僕らは急いでそこからはなれる。なぜかというと、バスの中でシャルロットとラウラが目立っていて注目の的だったからだ。でもまぁ無理もないと思う。２人とも美人だしプラチナだし、ブロンドだし。シャルロットなんか、終止顔が真っ赤っかだったけど。そんなこんなで僕らは店へと向かう。着いたビルは１階から７階まであって結構でかい。

「さて、どうする？」

「じゃあ上から順々に見て行こうか」

シャルロットの提案で僕らは上から見て行く事になった。曰く、１階あたりはもう秋服の売り場となっていて、夏服は上の階の方でセールまっただ中という事らしい。それをラウラに言ったら

「なるほど、戦争では足りなくなってから準備では遅すぎるからな。

備えあれば憂い無しというやつか」

うんラウラ、全然違うから。そんなラウラに突っ込みを入れつつ僕らは一件目のお店に入った。当たり前だけど、女の子のブランドってよくわからないなぁ・・・

「・・・プラチナに、ブロンド？」

入った瞬間に回れ右をして帰りたくなった。店内は女の子ばかりだし、やっぱりこの２人、目立つなぁ・・・僕らが入ってすぐに２人はまたもや注目の的となった。余談だが、実は吉良にも目がいっていた女性が多数いたのだがそこは吉良、まったく気づいていなかった。

「い、いらっしゃいませ！今日はどんな服をお探しで！？」

うわずった声で店長とおぼしき人が接客をする。

「あの、この子に合う服を探しにきたんですけど、いいのありますか？」

それにシャルロットは苦笑しながら返した。

「こちらの銀髪の方ですね！今すぐ見立てましょう、はい！」

言うなり、店長は展示品のマネキンからセール対象外の服を脱がす。その手には白いサーマルシャツが握られていた。

「ど、どうでしょう？お客様の銀髪にあわせて、白のサーマルシャツは」

持ってきたシャツは薄手で中のインナーが透けて見えるようになっており、涼しさの中に色気漂う物だった。

「むぅ、わから・・・」

「わからない、はナシで」

すごいよシャルロット。いまラウラが言おうとしてた事を先回りしたよ。そして先回りされたラウラを見れば、珍しくむくれていた。

「・・・白か。悪くないが、今着ている色だぞ」

おそらく頑張って考えてひねり出したのであろうが、いかんせん女子力というものに欠けた答えだった。店長もどう対応していいのかわからず間の抜けた返事をしてしまう。

「ラウラ、せっかくだから試着してみたら?」

めげずにシャルロットが頑張って勧める。が・・・

「いや、面倒くさ・・・」

「面倒くさい、はナシで」

またしてもシャルロットは言葉を先回りし、ラウラは今度は黙ってしまう。

そうこうしている間に店長とシャルロットはシャツに合うインナーとボトムスを選んでいった。・・・僕来る必要なかったんじゃない

かな?と思ってしまう。隣のラウラを見れば、店長と一緒になって嬉々として色々選んで行く2人を見てもう抵抗しても無駄と悟ったのか、その光景を眺めるだけだった。

「ラウラ、覚悟を決めたんだね」

「まぁ、シャルロットがあそこまでなればな」

そんなこんなでシャルロットが洋服を何着か持ってきて、ラウラは試着室へと押し込まれたのだった。

「それにしても、前から思っていたんだけど・・・」

ラウラが試着室へとこもっている時に僕はシャルロットに話しかける。

「ん?なに?」

「いや、シャルロットが女の子って形で再入学したら名前が少し長くなっちゃって、僕としては愛称っていうのかな?この際呼びやすい呼び名みたいなものを決めたいと思うんだけど・・・」

「へっ!?」

突然の吉良の申し出にシャルロットは驚いた。もちろん『シャルロット』と呼ばれるのが嫌なわけがないが、こう、特別な呼び名というのはとても魅力的だった。

「あ、嫌だった?それなら・・・」

「ううん！嫌じゃないよ！よ、よければお願いできるかな？」

シャルロットの剣幕に若干たじろぎながら吉良は考えた。その反対にシャルロットは吉良の言葉を一日千秋の思いで待っていた。

「そうだね、『シャル』なんてどう？呼びやすいし、親しみやすいし」

シャルロットだからシャル、なんて安易かな？と思わないでもないが、シャルと呼ばれたシャルロットの頭の中は花畑状態だった。

「（シャル、シャルかぁ・・・うふふ／／／それって、僕と大和だけの２人だけの・・・特別な呼び方」

ただいま心の中のお花畑では３頭身のシャルロットが４人手を繋いで踊っている。

ーしばらくお待ちくださいー

とりあえず吉良はシャルを正気に戻しにかかる。未だに花畑状態にシャルに向けて目の前で手を振るが一向に帰ってこない。そこへ

「私が色々考えている時に、何をいい雰囲気になっている？」

シャ！っと勢いよく試着室のカーテンを開けて、ラウラがジト目でこちらを見ていた。おかげでシャルも正気に戻った。ってあれ？

「ラウラ、制服のままじゃないか」

カーテンを開けて出てきたラウラは制服を着ていた。

「えぇと、もしかして、気に入らなかった？」

「いや、そうではない。そうではないのだが・・・」

心配そうに聞くシャルに、どこか歯切れの悪いラウラ。これはもしかして

「シャル、もしかしたらラウラは好みの洋服が見つかったのかも」

僕がシャルに耳打ちする。そしてラウラを見ればコクっと頷いて

「も、もうすこし可愛いのがいいな」

そう言った。先ほどとは打って変わったラウラの返答にシャルは一瞬ぽかんとするも、すぐさま持ち直して洋服選びに戻る。シャルはラウラの要望を聞き、様々なアイテムを選んでいく。

「ブレスレットにそっちの肩が出てるワンピース。それから・・・」

まるで自分の事のように洋服を選んで行くシャル。そして、もう一度ラウラに洋服を渡し、試着室のカーテンを閉めた。さて、どうなる事やら・・・

「うわぁ、きれい・・・」

どこからかそんな声が上がる。店内はもはや異空間のようだった。

店内の誰もが息をのんでいた。

「妖精みたい・・・」

そして、その空間を作り上げているのが着替え終わったラウラだった。さすがのラウラも店内中の視線を浴びていて照れくさそうな顔をしている。

「うん、やっぱりラウラよく似合うよ！」

服を選んだシャルが満足そうな顔でそう言った。ラウラの今着ている服は肩が露出した黒のワンピース。それには部分部分にフリルが付いていてかわいらしさを演出している。そしてラウラの超俗的な雰囲気と黒という色がまさにベストマッチしていた。よって、言葉通り妖精さながらの格好だった。

「大和はどう思う？」

ラウラを見てシャルが聞いてくる。

「うん、似合うよ。一夏的にもドストライクだと思う。やっぱりラウラに黒は映えるねぇ。ってこれは一夏に言ってもらった方がいいかな？」

「なっ！？」

ニヤっと僕は笑いながらラウラをからかうと、ラウラは真っ赤になってうつむいてしまった。僕はラウラの反応に満足しつつ、店内を見渡すと、シャルが僕らを放って何かを買っているのが見えた。

「シャル、何を買ったの？」

「ふわぁ！」

清算を終えたシャルに話しかけると、シャルはびくぅっ！としてこちらを向く。

「いや、何でもないよ、なんでも。あはははは」

絶対に何かありそうだったが、シャルが答えてくれなかったので結局わからずじまいだった。そして僕らはラウラの清算を済ませて店をあとにした。

「でも、なんでせっかく買った服を着ないで出ちゃったの？」

店を出てすぐシャルがラウラに聞いた。そう、ラウラは買った服を着ないで制服のままでいたのだった。別段珍しい事ではないが、制服のままうろつくのもどうかと思ったので、シャルは着ていく事を勧めたのだがラウラが拒否したのだ。

「シャル、きっとラウラは真っ先に一夏に見てほしいんだよ」

「なっ！？」

「あぁ、なるほど」

僕の言葉に焦るラウラと納得するシャル。

「・・・もう我慢ならん！大和！お前とは一度きっちり話しをしようと思う！」

それなんてO☆HA☆NA☆SIフラグ?当然のごとく僕は拒否しといた。

あぁ、ラウラをからかうのって以外と楽しいかも。そんな事を思いながら僕らはお昼を食べに向かった。

「それで、このあとはどうするつもり?」

カフェのオープンテラスでお昼を食べながら僕はシャルに聞いた。

「そうだねぇ、アクセサリーなんかを見たいかも」

キランとこちらを狙う猛獣のような目をしてシャルがこちらを見ていた。えっと、何か嫌な予感がするんだけど・・・

「大和にアクセサリーを買ってもらいたいなぁ・・・この間のセシリアみたいに」

「ぐはぁ!」

「ま・さ・か、忘れたなんて言わないよね?」

まさか、すっかり忘れてたとは言えない。僕は苦し紛れに目線を外へずらす。あぁ、休みだからか人が多いなぁ。つられて2人も外を見る。どうやら成功したかな?とそのとき路地から出てきた女性と、歩いていた少年がぶつかるのが見えた。

「あ、すいません!」

当然、ぶつかった人はすぐに謝る。それに対して路地から出てきた女性は謝りもせず・・・

「誰か！警備員を呼んで！暴行されたわ！」

と言った。ちょっと待て。今のどこに暴行されたところがあった？だがしかし、あまりにも女性が騒ぎ立てるのでわらわらと野次馬が集まってきてしまっていた。

「ごめん2人とも、ちょっと行ってくる」

たまらず僕はテラスを飛び越える。

「僕も行くよ！」

「私もだ！」

僕に続くようにして2人もついてきた。未だに女性はわめき続け、周りの野次馬、特に男は哀れみの目で少年を見ていた。

「ちょっと待って下さい！あなたはぶつかっただけでしょう！？どこに暴行の要素があったんですか！？」

僕は野次馬の中を割って入り、女性に言った。

「女にぶつかった時点で暴行よ！」

「ふざけるなぁ！あんたはいったい、なんなんだ！」

ぶつかった少年が噛み付くようにそう言う。

話にならない。一回会話しただけでそれがよくわかった。それにしてもこの人どこかで・・・ってこの人！前に僕に水着をかたづけるように言ってきた人じゃないか！

「そういえばあなたは！・・・そうよね、同じ男ですものね。しかし醜いですわね」

フン、と女性は鼻で笑う。相手も僕の事に気づいたようだ。だが、ここにいるのは僕だけではない。

「僕も見ていましたよ。あなたとこの人はぶつかっただけで、暴行なんかされていなかったじゃないですか」

「そうだな、同じ女として恥ずかしいぞ！恥を知れ！」

援護射撃とばかりに2人も証言する。

「な、な！」

僕らの証言を聞いて、野次馬がブーイングを始める。結局駆けつけた警備員に3人で証言し、事無きを得たのだった。

「ありがとうございました！」

野次馬が去って少ししたあと、少年がぺこっと頭を下げた。

「いや、僕らで力になれて良かったよ」

「あ、自己紹介がまだでしたね。俺、シン・アスカっていいます。

シンって呼んで下さい」

「僕は吉良大和。」

「シャルロット・デュノアです」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

僕らは交互に挨拶を交わす。どうやらシンは僕らより1つ下みたいだった。

「まったく、男には生きにくい世の中ですよね・・・」

「まぁね。でも、あんなのばかりじゃない事が救いかな?」

「そうですね」

あははと笑いながら僕らはすぐに打ち解けた。少し話したあと、シンが立ち上がる。

「俺、そろそろ行かなきゃ。大和さん、シャルロットさん、ラウラさん、今日はありがとうございました。機会がありましたら、また会いましょう!」

「うん!」

そう言って僕らは互いに握手し、別れた。そして、その別れた後ろ姿を見ながらシンは呟く。

「男には行きにくい世の中だけど・・・そうさ、俺はやる。俺がこ

の腐った世界を叩き切ってやるんだ！俺の相棒、デスティニーとともに・・・」

そう呟いた彼のクセのある黒髪に覆われた耳には、一枚の赤い羽を模したピアスがあった。待機状態のデスティニーがきらりと光ったのだった。

騒動を終えた僕らは再びオープンテラスのカフェへと戻ってきた。ふと、シャルロットが隣のテーブルにいた女性に気がつく。

「どうすればいいのよ・・・まったく」

つられて僕も見れば、年は２０代後半だろうか。かっちりとしたスーツを着ている女性がため息をついていた。何か悩み事でもあるのだろか？

「ねぇラウラ、大和」

シャルが意味ありげにこちらを見る。

「おせっかいは程々にな」

ラウラは言っても無駄だと思いながらも一応言っておく。・・・僕はまた面倒に巻き込まれる予感がした。

「あの、どうかされました？」

そのままシャルは女性へと近づいて行き、声をかけた。声をかけられた女性はビックリしながらもシャルを見て、次に僕とラウラを交

互に見て、最後にもう一度シャルを見てこう言った。

「あ、あなたたち！バイトしない！？」

「「「はい？」」」

面倒ごとに巻き込まれた瞬間だった。

「僕たちは・・・どうして、こんなところに、来てしまったのだろう？」

「大和、何やってんの？」

気にしないで、ただ言いたかっただけです。さっきシャルが話しかけた女性に連れられて僕らはとある店にやってきていた。話を聞くと、なんでもいきなり従業員の２人が辞めたらしい。それも駆け落ちで。さらに、それにショックを受けたもう１人の女性店員が辞めてしまい計３名もの従業員が辞めてしまったのだ。

「でもね、今日はとっても大切な日なの！本社から視察の人が来ちゃうのよ！だからお願い！あなたたちに今日だけアルバイトをしてほしいの！もちろんアルバイト代は払うから！」

「ハァ・・・事情はわかりました」

連れられてきた女性のお店というのがこれまた特異な喫茶店だった。女性はメイドで男は執事の格好で接客するという、いわゆるメイド＆執事喫茶だった。

「ところで大和はいいとして、どうして僕が執事の格好なんですか？」

着替え終わったシャルがやや控えめにそう言う。

「だってほら、似合うじゃない！そこいらの男なんかよりずっと綺麗だもの！ほら、隣の彼氏さんもなんか言ってあげなよ」

「彼氏！？」

「別に彼氏じゃないですけど、よく似合ってるよ」

「大和！？」

似合っていると言われた瞬間シャルの顔は真っ赤になった。

「あら、彼氏さんじゃなかったの？でもこっちの彼もかなり格好いいから2人の執事姿はお似合いね！」

「（うわわわわ）」

大和に似合っていると言われ、店長には2人はお似合いと言われたシャルの頭の中では再び3頭身のシャルが手をつないで踊っていた。もはやお決まりのパターンである。いつの間にかシャルは自分が紳士服を着ていた事なんて気にならなくなっていた。

「ふむ、着替え終わったぞ」

後ろからメイド服に着替え終わったラウラが出てくる。言わずもがなラウラもすごくよく似合っていた。

「てんちょー！早く手伝って～」

僕らがバックヤードで最終確認をしていると、ホールリーダーからヘルプの声が聞こえた。そろそろ行こうと思った時、僕はこのお店の名前をまだ知らない事に気がついた。それを店長に言うと笑みを浮かべてスカートをつまんであげ、大人びた容姿に似合わないかわいらしいお辞儀をしてこう言った。

「お客さま、@クルーズへようこそ」

「デュノア君、４番テーブルに紅茶２つお願い」

「わかりました」

バックヤードで簡単な説明を受けたあと僕らはホールへと出た。シャルがカウンターから飲み物を受け取ってトレーへ乗せ、テーブルへと運んで行く。

「お待たせしました、紅茶、お２つです。ミルクと砂糖はいかがいたしますか？」

ただ運んで出す。それだけだというのに動作に気品がにじみ出ていて、他のスタッフはため息さえ出す人までいたし、そんなシャルにお客さんもほとんどが見入っていた。さて、もう１人はというと・・・

「水だ、飲め」

シャルとは真逆だった。それホントに接客？と言いたくなるような物だったが・・・

「あ、あの子、超いい」

「罵られたい、見下ろされたい、差別されたい！」

・・・一部の人たちに大人気だった。

「吉良君、６番テーブルのオーダーお願い」

「はい！」

おっと、僕も働かないと。言われた通りにオーダーを取り、厨房へと伝える。

「あの！金髪の美少年執事さんを１つ！」

「美少女メイドさんをぜひ！」

「茶髪の美少年執事さんを！」

えっと、僕らは売り物ではないんですが・・・他の２人もどう反応したらいいのか困っていたが、店長が間に入ってうまく捌いていってくれた。そこはさすが本業、店長の指示は的確で通常の５割増の客数をうまく捌いていっていた。そんな混雑が２時間ほど続き、さすがの僕らも精神的な疲れが見え始めた頃、店内はようやく落ち着きを見せ始めた。

「ふぅ、やっと落ち着いたかな？」

シャルが一息つきながら言う。

「そうみたいだね。あ、すみません店長。少しトイレに行ってきていいですか？」

「ええ、店も落ち着いてきたしいいわよ」

僕は店長の許可を得てトイレへと向かう。でもまさか戻ってきた時にあんな事になるなんてこの時は思いもよらなかった。

「ふぅ・・・」

トイレからも戻ってきて店内に入ろうとすると違和感を感じた。さっきまであれだけ賑やかだった店内がなぜか妙に静かすぎたのだ。

「（どうしたんだ？）」

不審に思いドアの隙間から中をうかがうと、そこには男3人がソファを占拠していた。しかもその手には・・・

「（アレは拳銃！鞄にはお金。ってことは銀行強盗の犯人か！）」

まずい事になった。いま店にいる人は全員人質って事だ。下手に出て行くとけが人が出てしまう恐れがある。外では警察が説得を試みているが、成功する確率は低いだろう。少し事態の成り行きを見る必要があると思っていたとき、思いもよらない人物が動いた。

「（ちょっ!?ラウラなにやってんの!?）」

物陰に隠れて事態を見ていた僕の目には、ラウラが犯人に向かって行きテーブルに水を置いた。と思ったら水を空中にぶち上げ、氷を指で弾いて狙い違わず男たちに当てた光景が飛び込んできていた。さらには・・・

「（シャルまで!?）」

もうどうにでもなれと思ったのか、シャルまで飛び出していき犯人を制圧しにかかる。しかしそこはさすが代表候補生、受けてきた訓練の中にＩＳ以外の対処法も習っていたのかどんどん犯人を制圧していってる。

「ふ、ふざけるなぁ!俺がこんなガキどもに!」

まだ残っていた一味のリーダーが拳銃を構える。さて、ここらへんが出番かな?そう思った僕はドアを開けて一気にリーダーの後ろへと回り込んだ。

「やめてよね、本気で戦ったら君たちが僕らにかなうわけないだろ?」

かかと落しの要領で拳銃を落とし、相手の右手を背中へと回し一気に組み伏せる。

「な!?貴様、どっから!?」

突然の僕の出現に思考が追いついていないリーダー。だがもう遅い。

「「チェックメイト」」

犯人が所持していた銃をシャルたちが奪い、リーダーの眉間に突きつけたのだった。

「ど、どうか命だけはお助け・・・」

ものの１０分程度で強盗犯たちはお縄となったのだった。

結局お縄となった犯人一味は警察に連れられて連行されていった。そこからは早かった。僕らは頷きあうと店をあとにしようとした。あれだけの事をしたのだ。警察絡みの面倒ごとに巻き込まれる事は必至。そしてそれを千冬さんに知られたらどうなるか、考えただけでも恐ろしい。

「あ！ちょっと待って！」

店を出ようとした時に店長から呼び止められる。

「なんですか？」

「その様子だと忘れているみたいね。はい、働いた分のお給料よ。今日はありがとう。今度来た時はたっぷりサービスするからね。ほら、面倒ごとは私に任せてさっさと行きなさい」

僕らは店長にお礼を述べて店をあとにした。まるで自由に吹く黒き一陣の風のように・・・

お店を出た僕らはシャルに引っ張られてアクセサリーショップへと

来ていた。シャルは何か僕に似合う物を買ってと言ったので、僕はシンプルなシルバーのブレスレットを買った。そのおかげでバイト代は消えてしまったが、シャルが超ご機嫌なのでよしとしようかな。そんなこんなで僕らの買い物は終わった。

夕食後、僕は途中で会った一夏と共にシャルの部屋へと向かっていた。というより一夏に誘われたのでついて行く事にしただけだが・・・

コンコン。一夏が部屋をノックする。すぐに許可が下りたので入室すると、そこには面白い光景が広がっていた。

「シャル、なんて格好しているの？」

「大和！？」

「お、なんか2人とも変わった服を着ているな。黒猫と白猫だ」

「一夏か！？」

僕の目に飛び込んできた光景。それは、猫の着ぐるみのようなパジャマを着たシャルとラウラだった。

「（えええええ！？い、今まで急に部屋にくる事なんかなかったのに、なんで急に！？ていうかどうして今日！？）」

突然の吉良の登場にシャルの頭の中はグルグル渦巻いていた。

「悪かったな、今日ＩＳ関係の用事があって電話に出れなかったん

だ」

一夏がラウラに謝る。

「う、うむ、嫁として殊勝な心がけだな。褒めてやろう」

対するラウラは腕組み仁王立ちでそう言うが、いつものような覇気はなかった。まぁ肉球にねこみみで覇気を求めても無理な事だが・・・今のラウラは可愛さ2割増しだった。

「「ぷっ」」

吉良と一夏が同時に吹き出した。

「（うわぁあ！笑われた～。絶対子供っぽいって思われたよぅ）」

笑われたと思ったシャルは今すぐにでも布団に潜りたい気分だった。が、次の吉良の一言で今度は顔が真っ赤に染まった。

「なんていうか、2人とも可愛いね」

「か、かわいい？」

「そうだな大和。シャルもラウラもよく似合っているよな」

「っ！？」

その言葉を聞いて2人は天にも昇る気持ちだった。

「そうだ、今日はちょっとしたお土産を持ってきたんだ」

そう言って一夏が取り出したのは@マークが書かれた包み。開けてみると中に入っていたのはココアクッキーだった。

「い、一夏。ちなみにこれはどこで・・・？」

背中に嫌な汗が流れるのを感じながら吉良が尋ねる。

「おう、@クルーズっていうお店の前を通りかかったら配ってたんでもらってきた。なんか事件があったらしくてそのお詫びだってさ。俺関係ないのにな」

あははと笑いながらクッキーを広げる一夏。それを見て吉良たち3人は互いに頷きあい、これ以上追求するのをやめた。知らないのなら、知らないままでいてもらう。

「ココアクッキーか。なら、ここに子猫が2匹いる事だしホットミルクにするかな？」

「あ、一夏、僕がやるよ」

「ん？いや、その手じゃ無理だろ」

一夏に言われてシャルは自分の手が今肉球になっていた事に気がつく。

「じゃあ僕が」

そう言って吉良がスッと立ち上がる。それを見て『子猫』と呼ばれた2人は頷きあう。

「ねぇ大和、この服、可愛い？」

「うん、可愛いよ」

「一夏はどうだ？」

「ああ、可愛いと思うぞ。やっぱりラウラに黒は似合うな」

あ、それ昼に僕が言った言葉だ。

2人が照れくさそうに喜んでいると、それからすぐに吉良がホットミルクを持ってきた。

夏の夜、けれども飲み物はホットミルクで4人はお茶会を開く。

黒猫と白猫が1匹ずつに王子様が2人の不思議なお茶会だった。

余談だが、にくきゅうハンドの両手でマグカップを持ってクピクピとミルクを飲む2人がとても可愛かった。

第２２話：僕とシャルと@クルーズ（後書き）

新たな登場人物としてシン・アスカを出しました。

彼は後々に主要人物の誰かと戦う事になります。

第２３話：幕間（前書き）

今回は４巻と５巻を繋ぐ話となっています。何やらキナ臭くなってきました。

第２３話：幕間

お茶会を終えた僕はシャルたちの部屋を出て自室へと続く廊下を歩いていた。だが、自分の部屋のドアの前にたどり着くとなぜか千冬さんが立っていた。

「こんばんは、織斑先生」

「ああ、吉良、お前に話があるんだ」

「話・・・ですか？」

「そう、フリーダムの事についてだ」

千冬さんのこの言葉で場の空気が一変する。

「それはドアの前でする話ではありませんね。どこかへ行きますか？」

「そうだな、いやその前に・・・」

千冬さんはくるっと回ると廊下の角の方へと話しかけた。

「尾行とは感心せんな、そこにいるのはわかっている。こそこそしてないで出てこい」

僕も角の方へと目を凝らす。すると、角から苦笑いしながら１人の美少女が出てきた。

「あちゃー・・・バレてました？」

「やはりお前か、更識」

更識と呼ばれた彼女はパンっと扇子を開きながらこちらにやってくる。ちなみにその扇子には『尾行失敗』と書いてあった。

「織斑先生、よくわかりましたね」

僕なんてまったく気配すら感じなかったですよ。

「なに、こいつ特有の厭らしい気を発していたのでな。わかるさ、嫌でもな」

「先生、なにげにひどくありません？」

厭らしいと言われた彼女が反発するが、まったくどうでもいいといった感じである。

「ところで彼女は誰です？」

「うわ！今のには傷ついた！」

わからなかったので質問すると、更識さんはよよよと泣き崩れる。ご丁寧にも泣きまね付きで・・・ころころと表情が変わる人だ。というのが僕の彼女に対する第一印象だった。

「彼女は更識楯無（さらしきたてなし）。２年生で生徒会長だ。あぁ、あとロシアの代表だったな」

「はぁ・・・え!?」

生徒会長?ロシア代表?・・・見えない。

「今何か失礼な事を考えなかった?」

「いえまさか」

・・・そういえば入学式にいたような気もするが覚えていない。なにせそれどころではなかったのだから。何だか遠い昔の事のように思えるから不思議だ。あの頃はこんな風になるなんて思っていなかったからなぁ・・・と感傷に浸る吉良だった。

「それで、生徒会長がわざわざ織斑先生を尾行したのはなんでですか?」

「それはなぜだろうね。吉良大和君」

冷たい空気を纏う彼女。言外に、君が知る必要のない事だよと言っているように思えた。

「大方、国の事情と家の事情というやつだろう」

「ひどい織斑先生!ミステリアスな女っていう設定にしてたのに・・・」

さっきの雰囲気はどこへやらだった。そんな彼女を見て千冬さんはため息を1つ。

「ハァ・・・これから私と吉良は大事な話があるんだ。付いてくる

なよ」

「教師と生徒なんて不純だと思いますけど・・・」

バシン！久しぶりに聞く小気味のいい出席簿アタックの音。どうでもいいけど一体どこから取り出したんだ？

「そんなわけあるか馬鹿者。いいからついてくるなよ小娘・・・吉良、行くぞ」

スタスタと歩き始めた千冬さんの後ろについて行く。途中で後ろを向けば更識さんはこちらを見ているだけでついてくる様子はなかった。

吉良たちが去ったので廊下には更識が1人ぽつんと立っている。

「ちぇ、尾行は失敗。さすがは織斑先生っていったところね。まぁいいわ、次はあの子と会ってみようかな」

くるっと吉良たちとは正反対の方向へ歩き出す。途中でパンっと開かれた扇子には『織斑一夏』と書かれていた。

「やれやれ、アイツにも困ったものだ」

「あはは、すごい人でしたね・・・」

あの生徒会長と別れたあと僕らは学園地下にあるラボへと来ていた。今この場にいるのは僕と千冬さんだけである。僕らは先ほどの光景を頭に浮かべて苦笑する。がそれもここまで、本題に入ろう。

「それで、フリーダムのなにが？」

「単刀直入に言おう。お前のフリーダムにリミッターを付けさせてもらう」

「リミッター？」

「そうだ。私の目測だが、お前のフリーダムの性能は第４世代としてカテゴライズされている白式や紅椿よりも頭１つ飛び抜けていると思っている。核駆動ならなおさらだ。それと、技術提供をしないというお前の考えに私も賛成だ。絶対にＩＳがスポーツから戦争の道具に変わってしまうだろう」

「はい」

「つまり、フリーダムを白式や紅椿などと同じくらいにダウンさせて各国の、ひいては国際ＩＳ委員会の目を欺かせるんだ。特に国際ＩＳ委員会は凝り固まった思考を持った奴らばかりだ。もし男のお前が現行ＩＳのどれをも上回る力を持っているならば奴らは容赦なく奪いにくるぞ」

「それでリミッターですか」

「そうだ、やはりというか国際ＩＳ委員会がフリーダムについてのスペックデータを要求してきている。こちらは私がストライクのデータをベースにして白式と同じくらいの出力だと報告しておく」

「武装等についてのデータは」

「それも心配はいらん。ストライクのデータをチェックした時に気づいたのだが、ビーム兵器等とＰＳ装甲に関するデータはブラックボックスとなっていて誰も知らない。よってフリーダムもそうだろう。だからこんな武装があるという事しか出来んな。まぁもっとも、わかったところで作れるとは思えないがな」

ははははっと笑いながらそういう千冬さん。

つまり、ストライクとフリーダムについては何一つわからなかったっていう事か。でも合宿中に束さんが色々調べていたような・・・

「でもそれならむしろ、桁違いのスペックを見せて手出しさせないようにした方がいいのでは？」

「それこそ愚の骨頂だ。お前は今から自分の命を危険にさらさせたいのか？」

いわれてハッとする。いくら外部からの力が及ばないここでも万全ではない。危険因子がいるなら命を狙うだろう。強すぎる力を示せば敵を呼ぶだけ、か。それに、示せばおそらく何らかの理由をつけて（危険すぎる物だとかで）フリーダムは取り上げられてしまうだろう。

「３年だ。奴らが油断している３年でどうにかする方法を見つける」

「わかりました。では具体的にどんなリミッターを？」

「まず機体の速度を落とす。普通の速度が瞬時加速（イグニッション・ブースト）並だからな。それと武装の威力を落とす。ＰＳ装甲はそのままだ。これでフリーダムは白式よりちょっとだけ強い程度になるはずだ。それと、リミッ

ターの解除権は私が持つが滅多に許可しないのでそのつもりでな」

「わかりました」

さて、ここでまとまった事を一回整理してみよう

・フリーダムにリミッターを付ける事
・国際ＩＳ委員会には報告書を提出
・３年のうちに自由国籍権を取得し、どの国にも属さない事としたい。←これは希望である。

「でもどうしてここまでするんですか？バレたら織斑先生も危ういですよ？」

僕が疑問に思っていた事を言う。

「なに、国際ＩＳ委員会の思い通りに行くのが気に食わないだけだ。アレは時を重ねるごとに腐敗していっているからな。それに・・・」

それに？

「生徒を守るのは教師の役目。弟分を守るのは姉の役目だ」

そう笑って言った千冬さんの顔は忘れられない。

「さて、話もまとまったし夜も遅い。もう戻っていいぞ」

「はい、ありがとうございました」

「くどいようだが国際ＩＳ委員会には気をつけるようにな」

「わかりました」

そういって僕は部屋から出た。あのあとすぐにフリーダムにはリミッターが付けられたのだが、どの程度変わったのかわからないから、明日一夏と模擬戦をやろうかな？

「本当に気をつけなければならない組織がまだあるが、今はまだ知る必要はないか・・・」

吉良が出て行ったラボで千冬の独白が響いたのだった。

第２３話：幕間（後書き）

今回の話は短かったので、明日か明後日あたりにできればもう１話あげたいと思ってます。

これから文化祭の話に向けて色々考えていきたいです。

ではまた！

第２４話：学園祭（出し物決定編）（前書き）

ＰＶ２７万、ユニーク２万６千、お気に入り１７０件以上。

読んで下さっている方々、ありがとうございます。

これからもＩｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｅｅｄをよろしくお願いします！

第２４話：学園祭（出し物決定編）

「じゃ、よろしく一夏」

「あぁ」

場所は第三アリーナ。この日吉良は先日フリーダムにかけられたリミッターがどの程度なのかチェックする為に、一夏と模擬戦をやる事にしたのだった。両者はすでにＩＳを展開し、アリーナの中央にいた。ちなみに模擬戦の話を聞いていつものメンバーがついてきたのは言わずもがなである。

「行くよ！」

「来い！」

最初に動いたのは吉良だった。フリーダムをハイマットモードにし、ビームサーベルを展開し一夏へと突進していく。

「（速度はまずまず、もちろん遅くはなっているけれど・・・）」

「へ、やられるかよ！」

吉良が突進してきたのを見て一夏も雪片弐型を構え、両者は打ち合う。彼らは移動しつつすれ違い様に何度も打ち合っていく。

「（ビームサーベルについては目立った変更はないね）」

いったん距離をとってビームサーベルを戻し、今度はビームライフ

ルを手に取る。

「照準・・・入った！」

セシリアとの特訓のおかげか吉良の射撃能力は格段に上がっていた。吉良は昔、箒のところで剣を習っていたので剣術も出来るのだが、さぼっていたせいでいささか腕は落ち、今となってはむしろ苦手だった射撃の方が得意となっていた。

「雪羅！シールドモード！」

吉良の的確な、それでいて時折かく乱させてくる射撃に一夏はたまらず雪羅をシールドモードにする。白式の前に展開したそれは吉良のビームをことごとく無効化していった。

「・・・なら！」

腰の部分の折り畳まれていたレールガンを展開し、一夏に叩き付ける。レールガンは実弾兵器なのでこれは無効化されずに一夏にダメージを与えていく。加えて一夏の白式はセカンドシフトした事によって、大量のエネルギーを消費する機体となってしまい、白式のエネルギー残量は徐々に少なくなっていった。

「っくそ！仕方ねぇ、これで決める！」

一夏の雪片弐型が変形しエネルギー刃が展開される。零落白夜の発動だ。続いて一夏は瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使って一気に接近してきた。セカンドシフトした事によって現れた大型スラスターが白式の最高速度を大幅に上げていた。

「っ・・・・・・！」

接近してくる一夏に対して、こちらもハイマットモードからの瞬時加速（イグニッション・ブースト）になり吉良はビームサーベルを構える。

「うぉおおお！」

ガキィン！・・上段から振り下ろされる雪片を横で受け止める。刹那、吉良はシールドを捨て去り、空いた左手でもう一本のビームサーベルを逆手で引き抜き一夏の右腕を破壊する。

「んな！？」

そのまま吉良は高速でビームサーベルを操り白式の四肢を攻撃していく。その瞬間、白式の絶対防御が作動し吉良の勝ちが決まった。

「やっぱ強いな大和は」

戦いを終えてピットに戻った一夏が吉良に話しかける。

「でも一夏、性能上は互角なはずなんだよ？」

リミッターをかけて、だけどね。と吉良は心の中で思う。

「ていうか、アンタのＩＳが燃費悪すぎるのよ」

２人の戦いを見ていた鈴が客観的な分析をする。いつの間にか回りにはいつものメンバーがいたのだった。『白式の燃費が悪い』これ

は一夏も思っていた通りなので反論が出来ない。

「それに一夏のは雪片1本だけど、僕のは2本だから数のアドバンテージもあるね」

1本で攻撃を捌き、もう1本で攻撃する。

「じゃあ今度はアタシたちとやろうよ。ずっと見てるだけじゃつまんないし・・・」

「そうだね、僕もやりたいかな」

「し、仕方ありませんわね、このセシリア・オルコットが大和さんの訓練に付き合って差し上げますわ！」

やいのやいのと言い出す彼女たち。でも、その申し出はありがたかったので僕らは自分のＩＳのチェックの為に申し出を受けたのだった。

訓練が終わって僕らはそれぞれ昼食をとっていた。さっきの訓練のおかげであらかたフリーダムについての事はわかってきた。全体的に見れば出力を落としている事によって武装の威力が落ちていたり、速度が遅くなっていたのだ。ただ遅くなったといえども速度は白式並みで十分に速い部類に入る。その白式の操縦者である一夏は白式のあまりの燃費の悪さに閉口していた。

「ハァ・・・同じパワーアップなのに吉良のとじゃ色々と違いすぎるな」

「だから燃費が悪すぎるのよ。ただでさえシールドエネルギーを削

る武器を持っているのに、それが二つに増えたんだからなおさらでしょ」

むぅ・・・と一夏は唸る。白式は背部スラスターの大型化に伴い、速度は上がったがエネルギーも大量に消費するようになってしまっていた。そこへ零落白夜と雪羅。今の一夏の優先事項はエネルギー運用についてだった。

「なら一夏は箒と組んで戦えばいいんじゃない？」

「なにっ！？」

そこへ飛び出した吉良の爆弾発言。

「ほら、確か白式と紅椿ってお互いが対になる存在なんでしょ？ならそれが一番効率的じゃないか」

「って言ってもなぁ・・・」

吉良に言われて一夏はちらっと箒を見る。突然の事に箒は口をぱくぱくさせていた。

「わ、私は・・・！いや、一夏！私と組め！」

「なんでだよ・・・ペアマッチがあるわけでもないのに」

「そうだ、それにこいつは私と組むんだ。嫁だからな」

ラウラそれ違うから。

「何言ってんのよ。コイツはアタシと組むの。甲龍は近接も中距離もこなすから白式と相性がいいのよ」

僕の一言を引き金にして『私だ！いやアタシだ！』なんて争いが始まった。言わなけりゃよかったと思ったが後の祭りである。そんなこんなで昼休みは過ぎていった。

「やっぱり無駄に広いもんだ」

昼食を食べ終えた僕らは午後からのＩＳ実戦訓練の授業の為にロッカールームで着替えていた。さっきの一言は改めてここを見回した一夏のつぶやきである。確かに男２人の為に教室１部屋はあろうかというロッカールームは広すぎる。着替え終わった僕は、同じく着替え終わった一夏が白式のコンソールを呼び出して調整しているのをぼんやりと眺めていたのだが、後ろから一夏に魔の手が伸びてきていた。

「だ～れだ？」

突然の事に混乱する一夏。

「はい、時間切れ」

そういって解放された一夏は後ろを振り向いてその人物を確認するが

「だれ？」

見覚えのない人物だった。リボンの色が２年生だという事くらいしかわからなかった。

「こんにちは、更識先輩」

吉良が挨拶する。

「大和知っているのか？」

「うん、この間会ったからね。彼女は更識楯無先輩。２年生で生徒会長でロシアの代表なんだって」

「な、なんだってー！？」

僕の言葉に衝撃を受ける一夏。そんな中、更識先輩は扇子をパンっと開いてイタズラっぽい笑みを浮かべた。

「また会ったね吉良君。でも急がないと君たち織斑先生に怒られるよ」

「「え？」」

嫌な予感がしたので僕らは振り返って壁にかけられた時計を見る。・・・すでに授業開始から３分が経過していた。

「ぬあああああ！やばい、やばい！」

もう１度元凶の人物を見ると、もうそこには誰もいなかった。

「・・・遅刻の言い訳は以上か？」

地獄の教師、織斑千冬。そこには慈悲の心など一片たりともない。

「いや、あのですね？だから、見知らぬ女生徒が・・・」

「ではその女子の名前を言ってみろ」

「更識先輩でした」

僕の言葉に織斑先生の表情がピクッとわずかばかり動いた・・・気がする。

「そうか」

途端にその場の空気が軽くなったような気がした。その日僕らは授業に遅れたにもかかわらず情状酌量という奇跡を得たのだった。

翌日、ＳＨＲと1限目の半分を使って全校集会が行われた。内容は今月の中程にある学園祭についてである。

『それでは、生徒会長から説明させていただきます』

生徒会の役員の声が響き、体育館の中は静まる。そして壇上で挨拶をしている人は昨日も見た人だった。

「（更識楯無先輩、吉良が言った通り生徒会長だったんだな）」

そんな事を思いながら一夏は壇上の人物に目を向けた。

「さて、昨日会った人もそうじゃない人もこんにちは。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

にっこりと微笑みを浮かべて言う彼女は同性をも魅了するらしくあちこちから熱っぽいため息が聞こえてきた。

「では、今月の一大イベントの学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入します」

閉じられた扇子を慣れた手つきで取り出し、横へとスライドさせる。それ合わせるように空間投影ディスプレイが浮かび上がった。

「名付けて『各部対抗織斑一夏&吉良大和争奪戦』！」

ぱんっ！と小気味いい音をたてて扇子が開く。そして、ディスプレイには僕たちの写真がでかでかと映し出されていた。

「え・・・？」

「えぇえええええええええ！？」

割れんばかりの叫び声に揺れる場内。

「静かに！学園祭では毎年各部活の出し物に投票して、上位組は特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないので・・・」

そこで会長は言葉をいったん区切る。

「彼らを一位の部活に入れたいと思います。いいですか？彼らをペアで、です」

「うおおおおお!!」

再度上がる雄叫び。ていうか僕らは了承してないのに・・・

「やってやる!やぁってやるわ!」

「今日からすぐに準備するわよ!秋季大会?放っとけあんなん!」

いや、秋季大会よりも間違いなくこっちのほうがあんなんになると思うのですが・・・

2人そろって目を見合わせたあと、壇上にいる会長に目を見やると

「パチっ」

ウィンクを返された。・・・いやどないせぇと?

「よしよしよし!盛り上がってきたぁ!」

混乱する僕らをよそにどんどん盛り上がっていく彼女たち。

「いい!?最高で1位、最低でも1位よ!」

かくして初耳&未承諾のまま、僕らの争奪戦は始まったのだった。

僕らの意思は・・・

同日、放課後の特別HRでは学園祭の出し物を決める話し合いで盛り上がっていた。・・・男の僕らを除いて、だが。というのも

1、ウエディング喫茶（人生の墓場）

2、写真館（織斑×吉良）

3、織斑と吉良のホストクラブ

上げられる候補はどれをとってもアウトだった。ウエディング喫茶は僕らが新郎となって～とか冗談じゃないし、写真館の横のカッコ書きは見たくない、ホストは（ｒｙ。・・・つまり

「「却下」」

僕と一夏の声が重なる。

『えええええええ！？』

途端に大合唱が始まるがこれだけは譲れない。

「あ、アホか！誰が嬉しいんだこんなもん！」

その大音量に負けじと一夏も抗議する。

「私は嬉しいわね！断言する！」

「そうだそうだ！女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「彼らは共有財産である！」

等々、彼女らはなおも食い下がる。ちなみにこの場をおさめられそうな唯一の人物はここにはいない

『時間がかかりそうだから職員室に戻る。あとで報告に来い』

そういって職員室に引っ込んでしまったのだった。

あーでもないこーでもないと、どんどんヒートアップしていく彼女たち。だが、そんな中突如としてラウラが発言をする。

「メイド喫茶はどうだろう?」

その言葉に僕だけでなくクラスの全員がぽかんとしている。

「ウエディング喫茶よりは受けはいいだろう。それに飲食店なら経費の回収もできる上に休憩場としての需要もあるはずだ」

いつもながらの淡々とした口調だが、言っている事がいつもとはあまりにもかけ離れている為、みんな理解に時間を要した。

「え、えーとみんなはどう思う?僕としてはいいと思うんだけど」

とにかく僕は反応を見る為にみんなに促してみる。だが大多数の女子はいまだに衝撃から抜け出せていないみたいだった。

「いいんじゃないかな?大和と一夏はホールに執事の服を着て出てもらえばいいよね」

その言葉にクラスの女子がピクッと反応した。

「執事・・・いい!」

「それでそれで！？」

「メイド服はどうする？私、演劇部衣装係だから縫えるけど」

一気に盛り上がるクラス。そんな中一夏がこっそり僕に耳打ちする。

「（ホントにいいのか？大和）」

「（ここら辺が妥協するところだと思う。これ以上渋って変な方向に行ったら目も当てられないし、ちょっと変わった喫茶店だと思えばどうにかなるよ。少なくともウエディングをやるよりは・・・）」

「（・・・そうだな）」

よし、これで僕らも腹をくくった。

「メイド服についてはツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

今日はラウラに驚かされっぱなしだ。その言葉を聞いてクラスのみんながラウラに注目した。

「・・・シャルロットと大和がな」

「え、えっとラウラ。それってこのあいだの？」

「うむ」

その言葉を聞いて顔を見合わせる僕ら。ラウラは間違いなく@クルーズでの事を言っていた。

「き、聞いてみるだけ聞いてみるけど、駄目でも怒らないでね？」

不安げに言うシャルロットに、『怒りませんとも！』と断言するクラスの女子。

かくして、1年1組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶ヨーロピアン』となったのだった。

第２４話：学園祭（出し物決定編）（後書き）

吉良が一夏の白式を攻撃した時の格好は、種デスでフリーダムがアスランのセイバーをバラバラにしたところを思い浮かべていただけたらわかりやすいと思います。

次回は吉良とシャルがセシリアを連れてメイド喫茶へ服を借りに行く話と、楯無との決闘。という話になると思います。

ではまた次回！

第２５話：お茶会と決闘（前書き）

更識会長、本格始動

第２５話：お茶会と決闘

「ですから！実弾兵器を送って下さい！」

『その要求には応えられません。セシリア・オルコット、あなたのブルー・ティアーズはＢＴ兵器の実働データをサンプリングする事です。実弾装備のデータは対象外です』

「わかっています！えぇ、わかっていますとも！・・・あぁもう、融通の利かない！」

６限目の授業が終わってクラスがおしゃべりに夢中になっている中で、セシリアはその輪から外れ隅の方で携帯片手に本国イギリスのＩＳ整備部門担当者としつこく交渉しているのだった。

『そもそもどうして、急に実弾兵器などと？』

「うっ・・・」

答えに詰まるセシリア。理由は単純にして明快。ＢＴ兵器しか装備していないブルー・ティアーズでは一夏に勝てないからだ。一夏の白式に装備されているエネルギーを無効化する楯を貫通できないからどうあっても勝てないのだ。

「（わたくしだけが、わたくしだけが！）」

燃費の悪い白式にただ１人負けているとあって、セシリアのプライドはかなり悲惨な物になっていた。そんな心境を知ってから知らずか、電話の相手はさらに追い討ちをかける。

『セシリア・オルコット、いいですか？あなたの役目はＢＴ兵器の実戦データ収集です。それでは』

ぶつっ。電話が切れて、トーン音だけがむなしく響く。思わず床に携帯電話を投げつけそうになりセシリアは右手を振り上げる。

「せ、セシリア。どうしたの？」

「・・・なんでもありませんわ」

声をかけてきたのはシャルロットだった。そしてその隣には吉良がいた。

「（一夏さんの白式が第２形態になっても一番影響がなかったのはシャルロットさんですわね。それに大和さんのフリーダムもレールガンを搭載しているから大丈夫・・・わたくしだけですわね）」

装備のほぼ全てが実弾のために影響のないシャルと、レールガンを持っている為に対抗手段はある吉良のＩＳにセシリアは嫉妬した。

「（現在の成績では順に、ラウラさん、大和さん、シャルロットさんが同列、鈴さん、箒さん、一夏さんと来てわたくし・・・）」

また深いため息が漏れる。何気なく呼び出したＩＳのデータを見て、『ＢＴ兵器稼働率３７％』の数字にさらにため息が漏れる。

最大稼働時はビーム自体を自在に操れるというが、今のセシリアには机上の空論にしか思えなかった。

「ところで、2人はこれからどちらへ？」

気持ちを切り替える為にセシリアは2人に尋ねる。そして今更ながら自分の思い人がライバルである、シャルロットと一緒にいるのに慌てたのだった。

「僕たちはこれから学園祭で使う服を貸してもらえるか、ちょっと交渉してくるんだ」

吉良が答える。

「そうだ！セシリアもいっしょにどう？」

「いいんですの！？」

「うん、何だかセシリア元気なさそうだったし気分転換にでも行かない？」

「わ、わかりました。それでは一緒に行かせていただきます」

思いがけず想い人から誘われたセシリア。それまで考えていた事はどっか彼方へと飛んで行ってしまったのだった。

「（う～！大和って、大和って！）」

ちなみに自分と2人きり。つまり勝手に、大和とデートできると思っていたシャルが心の中で地団駄を踏んでいたことに2人は気付かない。

そしてセシリアを含めた3人は1軒のお店、@クルーズの前にいた。

「（何だかこの間の出来事を思い出してきちゃった）」

そう吉良は1人思い出す。この間の出来事と言うのはもちろん、偶然ここで臨時のバイトをしていた時に強盗犯がやってきて、シャルとラウラと吉良で犯人一味を取り押さえた出来事である。

「ところで、大和さんとシャルロットさんはこのお店とどういう関係が？」

疑問に思ったセシリアが聞いてくる。まぁ確かに普通に考えたら関わりがあるとは思えないだろうからね。

「まぁいいじゃん。セシリア。それよりも早く中に入ろうよ」

適当にシャルがごまかして僕らは中に入る。

「いらっしゃいませ。って、ひさしぶりね、あなた達」

ドアを開けて中に入ると店長が迎え入れてくれた。

「今日はお客さんとしてきたの？それとも・・・またバイトしにきてくれたとか？」

「バイト？」

店長はにこっと笑いながらそう言う。セシリアはバイトと言われて？マークを浮かべていた。これ以上話しているといらん事を話されてしまうと思ったのですぐにシャルが事情をかいつまんで話す。

「なるほど、学園祭の出し物に店の服を使いたいという事情はよくわかったわ。いいでしょう！2人には手伝ってもらった事もあるし、貸してあげるわ」

「「あ、ありがとうございます！」」

よかった。割とすんなり行ったみたいだ。あとは洋服を学園に持ち帰るだけ・・・

「だけど・・・代わりにって言うわけじゃないけど、1つお願いがあるのよ」

世の中そう、うまく行く物でもないと思った瞬間だった。

「また・・・これを着て働く事になるなんて・・・」

着替え終わり鏡の前で身だしなみをチェックをしながら僕は呟いた。そう、店長のお願いと言うのは『病欠してしまった男のアルバイトの代わりとして今日だけ働いてくれないか？』というものだった。『男の』ときている時点でセシリアとシャルは無理。とくれば男の僕がやる事になるのだが

「まさかお客さんとして2人が残るなんて・・・」

問題はここだった。てっきり2人は洋服を受け取って帰るものだとばっかり思っていたのだが、突然僕のバイトが終わるまで待つと言い出してお客さんとして1つのテーブルに通されたのだった

ｓｉｄｅ　セシリア&シャルロット

最初、吉良がバイトのお願いをされた時は2人ともビックリしていたが、吉良がそれを承諾した事によって2人の思考が切り替わった。

「わかりました。服をお借りするのですから、やらせていただきます。セシリアとシャルは洋服を受け取って学園まで持って行ってくれる？」

吉良が2人にそう言うが、2人とも考えている事は1つだった。

「（シャルロットさん）」

「うん、セシリア）」

ちらっと目配せし合い軽く頷く。

「いえ！大和さんが残るのでしたらわたくしも終わるまで待ってますわ！」

「・・・え？」

「そうだよ！それに、まだ外も暑いしここで少し休憩して行こうかな？」

「シャルまで！？」

2人は互いに頷いてまるで最初からそう決まっていたかのようにそう言った。きっと、今の2人の頭の上には『ｓｕｃｃｅｓｓ』の文字が光り輝いているだろう。もしくは『計画通り』と言ってニタリ

と笑う誰かさん？

「ならあなた達はお客様としてあそこのテーブルに案内するわね。ほら、吉良君は着替えてきなさい」

店長にさぁ、さぁ！と背中を押されて僕は更衣室へと向かう。ちらっと後ろを向いた時に店長がニタリと笑っていたのは僕の錯覚ではないと思う。その後店長は２人を、吉良がどの位置にいても絶対に見えるテーブルに案内したのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「・・・まぁ、考えても仕方ないか」

そういって吉良はロッカーの扉を閉めて更衣室から出たのだった。

「（出てきましたわよ！シャルロットさん）」

「（うん、やっぱり大和の執事服って似合うね）」

「（わたくしの専属執事になって下さらないかしら？）」

「（今日は僕たちに仕える執事だよね）」

こんな事を言いながら２人は吉良を見る。シャルは２回目だが初めて見るセシリアは、あともうちょっとで鼻血を吹き出すところだったがなんとか耐えたのだった。２人はとりあえず飲み物を注文しようとして吉良を呼ぶ。

「お、お決まりでしょうか。お嬢様」

「「（ブハっ！）」」

「だ！大丈夫ですか！？」

前言撤回。２人ともお嬢様と呼ばれただけで鼻血を吹いてしまった。

「だ、大丈夫です。僕はアイスティーとチーズケーキで」

「わたくしもですわ。わたくしもアイスティーとこちらのスコーンを」

「かしこまりました。アイスティーが２つにチーズケーキとスコーンですね」

オーダーを復唱してキッチンへと伝える。

「大変だな、吉良も」

「あ、鮎沢さん・・・まったくどうしてこんな事になってしまったんでしょうか？」

「それぱっかりは私に聞かれてもなぁ、とそれよりも碓氷！できたのか？」

オーダーを通して少し鮎沢さんとキッチンの碓氷さんと言葉を交わす。ちなみに碓氷さんも男で、キッチンのメンバーが足りなかったので急遽そこにいたという理由でアルバイトさせられたのだった。

ちょっとどうかと思ったので鮎沢さんに言ったら

「アイツは変態だからいいんだ！」

というわけのわからない理由で押し通された。まぁ、碓井さんも「みさちゃん」とか言ってからかって楽しんでいるあたり、深くは気にしなくていいんだろう。と僕は結論付けた。

キッチンから渡された飲み物とケーキ類を受け取って僕は彼女達がいるテーブルへと向かう。

「お待たせいたしました。アイスティーとケーキ、それとスコーンです」

かちゃりとテーブルにそれぞれの物を置いていく。そんなこんなで僕は3時間ほど@クルーズでバイトをしていったのだった。ちなみに、ずっと2人以外にもたくさんの視線が僕に突き刺さってきていたのが気になってしょうがなかった。

「・・・なんだかすごく疲れたよ」

バイトが終わって僕らは学校の校門をくぐりながらこう言った。バイトによる体力的な疲れ、というよりは精神的な疲れのほうが大きかった。

「ま、まぁまぁ。おかげで学園祭に使う服を借りれたんだからよかったよ」

「そうですわ（それにわたくしたちだけ、一足お先に大和さんの執事姿を見られましたし）」

「・・・・」

何だかもう疲れて突っ込む気力もなかったのでそのまま放置する事にした。その後僕らは問題なく寮までたどり着いて別れた。

そして自分の部屋へと続く廊下を歩いている時に今度は違う意味で疲れる相手と出会ってしまったのだった。

「・・・今なんだか変な事考えなかった？」

「いえまったく。こんばんは、更識先輩。それと・・・一夏？」

僕が自室の前にたどり着いたら更識先輩と一夏に出くわした。まいったなぁ・・・厄介ごとに巻き込まれる事確定だ。

「一応聞いとくけど、どこに行くの？」

「一応ってのが気になるが、生徒会室だ」

僕の言葉にムスッとしながら答える一夏。でも生徒会室へ？なんで一夏が？

「これから一夏君とお茶するんだけど、ちょうどよかった。吉良君も来なさい」

「はぁ・・・」

「その返事は肯定？それとも否定？」

一夏の方を見れば犠牲者を増やしたいのか先輩に隠れて手招きして

いた。・・・断る事は、できなそうだ。

「行きますよ・・・」

「うむ、よろしい。素直な吉良大和君はおねーさん好きだよ」

更識先輩みたいな人に『好きだよ』といわれて少しドキドキしてしまう。

「や、大和でいいですよ」

そしてそんな照れを隠す為にこう言ったのだった。

「そうか、では私も楯無と呼んでもらおうかな?もしくはたっちゃんでも可」

「楯無先輩で・・・」

さすがに年上の人をたっちゃんなんて呼べなかったので名前で呼ぶ事にする。そして僕は2人のあとについて生徒会室へと向かうのだった。

「ただいま」

「おかえりなさい、会長」

生徒会室に入ると出迎えてくれたのは3年生の女子だった。眼鏡に3つ編み、いかにも『お固いが仕事はよくできる』という印象を当てる人だった。事実、片手に持ったファイルがよく似合う人だった。

これが制服ではなくスーツならなおさらだったのに。とよくわからない感想を持った吉良だった。そして、その後ろには意外な人物がいた。

「わ～・・・・・おりむ～だ～・・・」

布仏本音さんだった。今の彼女はいつも眠そうなのに、さらに眠そうだった。

「え～と、のほほんさん眠いの？」

それを見た一夏が疑問を投げかけるが、返ってくる言葉がとぎれとぎれでよくわからなかった。

「あら、あだ名だなんて、仲いいのね」

お茶の準備をしていた3年の先輩が目を丸くし、楯無先輩がそう言った。対する一夏はすまなそうに

「いや、あのー・・・本名、知らないんで」

そう言った。って、名前を知らないからあだ名って。しかもそのあだ名がしっかりと布仏本音を縮めた物になっているのだから驚きだった。

「彼女は布仏本音さんでしょ。一夏、名前を知らないからあだ名って失礼でしょ？」

うぐっ！と一夏は言葉に詰まる。

「ひどい！てっきり私の事が好きなのだと！」

さらにそれに追い討ちをかける布仏さん。だけど笑っているからバレバレだ。

「本音、嘘をつくのはやめなさい」

「てひひ、バレた。わかったよ～、お姉ちゃん」

見かねた3年の先輩が布仏さんをたしなめるが、お姉ちゃん？

「私は布仏虚妹は本音」

なるほど、姉妹ってわけか。話を聞けば、3人は幼なじみで布仏家は代々、更識家のお手伝いさんをやっているらしい。姉妹で生徒会に入っている事に疑問を持ったが、聞けば生徒会長は最強じゃないといけないけど、それ以外なら会長権限で誰でもいいらしい。

「じゃ、お茶にしましょうか」

楯無先輩がそういったのを皮切りにして僕らもケーキと紅茶をいただく。うん、茶葉はダージリンかな？すごく美味しい。そうしてケーキを食べようとした時、布仏さんが一心不乱にケーキのフィルムをなめている事に気付く。

「・・・やめなさい本音。布仏家の常識が疑われるわ」

「だいじょうぶ、だいじょうぶっ。うまうま♪」

見かねた布仏先輩がたしなめるが布仏さんはまったく気にしてない

ようだ。

「・・・・・・」

ゴチっ！・・・思い切りグーで殴られた布仏さん。

「うぇぇ、いったぁ・・」

殴られた彼女は頭をさすっている。それが何だか小動物チックで思わず僕は笑ってしまった。

「あ～やまぴ～もひど～い。笑わないでよ～」

涙目で訴える彼女。そこで楯無先輩が間に入ってようやく本題に入るようだった。・・・かいつまんで話せば、僕らがどこの部活にも入らない事に対して色々苦情が寄せられたので生徒会として、どこかに入部させようってことになったらしい。

「（そこで学園祭の投票決戦につながるわけか）」

話はわかったのだが、そもそもの苦情が間違えていると思った。この学校は女子校でありそこに出来る部活も自然、女子を対象とした物になる。だから男である僕らが入る事は出来ないはずなのだ。マネージャーとして？無理無理、男女比１：９でどうしろっていうのさ。そんな精神衛生上よくないことはご免被る。

「でね、交換条件としてこれから学園祭までの間、私が特別に鍛えてあげましょう。ＩＳも、生身もね」

「「遠慮します」」

僕らの声が重なった。

「そういわずにどう？」

「だいたい、なんで俺たちを鍛えるんですか？」

一夏がそう言う。それに対して楯無先輩はクスリと笑った。

「それは簡単、君たちが弱いからだよ」

あまりにさらりと言われたので一夏は一瞬、なんて言われたわからなかったが、わかるにつれて段々理解してきた。そして、少し・・・少しだけムッとしてしまう。

「そんなに弱くないつもりですが・・・」

「ううん、弱いよ。むちゃくちゃ弱い。一夏君から見たら強いかもしれない大和君も、私から見たらまだまだだね」

反論を試みる一夏だが、あっさりと切り返されてしまった。

「僕も自分が強いなんて大それた事は言いませんが、それほど弱くもないつもりです」

「うぬぼれないで。あなたがそう思えるのは自分の力ではないの。そのＩＳの性能のおかげだっていうのを忘れないで」

「・・・・・・」

そう言われてはさすがの吉良も黙るしかない。だけど言われっぱなしでは納得できないのもまた事実。

「じゃあ、勝負しましょう。俺が負けたら従います」

「僕もです」

「うん、いいよ」

にこりと笑ったその顔は『罠にかかった』という表情をしていた。

・・・・・やってしまったような気がした。

「さて、最初はどっちからやる？なんなら2人いっぺんにでもいいよ」

場所を道場に移して僕らは向かい合う。楯無先輩は『2人同時でもいい』とか言っていたけど僕らにもプライドって物がある。女の人1人相手に男2人がかりで相手をするわけにはいかない。

「なら最初は僕が行きます」

そう言って僕は彼女と対峙する。・・・すぐに僕らのプライドなんか粉々になるんだけど、この時の僕らには知る由もなかった。

「行きます」

「いつでも」

楯無先輩はその顔に浮かべた笑みを崩さない。涼しげなそれは、纏う雰囲気も手伝ってミステリアスな事この上ない。

「（まずは小手調べだ）」

基本に忠実なすり足移動。そして楯無先輩の腕をとるが・・・

「がはっ！」

一瞬にして返され、そのままたたみに打ち付けられた。幸い受け身をとる事が出来るので大丈夫だったけど、ものすごい衝撃に肺の中の空気が全て出たような感じだった。

「まずは一回」

そして自分の首筋、頸動脈を先輩の指がなぞった。その気になれば僕を殺傷する事も可能だという事を見せて、先輩は僕から離れる。

「これが実戦だったら・・・もう終わってるって、そう言いたいんですか！？あなたは！？」

「そうよ。ホントだったら君、この一撃で死んでるもの」

「っ！！」

・・・冷静になるんだ。相手は千冬さん並だ。考え無しに突っ込んでちゃさっきの繰り返しになるだけ。

「ふぅー」

大きく息をはき、全身から力を抜いて頭の中に揺らぐ事のないロウソクの火を思い浮かべ、僕は意識を冷たく低く集中させていく。この人相手に長期戦は無理だ。だから、今自分が持っている全ての力を使って、仕留める！

「む。本気だね」

「・・・・・・」

僕の無言の返答に、先輩もまた無言で答える。

「（初撃で倒す！）」

先輩は強い。それは事実だ。だけど、それは動き出したらの話。いかに先輩といえども、『静』を上回る『動』で攻めれば僕にも勝機はあるかもしれない。だから僕は篠ノ之流古武術が奥義「零拍子」ーー相手の1拍子目よりも早く仕掛けるーーで動いた。

「！」

その早さに驚いたのか、楯無先輩は一歩後ずさった。・・・もらった！

ずどん！

「がはっ！」

真正面から突っ込んだ僕は、先輩の下がった足が着地するのと同時に思いっきり投げ飛ばされた。

「（ともえ投げ！？）」

またもや肺の中の空気が全部持っていかれたような感覚がする中、僕はすぐに起き上がりざまに必至に先輩の足首を掴む。

「あら？」

「今度こそ、もらった！」

足首を力任せに真上へと投げ、空中でひっくり返った楯無先輩の胴をとる。

「あまーい」

確実に両脇を捕らえたはずなのに、先輩はあろう事か右腕をたたみに突き出し、それを軸にしてカポエラキックを放ってきた。

「ぐぁっ！」

「おしい、攻め方はよかったんだけどね」

『生徒会長は最強であれ』前に楯無先輩から聞いた言葉だが、それが伊達でも酔狂でもない事を思い知る。

「そ、生徒会長は伊達ではないの」

だけど負けられない！こうなってしまっては意地だ。男の意地。それだけは曲げられない！

「でやあああああ！」

吹っ飛ばされたのを強引に腕と足で着地し、すぐさま飛び出す。そしてそのまま、殴りかかる勢いで先輩につかみかかった。・・・すると・・・

「あっ・・・」

「きゃん」

胴着が思い切り開かれて、ブラジャーに包まれた先輩の豊満なバストが・・・て！？

「大和君のエッチ」

「えっ！？」

言い訳をしようにもこれは１００％僕が悪い。そして僕は動揺からか、掴んでいた腕を落としてしまった。し、しまった！

そして次の瞬間、僕は空中コンボという物を体験する事となった。

何発打ち込まれたかなんてわからない。ただ、１０発以上打ち込まれた事はわかるのだが、それ以上から先は気絶してしまったからだ。

「おねーさんの下着姿は高いわよ？」

くすっ、と楽しそうな笑い声を最後に聞いた気がする。この代償は本当に高かった。

第２５話：お茶会と決闘（後書き）

夏休みに入っても遅筆なせいでまったく投稿スピードが上がらない・・・

すいません。がんばって次話も書いていこうと思います。

第２６話：吉良、とても疲れる（前書き）

生徒会長が本領発揮です。

第２６話：吉良、とても疲れる

ｓｉｄｅ　一夏

ざあざあ、ざあざあ、と風に揺れて木々が音を奏でる。

気がつけば俺は青空の澄み渡る草原に１人立っていた。おかしいな、俺は確かさっきまで道場にいたはずなのに・・・

こつっという蹄の音がしたので後ろを振り向けば、そこには純白の馬がいた。

「お前は・・・あのとき、白騎士と共にいた・・・」

白騎士と共にいた一頭の白き馬。その馬はしきりにある場所をさしていた。

「俺に、そこに行けと？」

馬は何も言わずに走り出す。俺は無意識に走り出してその後ろを追いかけた。そのまま走っていくと井戸があって、その前にとても美しい人がいた。

「お前が・・・連れてきてくれたんだな」

その純白の馬を目で見やりながらそう呟き、その美しい人を見る。きれいな黒髪を高めの位置で束ね、白と赤の巫女装束に身を包んだ、美しい人。俺は、その人からなぜか目をそらす事が出来なかった。そして、その人が振り返る。・・・が俺にはその顔が見えない。美しいとはわかるのに、その顔が誰なのかを理解できない。

「あなたは、いったい・・・」

心は張りつめていき、やがて・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「～～～♪～～～♪」

耳に優しい鼻歌を聴きながら一夏は目覚めた。

「あら、お目覚め？」

まだハッキリしない意識の中で目を開けてみれば、先輩と目が合った。

「ここは・・・？」

「ん、一夏君の部屋だよ。あのあと、２人ともダウンしちゃったからここまで運んできたの。といっても大和君はすぐに目が覚めたんだけどね」

「そうですか・・・」

まだ目が覚めない。起きようとは思うのだが頭が何かとても柔らかい物に支えられていて、起きようとする意思を根こそぎ奪っていくようだった。・・・そういえばこの体勢って・・・ちょっとまて！

「な、な、なにしてるんですか！？」

妙に柔らかくて、心地よくて、最高の枕だと思っていたら！しかも

なんかいい匂いしたし・・・

「ん？ひざまくら」

ぐあ。その通りだが！その通りなんだが！なんでそんな『おかしな事を聞くね？』って顔をされないといけないんだ！

「だって、大和君は目が覚めたらすぐに自分の部屋に戻っちゃってつまんなかったんだもの」

「さいですか・・・」

って、そんな事より今すぐにこの体勢から逃れないと大変な事になると俺の中でエマージェンシーが鳴り響いている。そう思った俺は起き上がろうとするが、それよりも先に先輩によって『がし！』と抑えられてしまった。そしてまたあの柔らかい膝に・・・

「一夏！織斑先生から聞い・・た・・・」

がらっとドアを開けて一声を放ったのはラウラだった。彼女は俺と先輩の様子を見て、その表情がみるみる無表情へと変わっていった。・・・考えるまでもない。俺は、終わった。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ、目標を駆逐する」

その目標が俺なのか先輩なのかはわからないが、ラウラはＩＳを展開しながら静かにそう言った。

「うわ！うわわわわ！」

どんどんＩＳが展開されていき、まさに切り掛かり始める寸前で俺の前に先輩が立ちはだかった。危ないと思ったのも一瞬で、次の瞬間には先輩は、持っていた扇子を開き、ピンと張った紙でラウラの頸動脈の頸動脈を押さえたのだった。

「なっ・・・!?」

あまりの鮮やかな手並みと早業に俺とラウラは驚きを隠せない。すでに絶対防御の保護があるとはいえ、殺すだけなら先輩の方が早かっただろう。ラウラもそれを感じ取ったのか、奥歯を噛み締めながらＩＳを解除した。

「うん、素直でよろしい」

そう言ってぽんぽんとラウラの頭をなでる先輩。そんな事をされ慣れていないラウラは赤くなりながらもされるがままだった。

「・・・なにやってるんですか？」

騒ぎを聞きつけたのだろう。入り口を見れば、今度は呆れ顔をした吉良が立っていた。

「ん、大和君も。ちょうどよかったわね。じゃあ、行きましょうか」

「へ？行くってどこへ？」

尋ねる一夏。その問いに先輩はにっこりと笑って

「第３アリーナよ」

こう言ったのだった。

「あら？大和さんと一夏さん？」

「え、大和？」

僕たちが第３アリーナに着くとセシリアとシャルに出会った。２人とも訓練をやっていたのかＩＳスーツを着て休んでいるところだった。２人は僕らがここにやってきた事で不思議そうな顔をしていた。しかし、僕の隣にいる楯無先輩を見るなりセシリアの眉がツイっと上に持ち上がるのが見えた。

「・・・・・そちらの方はどなたですの？」

いきなり敵対心をあらわにして彼女を見やる。

「せ、セシリア！生徒会長だよ！」

逆に、隣のシャルはそのセシリアの態度にヒヤヒヤしていた。

「あぁ・・・そういえば、どこかで見たような顔ですわね」

なおも止まらないセシリアの不機嫌。それをどうにかシャルがなだめようとするのだが、そのことごとくを粉々にしていた。・・・シャルって苦労人体質なんだね・・・

「まぁそう邪険にしないで。あ、私はこれから一夏君と大和君の専属コーチをする事になったから今後も会う機会があるわね」

セシリアの態度に楯無先輩は構わずそう告げた。これに驚いたのはラウラを含めた女の子3人である。

「え、どういうこと!?」

「大和さん!」

「一夏!」

シャル、セシリア、ラウラの順に僕らに詰め寄ってくる。

「ちょ、ちょっと待って!これはその・・・勝負の結果なんだ!」

「そう!勝負のな」

詰め寄ってくる彼女らに後ずさりつつ僕らは言い訳じみた言葉を発する。

「そうよ、負けたら言いなりっていうね」

それに追い討ちをかけるかのごとく楯無先輩がそう言う。この言葉を聞いてさらに詰め寄ってくる彼女達。結局、彼女らをなだめるのに相当に時間を使う事となってしまったのだった。ところで、どうして僕らはここにきたんだったっけ?と当初の目的を忘れてしまう吉良たちだった。

やがて落ち着いてきて、どうして僕らがここにきたのかを思い出し、楯無先輩指導のもと僕らの訓練が始まった。

「それで、訓練って何をやるんです？」

シャルとセシリア、それぞれＩＳを展開し終えて楯無先輩に聞く。

「うん、まずはシャルロットちゃんとセシリアちゃんに『シュータ
ーフロー』で円状制御飛翔（サークル・ロンド）をやってほしいんだ」

えっと、確か射撃の戦闘動作だっけ？僕のは射撃武装がメインだから
らいいとして、一夏は・・・と一夏の方をちらっと見ると、そもそ
も一夏はその言葉の意味が分かっていないみたいだった。きっと今
頃『倫敦がどうした？』とか考えているに違いない。

「わかりました。でも、大和はいいとしてこれが一夏の役に立つの
かな？」

シャルも同じ疑問を持ったので口に出す。

「それはね・・・」

「それは白式の第２形態に射撃能力が追加されたからか？」

先輩の言葉にかぶせるようにしてラウラがしゃべった。

「鋭いね。でもそれだけじゃないんだなぁ」

トントンと扇子で手を叩きながら楯無先輩が続ける。

「射撃で重要なのは麺制圧力でしょ？だけど連射できない大出力荷
電粒子砲はどちらかといえばスナイパーライフル、つまり一撃必殺

の武器になるの。けれど、一夏君の射撃能力は大和君のそれと比べて大きく劣るわ。だから射撃戦には向かない」

さりげなーく一夏の駄目出しをしてる楯無先輩

「だから、あえて・・・」

「近距離で叩き込む」

またしてもラウラが先輩の先を言う。

「ん、またしても鋭いね。ラウラちゃん」

ぱんっと扇子を開いてラウラを褒める楯無先輩。よく見ると、その扇子には『見事』と達筆で書かれていた。一体いつの間に書いたのだろうか？

「ラウラちゃん・・・」

ラウラちゃんと呼ばれた彼女は心ここにあらずだった。

「さて、説明も済んだところで2人ともお願いね」

『では、始めます』

『一夏さん、大和さん。どうぞしっかりご覧になって下さいね』

アリーナではシャルとセシリアが向かい合って、徐々に加速し始め、射撃を開始する。円運動を行いながら不定期な加速を行って射撃を回避する。それと同時に自らも射撃を返しながら、決して減速する

事はない。そんなハイレベルな訓練に僕らは思わず見入ってしまっていた。

「「これは・・・」」

「うん、2人ともすごさがよくわかったんじゃないかな？あれはね、射撃と高度なマニュアル機体制御を同時に行っているの。回避と命中の両方に意識を割きながら、ね。これは機体を完全に自分の物にしていないと出来ないんだよ」

「（マニュアルによる機体の制御と射撃。つまり複数の同時思考か）」

・・・頭が痛くなってきた。

「君たちはね、機体だけが強くても意味無いの。とにかく必要なのは経験、積み重ねだよ」

なるほど、これは今の僕らにはとても難易度が高い訓練だ。

「じゃ、一夏君はこれを教えていくから準備して」

一夏は？

「あの、僕もこれをやるんじゃ？」

「え、誰もそんな事は言ってないよ。大和君はこっち」

そう言って楯無先輩が指差した方を見れば、大量のバルーンが不規則に移動をしていた。

「これは・・・？」

「大和君のフリーダム、複数の敵を同時に狙えるマルチロックオンシステムなる物があるんだって？すごいねこれ。でも、そういうシステムを使うには相手の動きを予測して、適切に狙っていく訓練が必要かなって考えたの。だから、大和君の訓練は、不規則に動くバルーンの動きを予測して、それを狙う。つまり、移動の予測と射撃の同時思考をやってもらうの。あ、ちなみにバルーンには適度に攻撃するように設定してあるから回避も忘れずにね。どこぞの、戦場で棒立ちになるようなアニメ設定はないから」

なんてメタな発言もしつつ楯無先輩はにっこり笑った。つまり、バルーンの動きを予測して狙いを定め、攻撃を避けつつ自分の攻撃を当てる。あれ？一体いくつの事を考えなければならないんだろう。確かにロックオン中に攻撃を当てられてたらやられるのはわかるけど、果たして僕にそれを処理できる能力があるのか・・・吉良の複数同時思考の訓練も難易度が高いのだった。

訓練を始めて2時間。本日は初日という事もあって軽めにするという先輩の一言でもって本日の訓練は終了した。ちなみに先輩はもういない。

「・・・これが・・・軽め？」

ゼイゼイと言いながら吉良が呟く。

「軽め・・・らしいぜ・・・」

隣の一夏の息も絶え絶えだ。

吉良の訓練は思っていた通り、いや思っていた以上に大変だった。バルーンは不規則に動くので動きを予測するのは難しくまた、ロック出来てもバルーンが攻撃してくるのでそれを避けると、せっかくのロックが外れてしまうのだった。

一夏にも・・・色々あったのだが、割愛させていただく。

「と、とにかく部屋に戻って休もうぜ」

「う、うん」

そう言って僕らはシャルとセシリアに肩を貸してもらい、部屋への道をゾンビのように歩いていったのだった。

「じゃあ大和、お疲れ」

「うん、お疲れ」

扉の前で僕らはそう言って、まず一夏が扉をあけた。すると・・・

ｓｉｄｅ　一夏

「お帰りなさい、ご飯にします？お風呂にします？それとも、わ・た・し？」

バタン！・・・ドアを閉じて1秒、状況を整理する。えーと、現在地、1年生寮、俺の部屋の前、表札に『織斑』の字を確認。よし、間違ってない。間違ってないぞ。

「（さっきのは夢か幻だろう。でなきゃ楯無先輩が裸エプロンで俺の部屋にいるはずがない。隣の大和が気の毒そうな目で俺を見てる気がするけど、俺の気のせいだ。そうに違いない）」

そう思った一夏はもう一度自分の部屋の扉を開ける。

「お帰りなさい。私にします？私にします？それともわ・た・し？」

「選択肢がない！」

一夏が吠える。

「あるよ、１択なだけで」

俺の部屋で待ち構えていたのは裸エプロンの楯無先輩だった。な、何を考えてるんだ！

「ご愁傷様、一夏」

大和がかわいそうな物を見る目で俺を見た。くそ！今からでも遅くないから俺と変われ！

「無理」

吉良はそんな一夏の心情を察したのか、一言無理と呟いて自分の部屋を開けて・・・閉めた。ん？何があったんだ？？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

バタン！・・・今度は僕が自分の状況を整理する事となった。現在

地、1年生寮、僕の部屋の前、表札に『吉良』の字を確認。

「（さっきのは夢か幻に違いない。きっと僕の開け方がいけなくて違う次元の扉が開いたに違いない。うん、きっとそうだ）」

そう思いながら再びドアを開ける。

「・・・やっぱり僕の私物がない！」

開けたのは確かに僕の部屋なんだけど僕の私物が全てなく、綺麗さっぱり撤去されていた。なに？どういうこと？？

「あ、大和君の荷物ならこっち」

「「えっ？」」

「今日から一夏君と、大和君と、私でここに住むの」

「「・・・・・・は、はぁあああ！？」」

「いやぁ、みんなに自慢できるなぁ。1年のイケメン男子2人を侍らせて一緒に寝泊まりできるなんて・・・しかも大和君にとっては初めての女になるのね」

「いや、あの、ちょっと・・・ここって1年生寮ですよ？」

問題はそこではないけど、一夏も僕も相当混乱しているみたいだ。

「生徒会長権限」

「それ、職権乱用ですからね！？」

つっこむ吉良。だが、生徒会長権限というジョーカーは覆らない。

「でもここって2人部屋ですよね」

それでも一夏がなんとか反撃を試みるが

「それについては大丈夫。さあ、出番よ！」

「「へっ・・・？」」

先輩の声を合図に、突如スーツを着た男4人が現れてベッドをくみ上げていく。そうして出来上がったベッドは、2つのベッドの間にすっぽりと収まったのだった。

「真ん中が私で、右が一夏君、左が大和君。どう？これで完璧でしょ？」

出来上がった光景を見て言葉が出なかった。隙間なくぴったりと3つ並んだベッドで僕らが寝る。考えただけで頭が痛い。どうにかして先輩を追い出せないものかと真剣に考える。

・・・考えたが数秒でやめた。なぜなら、すでに私物が準備万端にセッティングされていたからだ。

「（段ボール箱とかそういう次元じゃなくて、すでに荷ほどきが終わってる）」

「「はぁぁぁ・・・」」

僕らは深くため息をついて、同時に自分の魂まで落ちるんじゃないかというくらい低迷した気持ちになった。

「お？もういいの？」

「あきらめました。というわけでちゃんと服を着て下さい」

色々あってすっかり忘れていたけどこの人まだ裸エプロンのままだったんだ。

「ん？着てるよ。ほら」

くるんっと先輩は一回転する。すると、見事に大胆な紐ビキニが見えた。

「じゃん♪水着でした～」

「「・・・・・・」」

「残念だった？」

「「そんなわけありません！！」」

絶対、たぶん、きっとそんな事はないと思う・・・

「んふふ、夏に乗り遅れたささやかな復讐なのでした」

何に対する復讐なのかと思ったが、もはや突っ込む気力はなかった。

なし崩し的に先輩と泊まる事となった僕たち。とりあえず僕は喉が渇いてしまったので購買へと飲み物を買いにやってきた。そして、その帰り道に虚(うつほ)さんに出会った。

「こんばんは、虚先輩」

「あら、こんばんは。大和君・・・・てその様子だともう振り回されているみたいね」

疲れ切った僕の表情を見て虚先輩がそう言った。

「まぁお嬢様・・・楯無さんにも色々考えがあるのよ。その全てまではわからないけど」

とりあえず、僕らと暮らす事に意味なんてないと思う。きっとおもしろいからだろう。僕らとしてはたまったものではないが。

「でも、訓練とかやってくれているのだから、好意は受け取るべきよ」

「はあ、そういうものですか」

まあ実際、訓練とかで正直助かっている部分もあるので楯無先輩の言う通りにしようかなと思う。そう結論を出すと、虚先輩がただし！と人差し指を立てて言った。

「間違いなく、毎日振り回される事になる。警戒しても、予防しても意味無いわ。だから、体力だけはしっかりね」

「・・・なるべく食事はしっかり取るようにします」

「それがいいわ。喉を通れば、だけど」

なんと不吉な事を・・・でも考えてみれば、毎日あんな事が起こると考えたら・・・やめよ、本当に喉を通らなくなりそうだ。

「それじゃ、またね」

「あ、はい。また」

そんな挨拶で虚先輩と別れると、僕は新しい僕の部屋へと向かったのだった。そして、自分の部屋のドアを開けて・・・

「そこに直れ一夏！女子を連れ込み、あろう事か破廉恥極まりない格好をさせて・・・恥を知れ！」

「どわぁあああ！アブねぇ！刀を振り回すな箒！」

「一夏君が無理矢理脱がせて・・・」

「楯無先輩！？」

いつの間にか来ていた箒と、笑顔で箒が振り回していた刀を受け止める先輩に、僕は虚先輩の言葉の意味を再確認するのだった。

その後、どうにか乱心していた箒を落ち着かせて、波乱に満ちた僕らの同居生活は始まった。

第２６話：吉良、とても疲れる（後書き）

訓練の無いように違和感があるようでしたらご指摘お願いします。訓練とか考えるのが苦手でして、とりあえずマルチロックオンを使うならこんな訓練とか必要かなと考えたのですが・・・どうでしょうか？

第２７話：学園祭開始（前書き）

累計ＰＶ３２万突破！ユニーク３万突破！感謝感謝です！

これからもＩｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｅｅｄをよろしくお願いします。

第27話：学園祭開始

いよいよ始まった学園祭。ここまで本当に長かった。楯無先輩との同居生活の事を思い出すと寿命がストレスでマッハなので思い出さない事にしておく。ただ、胃が痛くなる事この上ない経験だったのは間違いない。さて、IS学園の学祭は一般開放はしていないので開始の花火などは上がらない。しかし、生徒1人につき1枚の入場チケットが渡されるのでそれでもって外からのお客さんも来る事が出来る事になっている。そして、当の生徒達の弾けっぷりはというと・・・

「うそ!?1組であの吉良君と織斑君の接客が受けられるの!?」

「しかも執事の燕尾服!」

「それだけじゃなくて、ゲームもあるらしいわよ?」

「しかも勝ったらツーショットで写真を撮ってくれるんだって!これは行かない手はないわね!」

ご覧の通り、相当な物だった。特に僕たち1年1組の『ご奉仕喫茶ヨーロピアン』は盛況で朝から大忙しだった。

「というより俺たちが忙しいだけじゃないかぁ!」

「一夏、そこはもう諦めようよ」

あまりの忙しさに文句を言う一夏をなだめつつ接客を行う僕ら。学園に2人しかいない男がそろって接客をやっているのだ。珍しさか

らお客が集まるのも無理はないと思うけど、もうちょっとどうにかならないものか・・・

「いらっしゃいませお嬢様、こちらへどうぞ」

僕たちとは反対に、メイド服を着ている今日のシャルは本当に機嫌が良かった。

「（似合っているって褒めたからかな？それに、このあいだと違って、メイド服なのも要因の１つなのかな？）」

ちなみに接客班は僕と、一夏と、シャルと、セシリアと、ラウラと、本当に意外なのだが箒だった。いつもなら『破廉恥な！』とか言って断りそうなのに。だがまぁ、仏頂面なので接客には向かないと思う。一夏の順番待ちを聞かれた時は特に・・・

あとは調理班と雑務全般。こちらも調理やら列の整理やらで大変忙しそうだ。

「ただいま２時間待ちでーす！」

げ！そんなに！？思わずどの程度列が出来ているのか気になってしまい、ひょこっと顔を出す。ひーふーみー・・・数えられないか・・・

「あ！吉良君だ！」

そんな事をしていたら見つかってしまった。即座に列を整理していた人がやってきて僕を中へと押し込む。

「こらー！出るなって言ったでしょ！混乱度合いが上がるの！」

「すみません・・・」

「それに、お楽しみは最後まで取っておかないとね！」

「な、なんだって？」

『いいから戻る！！』

「はい・・・」

そう言われてはどうしようもないので僕はおとなしく接客へと戻った。改めて店内を見回すと、一夏が鈴の接客をしているのが見えた。

「（鈴！なんて大胆な！）」

鈴が着ていたのはかなり大胆なスリットが入ったチャイナドレスだった。真っ赤な生地に竜のあしらい。髪型は丸いぼんぼんみたいなシニョンにしていた。うん、よく似合っているけど男には目のやりどころに困る格好だよね。

「ナニヲミテイルンデスノ、大和さん」

ビクゥ！！突如背後から声がする。僕はまるで背中に氷を入れられたみたいになってしまった。

「せ、セシリア。な、何も見ていないよ？」

「ならいいですわ」

ほっ・・・・・・。

「まちがっても鈴さんのドレスを見てました、なんてあるわけありませんものね」

「ははははは、何を言ってるのさセシリア」

見てました、とは言えない。僕はそこから逃げる為に話題を変える事にした。

「と、ところでセシリア！その服似合うね！とても可愛いよ」

「か、可愛い！？ホントにそう思いますの！？」

まずい！プライドの高いセシリアにメイド服が似合うなんて、地雷だったか！？

「いや、その、うん・・・」

「そうですか・・・可愛い・・・うふふふふ」

地雷かと思ったけど、どうやらそうではないらしい。可愛いと言われたセシリアはほんのり頬をピンクに染めて、手で頬を押さえていた。

「大和さんがご主人様で、私がメイド。メイドが失敗すると、ご主人様にお仕置きされてしまうのですわ」

「・・・・・・」

「そんな、大和さん・・・いけないお仕置きは駄目ですわ」

どうやらセシリアは前に、『ご主人様とメイドのイケナイ関係』という本を読んだらしい。・・・お願いだから戻ってきて。そっちは住むところが違う。

そんなこんなで接客を続けていくと、楯無先輩がメイド服を着てやってきた。そして開口一番

「私もお茶しようかな?」

と言った。て、接客はしないんですか。そうですか。というかどうでもいいけどその格好だと、会長はメ○ド様!だよね。

「ならなぜそんな格好を・・・」

「うふ、着たかったから♪」

・・・はぁ。と一夏と僕で何回目になるかももうわからないため息を漏らすと、さらにそこにひときわ騒がしい女子飛び込んできた。

「どうもー、新聞部の黛薫子でーす。噂の吉良執事と織斑執事を取材に着ましたー」

新聞部のエース、参上。ことあるごとに僕らの写真を撮りにくるので、今では結構顔なじみである。

「あ、薫子ちゃんだ。やっほー」

「わお！たっちゃんじゃない！メイド服も似合うわね～。写真取らせてもらうわね。できれば吉良君と織斑君を左右において」

「わお、イケメンを侍らせている女ね！」

・・・僕らがイケメンがどうかは別として、どうしてこうも2年はこういうノリの人が多いんだろうか。

「じゃあ、他の子も撮りたいからメイドさん集合！」

「あ、じゃあその間は私がお手伝いするわ」

「よろしくーたっちゃん」

あれよあれよと決まっていく撮影。こうして撮影が始まった。

1人目：セシリア
「ご主人様、スマイルです」

「それ違う！」

吉良の渾身の突っ込みが入った。

2人目に一夏とラウラ。

3人目：シャル

「ねぇ大和。この服、どうかな？変じゃない？」

「うん、大丈夫。バッチリよく似合っているよ」

「執事服よりもメイド服の方がいい？」

どうもこのあいだの執事服の事を気にしているようだ。

「メイド服の方が可愛いよ」

だからシャルに自信を持たせるようにこう言った。

「か、可愛い！？」

可愛いと言われたシャルは終始ご機嫌だった。箒と一夏の撮影も終わり、そんなこんなで写真撮影は終了した。

「やー。１組の子たちは写真映えしていいわ。撮る方としても楽しいわね」

写真を撮り終わってほくほく顔の黛先輩。

「さて、２人とも校内を見てきたら？」

「えっ、いいんですか？」

突然の申し出に思わず声を上げてしまう。

「うん、いいわよ。おねーさんの優しさサービス」

「でも俺たちがいなくなると、クラスメイトからお叱りが・・・」

「それも大丈夫。私が適当にごまかしておくから」

確かに楯無先輩なら人気もあるし、大丈夫かな？

「一夏、ここは先輩の厚意に甘えよう」

「そうだな。じゃあちょっとお願いします」

「行ってらっしゃーい」

それぞれ執事服を脱いで、廊下に出る。相変わらずの長蛇の列だけど、楯無先輩が手伝ってくれているおかげで回転が速くなっているような気がした。

「あ、吉良君たちだ！」

「どこに行くの？休憩？」

「うん、まぁそんなところ」

廊下を歩いていると声をかけてくる女子に返事をしながら、僕たちは招待した人達を迎えに正面玄関へと向かう。

「ちょっといいですか？」

「はい？」

ふと声をかけられた。それも階段の踊り場で。

「失礼しました。私、こういうものです」

すっと差し出された名刺を見ると『ＩＳ装備開発企業みつるぎ　渉外担当　巻紙礼子』と書かれていた。まいった。またこういう手合いか。

「実は、我が社で開発した装備を吉良さんか織斑さんにぜひ使っていただきたいと思いまして・・・」

正直、フリーダムと白式に装備提供を名乗り出る企業は後を絶たない。特にフリーダムは未知の技術の固まりなので、あわよくばその技術データをもかすめ取ろうとする輩があとをたえない、と千冬さんがぼやいていた気がする。というかそもそも、僕らのＩＳに追加装備はできない。一夏の白式も僕のフリーダムも装備自体を嫌がるのだ。

「あー、えーと、こういうのはまず学園側に許可を取ってからお願いします」

なので断り立ち去ろうとすると

「そう言わずに！」

スーツの女性こと、巻紙さんは僕らの進路を塞ぐように前に立ちはだかった。

「こちらの追加装甲や補助スラスターはどうでしょう？さらに、今ならもう１つ脚部ブレードがついてきます！」

「いや、本当にいいんで・・・僕たちは人を待たせているのでこれで失礼します！」

「行くぞ！大和」

「あっ！」

カタログを取り出している隙に僕らはその横を素早く通り過ぎて逃げる。

「思ったよりも時間を取られちゃった。待たせているからダッシュだね」

「行くぞ」

そう言って僕らはそのままダッシュで校門へと向かったのだった。

「・・・・・・」

吉良たちが去ったあとで巻紙と名乗った女は身を正す。その顔は、いままでしていた笑顔が嘘に思えるくらいに歪んでいた。

「あー・・・失敗しちまったか。なら仕方ねぇよなぁ」

そこで彼女はいったん言葉を切って、歪んだ笑みを浮かべた。

「なら、力づくで行くしかないねぇ」

その目は、獲物を見つけて絶対に逃さないという、捕食者の目だった。

「「ふっふっふ」」

学園の正面ゲートの前で一組の男女がチケットを片手に笑いをこらえている。端から見たらカップルだが、残念ながら彼らはカップルではない。なぜならそこにいたのは、一夏と大和の友人こと五反田弾と妹の蘭だったからだ。

「てかなんでお前までここにいんだよ？」

今更ながら弾は冷や汗たらたらだった。妹に絶対にバレないように念には念を入れて隠していたチケット、そしてこの日のイベント。前述していた通り、ＩＳ学園の学祭は招待制である。入る為にはチケットが必要なのだが・・・

「ふっふっふー♪」

「なっ！それは！？」

ひらひらとチケットを振る蘭に思わず固まる弾。

「（誰だ！コイツにチケットを送ったのは・・・）」

頭の中でぐるぐると考えるが答えは出ない。弾、アホの子である。ちょっと考えればわかる気が・・・

「あそこの男子、かっこ良くない？」

「えー、私は織斑君の方がいいなー」

「ていうか、隣に彼女さんがいるじゃない」

「「（彼女（彼氏）じゃない！）」」

心の中でそう突っ込む2人であった。

「そこのあなた」

「はい！？」

ふいに声をかけられて弾はビクッと背筋を伸ばす。ここは女子校であるので男の弾がそういう反応をしてしまうのも無理もない。振り向いた先にいたのは眼鏡と手に持ったファイルがいかにも堅物イメージの布仏虚だった。

「あなた、誰の招待？一応、チケットを確認させてもらってよろしいかしら」

毎年かなりの人数の男が学園祭に許可なく入場しようとして拘束されるという事態が発生しているので、隣の蘭には目もくれずに弾に問いただす。それに弾は握ってくしゃくしゃになってしまったチケットを差し出したのだった。

「配布者は・・・あら？織斑君ね？」

「っ！？」

「え、えっと知っているんですか？」

織斑の言葉を聞いて隣の蘭の眉が吊り上がった気がしたが、弾は気

にしないことにした。

「ここの学園生で彼のことを知らない人はいないでしょう。はい、返すわね。彼女さんと一緒に来たの？」

「か、彼女じゃありません！ただの妹です！」

突然降ってわいた美人との邂逅に弾のテンションは上がり続けた。ここで蘭と彼女であると誤解され、せっかくのチャンスをふいにしたくなかったので、必至に弁解する。

「そう、妹さんだったの」

「「・・・・・・」」

「あ、あのっ！」

「？なにかしら」

「い、いい天気ですね！？」

「そうね」

会話終了。自分のセンスの無さにズーンと落ち込む弾を不思議そうに眺めながら、虚は去っていった。あとには蘭の『お兄のバーカ』という声が聞こえたのだった。

「お、いたいた。おーい、弾！・・・と、蘭？」

「おー・・・」

「い、一夏さん！」

返事をした弾は半死のような有様で、逆に一夏の姿を見た蘭はテンションＭＡＸだった。

「やぁ、蘭。来てくれたんだね」

「あ、大和さん！お招きありがとうございます！」

遅れること少し、吉良がやってきた。

「蘭にチケットを送ったのは大和だったのか！」

「そうだよ？」

「なんで蘭なんかにチケットを送ったんだ！？」

そこで吉良は弾を２人から遠ざけて、隅の方で２人で話すことにした。

「（あのね、もし、後々になって弾が一夏に会いに行っていたことが蘭にバレたら、どうなると思う？）」

「（・・・・・タラタラ・・・・・・）」

「（そこで、一夏が執事服を着て接客していたという情報を蘭がどこからか入手していたら・・・）」

「（・・・・・ダラダラダーー・・・・・・）」

「（良くて負傷、最悪の場合・・・死？）」

「・・・大和、蘭を誘ってくれて、ありがとうな」

「ううん、僕も友達の死体は見たくなかったし・・・」

話もまとまったところで2人は一夏たちと合流し、学校の中に入っていく。

「さて、まずは鈴に会いにいくか」

という一夏の提案のもと、僕らは最初に鈴のいる中華喫茶に入っていった。

「いらっしゃいませ～」

「ぶはっ！り、鈴、おま、お前、なんてカッコしてんだ！？」

「なぁ！どうして弾がここにいんのよ！」

「お兄だけではありませんよ。お久しぶりです、鈴さん」

「蘭まで！」

あぁ・・・すっかり忘れていたけど、蘭と鈴って仲が悪かったんだ。

一夏を取り合っている仲だからしょうがないけれど・・・

「チャイナドレス・・・に、似合わね～・・・ぶごっ！」

弾の言葉を聞いた鈴は即座に手に持っていたお盆を弾の顔面に投げつけた。うわぁ・・・顔面にめり込んでいる。

「お兄、似合わないのは仕方ないですよ。だって鈴さんは胸が・・・ねぇ」

「なんですってー!!」

蘭が鈴のブロックワードを言ってしまい、鈴激昂す。自分が呼んどいてあれだけど、もっと穏便に行けないもんなのかな・・・

「か、帰れ!」

「なんだよ、いってーな!あー、さっき会った可愛い人と大違いだ」

「はぁ?誰それ」

「ふっふっふ・・・教えてやらん」

「一夏、アホが壊れたわよ」

「アホって言うな!」

「元からだろ」

「お兄はアホですから」

「ちょっとみんな・・・」

「否定しろよ！！」

そんなかんじで鈴のお店で騒ぎ、時間は過ぎていくのだった。そして、シャルから電話がかかってきた。どうやら僕ら目当てで来た客が、僕らを出してくれというクレームを言ってきたので急遽戻ってきてくれというのだった。

「一夏、行こう」

「ああ！」

そう言って席を立つ僕らと、ソレにくっ付いてくる弾と蘭。まぁ、蘭は執事一夏の接客を受けたいからだよね。

1組に戻ってくるとすぐに引っ張りだこになった。ちなみに、一夏が蘭を連れて戻った時に、箒が蘭に突っかかっていくのが見えた。なんでも、蘭と箒は夏祭りの時に会ったらしく顔見知りとのことだ。と一夏は悠長に話していたが、絶対アレは仲がいいとかそんなんじゃない。一夏を巡る恋のライバルってやつだろう。

そんなこんなで僕らは1時間程度働いて、ようやくピークから解放されるのだった。

「お疲れさま、吉良君、織斑君」

「あ、鷹月さんもお疲れ」

クラスのしっかりものこと鷹月静寝さんは今日も色々と忙しそうだ。

「2人とも少し休憩してきたら？お店をいったん整えるのに時間か

かるから、1時間くらいなら大丈夫よ」

「いいの？」

「ええ、そのかわり戻ってきたら倍以上働いてもらうから。何せ2人は看板だからね」

そういうことならお言葉に甘えようと思って、僕らは向きなおる。視線の先には待ってましたと言わんばかりにシャルとセシリアがいた。そういうわけで、僕とシャルとセシリア。一夏と箒とラウラと蘭で別々で回ることとなった。ちなみに鈴は2組なのでいない。

「じゃあ行こうか」

そうして僕らは教室の外に出た。

「料理部？」

「うん、日本の伝統料理を作ってるんだって。せっかくだから作れるようになりたいなぁって思って」

相談した結果、僕は特に行きたいところがなかったので、シャルとセシリアの2人で1時間をわけて順に回っていくことにした。そして、料理部がある家庭科室へと入っていく。

中に入ってみると、ずらっと並べられた大皿に肉じゃがやおでん、その他和えもの等色々盛られていた。

「あ、これが肉じゃがってやつ？」

「そうだよ。昔は女性の必須スキルだったらしいよ」

「なぜですの？」

「なんでも、肉じゃががうまい女と結婚しろって風習があったらしい。よくわからないけどね」

「「け、結婚・・・」」

よくわからないけど、結婚という言葉を聞いて2人の顔色が変わった。そして、2人とも肉じゃがをじーっと見つめている。

もしかして食べたいんだろうかと思っていると、料理部部長らしき人がやってきた。

「おおっ吉良君だ！まさかうちにきてくれるなんて思わなかったよ。さあさあみんな、食べていってよ。特別にタダでいいわよ。そのかわりに写真を撮らせて～。あとうちに投票して？」

おっと、清々しいまでの不正勧誘だ。

「い、いえ！ちゃんとお支払いします」

「そうですわね」

そう言って2人は肉じゃがをもらう。せっかくなので僕も同じものをいただいた。

「おお、これはなかなか！」

「美味しいね、大和」

「おいしいですわ！」

しっかりとした味付けなんだが、くどくはない。よくいわれるところの『いい煮付け』ってやつだ。これは・・・

「これ、水を使ってませんね？」

「お、大和君よくわかったね。もしかして肉じゃが得意？」

「えぇ、まぁ。母に教わりましたから」

「じゃあ大和君はいい嫁になるね」

「その使い方間違ってますから！」

まさかラウラ以外にこの言葉を使う人がいるなんて・・・あと、僕の肉じゃが得意発言を聞いてなぜかシャルとセシリアが落ち込んでいるのが見えた。そんなこんなで料理部をあとにした。

次に僕らがやってきたのは音楽室だった。音楽室と言ってもただの音楽室ではない。オーケストラがバッチリ入る音楽室である。どんだけお金がかかっているんだろう。

「そういえばセシリアってバイオリンが出来るんだっけ？」

「ええ、ピアノも多少は・・・」

「じゃあさ、なにかいっしょに合わせてみない？」

「合わせるって？」

「僕がピアノで、セシリアがバイオリン。曲は・・・ベートーベンの春なんかどう？」

ベートーベン、バイオリンソナタ第５番『春』第１楽章。昔の○めカンタービレで少し有名になった曲だ。

「大和さん、ピアノ弾けたんですの！？」

「うんまぁ、昔からやってて・・・バイオリンは出来ないけどね」

そう言って僕らは楽器体験コーナーへと向かい、セシリアはバイオリンを手に取り、僕はピアノの前に座る。

音楽室は結構人がいたが、僕らが何やら準備しているのをみて一斉にこっちを見ていた。

「じゃあ始めるよ、セシリア」

「いつでもどうぞ」

シャルが始めだけ合図して僕らは演奏を始める。ベートーベンの春。とても綺麗に上下に流れるようなピアノのメロディとバイオリンの音色に観客は聞き入ってしまっていた。吉良とセシリアは、初めて合わせたとは思えないくらい息がぴったりだった。

「～～～♪～～～♪」

約１０分の第１楽章が終わった。

パチパチパチパチ！！

途端に観衆から拍手が沸いた。残りの時間はいろんな楽器を経験させてもらう。そんなこんなでセシリアとの休憩時間も終わった。

「吉良大和と、イギリス代表候補生セシリア・オルコットの合同コンサート・・・これはイケル！！」

彼らの演奏を聴いていた１人の女性がそう思ったのだった。この時の演奏をきっかけにして後々、吉良はイギリスに行くこととなるのだがそれはまた別のお話。

僕たちが休憩を終えて教室に戻ってくると、ちょうど一夏たちも戻ってくるのが見えた。うん、一夏がやつれているけど何があったんだろう・・・

１年１組の出し物は相変わらずの盛況ぶりで、戻った僕たちはまたしても引っ張りだこになる。

「休憩に行っていた分、がんばるぞ」

僕は気合いを入れ直して接客をして、仕事をやっていく。

「じゃじゃん、楯無おねーさんの登場です」

「「・・・・・・」」

気合いも新たに頑張っていこうとしたところで職場放棄人間とエンカウントした。

コマンド
↓逃げる
逃げる
逃げる
逃げる

「だが、回り込まれた！」

「わあ！進路妨害するのやめて下さいよ！」

「まぁまぁ、そう言わずに。時に2人とも、君たちの教室を手伝ってあげたんだから、生徒会の出し物にも協力しないさい」

「疑問系じゃない！？」

「うん、決定事項だもの」

「でも・・・いえ、もういいです。それで、何を手伝うんですか・・・？」

「あら、無抵抗」

そりゃあね。抵抗したところで意味無いなら、無抵抗にもなりますよ。

「で、出し物はなんですか？」

少し語気を荒げて一夏が問う。

「やん、怒らないで。演劇よ」

「「演劇・・・・・・？」」

演劇って劇をやるあの演劇？

「そう、あの演劇。それも観客参加型のね」

「「はっ！？」」

観客参加型の演劇ってどんなのだろう・・・まさかみんなが出演者になるとか・・・ないか。

「ともかく、２人ともおねーさんについてきなさい」

びっと扇子を僕らに向けて威風堂々宣言する楯無先輩。

「あのー、先輩？大和たちをつれていかれと、ちょっと困るんですけど・・・」

「ちょうど良かった！シャルロットちゃん、あなたも来なさい」

「ふぇ！？」

「おねーさんがきれーなドレスを着させてあげるから」

ドレス・・・といってシャルは考え込んでしまった。頼む！頑張って断ってくれ！

「じゃ、じゃああの、ちょっとだけ・・・」

シャル、あっさりと陥落。

「ん～。素直で可愛い！じゃあ、箒ちゃんとセシリアちゃんとラウラちゃんもゴーね！」

「「「はっ！？」」」

こっそり聞き耳を立てていた3人が同時に驚きの声を上げる。

「全員ドレスを着せてあげるから」

「それなら・・・」

「つ、付き合っても・・・」

「仕方が無いな・・・」

ドレスという言葉にみんなあっさり陥落してしまった。みんなそんなにドレスを着たいのだろうか？

「ちなみに・・・演目ってなんですか？」

おそるおそる聞いてみる。5人のヒロインが登場するんだ。よっぽどすごい劇に違いない。

「ふふん」

その言葉を待っていましたと言わんばかりに、楯無先輩が扇子を開いて言った。

「シンデレラよ」

「「へっ・・・・・・・？」」

その言葉に僕と一夏は互いに顔を見合わせたのだった。

第２７話：学園祭開始（後書き）

この肉じゃがの調理法は実際にあります。こうして作ると味がバッチリしみ込んで美味しいですよ。ちなみに料理とピアノのところは作者の趣味全開であります！

さて、そろそろ番外編を書こうと思っています。
内容としては
１、もしも劇の内容が○○だったら
２、楯無先輩との同居生活
３、僕とセシリアと演奏旅行ｉｎイギリス

こんな感じで考えています。まずは次回、１番の番外編です。２、３はアイディアがまとまりしだいです。

ではまた！

番外編：ＷＥ　ａｒｅ　ＳＹＤ！（序章という名のアンケート）（前書き）

番外編第一弾、もしも劇の内容が○○だったら。

タイトルでお気づきの方もいるかと思いますが、ネタは生徒会役員共です。

いわゆる中の人ネタですが、ＩＳ学園と桜才学園の設定ってどことなく似ている気がするんですよね。

番外編：ＷＥ　ａｒｅ　ＳＹＤ！（序章という名のアンケート）

「それで・・・演目はなんですか！？」

「やん、怒らないで」

一夏が語気を荒げながら先輩に問う。先輩はぱんっと扇子を開いて僕らに見せた。そこには・・・

「ＳＹＤ？」

「そう、生徒会役員共よ」

・・・かくして、劇の内容は生徒会役員共に決まった。・・・いいのかな、これ・・・とにかく、始まります。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「いち兄～急いで～！」

「大丈夫だよ、駅近くだから」

そう言って俺は自分の家をあとにする。空は青く冴え渡っていて、申し分の無い朝だった。この春から俺、織斑一夏は高校へと進学した。進学した高校は家から近く、それが選んだ決め手だった。

「ほら、間に合った」

電車がホームへ入ってきてドアが開く。だが、開いたドアにいたの

は『女子』だけだった。そう、この春に俺が進学したのは、今年から共学化した元女子校の私立ＩＳ学園高校だったのだ・・・・・・・

「う～ん・・・女子ばっかだなぁ・・・」

電車を降りて校門をくぐり、周りを見回す。やはり女子ばっかである。

「仕方ないか・・・去年まで女子校だったもんなぁ」

家から近いという理由で選んだこの学校。この学校はかなりの名門で、諸外国の女の子の留学も受け入れていた。そんな高校が共学化するのだから、かなり揉めたらしいのだが結局、共学という方向で落ち着いたのだった。

「ま、少しずつ慣れていくか」

そんなことを思いながら昇降口に向かうと・・・

「こら！そこの男子生徒！」

服装チェックをしていた女子に声をかけられた。左腕には生徒会の腕章が見える。ヤバい、新入早々生徒会に目をつけられるなんて・・・

「君は、新入生だな？」

「はい・・・」

生徒会の役員と思われる女子生徒はスタスタとこちらにやってきた。
そして目を見開いて一言・・・

「制服の着方がだらしないぞ！ちゃんとネクタイを締めろ！」

これが、俺、織斑一夏と生徒会長、篠ノ之シノとの出会いだった。

番外編：ＷＥ　ａｒｅ　ＳＹＤ！（序章という名のアンケート）（後書き）

それで、番外編を書くのはいいのですが、今までのキャラを下ネタ等に走らせてしまうことになるので、ＩＳのキャラとは大きく異なってしまいます。

自分は面白いと思うものでも、好き勝手書いて読者を置き去りにするようなことは小説を書く人としては駄目かな?と思ったので、最初だけ書くことにしました。

これを読んで続きが読みたい！と思った方がいましたら感想にて書いていただけたら助かります。何も無い場合はお蔵入りになってしまいますが・・・

お蔵入りになった場合は、本編の続きを書きます。

では、よろしくお願いします。

第２８話：集う者たち（前書き）

昨日の８日に、また１つ年を取りました。だからといって何かが変わるわけでもないんですが・・・

とにかく、これからもよろしくお願いします。

第２８話：集う者たち

「２人とも、ちゃんと着たー？」

「「・・・・・・」」

「開けるわよ？」

「「開けてからいわないで下さい！」」

第４アリーナの更衣室。普段はＩＳスーツの着替え場所として使われるところに僕らはいた。なぜって？それは劇で使う衣装に着替える為だったんだけど・・・

「はい、王冠」

「「はぁ・・・」」

その服装が・・・なんというか、王子様だ。・・・シンデレラの劇をやるのだからまさかとは思っていたけど・・・

「なによ。嬉しくなさそうだけど、シンデレラ役の方が「「却下です」」・・・ちぇ」

さっきちらっと会場となる第４アリーナを見たけど、セットはかなり豪勢だった。加えて観客は超満員。なんというか、ここ数日胃に穴が開きそうなことが多かったけど、これは最上級だ。と吉良は思う。時折聞こえてくる歓声がそれに拍車をかけていた。

「あのー、俺ら脚本とか台本とか一度も見ていないんですけど・・・」

「大丈夫、基本的にこちらでアナウンスするから。その通りに進めてくれればいいわ。もちろん、台詞はそれに沿ったアドリブよ」

・・・・・大丈夫なのだろうか、本当に。言いしれぬ不安を抱きながら僕らは舞台袖へと移動した。

「さぁ、ショウタイムよ！」

楯無先輩がそういうとスルスルと幕が上がる。さぁ、始まりだ。

「むかしむかし、あるところにシンデレラという少女がいました」

ナレーションが始まった。僕はシンデレラのストーリーを頭に浮かべて自分のたち位置を確認する。とりあえず、シンデレラがお城にくるまでは出番は無さそうだ。・・・と思っていた時が自分にもありました。

「シンデレラ・・・それは名前ではない！幾多の舞踏会を抜け、群がる敵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわない地上最強の兵士たち！」

・・・おかしい。開始からほんのわずかで僕の知っているシンデレラじゃなくなった。可憐なシンデレラがどうしたらそんな猛者に変わるのだろうか？

「そう、彼女らはこう呼ばれる。『灰被り姫（シンデレラ）と！』」

・・・・・彼女ら？

「今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。王子たちの冠に隠された隣国の機密事項を狙い、舞踏会という名の死地に少女が舞い踊る！」

「「わけがわからないよ！？」」

もはやシンデレラとはほど遠い物になってしまった。シンデレラってもっと平和なストーリーだったよね！？

「もらったぁああ！」

僕らが話の流れについて行けてなくてぼけっとしているところに突如、叫びと共に鈴が現れた。それも白地に銀のあしらいが美しいドレスを着て。

「のわっ！？」

「よこしなさいよ！」

一夏は反射的に何かを避けた。あれは・・・中国の手裏剣こと飛刀！？

「し、死んだらどうすんだ！？」

「死なない程度に殺すわよ！」

「意味がわからん！」

一夏は鈴が投げてくる飛刀をそばにあったトレーで防御する。鈴は構わずにそのトレーを蹴り上げて・・・なんだスパッツか。安心したようなそうでもないような・・・そうやって一夏と鈴が必死の攻防をしているのを僕は眺めていると、ふと赤い光線が泳いでいるのを見つける。そしてその光線はそのまま僕に近づい・・・て!?

「うわぁ!」

しゃがんだ瞬間に頭の上を何かが通り過ぎる。それと同時に後ろにあった花瓶が弾け飛んだ音がした。

「(す、スナイパーライフル!?っていう事はセシリアだ!)」

サイレンサーを装備しているらしく発砲音とマズルフラッシュがわからない。でも・・・花瓶が割れるくらいの威力だ。当たったら無事じゃ済まない!

(プシュ、プシュ)

「しかも連射付き!?」

とにかく遮蔽物で身を隠さないと死んでしまうのでそばにあったテーブルを楯にして逃げる。ていうか・・・

「「なんてアグレッシブなシンデレラたちなんだ!」」

僕と一夏の絶叫がこだました。

side セシリア

「くっ、逃がしましたわ」

コンコンっと足下に薬莢が落ちる中セシリアは絶好のタイミングで外した事を悔やんだ。アレさえ当たっていれば・・・！でも考えていても仕方ないので次の狙撃ポイントへ移る。狙撃の基本である『ショット&ムーブ』だ」

「（今回は何が何でも勝たせてもらいますわ！）」

女子組にだけ教えられて秘密の景品。それは『王冠を取った人に同室同居の権利を与える』という物だった。初めこそ疑っていた彼女たちだが、楯無の『生徒会長権限で可能にする』という言葉を聞いて全員が立ち上がった。

「（シャルロットさんがまだ動きを見せないのは気になりますが、それよりも前に勝ってしまえばいいだけの事！そうすれば・・・）」

にへらと笑ったセシリアの頭の中には吉良と一緒に暮らしている光景が出来上がっていた。

「そのためにもこの勝負、勝たせてもらいますわ！）」

そう言ってセシリアは次なる狙撃ポイントへと移動していった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「死ぬ、死ぬ、死んじゃう！」

「一夏！とりあえずあそこに隠れよう！」

鈴とセシリアの攻撃をかわした僕らはとりあえず共同して逃げる事にした。背を合わせれば死角もカバーできる上に最悪

「（一夏（大和）を楯にしよう）」

と考えていたからだった。とにかく死なないように必死だった。

「げぇ！行き止まりじゃないか！」

逃げ込んだ先は行き止まりだった。どうやらセシリアが狙撃によってこの場所まで誘導していたらしい。しまった、やられる！

「2人とも！伏せて！」

そう思った瞬間、僕らの前にシャルが立ちはだかった。手には対弾シールドを持ち、それによってセシリアの狙撃を防いでいた。

「た、助かった。ありがとう、シャル・・・」

キンッ、カンッ、と弾丸を防ぐたびに鋭利な音が響く。

「いいから早く逃げて！」

「大和、行くぞ！」

そう言って一夏が腕を引っ張ってくるので僕も行こうとすると、シャルが僕を呼び止める。なんだろう？

「あの、できれば王冠を置いてってくれると嬉しいなぁと・・・」

「？それくらいなら、いいけど」

そう言って僕は頭にかぶせられていた王冠を取ってシャルに渡そうとするが・・・

「王子様に取って国は全て。その重要機密が入った王冠を取られると、自責の念によって電流が流れます」

・・・・・・え？

「わぁあああああ！」

バリバリバリ！というのっぴきならない音を立てて僕の全身に電流が流れる。もう痛いを通り越して、熱い・・・

「な、な、な、なんじゃそりゃあああ！」

その様子を見ていた一夏が声を上げた。

「ああ！なんという事でしょう！王子の自責の念はこうまでも重いのでしょうか！王子様の国を思う心に痺れる思いです！」

比喩でもなんでもなく電流が流れて痺れているんですが！！とにかくまた電流を流されてはたまったものではないので急いで立ち上がり、王冠をかぶりなおす。それにしても楯無先輩、さっきからなんて楽しそうなんだ！さっきなんて声の端々から笑いがにじみ出ていたよ・・・ホント、どうしてこんな人が会長なんだか・・・

「ごめんシャル、そういう事だから僕行くね！」

「ええっ！？そんな、困るよ！」

「そう言われても・・・ごめん！」

「あっ、待って！大和！」

シャルを振り切って僕たちは脱兎のごとく逃げ出す。しかし、その先にいたのは・・・

「一夏！そこに直れ！」

「王冠は私がいただく」

黒髪と銀髪のシンデレラ、箒とラウラだった。箒は日本刀でラウラは2刀流のタクティカル・ナイフを逆手に構えていた。

「うわぁあああ！」

2人が一夏めがけて飛びかかる。前は危険だと判断した僕は即座に反転して逃げようとするが・・・

「もう追いつめたよ、大和」

「おとなしく王冠を渡して下さい」

そこには先ほど振り切ったシャルと、すでに狙撃ではなく至近距離でこちらを狙っているセシリアがいた。

「なぁ大和、こういう時、なんて言うんだっけ？」

背中合わせにした一夏がそう聞いてくる。

「・・・万事休す？」

「ですよねー！」

僕らが現実当否していると、地面が揺れている事に気付いた。地震かと思ったがこれは・・・

「さあ！ただいまからフリーエントリー組の参加です！みなさん、王子様の王冠を目指して頑張って下さい！」

「は、はぁっ！？」

地響きの正体はざっと見ても数十人はいるシンデレラだった。しかも現在進行形でどんどん増えている。

「織斑君、おとなしくしなさい！」

「吉良君、私と幸せになりましょう！」

「いのちを・・・燃やせぇえええええ！！」

迫りくる大量のシンデレラに目の前の５人の最強のシンデレラ。・・・シンデレラというよりも修羅とかそっちの方が正しいような・・・

迫り来る彼女たちに、もうどうにでもなれと覚悟を決めて僕らはおとなしく目を閉じてその瞬間を待っていた。

「こちらへ」

「「えっ？」」

だが、僕らは何かに足を引っ張られてセットの上から転げ落ちていったのだった。

「着きましたよ」

「は、はぁ、どうも・・・」

僕たちは誘導されるまま、セットの下をくぐり抜けて更衣室へとやってきた。最初に僕らが使った部屋で、制服なんかもそろっている。

「えっと・・・」

そういえば誰が僕らをここまで連れてきてくれたのだろうかと思い、その人物を見ると、今日名刺をくれた巻紙礼子さんだった。・・・まいった。また武器の勧誘をされるのかな？彼女は相変わらずニコニコと笑みを浮かべている。

「どうして巻紙さんが？」

「はい、この機会に白式と、フリーダムをいただきたくて」

「「・・・・・・は？」」

ニコニコと、笑顔は崩さない。

「いいからよこしやがれよ、ガキ共」

あくまでもニコニコと営業スマイルは崩さない。だが、彼女の笑みに薄ら寒い物を感じた。・・・本能が告げている。この人は敵だ、と。

「!?、一夏!」

「ぐえっ!」

またしてもボケッとしていた一夏の首根っこを引っ張る。と同時に今まで一夏がいた場所を蹴りが通り過ぎた。

「ち、避けたか。そっちのガキはなかなか勘がいいようだなぁ」

「え?え?」

「一夏!彼女は敵だ!ぼけっとしてないで!」

一夏をこちらへと寄せながら僕らは彼女から十分な距離を取る。これなら不意打ちをされる可能性はない。

「あなたは一体、なんなんだ!」

「あぁ?私か?企業の人間になりすました謎の美女だよ。おら、嬉しいか?」

「なぜフリーダムの事を知っている!?あれはまだ、国際ＩＳ委員会にしか報告してないのに!」

「ははは!それは裏を知らないガキの言葉だな。ぺらぺらしゃべる

気はねぇが、下種の口に戸は立たねぇって事だ」

その言葉と同時に彼女のスーツを引き裂いて、女の背後から鋭利な『爪』が飛び出す。それも、クモの脚によく似たそれは、黄色と黒と言う禍々しい配色で、刃物のような先端を持っている。

「こい！白式！」

「いくよ！フリーダム！」

彼女がＩＳを展開するのを見て僕らも展開する。

「はは！待ってたぜ、それを使うのをよぉ」

そこでようやく笑みを崩した女。ヘビのような切れ長の目と、しゃべるたびに飛び出す長い舌がヘビを連想させた。

「くらえ！」

ジャカっと、８本の装甲客の先端が割れるように開いて、銃口を見せる。

「くそっ！！」

実体弾に対して有効な防御法を持たない一夏は天井に向かって緊急回避を行う。僕はＰＳ装甲があるのでそのままだ。

「そうか、それが実体弾を無効化する装甲かぁ」

「えぇ、残念ですけどあなたの攻撃は効きませんよ。諦めて降参し

たらどうですか？」

「ほざけ！とまぁいい。せいぜいＩＳとの別れの言葉でも惜しんでな」

ＩＳとの別れ？どういう事だ？

「なんなんだよあんたは！？」

「ああん？知らねーのかよ、悪の組織の１人だっつの」

「ふざけんーー」

「ふざけてねぇっつの！ガキが。秘密結社『亡国機業』が１人、オータム様っていえばわかるかぁ？」

亡国機業だって！？あれは存在自体が眉唾物だと思っていたのに。

「そうそう、ついでに教えておいてやんよ。第２回モンド・グロッソでお前を拉致したのはうちの組織だ！感動のご対面だなぁ、ハハハハ！」

そう言ってオータムは天井にいる一夏の方を見た。

「「ーーー！！」」

第２回モンド・グロッソの時に一夏は誘拐された。そして、その時の犯人が目の前にいる。今の一夏は、簡単に沸点を超えてしまった。

「き、貴様らがぁあああ！」

「駄目だ！一夏！考え無しにまっすぐ突っ込んだら！」

「クク、やっぱりてめぇはガキだなぁ。こんな真っ正面から突っ込んできやがって・・・よぉ！」

指先であやとりのような物をいじっていたかと思うと、それを一夏めがけて投げた。エネルギーワイヤーで構成された塊は、一夏の目の前でぱんっと弾けて巨大な網へと変化した。

「こんなワイヤーで！」

エネルギー体なら雪羅で切り裂けると思った一夏はビームクロウで切り裂こうとする。しかし、その糸は全身に伸びていき、数秒で腕が動かせないくらいにがんじがらめにされてしまった。

「ははは！楽勝だぜ、ったくよぉ。」

「一夏！」

一夏が捕らえられたのを見て、僕はフリーダムのビームサーベルを構え、助けにいこうとする。

「おおっと、動くなよ？」

ハイマットモードにして接近しようとすると、クモの脚の鋭利な部分が一夏の首筋にピタッと付けられた。つまり、動くと喉をかっ切るって言いたいのか！？

「さて、お別れの準備はできたか？ギャハハハ！」

オータムは４本の脚の付いた４０センチほどの小さな装置を持って、一夏に近づき、それを取り付けた。胸部に付けられたそれは脚を閉じて、一夏の体を固定化する。

「何とのだよ・・・？」

一夏の問いにオータムの顔が歪む。

「決まってんだろうが、テメーのＩＳとのだよ！」

「なにっ！？」

刹那、機械が放電を始め、一夏の体が白く発光し出した。

「が、がぁあああああ！」

苦痛による一夏の絶叫をオータムはニィッと口を上げて笑って見ていた。徐々に電撃は収まっていき、機械が外れ、一夏はクモの糸から解放された。

「終わったか」

糸から解放された一夏は一直線にオータムへと向かって拳を振り上げる。

「あたらねぇよ！ガキ！ＩＳのないお前じゃなぁ」

だが、振り上げた直後に逆に腹を殴られてロッカーに叩き付けられてしまった。そこで一夏はようやく自分の現状に気付くのだった。

「俺の・・・白式が！」

一夏の体には構築済みのＩＳスーツだけが残されて白式の装甲も装備も全てが無くなっていた。

「へっへっ、お前の大事なＩＳならここにあるぜ？」

「なにっ！？」

オータムが手にしている菱形のクリスタル。それは、まぎれも無く白式のコアだった。白式のコアは第２形態まで発展した証拠として、通常の物よりも強く輝いている。

「さっきの装置は剥離材（リムーバー）っつうんだよ！ＩＳを強制解除できる秘密兵器だぜ？生きているうちに見れて良かったなあ！さて、次はお前だ。吉良大和。お前のフリーダムも頂いていくぜ！」

「そんなこと！」

再び８本の脚の銃口から弾が飛び出す。それを僕は縦横無尽に避けるが、決してオータムに近づき攻撃しようとは思わない。近づいて糸に絡められたら最後。フリーダムを奪われてしまうだろう。よって、僕の攻撃手段も遠距離からのものに限られてしまうい、そうそう当たらない。

「ちぃ、ちょこまかと！おとなしくフリーダムを渡せってんだよ！」

フリーダムの機動性に翻弄されてオータムの動きが鈍くなる。これなら攻撃を・・・！

「なんだ!?」

突如フリーダムの動きが止まった。

「ハハハハハ!ようやく引っかかったか。てめぇももう終わりだな!」

「なんで!?糸には引っかかっていないはずなのに!」

「バーカ!自分の周りを良く見てみろ!」

言われてフリーダムの周りを良く見る。そしてハッとした。目を凝らせばかろうじて見えるくらいの糸がフリーダムに絡み付いていたのだった。

「クモを甘く見ちゃいけねーな。このエネルギーワイヤーは太さを自在に操れるんだよ!だからお前が飛び回っているところに超極細の糸を張り巡らさせてもらったのさ。あとはお前が勝手に糸をまとめていったんだよ!」

クモの糸は捕らえた獲物が動けば動くほどさらに絡み付いて離れなくなる。あとはクモ自身が獲物をぐるぐるに巻いて補食する。そして、虫たちは大抵張り巡らされているクモの糸に気付かずにそこに突っ込んでしまうのだ。

「くそっ!」

「安心しな!お前のＩＳを剥ぎ取ったらあいつ共々仲良く殺してやるからさぁ!ぎゃはははは!」

「大和ぉ！」

オータムが剥離材をもってこちらに近づいてくる。くそ！このままでは！そう思って腕を動かそうとするが、強靭な糸の前にそれは不可能だった。・・・ここまでか。そう思ったときだった。

「困るなぁ。うちの生徒に手を出されるのは」

「誰だ！？」

場にそぐわぬ楽しげな声。糸に絡められて姿は見えないけど、声だけではっきりわかる。

ＩＳ学園生徒会長：更識楯無がそこにいた。

第２８話：集う者たち（後書き）

オータムの使うアラクネのエネルギーワイヤーに伸縮、太さ細さ自在の効果を持たせました。こうやってやったら吉良も捕まるかなぁって思って・・・

次回は楯無無双です。あとは・・・邂逅？

第２９話：邂逅（前書き）

更新遅くなってすみませんでした。今回はうまくまとまらずに書いては消しての繰り返しでした。そのせいかいつもよりクオリティが落ちている気がしますが・・・どうぞご覧ください。

第２９話：邂逅

彼女の声が聞こえるときは、だいたい厄介事がともにやってきた。だが、今回ばかりは違った。彼女の声を聞いた瞬間、僕の体を言いようの無い安心感が包んだのだった。

「楯無先輩！」

「あらあら、ボロボロじゃない。ま、２人とも、あとはおねーさんに任せなさい」

楯無はそう言ってＩＳを展開した。

「てめぇ、どこから入った？今ここは全システムをロックしてるんだぞ？・・・・まぁいい。見られたからにはお前を殺す！」

楯無を敵と認識し、睨みつけてくるオータム

「それは困るのよねぇ・・・そこにいる２人は私のお気に入りだから殺させないし、私も死ぬつもりは無い。私はこの学園の生徒たち、その長。ゆえに、そのように振る舞うのよ」

体する楯無は、そう言ってずんずんとオータムに近づいていく。不用心とも取れるくらいに近づいてくる彼女に、オータムは内心歓喜した。・・・今なら殺れる。そう判断した。

「バカが！不用意に近づきやがって！死ね！」

そう言って彼女は鋭利な脚を楯無へと突き刺した。殺した！そう思

ったオータムだが、すぐに異変に気付く。

「（手応えがない、だと？）」

「うふふ」

立ったまま腹部を貫かれた楯無。端から見たら致命傷だが、しかし彼女は余裕の笑みを崩さない。オータムが楯無をよく見ると、脚が貫いている箇所からは一滴の血も流れていない事に気付いた。

「どうしてだ！？」

オータムが叫んだ次の瞬間、貫いていた楯無が崩壊した。ばしゃっと音を立てて、楯無の姿をしていたものが霧散する。

「！？こいつは・・・水か？」

「ご名答。それは水で作った私の分身よ」

そのたっぷりと余裕を感じさせる声は、オータムの真後ろから聞こえた。ぎくりとしたオータムを、楯無は手に持ったランスで薙ぎ払う。

「あら、以外と速いのね。なかなかの機動性だわ」

「ハッ！残念だったなぁ！」

「いいえ、成功よ」

強がりを言いやがって。と毒づいたオータムだったが、楯無の方を

見てまたもぎょっとした。オータムの目にはいつの間にかクモの糸から解放された吉良が映っていた。

「てめぇ最初からこれが狙いだったのか！」

「またしてもご名答。本当はついでにあなたもやっつけたかったんだけどね」

先程楯無が薙ぎ払ったランスの本当の狙いは、吉良を拘束していたクモの糸を断ち切る事だった。

「ありがとうございます！僕も戦います！」

「いいえ、２対１なんて卑怯よ。それに、私だけで充分だから」

「卑怯なんて言ってる場合ですか！？」と言う吉良に対して「まぁまぁ、気持ちだけもらっておくわ」となだめる楯無。

「なんなんだよ、てめぇはよぉ！」

「更識楯無。そして、ＩＳ『ミステリアス・レイディ』よ。覚えておいてね」

ミステリアス・・・そういえば楯無先輩、前にもミステリアスな女って言っていた気がするけど、こういう事だったのかな？と１人ごちる吉良だった。解放された吉良はとりあえず邪魔にならないように一夏と一緒に更衣室の隅へと移動した。

彼女のＩＳ『ミステリアス・レイディ』はアーマーが全体的に狭く、小さい。だが、それをカバーするように透明の液状のフィールドが

形成されていて、まるで水のドレスのようだった。さらに、手に持った大型のランスの表面にも水の螺旋が流れて、まるでドリルのようだった。

「けっ！今ここで殺してやらぁ！」

「うふふ。それは悪党が吐く言葉よ。これじゃあ私が勝つのは必然ね」

「ほざけ！」

そうして2人は激突する。その鋭利な8本の脚と2本の腕で攻撃してくるオータムを、楯無はランスによる攻防一体の動きで応戦していった。

数的優位に立っているはずのオータムだが、全てランス1本に攻撃が捌かれていて有効打を与えられない事にイライラしだしていた。

「くそが！調子に乗るな！」

腰部装甲から2本のカタールを抜いたオータムは、近接戦闘と射撃の2通りの攻撃を始め出す。

「そんな雑な攻撃じゃ、水は破れないわ」

しかし嵐のような実弾射撃は、楯無の水のヴェールの前にことごとく無力化されていった。弾丸は、水に包まれた瞬間に勢いを失い、水に捕らえられて止まっていた。

「！？・・・タダの水じゃあねぇな」

「ホント、鋭いのね。そう、この水はＩＳのエネルギーを伝達するナノマシンによって制御しているのよ。すごいでしょ？」

しゃべりながらも彼女の動きは止まらない。どちらが優位に立っているかは明らかだった。

「強すぎる・・・」

２人の戦いを見ていた一夏がぽつりと呟いた。

「一夏？」

「・・・俺さ、あいつに白式を奪われた瞬間、頭が真っ白になって何も考えられなくて・・・悔しくて仕方なかった」

「・・・・・・」

「白式も強くなって、俺はもう無力じゃないって思ったけど違ったんだ。俺は・・・まだまだ無力だ」

それは僕も思っていた事だった。ストライクがフリーダムになって強くなった気でいた。でも、今の僕はこうして彼女の邪魔にならないように隅にいる事しか出来なかった。・・・悔しさがこみ上げてきていた。

「でも、だからこそ・・・」

そう、だから・・・

「強く、なりてぇな」

「なりたい、じゃなくて絶対なろうよ。一夏」

「そう、だな」

彼女の戦いを見ながら僕らはそう決心したのだった。

戦いはすでに終盤に入っていた。カタールでも足りないと思ったオータムは、４本を射撃にし残りの４本は格闘にすると言う猛攻に出た。

「あらら、これはさすがに重いわねぇ」

「ははは！いつまでその余裕が続くかぁ！？」

オータムの言葉通り、手数の多さに楯無はしだいに押され始める。装甲で守られているとはいえ、時折その攻撃がＩＳ本体に届き始めていた。これは・・・まずい！

「楯無先輩！」

「大丈夫よ、大和くん。それと一夏君、君は君の望みを強く願っていなさい」

「ふん、ガキが！余裕ぶるんじゃねぇよ！」

そうこうしている間に、ついに鉄壁のガードを崩したオータムが、装甲脚で楯無を吹き飛ばした。それと同時に両手で練り込んだクモの糸を放出し、楯無の自由を奪った。

「はぁ・・・はぁ・・・てこずらせやがって・・・」

「うーん、捕まっちゃった」

「今度こそもらったぜ・・・！」

ジャキン！とオータムが銃を構える。その目は勝利を確信していた。

「ところで知っている？この学園の生徒会長というのは最強の称号なのよ？」

「はっ！なにが最強だ！今お前はこうして私に拘束されて動けねぇじゃねぇか！」

楯無の言葉を聞いてオータムが嘲る。オータムには今のこの状況では、楯無の言葉は負け惜しみにしか聞こえなかったからだ。

「・・・ところでこの部屋、暑くない？」

「ああ？」

「温度ってわけじゃなくてね、人間の体感温度が」

「不快指数っていうのは、湿度に依存するのよ。・・・ねぇ、この部屋って湿度が高くない？」

「！？」

ぎくりとしたオータムが見たのは、部屋一面に漂う霧だった。それ

もただの霧ではない。その霧は彼女自身にまとわりつく異様に濃い霧だった。

「そう、その顔が見たかったの。己の失策を知った、その顔をね」

にっこりと女神のように微笑む楯無。しかしその表情には、死神の鎌のごとき必殺の意図が込められていた。

「ミステリアス・レイディ・・・『霧纏の淑女』を意味するこの機体はね、水を自在に操る事が出来るのよ。さっきも言ったように、エネルギーを伝達するナノマシンによってね」

「し、しまっ・・・！」

「遅いわ」

パチン、と楯無が指を鳴らした次の瞬間、オータムの体は爆発に飲み込まれた。

「あはっ。何も露出趣味や嫌味で自分の能力をべらべらとしゃべったんじゃないのよ？はっきりこう言わないと、驚いた顔が見れないもの」

ＩＳから伝達されたエネルギーを霧を構成するナノマシンが一斉に熱に転換し、対象物を爆破する能力『清き熱情（クリア・パッション）』

限定空間でしか使用できないとはいえ、全ての行動と同時進行に準備を行えるこの技は、威力共々実戦に置いて高い有用性を誇る。

「ま、まだだ！」

「いいえ、もう終わりよ。・・・ね？一夏君」

オータムは嫌な予感がして、後ろを振り向く。そこで見たのは、右腕を掴んで意識を集中していた一夏の姿だった。

「・・・来い！白式！」

その全身が光に包まれ、そして・・・・・・

楯無に「願え」と言われた一夏はその真意を掴めずにいた。願えって何を・・・そう思った一夏だが、隣にいた吉良がこう言った。

「もしかしたら、楯無先輩は白式を呼び出す事を願えって言っているのかも」

「はっ！？そんなこと、出来るのか？」

そんな事、聞いた事も無い。と一夏は言う。

「だけど、今の一夏の願いって白式を呼び出す事でしょ？」

「・・・そうだが・・・」

「なら、一夏が願えばきっと白式は応えてくれるってことなんじゃないかな？」

「（・・・白式は、きっと応えてくれる。俺が呼ぶ限り、何度でも・・・何度でも！）」

右腕に意識を集中させる。ギュッと閉じたまぶたの向こうで光が見えた気がした。

そして・・・一夏の右手にコアが構築・・・いや、召喚された。

「白式、緊急展開！雪片弐型最大出力」

応えてくれた。その事実が俺に勇気をくれた。・・・行ける！

すでに完全な展開状態になった白式と意識を同調させ、オータムに向かって突撃する。

「なぁ！？て、てめぇ、どうやって！？」

手元にあったはずの一夏の白式のコアが無くなって、一夏に展開されている。これを見たオータムはうろたえていた。しかし、一夏はそんな事おかまいなしに零落白夜を発動させてオータムに切りかかる。

「知るか！くらえぇえええ！」

「ぐ、ぅううううう！」

オータムは8本の装甲脚を集中させて一夏の斬撃を受け止めるが、もう1人の存在の事を忘れていた。

「大和、今！」

「いっけぇえええええ！」

大和がハイマットフルバーストを放つと同時に一夏は緊急回避を行う。当然オータムは回避する事が出来ずに直撃を受けた。

「ぐぁあああああ！」

「そして、これで、おわりだぁあ！」

吉良の攻撃をまともに受けて、あとわずかでオータムは落ちる。とどめの一撃を一夏は放とうと接近した。

「ぐふっ！！」

瞬時加速付きのスラスター・フルブーストを乗せた一夏の蹴りがオータムに決まり、オータムは壁に叩き付けられた。相当な威力だったのか、その衝撃で壁の一部が崩れ、外が見えていた。

「よし！一夏君、そのまま拘束して！」

「は、はい！」

そう言って、拘束しようとするが・・・

「くそ、ここまでか！」

バシュっと圧縮空気の音を響かせて、オータムのＩＳが本体から離

れる。それと同時に彼女のＩＳから光が漏れ出した。

「!?、一夏くん!」

ドカァアアン！

・・・・・一夏は爆発に巻き込まれる寸前で、楯無の体に覆われただった。楯無は、最大展開した水のヴェールで、一夏を包み守っていた。あの位置で巻き込まれていたら無傷ではすまなかっただろうと思った吉良はホッとした。

「大丈夫?一夏」

「あぁ、まぁ、なんとか・・・あの女は?」

「逃げられたわ。ＩＳのコアも、おそらく自爆直前に取り出しているわね。装備と装甲だけを爆発させたみたいね。一歩間違えば自分も危なかったでしょうに・・・」

意外な事に、真剣に話す楯無先輩は妙にかっこ良かった。

「そ、そうですか・・・ところで、その、そろそろ・・・」

「ん?」

「離してもらえるとありがたいのですが・・・」

一夏と楯無先輩の格好を見て僕は納得した。今、ちょうど一夏と楯無先輩は抱き合う形になっている。まぁ、そうすると、楯無先輩の自己主張が激しい部分が一夏に当たっているわけで・・・一夏とし

ては役得なんだろうけど、それよりも恥ずかしそうだ。

「やん、一夏君のエッチ」

「ち、違いますよ！これはその・・・緊急事態だったからでして・・・」

やいやい言っている2人を見て、僕はこの騒動がこれで終わったと思って安心した。と、突然楯無先輩が一夏の頭に乗っかっていた冠を取った。・・・あれ？電流が流れない？

「じ・つ・は・これは、ゲットした人がその人と同居同室の権利を手に入れられるっていうすてきアイテムだったのよ」

「はぁ！？・・・ま、まさか、それであんなに女子が必死になって・・・」

「うん、そうよ」

楯無先輩の言葉を聞いて絶句してしまう僕ら。

「まずは、一夏君のをゲット。次は吉良君よ。さぁ！おとなしく王冠を渡しなさい」

じり、じりっと僕に近づいてくる楯無先輩。それに連動するように僕は壁際へと後退する。ちなみに、一夏はすでにばたりと背中から倒れている。・・・あ、起きた。

「大和・・・こうなったらお前も、こっちに来い」

両手を突き出してこっちにやってくる一夏。って恐！！一夏、バイオじゃないんだから！

「さぁ、観念なさい」

２人とも壁際にやってきて、もう駄目だと思ったときだった。

ピキィイン！

「・・・ッ！？」

僕の頭の中を嫌なノイズが走った。なんだろう。嫌な予感がする。

「フリーダム！」

僕はフリーダムを緊急展開し、さっき一夏がオータムを蹴って開けた穴から外へと飛び出していったのだった。

「・・・そんなに嫌だったのかしら・・・？」

あとには、王冠を取り損なった一夏と楯無が残ったのだった。

ｓｉｄｅ　ラウラ&セシリア

ＩＳ学園から少し離れた公園で３機のＩＳが戦闘を繰り広げていた。

２機はラウラとセシリアのものだ。そしてもう１機は・・・

「なんなんですの！？あのＩＳは！」

「なんて数のビットだ！どうしたらあれだけのビットを操れるというんだ！」

クラス対抗戦の時に現れたあの緑のＩＳだった。おびただしいまでのビット兵器を使っていい、それは常人の処理能力を軽く超えていた物だったにもかかわらず、それを感じさせない動きで２人を攻撃していった。

２対１にも関わらず、苦戦しているのはラウラたちの方だった。ラウラはすでに左目の眼帯を外して、ハイパーセンサー補助システム『ヴォーダン・オージェ』を発動させている。が、意味も無く、被弾していった。

「ラウラさん！」

「私に構うな！撃て！」

そう言われてセシリアは狙撃を試みるが当たらない。

「あの４枚の羽がスラスターをかねているんですわね。・・・まるで前に戦った福音みたいですわ」

そう感想を持ったセシリアだが、その福音とは桁違いの強さだという事が唯一違うところだった。

「さて、こんなものか・・・迎えにきたぞ。オータム」

「てめぇ！・・・私を呼び捨てにするんじゃねぇ！」

飛来した襲撃者は、先程までラウラたちが尋問しようとしていたオ

ータムを回収しようとしていた。やっと手に入った亡国機業の貴重な「証拠」を逃すまいとしてラウラは接近を試みるが、相手のＩＳ腹部から放たれる何本ものビームに阻まれて接近できない。

「・・・この程度か。ドイツの遺伝子強化素体（アドヴァンスド）」

フルスキンなので表情はわからないが、声に嘲笑が混じっていた。

「貴様・・・なぜそれを知っている」

「言う必要は無い。ではな」

そう言ってオータムを引っ張り上げ、逃げようとする2人だが・・・

「来たか・・・」

「（なに?どういうことだ?）」

ラウラが疑問に思った瞬間、1本のビームが2人の間を通り過ぎたのだった。

「ラウラ!離れて!」

「ようやくお出ましか。吉良大和」

ラウラの前に吉良が現れたのだった。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「大丈夫!?」

「あぁ、私もセシリアも無事だ。それよりも気をつけろ。奴は強い・・・」

そう言われて相手を見る吉良。そのＩＳには見覚えがあった。それを確認した吉良はギュウッと右手のビームライフルを強く握りしめた。

「僕を呼んだのは君・・・なのか？・・・誰だ、誰なんだ、君は」

「そうか、自己紹介がまだだったな。私の名前はＭ。そしてＩＳ『クシャトリヤ』だ」

Ｍ？それは・・・

「オータム、予定変更だ」

「はっ！？んだとてめぇ！ちょっとｍ・・・！」

ブゥン！Ｍはオータムの言葉など聞く気も持たず、掴んでいたオータムを邪魔だとばかりに放り投げた。そして・・・

「貴様があの方と同じだというならば、証明してみせろ！」

そう言って、Ｍと名乗った女と見られる人物は４枚の大型の羽を広げる。

「ファンネル！」

「っ！？」

その大きな4枚の羽のうち1枚から6個のビットが射出された。

「オールレンジ攻撃か！」

6個のビットはそれぞれ散らばり、オールレンジ攻撃を仕掛けてくる。

「なら、ここは接近して！」

ビット兵器を相手にするときは接近戦に持ち込む事が必須だ。そうすれば相手はファンネルを使えなくなる。自分を撃ってしまうという誤射を防ぐ為だ。問題はそこまで接近できるかどうかだが・・・

「（ビットをよく見るんだ・・・あの時の訓練を思い出せ！）」

楯無さんに教えてもらった先の先を取る動き。ビットのわずかな挙動を捕らえて次の動きを予測しろ！そして・・・！

「はぁああ！」

取り回しのきかないシールドはすでに捨てた。今、吉良は2刀流のビームサーベルでファンネルのビームを切って防ぐという荒技をやりながら、ハイマットモードで接近していった。

「やるじゃないか」

Mはそう言って嗤った。そして、ファンネルの網をくぐり抜けて接近してきた吉良のビームサーベルをこちらもバインダーに収納されていたビームサーベルで受け止めた。

「さぁ、どんどん増えるぞ」

さらにMはクシャトリヤの羽を1枚広げて6個のファンネルを射出した。計12個のファンネルが僕に狙いを定めてきた。

「っ！？」

すでにファンネルの攻撃は目で追えるものではなくなっていた。回避が不可能だと断じた僕は、出来るだけ被弾を最小限に抑える為に、それまでに習ってきた全ての機動・・・瞬時加速に3次元躍動旋回・・・を使ってしのいでいた。しかし、完璧に回避する事はできずに、確実にダメージをくらっていった。

「ラウラさん、私たちも大和さんの援護を！」

見かねたセシリアがラウラに提案する。だが・・・

「駄目だ！どちらも速すぎて対処できない。最悪、私たちの援護が大和に当たるかもしれないんだぞ？」

「しかし・・・！」

セシリアだってラウラの言っている事がわからないわけではない。だが、自分の想い人が目の前で苦戦している状況は見ていられるものではなかった。

「（このままじゃじり貧だ・・・なんとか、しないと）」

吉良はそう思いながらハイマットモードで避けていく。その時、僕

らの間を一筋の青い光が通り過ぎた。

「ッ、大和さん！」

「（・・・今のはセシリアのビットによる攻撃か！）」

すでにＭにやられていてボロボロのはずなのに、セシリアはたった１つ残っていたティアーズで吉良の援護を試みた。ラウラの言った事は正だ。だが、今のセシリアはただ単に、想い人を守りたかった一心だった。しかし、そんなセシリアの想いもＭにとっては不快なものでしかなかった。

「ちっ、せっかく私がコイツと戦っているというのに水を差しやがって・・・」

そう言ってＭはセシリアの方へと向かう。

「情か、くだらん。・・・お前はもう死ね」

ぞくっとするほど冷たい声。そして、Ｍはビームサーベルを取り出し、セシリアへと接近する。対するセシリアは、さっきの攻撃が最後の力だったのか、まともに動けない・・・それを見た僕はすぐさまＭの後を追いかける。

「セシリア！」

ラウラも救助に向かおうとするが、先程の戦闘でＡＩＣは破壊され、装甲も至る所が破壊され満足に動けなかった。セシリアに迫る緑のビームサーベル。そして・・・・・・

「セシリアーー！！」

パァァン・・・

「・・・・・・」

頭の中で何かが弾ける感覚。目からハイライトが消え、そして急激にクリアになっていく思考。僕は瞬時加速していたフリーダムをさらに瞬時加速させるという2重瞬時加速（ダブル・イグニッション・ブースト）をした。目の前で繰り広げられている光景がコンマ送りのように見えたのだった。

吉良は、Mがサーベルを振り上げるのと同時に僕はクシャトリヤを追い抜き、セシリアを吉良の腕で抱きかかえその場から離脱した。

「なんだと！？」

突如後ろから青い閃光が飛び出し今まさに切り掛かろうとしていたセシリアを助け出した。それを見たMは驚き前を見る。そこには、大事そうにセシリアを抱きかかえていたフリーダムがいた。

「（コイツ・・・違う！？）」

目の前にいるのはまぎれも無くさっきまで戦っていたフリーダムだ。だが、フリーダムからにじみ出る途方も無いまでの暗く、深く、静かで冷たい殺気はMを戦慄させた。

「ラウラ、セシリアを頼んだ」

「あ、あぁ・・・」

吉良は、その腕に抱きかかえていたセシリアをラウラへと渡し、Mの方をきっと睨みつけてこう言った。

「僕の大切な人は・・・落とさせやしない！！」

セシリアをラウラへと渡した吉良は、ハイマットモードになりMへと突進していく。

「っ！ファンネル！」

先程までとは違う吉良の様子に若干たじろいだMも我にかえりファンネルによるオールレンジ攻撃を再開する。

「なっ！？」

だが、Mの放つファンネルによる攻撃はすべて吉良に避けられてしまっていた。

「はぁああ！」

ガシッ！・・・キィン！

それどころか、吉良はすれ違い様にファンネルを斬って破壊していく。それにMはただただ驚くしかなかった。

ｓｉｄｅ　セシリア

「ん・・・ラウラ・・・さん？」

「起きたか、セシリア・・・」

ラウラに抱きかかえられたセシリアが軽い気絶の状態から目を覚ます。

「はっ！大和さんは！？」

先程までの事を思い出し、がばっと起き上がるセシリア。そんなセシリアにラウラは苦しげな表情をして、前を指差した。その動きにつられセシリアもラウラが指差した方を見る。そして、目を見開いた。

「なんですの！？あれは・・・」

「わからん・・・だが、大和がお前の事を助け出してから急激にフリーダムの動きが尋常じゃないほどに速くなっている」

フリーダムの動きはさっきと比べて見違えるほどに速くなっていた。吉良は、クシャトリヤのオールレンジ攻撃を全て避け、破壊していく。その動きはまるで狂っているかのようにも思えた。

「まるで・・・バーサーカーのようだ・・・」

それを見て、そうラウラはぽつりと呟いたのだった。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「（くそっ！今度はこちらが防戦一方とはな）」

そう思いながらMは下唇を噛んだ。それまで圧倒的優位にたっていたはずだった。だが、それがいつのまにか防戦一方である。その事がMに精神的なダメージを与えた。

「（・・・所詮、失敗は失敗ってことなのか。・・・いや、そんなのは認めない。認めてしまったら、私は・・・！）」

「おぉおおおお！」

吉良とMは互いにビームサーベルで切り結び合っていく。Mはそこからいったん距離をとって、新たにファンネルを展開し、オールレンジ攻撃を仕掛ける。だが吉良もまた、距離をとっている事にMは気付いた。

「（これは・・・まずい！）」

そう思ったと同時に、フリーダムの5門の銃口が火を噴く。ハイマットフルバーストが放たれた瞬間だった。それによって新たに展開したファンネルはそのほとんどが落ちてしまっていた。

「（くそっ！ここはいったん退くしかないか・・・）離脱する！」

そうしてMはくるっと後ろを向いて急速にその場を離脱していく。もちろん途中で先程放り投げたオータムも拾って行った。

「はぁ、はぁ、はぁ」

去っていくMの後ろ姿を見る吉良の目にはハイライトが戻っていたのだった。

こうして、MとクシャトリヤとのMの戦いは幕を閉じたのだった。

学園に戻るとセシリアとラウラはすぐさま医務室へと運び込まれた。

幸い、ＩＳによる防護機能が働いていた為に外傷は少なく、１日安静にしていれば良い。という結果だった。そして今、僕らはその医務室にいる。その場にはいつものメンバーに加えて、楯無先輩と千冬さんがいて、つい今しがた起こった事を話していた。

「・・・つまり、オータムという女もＭってやつも亡国機業のやつらだったってわけか・・・」

「そうなんだよ。そして、狙いは一夏と僕のＩＳ。でもどうして・・・その、楯無先輩が知っていたんですか？」

僕はクルッと楯無先輩に向き直って尋ねた。どうしてこの人は一夏と僕が狙われている事とか、僕らのまったく知らない事を全て知っていたのだろう？

「ま、更識家は昔からこの手の裏工作に関しては強いのよ・・・暗部ってわかる？」

暗部ーつまり、決して表に出る事の無い裏の実行部隊ってやつかな？

「まぁその認識で概ねあってるわ。そして、更識家はその暗部に対する暗部・・・お家柄ってやつね」

あははと笑いながら開いた彼女の扇子には『常在戦場』と書かれていた。・・・まったくなんて人だ。

「「「「「・・・・・・」」」」」

それを聞いていたいつものメンバーもみんな絶句していた。

「千冬さんは知っていたんですか？」

この場で唯一驚いていなかった千冬さんに尋ねる。

「ま、私は教師だからな。生徒の素性くらいは知っている。それに前に尾行された時言っただろう？お家柄だろう、とな」

「ま、当面の危機は去ったようだし、私もこれで気が休まるわ」

「そういえば楯無先輩、一夏の王冠をゲットしましたけど危機が去ったのなら一緒に住む必要、無いんじゃないんですか？」

僕がそう言うと、一夏が目を輝かせて楯無先輩を見る。・・・ちなみに僕の王冠はすでに外れていて、誰のものにもなっていない

「そうだよな！てことはすぐに部屋替えですか？それは・・・」

助かりますなんて言ったら駄目だよ？

「寂しくなりますね」

土壇場での変更成功。

「ふふふ、しばらくはいるわよ？なにせ、王冠はゲットしたんだから」

ガーン！うなだれる一夏。そして、それを聞いていた箒と鈴とラウラの眉がピクッと動く。一触即発だ。

「ホントは大和君の王冠もゲットしたかったんだけどねぇ・・・」

フフフと笑いながら楯無先輩がこちらを見る。やめて下さい。シャルとセシリアの眉がピクッと動いて・・・

「「「一夏」」」

「「「大和（さん）」」」

爆発した。・・・と思ったらズパァアアン！といい音がする。見れば千冬さんの手には出席簿が握られていた。それも煙を上げている・・・

「落ち着け馬鹿者ども。話が進まない。次に、大和たちが戦ったクシャトリヤとかいうＩＳについてだが・・・」

そう言ってディスプレイが投影され、さっきの戦闘シーンが再生される。

「私が戦って感じたのは、フルスキンのＩＳでありながらその機動力は高く、ファンネルと呼ばれるオールレンジ攻撃に腹部のビームとビームサーベルと、その戦闘力はかなり高いものであるという事でした」

ラウラが戦った感想を述べる。

「その後、私とセシリアは援護に来た大和に救われて、今こうしてここにいる。・・・時に大和、お前はなんなんだ？」

ラウラのその言葉にみんなが一斉にこちらを見る。すでに戦闘データはみんな閲覧していた。その上でラウラが代表して聞いてきたの

だった。

「・・・なにって？」

「ハッキリ言って、セシリアを助けた後のお前は尋常ではなかった。その溢れ出る殺気はいつものお前のどこにあるのかわからないほどだったし、反応スピードから何から全てが向上しているように思えたぞ」

「・・・説明が難しいんだけど、セシリアがやられるって思った瞬間、急に頭の中がクリアになって、目の前で起こっている事がコマ送りみたいに遅く見えて・・・ごめん、やっぱりよくわからない」

「ぶちぎれたってこと？」

「それとはちょっと違うと思う、鈴。とにかくよくわからないんだよ」

「だが、あれはまるで・・・」

そこでラウラは言葉を切って・・・

「まるで？」

「バーサーカーのようだったぞ」

「バー、サー、カー・・・・・・」

その言葉が僕の心に重くのしかかってきたのだった。その後、僕らはラウラとセシリアを休ませるからと医務室から出され、めいめい

自分の部屋へと向かう。僕は千冬さんと寮に戻っていく。そして、ようやく自分の部屋の前に着いた。

「さて、今日は色々ありすぎた。お前もしっかり休め」

「・・・千冬さん」

「・・・なんだ？」

「バーサーカーって、なんですか？」

「・・・よくわからんが、北欧神話に出てくる伝承上の人物だろう？普段はおとなしいのに、戦闘になると興奮して人が変わったように強くなる」

「っ！？」

「だがまぁ、そんなものは気にするな。お前はお前。なのだからな」

「僕は僕・・・？」

「ではな・・・」

そう言って千冬さんは行ってしまった。僕は千冬さんに言われた事の意味を考えながら自室へと入っていった。

第２９話：邂逅（後書き）

さて、これからどうしよう・・・と思う今日この頃です。大枠は決まっているんですが、それを文章に起こすのが難しい・・・

あ、ＰＶとかユニークとかお気に入り件数とか、応援して下さってありがとうございます。この場を借りてお礼申し上げます。

ではまた！

第３０話：それぞれの思惑（前書き）

時間かかって申し訳ありませんでした。最近何かと忙しくて・・・
では、どうぞ。

第３０話：それぞれの思惑

「先日は学園祭、お疲れさまでした！」

学園祭が終了した翌日、もう一度全校集会が開かれた。なんでも、学園祭の順位の発表の為らしい。・・・さて、どうなる事やら。体育館に集まっている全校生徒がごくりとつばを飲み込む音が聞こえた気がする・・・

ダラダラダラダラとドラムを叩く音が聞こえて・・・

「第１位は・・・生徒会主催の観客参加型劇『シンデレラ』！」

「「「・・・・・・え？」」」

チーン！と音がして結果が告げられるが、ぽかーんと全校生徒が口を開く。そして、遅れる事数秒に我にかえった女子一同からブーイングが巻き起こった。

「卑怯！ずるい！イカサマ！」

「なんで生徒会なのよ！こんなの絶対おかしいよ！」

「私たち頑張ったのに！」

そんな苦情を楯無先輩は「まぁまぁ」と手で制して言葉を続ける。

「劇の参加条件は『生徒会に投票する事』よ。そしてあなた達は自分の意志で参加し、投票したのだから強制ではなく立派な民意よ」

そ、そんな条件があったのか・・・あれ?これはつまり僕らは生徒会に所属する事になったってことだよね?

「一夏・・・大変な事になっちゃったね」

「あぁ、みんな頑張ったのにまさか生徒会が1位だなんてな。そりゃみんな怒るだろ?」

「違うよ!?バカ一夏!生徒会が1位になったって事は僕らは生徒会役員になるってことだよ!」

「そっかぁ・・・て、ぇえええええええ!?」

「やっぱりわかってなかったんだね・・・はぁ、これならどこかの部活に決めてくれた方が良かったのに・・・」

学校に関する仕事を全部やらなければならない生徒会に所属する。どんな事をやらされるのか考えただけでも恐ろしかった。そして、未だに収まらないブーイングの嵐をよそに、楯無先輩は言葉を続ける。

「静かに。生徒会メンバーになった2人は適宜各部活動に派遣します。男子なので大会等の参加は無理ですが、マネージャー等やらせてあげて下さい。それらの申請書は生徒会に提出をお願いします」

「ま、まぁ・・・それなら」

「し、仕方ないわね。納得してあげましょうか」

「たなぼたたなぼた！」

楯無先輩の言葉を聞いて体育館がざわつき始める。

「じゃあまずはサッカー部に！」

「ずるいわ！ソフトボール部へ！」

「ちょっと、先に申請書を書いて出さないと！私たちが一番乗りだけどね！」

「・・・ほら来た。きっとまた、明日から大変だよ？」

「・・・昨日、楯無さんが言っていた『これからが大変だよ？』ていう言葉の意味が分かった気がする・・・」

後ろでラクロスだの、茶道だの、料理部だの言っている彼女らを見てため息を吐く。・・・胃薬、まだあったかな？

「柔道部！寝技あるよ！」

まずいでしょ？主に僕らが・・・

「それでは、特に問題がないようなので織斑一夏、吉良大和の両名は生徒会に所属。以降は私の指示に従ってもらいます」

大丈夫じゃない！大問題だ！と叫びたいのをぐっとこらえて、大歓声に包まれながら全校集会は幕を閉じた。逆らったところでまったく意味の無い事であるのはこれまでの経験で知っていたのだ。なら、

今回もそうなのだろう。

「吉良大和君、生徒会副会長。織斑一夏君、生徒会庶務着任おめでとう！」

「おめでと～」

「おめでとう。これからよろしく」

楯無先輩、のほほんさん、虚さん。3者3様の言葉の後、パパーンと盛大にクラッカーが鳴らされた。

「なぜこんなことに・・・」

がっくりと肩を落とす一夏。

「あら、いい解決法でしょ？元はといえばどこの部活にも所属しなかった2人がいけなかったのよ？」

しなかった。じゃなくて、できなかったんです。女子に囲まれて部活なんて冗談じゃない。

「おりむーたちがどこかの部活に入ればー、一部の人は諦めるだろうけど」

「その他大勢が『うちの部活に入れて！』と言い出すのは目に見えてるわ。その為に今回の措置を取らせてもらいました」

「学園長にもどこかの部活に入れてって言われていたしね」

3人の見事な連携に思わず『そう言われればそれが一番公平かも』とか言いそうになる。やばい、幼なじみは伊達ではない。

「僕らの意思が無視されている・・・」

「あら、なぁに？こんな美少女が3人もいるのにご不満？」

「そうだよ～。美少女なんだよ～？」

「美少女かどうかは知りませんが、ここでの仕事はあなた方に有益な経験になるでしょう」

あぁ、まともなのはあなただけですよ、虚さん。ちなみに、何で僕が副会長で一夏が庶務なのかというと・・・

「一夏君より大和君の方がしっかりしているから。さぼりがちなおねーさんのフォローをお願いね」

「・・・・・」

自覚があるならさぼらないで下さい。と目で訴えたがまるで効果無し。代わりに虚さんに同情の目で見られた。

その後はなぜか、虚さんに弾の事を細かく聞かれたり、僕らの生徒会就任パーティーが開かれたりしていった。こうして、僕らは生徒会に所属する事になったのだった。

「失礼します」

重厚なドアを開いて入ってきたのは楯無だった。窓の外は暗く、夜のとばりがあたりを包み込んでいた。

「あぁ、更識くん。ちょうどよかった」

楯無を迎え入れたのは穏やかな顔をした初老の男性だった。

「それでは報告をお願いします」

男性は立派な机に組んだ手を置きながら、楯無に言葉を促す。その顔は総白髪で、顔にも年相応のしわが刻み込まれている。

もしも生徒の誰かに彼の写真を見せたら全員が用務員のおじさんとか『学園の良心』とか言うだろうが、それは表向きの顔で、ここにいる『轡儀十蔵（くつわぎじゅうぞう）』こそがＩＳ学園という空間を実質的に支配しているのだった。

「はい。ではまず、織斑一夏くんに関してですが、彼のＩＳ訓練は順調です」

楯無はいつもの茶目っ気はまったく出さず、真剣な顔で報告を始める。

「正直、驚きました。一度教えた事を数回の反復で覚えるところや、理解の早さは今まで見てきたどんな女子よりも上ですね」

「そうでしょうね。あの、織斑先生の弟ですから・・・」

どこか深い意味のあるような言葉だったが、楯無はあえて触れなか

った。

「次に、吉良大和くんに関してですが、こちらも驚きました・・・と言うより、なんて言ったらいいのかわかりません。飲み込みの早さは織斑くん以上で、センスは抜群。試しに最高難易度の訓練をやらせてみたらかろうじてですけど、クリア。それでも1年のうちからクリアできるレベルではないのに・・・時々、彼は本当に人間なのか？と疑ってしまいますよ」

「ほぅ、君にそこまで言わせるとはなかなかいい具合に育ってくれましたね」

ふむ、とあごをさすって相づちをうつ轡木。

「それよりも気になったのは彼の出自です。私の家が調べてもめぼしいものは出てきませんでした。わかった事といえば、彼と彼の親に血縁関係がない事くらいだけ・・・彼は一体どこから来たんです？」

「・・・とりあえず全ての報告を。話はそれからです」

「最後に、亡国機業についてですが、確認しただけでも2機のＩＳを保有して、うち1機はコアを抜き取っていったのですぐには再度の行動はできないでしょう」

コアを人間の心臓に例えるなら、外装は肉だ。心臓を新たな肉体になじませるには時間がかかる。電池のように抜き取って交換、というわけにはいかないのだ。

「ただ、『クシャトリヤ』というＩＳには注意が必要ですね。鈍重

そうな機体に似合わぬ機動性、ファンネルと呼ばれるオールレンジ攻撃・・・おそらくこの場でアレに勝てるものはほんのごくわずかでしょう。以上です」

楯無からの報告を聞き終えると、ふぅーっと息を吐いて轡木が椅子にもたれかかる。それを見た楯無しも、少しだけ緊張を解く。

「・・・なるほど、織斑くん、吉良くん共に順調のようですね。亡国機業もいくつか心配な点はあるが、すぐには行動できない。現状はまぁまぁといったところですね。さて、吉良くんについてですが、私も詳しいわけではないのです。なぜか彼に関する情報は特秘事項となってて、この学園長ですら見る事が出来ないのですから・・・」

「彼には何があるんですか？」

たまらずに尋ねる楯無。

「・・・よくはわかりません。ですが、「ｓｅｅｄを持つ者」これが鍵を握っているようです。私が調べて得る事が出来たのはこれだけでしてね」

「ｓｅｅｄ・・・意味は、種・・・それを持つ者？」

2人してさっぱりだという顔をする。これ以上は前進しないと感じた轡木は話題を転換する事にした。

「それにしても更識くんには苦労をかけますね」

「いえ、私の機体も実戦経験を積ませる事が出来ますから」

「あぁ、ロシアの。なんとか完成しましたか・・・一時はものになるか心配でしたが、君に預けて正解でした」

「仕様については開発室の人間からいくつか指示を受けましたが、当面は現状のままで行きます」

「はい、それについては任せます。あなたの思うようにして下さい」

その他、学園の事についてのことを二言、三言伝え、楯無は報告を終えた。報告を終えると、もはや先程まで見せていた厳しい表情はなく、2人ともにっこりと人当たりのいい笑みを浮かべていた。

「さて、一段落したところでお茶にしましょうか。今日はいい茶菓子がありましてね」

そう言って轡木は立ち上がる。轡木のその言葉を聞いて楯無の顔が輝いた。

「十蔵さんのお菓子チョイスは外れがありませんからね！楽しみ♪」

「はっはっは、そんなたいした物ではありませんよ」

「いえいえ、本当に美味しいですよ。・・・そうだ！私もお茶を持ってきていたんでした」

楯無のその言葉を聞いて、今度は轡木の顔が輝いた。

「おお！まさか布仏虚くんの？」

「そのまさかです」

「おお、彼女のお茶は素晴らしいですからね、これは楽しいお茶会になりそうです」

年甲斐もなく欝木ははしゃぐ。楯無も目の前にあるお菓子を見て、そわそわとしていて実に落ち着きがない。

こんな光景を見て、彼らがＩＳ学園の長だとは誰も思いもしないだろう

同時刻、高層マンション最上階の部屋にて1人の女性が激昂していた。

「てめぇ！どういうことだよ！？」

豪華な飾りで溢れ帰っているその部屋で、オータムは少女に詰め寄っていた。

「・・・・・・」

「なんとか言え！このガキが！」

少女を壁に叩き付け、それでもなお涼しい顔をしてこちらを見てくる少女にオータムはさらに激昂した。懐からナイフを取り出し、少女へと近づける。

「その顔、切り刻んでやる！」

オータムが刃を近づけ、あと数センチという所で後ろから別の声が聞こえた。

「やめなさいオータム、うるさいわよ」

声の主は美しい容貌の女性だった。薄い金色の髪が、明かりに照らされてキラキラと透明な光を放つ。

「オータム・・・」

「あまり怒っているとせっかくの可愛い顔が台無しよ?」

「お前は・・・・・知っていたのか?こうなる事を・・・」

オータムの言葉に首肯するスコール。それを見たオータムは叫んだ。

「だったらどうして言わない!私は・・・私は・・・お前の!」

「わかっているわ、オータム。あなたは大切な私の恋人」

「わ、わかっているなら・・・いい」

さっきまでの怒りもスコールの笑みにかき消され、オータムは頬を赤らめて頷く。それはまるで初恋の相手を前にした少女のようにあどけなく、そんなかわいらしい様子にスコールは嬉しくなってまた微笑んだ。

「おや、私はお邪魔だったかな?」

「お前は・・・!」

さらにその後ろから人が現れた。その人物を見たオータムは先程よりも強い怒りの表情を浮かべる。

「そんなに怖い顔をしなくてもいいだろう。私たちは仲間、なのだから」

「お前など仲間ではない。男の分際で！」

「やれやれ、私も嫌われたものだな」

あからさまに男を敵視しているオータムを見て、スコールはため息を1つ吐き、オータムへと向き直る。

「行きましょう、オータム。髪を洗ってあげる。今日は疲れたでしょう？」

「あ、あぁ・・・」

そして、オータムはスコールへと手を引かれ浴場へと連れて行かれた。そして、去り際に

「エム、ＩＳを整備に回しておいてちょうだい。『クシャトリヤ』を直さないと・・・」

「わかっている」

エムと呼ばれた少女は短く返事をして、スコールは浴場の戸を閉めたのだった。

「そういうわけだから、頼む」

そう言ってエムはクシャトリアを男に差し出した。

「あぁ。しかし、君のクシャトリヤを追いつめるとはな。吉良大和、なかなかよく育ってきているじゃないか・・・だがまぁ、この程度ならすぐに直るだろう」

その言葉を聞いたエムは、１つ息を吐いて胸のロケットを握りしめ、まぶたを閉じる。

「（もう少し・・・もう少しだ・・・）」

ずっと待っていた。焦がれたときはもうすぐそばまで来ている。

「（もうすぐ、私の復讐が始められる。・・・そう、やっと）」

会う事が出来る

「織斑千冬（ねえさん）」

少女の口元が邪悪に歪んでいく。

「ふむ、私の事も忘れないでくれよ」

「わかっているさ。ラウ・ル・クルーゼ」

最上階の天窓から月の青白い光が入り、仮面の男を照らしていく。

そして、クルーゼと呼ばれた男の口元が、エムと同じように歪んでいくのだった。

第３０話：それぞれの思惑（後書き）

変態仮面の登場でした。劇中でもフレイを拉致し、自室に連れ込み秘書まがいの事までさせて、あんな事やそんな事とかさせたのかなぁ？・・・イザークが怒るのも無理ないですね・・・まったく、うらやま・・・けしからん！

次話は・・・イギリスにでも行ってもらおうかな？

お知らせ（　小説の凍結ではないです）（前書き）

長らく更新せずにすみませんでした。今回のお知らせは、タイトル通り小説凍結のお知らせではありません。

お知らせ（　小説の凍結ではないです）

皆さんお久しぶりです。「Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　ｓｅｅｄ」を書いているスピリタスです。

１ヶ月もの間更新しないで申し訳ありませんでした。実は更新する暇がないくらいにこの１ヶ月忙しかったのです。８月の終わりまでは順調だったのですが、９月に入ってからゼミの活動が忙しくなった事に加えて、私も大学３年という事で来年の就職にむけて、志望している公務員の試験対策予備校に通い始めた為、週に４日予備校で講義を受けて、さらに週に１回の飲食店でのバイトと、夏休み前と比べてがらりと生活リズムが変わってしまった為に執筆時間がまったくと言って良いほど取れなくなってしまったのです。

１ヶ月も放置していたにもかかわらずお気に入り登録をしてくださっていて、本当にありがとうございます。本当は週１ペースで更新していきたいのですが・・・というところです。

長々と言い訳ばかり見苦しいですよね。すみませんｏｒｚ

ある程度慣れてきたら執筆を再開したいと思います。

今は次章であるイギリス編を書いている最中です。なんとか１話は書き上げて近日中に上げたいと思います。

ぐだぐだとすみませんでした。それでは、この作品を読んで下さっている方達に感謝とお詫びをこめて、失礼します。

第３１話：イギリスへ（前書き）

お待たせしました！

今回から数話かけて新章であるイギリス編スタートです。

第３１話：イギリスへ

学園祭が終わってようやくいつもの日常に戻りつつあるＩＳ学園の寮の廊下を、１人の女子生徒が歩いていた。鼻歌を歌いながら歩いていた女の子はセシリアで、とても上機嫌そうだった。というのも・・・

「～～♪」

『僕の大切な人は・・・落とさせやしない！』

これは学園祭のあの日、Ｍと名乗った少女のＩＳに撃たれて薄れゆく意識の中で聞こえた吉良の言葉だ。

「僕の大切な・・・大切な人・・・／／／」

吉良の言った言葉を反芻し、そしてにへっとだらしない顔になるセシリア。本当に上機嫌である。そのまま自室の扉を開けると目の前にはどこぞの超高級ホテルのような内装が目に入る。セシリアは、自分の部屋に天蓋付きのベッドや、厳選して取り寄せた家具を配置し納得の自室となっていた。・・・ただ、この部屋は相部屋のはずである。であるからには同居人もいるはずなのだが部屋のスペースの比率が７：３というあり得ない事になっていた。・・・同居人が気の毒で仕方ない。

・・・話がそれたので元に戻す事にする。上機嫌で部屋に戻ったセシリアは、パソコンにメールが来ているのに気付きパソコンを起動する。メールを見ると差出人は『エリーゼ』と書かれていた。彼女はセシリアのいわゆるマネージャー的存在で、セシリアのヴァイオ

リニストとしての演奏活動を管理しているのであった。そして、彼女のよこしたメールの内容はと言うと・・・

『セシリア・オルコット、次回の演奏スケジュールが決まりました。次回帰国の3日後に行われる予定です。
PS　本日付けでイギリス政府から日本政府に正式に、吉良大和のイギリスへの招待の打診を行いました。あなたは帰国後のコンサートで吉良大和とのサプライズ共演をやってもらうつもりです。あなたからも吉良大和にその旨を伝えて下さい。滞在中の彼と彼の友人の身の安全はイギリス政府が責任を持って保証するという事もお忘れなく』

というものであった。それまで上機嫌だったセシリアはそのメールの内容に目を丸くしたのだった。

＜翌朝＞

「あ、おはよう。セシリア」

「っ!?お、おはようございます。大和さん」

「?・・・どうしたの?」

「な、なんでもありませんわ!・・・えぇ、なんでもありませんとも」

吉良の言葉に一瞬動揺したような感があるが、セシリアは悟られまいと平静を装った。

・・・明らかに何かありそうな感じではあるが、本人が何でもないと言うので吉良はそれ以上聞くのをやめておいた。・・・きっとろくでもない事を言われる。そう思ったからである。

その後は授業はつつがなく進み、残すは最後のＳＨＲだけとなった。壇上にはすでに千冬さんが立っている。

「さて、明日からは１週間の秋休みに入るが、あまり羽目を外しすぎるなよ？・・・さて、それ以外は特に連絡事項もないのでＳＨＲを終わりにする」

その一言をもってＳＨＲも終了し俄にざわつくクラス。そう、明日からＩＳ学園は学園祭での振り替え休日と元々の休みを使う形で短い秋休みに入る。すでにクラスメイトの何人かは、他の人達とどこかへ遊びにいこう！なんて話をしている。僕も一夏でも誘って弾とかと遊ぼうかな？そんな事を考えていたときだった。

「や、大和さん」

「セシリア？」

何だか思い詰めた表情をして、セシリアが僕の前に立っていた。というか今日のセシリアは朝からおかしかった。何でもないと言う割には、日中は心ここにあらずで千冬さんに何回も叩かれていたし、僕に何かを言い出そうとしているかと思えば、真っ赤になって逃げていく。・・・なんでだろう？そう思ったときだった。セシリアが口をぱかっと開けて大きく息を吸い込み、叫ぶ。

「あ、明日から！わたくしといっしょに！イギリスへ！来て下さいませんか！？」

「・・・・・・え?」

大声でそう言うセシリアに、あっけにとられる僕ら。そして・・・・・

「「「「「えぇえええええええええええ!?」」」」」

遅れる事数秒、割れんばかりの大合唱が教室中に響いたのだった。

「・・・なんでさ?」

その大音量に耳を塞ぎながら僕は1人呟いたのだった。

「つまり、要約すると、僕との共演の為にイギリスに来てほしいってこと?」

「はい・・・・・・」

あの、カオスに満ちたクラスをなんとか脱出し、なぜかショートしているセシリアを落ち着かせてようやく事情を聞く事が出来た。

「ん~・・・事情はわかったけど、どうしてそのエリーゼさんは僕がピアノを弾ける事を知っていたんだろう?」

「あ、それは学園祭の時にわたくしとの演奏を聴いていたからですわ」

「あ、なるほど」

すごく簡単な事だった。・・・というかあの場にいたんだ・・・

「世界で2人しかいない男のＩＳ操縦者。これだけでもう充分過ぎるくらい話題性はありますわ。そしてピアノが弾けるのですから、わたくしと共演したらさぞかし、盛り上がる（儲かる）のではないかとエリーゼは考えたらしいのです」

「・・・その人、ずいぶんなやり手だね」

「はい。わたくしも時々エリーゼが恐ろしく感じられますわ」

まだ一度もあった事がないのに、僕の中でエリーゼさんが恐い存在になっていった。

「まぁとにかく事情はわかったけど、一度千冬さんに聞いてみないと・・・僕にも立場ってものがあるし・・・」

フリーダムを所持している僕としては、僕はそうほいほいと海外に行くべきではないと思う。名目は演奏旅行だけど万が一ってのもあるからね。イギリスにしてみれば飛んで火にいるなんとやらだろう。

「そうですわね。それでは行きましょうか」

そう言って僕らは職員室へと向かった。・・・後ろでごそごそといくつかの影が動いているのに気付かないまま・・・

「やはり来たか。本日付けでイギリスよりお前に招待状が届いたからな・・・・・で、お前はどうするんだ?吉良」

職員室に入った僕らは千冬さんを見つけて事情を説明しようとしたが、すでに千冬さんは知っていたらしい。・・・よかった。説明する手間が省けた。

「はい、僕としては行くべきではないと思うんですが・・・万が一もあり得ますし・・・しかし・・・」

「だな。だがしかし、そこには1つ問題がある」

「・・・・・問題?」

「そうだ。確かに吉良はフリーダムの所有者だが、所属国家が決まっていないのが問題なのだ」

「どういう事ですの?大和さんは日本の国籍を有しているのですから、普通は日本なのでは?」

セシリアが訳が分からないという風に首を傾げる。

「そうだ。当初の予定では、だがな。当初の予定では、吉良のＩＳも織斑のと同じく倉持技研が開発する事になっていた。そこまでは良かったんだが・・・」

千冬さんが苦い顔になる。

「突然変異でコイツのＩＳが並外れた性能を持っている事がわかった瞬間、日本政府は吉良の所属を未定としたんだ。もしもコイツの

性能を独り占めしている、なんて諸外国に言われたら外交問題にまで発展するからな。かといって吉良のＩＳの所有者を不明にしておくのもまずい。よって、所有者は吉良大和とし、所属国家は未定。という形を取ったんだ」

「・・・ということは」

「今現在、吉良の所属国家は決まっていない。よってどこの国も自国に招待するのにいちいち日本政府の許可を取る必要がない。イギリスも便宜上日本政府に許可願いを出しただけだろう・・・だから、早く吉良の所属を決めろ。と言ったのに・・・あの腰抜け連中め」

苦々しげに千冬さんが言う。

「でも、よくよく考えたら演奏旅行みたいなものなんですから、そんなに危険はないかもしれませんけどね」

「その辺りは行ってみない事にはわからんがな・・・」

3人でどうしたものかと考え込んでしまう。そして数分後、とうとう千冬さんが口を開いた。

「ここで考えてても仕方がないな・・・しょうがない、私も同行しよう。そうすれば多少なりとも安全性は増すだろう」

「えっ!?千冬さんが?」

「・・・私では不満か?」

「いえ、そういうわけでは・・・・・・」

まさか千冬さんが、ついて行くなんて言い出すとは思わなかったからビックリしただけです。でもそれなら・・・

「それなら、お願いします。それに・・・口ではああ言いましたけど、実際は僕イギリス、というか海外に行ってみたかったんです」

「そんなところだろうとは思っていたさ」

フッと千冬さんが笑う。それだけで重く張りつめていた職員室の空気がだいぶ和らいだ気がした。

「なら、さっさと準備しないといけませんね」

「あぁ、だがその前に・・・」

スッと千冬さんが立ち上がる。・・・どうしたんだろう?

「盗み聞きとは感心せんな」

「げぇ!?千冬姉!バレてたのかよ!」

千冬さんが職員室のドアを開けると、ドアに耳をぴったりくっつけていたのだろう。横を向いたまんまのいつものメンバーが見えた。・・・なんというか、シュールだ。

「先生!イギリスに行くんですか!?」

「鳳、話を盗み聞きしていたのならわかるだろう?」

「千冬姉！俺たちも連れてってくれ！」

「・・・・・駄目だ」

「な！頼むよホント」

「・・・駄目だ」

「大和たちがいないのに1週間も学園でじっとなんかしてられるか！」

「却下だ」

駄目だと言われてもなお食い下がる一夏。・・・そして要らん事まで言ってしまうのが一夏という人間である。

「・・・というか、俺がいない千冬姉にまともな生活ができるとはおｍ・・・」

ゴゴン！！！

凄まじい音を立てて千冬さんの必殺の拳骨が火を噴いた。・・・なんか握られた拳からは煙が出てるし・・・

「・・・一夏？」

「・・・・・」

さすってみても返事がない。ただの屍のようだ。・・・・・じゃなくて！

「・・・まぁ、その、なんだ。お前らにも海外研修として連れて行くのもいい経験になるかもしれんな」

うおっほん！とごまかす様に咳払いして、千冬さんがそう言った。僕の周りを見れば、倒れて返事をしない一夏に完全にビビってしまい、みんな引いていた。

「・・・一夏が行くなら私も行くわ！」

「私もだ！」

「私も！」

「みなさんの安全はイギリス政府、およびオルコット家が責任を持って保証しますわ」

付け加えるようにセシリアがそう言う。一夏が行くならと、一夏ラヴァーズの箒、鈴、ラウラはついて行く事を決めたようだった。・・・そういえば誰か忘れているような・・・

「と・こ・ろ・で・・・」

・・・声がした方を振り返ると、それまで黙っていた魔王がゆっくりと立ち上がった。

「僕も連れて行ってくれるんだよね～？セ・シ・リ・ア？」

「ひぅ！！！」

にっこりと笑ってセシリアの肩に手を置くシャルだが、顔は笑っていなかった。それにすっかりビビるセシリア。なんと言うか・・・

「（黒い！黒いよシャル！）」

禍々しいオーラを振りまくシャルに、この場にいたみんな（千冬さん除く）は恐怖した。

「え、えぇ！もちろんシャルロットさんもご一緒ですわ！」

シャルの黒いオーラに当てられたのか、セシリアはガクガクと首を縦に振って同意した。・・・シャルがダークサイドに落ちた？

「さぁ！そうと決まったらさっさと準備しないと～♪」

『切り替えはやっ！！』

セシリアの返答を聞いて、それまでの黒さが嘘みたいにシャルの周りにお花のオーラが咲きほこった。・・・シャルロット、恐ろしい子！

「ごほん！・・・とにかく、明日からは我々はイギリスへと行く事になる。各自、しっかりと準備して旅に備えるように」

千冬さんの号令をもってお開きになる。その日、僕たちのイギリス旅行が正式に決定したのだった。

余談

「ところで、パスポートって一夏持っている？」

「いやぁ？前に持っていた物はとっくに期限切れだし・・・」

「どうしよう・・・パスポートって申請から発行まで時間がいるんだよね？」

「・・・・・・」

2人して最大の問題にぶち当たってしまった。どうしよう・・・出発は明日なのに・・・2人して頭を抱えていると、セシリアが通りかかった。

「あら？大和さんたち、どうしたんですの？」

「あ、セシリア。実は僕たちパスポートを・・・」

「あぁ。パスポートでしたらすでに発行済みですわよ」

「「へ！？」」

顔を上げてセシリアを見ると、2冊のパスポートをひらひらと振っているセシリアがいた。・・・いつの間に？ていうかどうやって？

「セシリア、一応聞いとくね？そのパスポート、どうやって手に入れたの？」

とりあえず浮かんだ疑問をセシリアにぶつける。すると、セシリアはクスッと笑って

「禁則事項です」

こう言ったのだった。

明日から僕らは一路、イギリスへと向かう事になる。

第３１話：イギリスへ（後書き）

長らくお待たせしてすみませんでした。予備校の方もだいたい慣れてきて、土日のどっちかが休みなので、それを使って執筆をしたいと思います。ですので更新は２~３週間に一回となってしまいますが、ご了承ください。

さて、今回から始まったイギリス編ですが、もともとこの話は番外編に収録される予定でした。ですが、構想を練っている時にこれを正史に入れたら話が進むんじゃね？と思って書き上げた次第であります。

これ以降はキーとなるキャラも出す予定なので、お付き合いいただければと思います。

ではまた、２、３週間後にお会いしましょう！

第３２話：幕間（前書き）

すいません、今回は短いです。

第３２話：幕間

＜翌日：新東京国際空港＞

「イギリス・・・かぁ」

「はい。楽しみですわね、大和さん」

翌日、僕らはイギリスへと飛ぶ為に成田空港へと集まる事になっていた。だが今ここにいるのはセシリアだけで、吉良はみんながそろうまでセシリアと談笑して待つ事にした。

「（・・・思えば、セシリアとの出会いもイギリスだったよねぇ）」

吉良の頭に思い起こされるのは入学してすぐ、クラス代表を決める時のやり取りだった。

「（あの時は日本をバカにしてきたセシリアにムカってきて、それでこっちもイギリスの事を言って試合にまで発展したんだっけ。それが今はこうして一緒にいるんだから、縁って不思議だよねぇ）」

「大和さん？どうかされました？」

吉良がぼーっとしているのに気付いたセシリアが声をかけてくる。

「ん？ううん。何でもないよ」

少し意識が違う方へと向いていた吉良も、セシリアの呼びかけにハッとして我にかえる。そして、セシリアの後ろの方からは見知った

面々が近づいてくるのだった。

「さてと・・・これでみんなそろったかな？」

軽く周りを見る。今ここにいるのは僕、セシリア、シャル、一夏、鈴、ラウラ、箒、楯無先輩、そして引率の千冬さん、と。・・・・・・ん？

「なんで楯無先輩がここにいるんですか！？」

ここにいるのが当たり前。みたいに何食わぬ顔をしてまぎれていたから気付くのに一歩遅れてしまったが、そこには楯無先輩がいた。一夏と鈴も、いつの間にか真ん中にいた彼女に気付いてぎょっとしてるし・・・

「やぁねぇ大和くん。おねぇさんだけ仲間はずれ？」

「いえ、そういう訳では・・・そもそもどうして僕らがイギリスに行くって知っていたんですか？」

僕らがイギリス旅行の事について話している時に楯無先輩はいなかったはず・・・

「あら、偶然にも私も今日からイギリスに行く予定があって、ここに来たら偶然大和君たちに会ったのよ」

「・・・なんだか不自然な偶然が多い気がするんですが・・・」

「気にしないの。それよりも偶然一緒なんだから一緒に行きましょ

う」

あくまでも偶然で通す気だな。と思った僕はそれ以上追求するのをやめた。見れば、みんなもどこか諦めた顔をしていた。気分を入れ替える様にフーッと息を大きく吐くと、楯無先輩の後ろに見慣れない女性が立っているのに気付いた。楯無先輩の近くに立っているのを見るに・・・知り合いかな?

「楯無先輩、その方はお知り合いですか?」

気になったので聞いてみると、その女性がにっこりと笑って前に出てきた。

「はじめまして、私は『インフィニット・ストライプス』の副編集長をしています、黛渚子(まゆずみなぎさこ)です」

『インフィニット・ストライプス』主にＩＳ関係の事をネタにしている月刊誌だ。

「・・・はぁ。雑誌の編集者の方でしたか・・・って黛?失礼ですが・・・」

「はい。ＩＳ学園で新聞部の部長をしています黛薫子(まゆずみかおるこ)の姉です」

やはり、名字から察するに関係者だったのか。でも黛先輩は新聞部で、お姉さんは雑誌の副編集者だなんて・・・黛家はジャーナリストの家系なのかな?と、そんなどうでもいい事をぼんやりと思ったのだった。

「でもなぜ、雑誌の編集者がここに?」

楯無先輩の知り合いってのはわかったけど、それと雑誌の編集者がここにいるのとの話がつながらない。そう思って聞いてみると、黛さんから答えが返ってきた。

「実は、こちらの楯無さんから雑誌のネタになりそうな物がある。と聞かされて急遽同行する事にしたんです」

航空費など全ての事は楯無さんがやってくれましてね。などと黛さんは言った。

「おい、あまりここで時間をかけてられん。そろそろ出発するぞ。オルコット、案内しろ」

「え、あ、はい。わかりました。ではみなさん、ついてきて下さい」

いい加減しびれが切れたのか千冬さんがセシリアにそう言った。いきなり声をかけられたセシリアは一瞬焦ったが、すぐにみんなを誘導していく。みんなもそれについて行く事となった。後に残ったのは僕と楯無先輩と黛さんだ。

「さ、大和君。私たちも行こう」

楯無先輩がぐいっと僕の腕を引っ張ってくる。そうだね、そろそろ行かないと。でもその前に・・・

「やはり偶然じゃなくてどこかで聞いていたんですね・・・」

先程の黛さんとのやり取りで確信した。もしも偶然だったなら、話のネタになりそうな物がある。なんて言わないからね。そして、そ

れを指摘された楯無先輩はチロッと舌を出して

「・・・バレた？」

と仰ったのだった。えぇ、もうバレバレですよ。・・・そうして僕たちもセシリアの後に続いたのだった。

～余談１～

あの後、セシリアについて行って搭乗ゲートまで向かったのだが、なぜか一般の人達が通るゲートを通らなかった。

「あの、セシリア？搭乗ゲートは向こうなんだけど・・・」

心配になって聞いてみる。

「大丈夫ですわ。わたくしたちの乗る飛行機は一般人が乗れる物ではありませんもの」

そう言って、ついっと窓の外を指差す。みんなと一緒になってその指差す先を見ると・・・

「自家用・・・ジェットかよ・・・」

一夏がそう呟いた。

「はい！あなた方はわたくしたちが招待したお客様なのですから、これくらいは当然ですわ」

セシリアがお嬢様だという事を再認識する事となったのだった。

～余談2～

「おぉ！以外と中は広いんだな！」

「はしゃがないでよ一夏！みっともない・・・」

セシリアに案内されてみんなが機内に入る。機内はとても広くて豪華だった。セシリア曰く、ファーストクラス以上のプレシャスシートという物らしい。

「席は自由に座って下さってけっこうですわ」

ということなのでさっそく席決めとなった。

「さて、どう座ろうか」

「俺は窓側がいいな。外の風景とか見たいし」

うん、すごく一夏らしい。

「では、嫁が窓側に座るなら私はその隣だな。伴侶というものはそういうものだろう？」

そしてラウラ、全然違う。というか未だに一夏の事を嫁って言ってたんだ・・・もう「婿じゃないの？」って突っ込みは野暮なのだろう。

「何言ってんのラウラ！そこに座るのは幼なじみの特権よ！」

とたんに鈴が噛み付いた。もはやいつもの光景だ。

「おい、お前ら。窓側に座りたいならゆずるから喧ｋ「一夏（嫁）は黙って（ろ）！」・・・はい」

・・・うん、これも予定調和だ。ところで、なぜか後のもう１人がとても静かなので気になった。なので最後の１人を見ると・・・

「ガタガタガタガタガタガタ」

「箒！？」

鈴とラウラが言い争っている中で、箒を見れば思いっきり震えていた。その震えようは、なぜか某青い鬼に出てくるた○しを彷彿とさせた。

「ど、どうしたんだ！？箒！！」

あわてて一夏が駆け寄った。

「な、ななな、何でも、ない。むむむ、武者震いというやつであろう」

そう箒は強がるが、脚が震えて顔が大変な事になっているのを見るに武者震いという理由はちょっと厳しい・・・

「・・・・・もしかして、恐いのか？」

「・・・ッ！」

一夏にしては珍しく図星だった。図星を言い当てられた箒は今度は顔が羞恥で真っ赤になっていった。

「そ、そうだ！恐いんだ！わ、私は飛行機など乗った事がなかったからな！」

怒りと羞恥で真っ赤になりながら箒は叫んだ。それに対して一夏はふっと笑ったのだった。

「わ、笑うな！」

「いやぁ？笑ってねぇよ。ただ、そうやっている箒がすごく珍しいというか、なんだか可愛いくてな」

「・・・・・・ッ！！！」

今や箒の顔は真っ赤っかだった。おそらく可愛いと言われた嬉しさと羞恥とが混じり合っているのだろう。

「わ、私は・・・こういう物には慣れていないんだ。だから一夏・・・お前の隣にいても・・・いいか？」

最後の方は搾り出す様な声だった。

「おう、それで箒が落ち着くってならいいぜ」

そう言って一夏は箒の手を取ったのだった。

「そういう訳だからお前ら、どっか別の席を・・・「「ふん！！」」」
グハッ！」

最後に鈴とラウラからそれぞれ一発ずつもらう一夏。・・・最後がしまらないのも一夏クオリティだろう。

～余談３～

ところ変わってここはＩＳ学園。その中で１人の女性がパソコンと向かい合っていた。

「・・・今頃織斑先生たちは空の上・・・かぁ。いいなぁ」

その人物は誰あろう山田先生である。さすがに山田先生までもがついていく、とは言い出せずまた、たまっていく書類仕事を片付ける為にこうしてパソコンとにらめっこをしているのだった。

「山田先生！追加の書類です」

必死になってキーボードを叩いているのに、無情にもどんどん追加される書類。

「織斑先生～早く帰ってきて下さい～！！」

まだみんな、イギリスに着いてすらいないのに早くも帰国を願ってしまう山田先生だった。

第３２話：幕間（後書き）

あれ？まだ日本を飛び立っただけだぞ？おかしいな、今頃イギリスに着いている予定だったのに・・・というわけであまり進展せず申し訳ありませんが、また再来週あたりにお会いしましょう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8953s/

Infinite Seed

2011年11月5日02時21分発行